新潮文庫

ムーン・パレス

ポール・オースター
柴田元幸訳

新潮社版

5985

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

1

それは人類がはじめて月を歩いた夏だった。そのころ僕はまだひどく若かったが、未来というものが自分にあるとは思えなかった。僕は危険な生き方をしてみたかった。とことん行けるところまで自分を追いつめていって、行きついた先で何が起きるか見てみたかった。結果的に、僕は破滅の一歩手前まで行った。持ち金は少しずつゼロに近づいていった。アパートも追い出され、路頭で暮らすことになった。もしキティ・ウーという名の女の子がいなかったら、たぶん僕は餓死していただろう。その少し前にキティと出会ったのはほんの偶然からだったが、僕はやがてその偶然を一種の中継地点と考えるようになった。それを契機に、他人の心を通して自分を救う道が開けたのだ、と。それがはじまりだった。そのあとは、いろいろ奇妙なことが僕の身に起きた。僕は車椅子の老人相手の仕事をはじめた。僕は自分の父親が誰なのかを知った。僕はユタからカリフォルニアまでの砂漠を歩いた。もちろんそれは、もうずっと昔のことだ。でもあのころのことは忘れていない。それらの日々を、僕は自分の人生のはじまりとして記憶している。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

一九六五年の秋に、僕はニューヨークにやって来た。当時僕は十八歳で、最初の九か月は大学の寮に住んだ。コロンビア大学では、自宅通学者を除いて一年生はキャンパス居住が義務づけられていたのだ。第一学年が終わるとすぐ、僕は西一一二丁目のアパートに引っ越した。そしてその後の三年間、とうとうどん底に落ちてしまうまで、そこで暮らした。もろもろの条件を考えてみれば、三年ももったのは奇跡といってよかった。

僕は千冊以上の本を抱えてアパートで暮らした。それはかつて伯父のビクターが所有していた本だった。僕がニューヨークへ引っ越す直前に、伯父さんは突然の衝動に駆られて、三十年以上かけて少しずつ集めたコレクションを餞別にくれると言い出したのである。僕は精いっぱい断った。でもビクター伯父さんは涙もろい、気前のいい人で、僕が並べる遠慮の言葉にも耳を貸さなかった。「私にはお前にやれる金もない」と伯父さんは言った。「何の忠告もしてやれない。私を喜ばせると思って、これを持っていっておくれ」。というわけで僕は本を受け取った。でもその後一年半、本が詰まったいくつもの箱を、僕は一度も開けなかった。僕としてはいずれ伯父さんを説き伏せて全部そのまま返すつもりだったから、とりあえずはそっとしておきたかったのだ。

結果的には、本を入れた箱はそのままの状態で大いに役立ってくれた。一一二丁目のアパートには家具がついていなかったので、欲しくもないし買う余裕もない物に無駄な金を使うよりはと、僕はそれらの箱を材料に「虚構の家具」を作り上げた。それはちょっと、パズルを組み立てるのに似ていた。一つひとつの箱をユニットとしていろいろな形の集合体にグル

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ープ分けし、何列かに並べて床に置き、上下に重ねあわせて、何度も組みかえているうちに、箱たちはやがて家具としての体裁をなしていった。十六箱のセットがマットレスの台となり、十二箱のセットはテーブルに、七箱の数組がそれぞれ椅子に、二箱がナイトテーブルになった。部屋のどこを向いてもくすんだ薄茶色で、色彩としてはいささか単調だったが、僕は自分のやりくり上手を得意に思わずにいられなかった。友人たちはそれを見て怪訝な顔をしたが、もうそのころには彼らも、僕の奇行に慣れっこになっていた。考えてもみたまえ、御機嫌な話じゃないか、と僕は彼らに講釈した。ベッドにもぐり込めば、君の夢は十九世紀アメリカ文学の上で生まれるんだぜ。食卓につけば、食べ物の下にはルネッサンスがまるごと隠れてる。まったくこたえられないよ、と。実のところ、どの箱にどんな本が入っているのか、僕は全然知らなかった。でもそのころの僕は、やたらに物語を捏造しては一人で悦に入っていたのだ。たとえ嘘であっても、自分の口から出てくるセンテンスの響きを楽しんでいたのだ。

虚構の家具はほぼ一年手つかずのままだった。やがて、一九六七年の春に、ビクター伯父さんが亡くなった。伯父さんの死は僕にとって大きな衝撃だった。いろんな意味で、これほどつらい経験ははじめてだった。伯父さんは僕がこの世で誰よりも愛する人物であるばかりか、たった一人の血縁であり、僕を自分より大きなものに結びつけてくれる唯一の絆だった。その伯父さんが亡くなって、本当に独りぼっちになってしまった気がした。運命に身を焼きつくされたような思いだった。何らかの形で、前もって伯父さんの死に対する準備ができて

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

いたなら、僕としてももう少し楽に対処できたかもしれない。でも、いつだって健康そのものだった五十二歳の男の死を、人はどんなふうに準備できるというのか？　四月なかばのある日の午後に、伯父さんは突然ぽっくり亡くなった。そしてその時点から、僕の人生は変わりはじめた。僕は別の世界のなかに消えていきはじめた。

僕の家族について語るべきことはあまりない。登場人物の数も少ないし、その大半は早々と舞台から姿を消してしまった。僕は母親と一緒にボストンで育ったが、僕が十一歳のときに母は交通事故で亡くなった。雪でスリップしたバスに轢かれたのだ。父親ははじめからいなかった。母と僕、僕らはいつも二人きりだった。母は誰とも結婚したことがなかった。その証拠に、生まれながらの姓をずっと使っていた。でも僕は、自分が私生児だということを、母が亡くなってからはじめて知った。小さいころは、そんなことを訊いてみるなんて思いもよらなかったのだ。僕はマーコ・フォッグ、母はエミリー・フォッグ、そしてシカゴの伯父さんはビクター・フォッグ。僕らはみんなフォッグであり、同じ家系の人間がみな同じ名なのはまったく当然のことに思えた。あとになって、ビクター伯父さんがわが家の名字の由来を教えてくれた。伯父さんの父親はフォーゲルマン（Fogelman）という姓だったが、アメリカに移民してきたとき、エリス島の入国審査官がそれをフォッグ（Fog）に縮めてしまい、この名がアメリカにおけるわが家の名字として使われることになった。やがて一九〇七年、これにもう一つgが加わってFoggとなった。Fogelは鳥という意味なんだよ、と伯父さんは教えてくれた。自分の血筋に鳥という動物が隠されているんだと思うと、

何となくいい気分だった。かつてわが家には空を飛べる勇ましい先祖がいたのだ、と僕は想像してみた。霧（fog）を突き抜けて飛ぶ鳥、と僕は考えた。大洋を越えて飛ぶ巨大な鳥、アメリカに着くまで休まず飛びつづける鳥。

　母の写真は一枚も残っていないので、僕も母の姿を思い出すのに苦労してしまう。頭のなかに浮かんでくる母は、小柄で黒髪の女性だ。手首は子供のように細く、指は華奢で白い。その指に触れられるとひどくいい気持ちだったことを、僕はよくふっと思い出す。僕の目に浮かぶ母はいつも、とても若くて可愛らしい。たぶん実際にもそうだったのだと思う。亡くなったときもまだ二十九歳だったのだから。僕らはボストンとケンブリッジ近辺の小さなアパートを転々として暮らした。たしか母は教科書会社のようなところに勤めていたと思うが、僕はまだ幼かったから、その仕事がどういうものなのかよくはわからなかった。いちばん鮮やかに思い出すのは、一緒に映画を観にいったときのことだ。ランドルフ・スコットの西部劇、『宇宙戦争』、『ピノキオ』。映画館の闇のなかで僕たちは手をつないで座り、ポップコーンの箱を掘り進んだ。母はたまにひどくおかしい冗談を言うことがあって、そんなとき僕はきゃっきゃっと騒々しく笑ったものだが、それはごくまれな、惑星同士がしかるべき位置関係に来た場合にのみ生じる出来事だった。ふだんの母は、どこか心ここにあらずといった感じの人で、むすっと黙り込んでしまうこともよくあった。ときには、混じり気なしの悲しみが母からにじみ出てくるのが感じられた。そんなとき母はまるで、胸のうちにひそむ何か巨大な混沌と戦っているように思えた。僕が大きくなるにつれて、僕をベビーシッターに預け

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

て出かけていくことがだんだん多くなっていった。でもその謎の外出の意味がわかったのは、ずっとあとの、母が亡くなってだいぶ経ってからのことだ。父親に関しては、母と暮らしているあいだも、そのあとも、すべては空白のままだった。父の話題だけは、母も絶対に話そうとしなかった。何べん訊いてみても、答えはいつも同じだった。「お前の父さんはずっと前に亡くなったのよ」と母は言うのだった。「お前が生まれる前にね」。家には父の痕跡は何も残っていなかった。一枚の写真も、ひとつの名前さえも。何もとっかかりのないまま、僕は父をバック・ロジャーズ（訳注 古典的SFマンガの主人公）の黒髪版として思い描いた。四次元世界に迷い込んで、戻ってこられなくなってしまったスペース・トラベラー。

母はウェストローン共同墓地に眠る両親の隣に埋葬され、僕はシカゴのノースサイドに住むビクター伯父さんに引き取られた。はじめのころのことはもうほとんど覚えていないが、どうやら僕は、しじゅうめそめそ泣いていて、十九世紀小説に出てくる哀れな孤児よろしく、泣き疲れて寝入ることも多かったらしい。ある日、ビクター伯父さんと一緒に道を歩いていて、伯父さんの知りあいの女性に出くわしたことがあった。いささか気のきかないこの女性は、ハンカチで目頭を押さえ、じゃあこの子がかわいそうなエミーの私生児（ラブ・チャイルド）なのねとか何とかえんえん喋りつづけた。その言葉を聞いたのははじめてだったが、何か忌まわしい、不幸な出来事をほのめかしていることは僕にもよくわかった。あとでビクター伯父さんに説明を求めたときに、伯父さんがとっさに作り上げた答えはいまでも覚えている。「子供はみんな愛の子供（ラブ・チャイルド）なんだよ」と伯父さんは言った。「だけどいちばんいい子だけがそう呼ばれるん

だ」

伯父さんは僕の母親の兄で、かぎ鼻でひょろっと痩せている人だった。四十三歳で独身、職業はクラリネット吹き。フォッグ家の者はだいたいそうだが、伯父さんも無目的と夢想に流れがちな性格で、突如おそろしく元気づいたかと思うと、じきまた長いことぼうっとしたりするのだった。クリーブランド交響楽団の一員として有望なスタートを切ったものの、やがてそうした性癖が伯父さんをじわじわ冒していった。リハーサルは寝過ごす。蝶ネクタイなしでコンサート会場に現われる。あるときなどは、ブルガリア人のコンサートマスターにも聞こえる大声で卑猥なジョークを言ったりした。交響楽団をクビになった伯父さんは、もう少し格が下の楽団をいくつか転々とした。移るたびに格はますます落ちていった。一九五三年、シカゴに戻ってきたころには、凡庸なキャリアに甘んじることに伯父さんは慣れっこになってしまっていた。一九五八年の二月に僕を引き取ったときは、初心者にクラリネットを教えるかたわら、〈ハウィー・ダンとムーンライト・ムーズ〉なる小さなコンボで、結婚式や堅信式や卒業パーティーなどの仕事をこなしていた。自分に向上心が欠けていることは伯父さんも自覚していた。でもその一方で、世の中には音楽以外にもいろんなものがあることを伯父さんは知っていた。実際、いろいろありすぎて、伯父さんはいつもそれらに押しつぶされんばかりになっていた。忙しい最中にも、何かほかのことをたえず夢見ていて、ある曲をじっくり練習しようにも、じきに頭はチェスの問題を解くことに没頭してしまうし、チェスをはじめたらはじめたでシカゴ・カブスの低迷について思いをめぐらせずにはいられず、

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

球場へ出かけていくと今度はシェークスピアに出てくる脇役の誰かのことを考え、やっと家に帰って本を読み出しても、二十分も経つとクラリネットを吹きたい欲求に駆られるのだった。というわけで、どこにいても、どこへ行っても、中途半端なチェスの一手や、未完成の対戦スコアや、途中で挫折した本が、ごちゃごちゃとあとに残ることになった。

でも伯父さんは愛すべき人物だった。母と暮らしていたときより食べ物は悪くなったし、アパートも前より狭くてみすぼらしかったけれど、慣れてしまえばそんなことはささいな問題だった。ビクター伯父さんは、できもしないことをできるようなふりをする人ではなかった。父親役という柄でないことは自分でも承知していたから、僕を子供というより友だち、小さな可愛い遊び仲間として扱った。伯父さんも僕もそれで不満はなかった。一緒に住むようになって一か月も経たないうちに、僕らは二人で、あるゲームをあみ出した。一緒にいろんな国を発明するのだ。自然の法則を無視した、空想の世界を作り上げるのである。念の入った国ともなると、出来上がるまでに何週間もかかった。僕はそれらの国の地図を描き、壁の特等席に飾った。明るさがころころ変わる島や、一つ目人間たちの王国の地図が、食卓のまわりに並んだ。考えてみれば、現実の世界は僕にとっても伯父さんにとってもずいぶんしんどいものだった。僕らがことあるごとにそこから逃れようとしたのも、無理ないことだと思う。

シカゴに移ってまもなく、伯父さんに連れられて『八十日間世界一周』の映画を観にいった。いうまでもなく、この話の主人公はフィリアス・フォッグという名である。フィリアス・フォッグ。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

それからというもの、ビクター伯父さんは僕をフィリアスと呼ぶようになった。あの不思議な時間——伯父さんの言を借りるなら「我々がスクリーンの我々と向きあったとき」——のひそかなる記念というわけだ。伯父さんは何ごとにつけ、込み入った珍説をでっち上げるのが大好きで、僕の名前についても、隠れた栄光をあれこれ引き出しては面白がっていた。マーコ・スタンリー・フォッグ。伯父さんによれば、その名は僕の血に旅というものが流れているしるしだった。いまだ誰も足を踏み入れていない地に、僕がいずれ行くことになる証しにほかならなかった。マーコは当然、中国を訪れた初のヨーロッパ人マルコ・ポーロに通じる（訳注 英語ではどちらもMarco）。スタンリーは、「暗黒なるアフリカの奥地」でリビングストン博士を捜し当てたアメリカ人ジャーナリストの姓。そしてフォッグは三か月足らずで地球を駆けめぐった男フィリアスに通じる。母がマーコという名を選んだのはただ何となく気に入ったからにすぎないことも、スタンリーというのが単に僕の祖父の名だということも、フォッグにしても実は無学なアメリカ人役人の気まぐれの産物でしかないことも、この際どうでもよかった。ビクター伯父さんは、ほかの人が何も思わないようなところに意味を見つけ出す人だった。そしてその意味を巧みに操り、一種の秘密の支柱を築き上げるのだ。僕はといえば、伯父さんに構ってもらえるのがとにかく嬉しくて、その長広舌がまるっきりのはったりだとわかっていても、心のどこかで、伯父さんの言葉を一言一句本気で信じてもいた。短期的な効果としても、伯父さんが僕の名にいろんな意味を付与してくれたおかげで、転校生としてのつらい最初の何週間かを切り抜けるのも少しは楽になった。子供たちがまっさきにからかう

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

のは名前である。フォッグという名も、彼らが思いつくままに、さまざまな歪曲を被ることになった。ファッグ（下っ端）、フロッグ（蛙）あたりからはじまって、霧から連想される名称も無数に出てきた。スノーボール・ヘッド（雪玉頭）、スラッシュ・マン（ぬかるみ男）、ドリズル・マウス（霧雨口）。名字の可能性が尽きると、今度はファーストネームが攻撃の的になった。Marco の最後の o などは格好の餌食だった。ダンボ、ジャーコ（あほんだら）、マンボ・ジャンボ（ちちんぷいぷい）などの蔑称がまず生まれたが、このほかにも想像を絶するやり口がつぎつぎに出てきた。マーコがマルコ・ポーロになる。マルコ・ポーロがポロ・シャツになる。ポロ・シャツがシャツ・フェイスになる。そしてシャツ・フェイスがシット・フェイス（うんこ顔）となるのだ。はじめて聞いたときは、手の込んだ残酷さにただただ唖然とさせられたものだ。こうした通過儀礼もやがて無事に終わったが、自分の名がこの上なく脆いものなんだという思いは僕のなかにあとあとまで残ることになった。その名は僕という人間とわかちがたく結びついている。だから僕は、これ以上名前に害が及ばぬよう、何とかしてそれを護ろうと考えた。というわけで、十五歳になると、答案用紙に M. S. Fogg と記名するようになった。現代文学の神々に倣ったつもりもあったが（訳注 二文字のイニシャルはT・S・エリオットやD・H・ロレンスといった文豪を連想させる）、と同時に、それが manuscript（原稿）の略称でもあるところが気に入ったのだ。ビクター伯父さんはこの変身術に大賛成だった。「人はみな自分の人生の作者だからね」と伯父さんは言った。「お前が書いている書物はまだでき上がっていない。ゆえに、それは原稿である。だとすりゃこれ以上ぴったりの名があるかね？」。マーコ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

という名は、人々の前から少しずつ姿を消していった。僕は伯父さんにとってはフィリアスであり、大学に上がるころには、ほかのすべての人にとってM・S・フォッグになっていた。気のきいたことを言いたがる連中から、M・Sってのは病気のイニシャルでもあるんだぜと指摘されることもあったが（訳注　多発性硬化症 multiple sclerosis はしばしばこう略される）、そのころには僕ももう、どんな連想や皮肉をくっつけられても平気で、かえってそれを歓迎するようになっていた。キティ・ウーと知りあうと、彼女も僕をいろいろ別の名前で呼んだが、それらはいわば彼女の個人的所有物であり、これもやはり嬉しかった。たとえば、フォギー。これは特別の機会にしか使われない。そしてシラノ。この名が発生したいきさつについては、じきに述べることになるだろう。ビクター伯父さんが生きていて、キティに会えたなら、マーコ＝マルコがささやかなりともついに中国の地を踏んだ、と面白がってくれたことだろう。

　僕はクラリネットのレッスンにはどうも馴染めず（僕の肺は非協力的だったし、唇もすぐ癇癪を起こした）、何かと口実を並べてレッスンを打ちきりに持ち込んだ。野球のほうが僕にはずっと面白かった。十一歳になるころには、例によって僕も、アメリカじゅうにゴマンといる、どこへ行くにもグラブをはめて、右手のこぶしでグラブのポケットを一日千回ぽんぽん叩いている痩せっぽちの子供になっていた。つらい転校生時代を乗りきるにも、野球は大いに役立ってくれた。最初の年の春に、僕が地元のリトル・リーグに入ると、ビクター伯父さんはほとんど全試合に応援に来てくれた。一九五八年七月に、突然ミネソタ州セントポールに引っ越すことになって（伯父さんは「願ってもない話なんだよ」と言った。何か音楽

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

を教える仕事があったような口ぶりだった）一時期それも中断になったが、翌年僕らはまたシカゴに戻ってきた。十月になり、ビクター伯父さんはテレビを買った。ワールドシリーズがはじまると、僕も伯父さん公認で学校をさぼり、六戦にわたる、結局ホワイトソックスの敗北に終わったシリーズを観戦した。それはアーリー・ウィンとゴーゴー・ソックスの年であり、ウォリー・ムーンと月へも届くホームランの年だった。もちろん僕らは地元ソックスを応援したが、ゲジゲジ眉毛のムーンが最後のゲームで一本かっ飛ばしたときは二人ともひそかに喝采を送った。翌シーズンがはじまると、僕らはまたカブスの応援に戻っていった。ドジな常敗集団カブス。彼らこそ僕らの心を捉えたチームだった。ビクター伯父さんはデーゲームの断固たる擁護者だった。チューインガムの王様が人工照明などという邪道に堕していないという事実は、伯父さんから見れば倫理的優越の証しにほかならなかった（訳注　当時カブスのオーナーだったフィリップ・リグリーは有名ガム会社の経営者で、「野球は太陽の下でやるべき」という信念の持ち主だった）。「こっちは野球を見に来てるんだ」と伯父さんはよく言った。「星はグランドにいる連中だけで十分さ。野球とは太陽と熱き汗のスポーツなんだ。アポロの馬車が天頂に浮かぶ！　大いなるボールがアメリカの空に燃える！」アーニー・バンクス、ジョージ・アルトマン、グレン・ホビーといった選手たちについて、僕らは毎年えんえんと議論を戦わせた。伯父さんのいちばんのお気に入りはホビーだったが、みずからの世界観にあくまで忠実な伯父さんは、ホビーはピッチャーとして大成しないだろうと宣言した。なぜか？　名前（趣味）にプロ精神が欠けているから。この種の珍説が伯父さんのジョークの中枢をなしていた。もうそのころには僕も、伯父さん流ユーモ

アの通になっていたから、それらが真顔で口にされねばならないこともちゃんと承知していた。

僕が十四歳になってまもなく、家族の人口が三人に増えた。ドラ・シャムスキー、旧姓カッツ、がっしりした体つきの、四十代なかばの未亡人。金髪に脱色した頭がひときわ目を惹き、臀部はいつもぎゅっと締めつけられている。六年前に夫シャムスキー氏を亡くして以来、ドラはミッドアメリカン生命保険の統計課で秘書として働いていた。ビクター伯父さんと出会ったのは、フェザストン・ホテルの舞踏室でのことだった。保険会社がそこで恒例の大晦日パーティーを開き、余興に音楽をということでムーンライト・ムーズを雇ったのである。旋風のようにめまぐるしい求愛期を経て、二人は三月に夫婦となった。このこと自体は僕も文句はなかったし、結婚式でも嬉々として新郎付添い役を務めた。でも、いったん事態が落着くと、わが新しい伯母の、夫のジョークに対する反応があまりよくないのを見て、僕はひそかに胸を痛めた。伯母さんはひょっとして少し鈍いところがあるんじゃないだろうか。頭の回転がいくらかゆっくりなんじゃないだろうか。夫婦生活はこれで大丈夫かと、ちょっと心配だった。やがて僕は、ドラのなかに二人の人間が同居していることを知った。第一のドラは、元気溌剌、軍曹のごとくきびきびと家のなかを飛び回る、胴間声の男っぽい人物。ちゃきちゃきの明るさの砦、何でも来いの親分肌。そして第二のドラは、飲んべえで遊び好きの、肉体の快楽を愛する女である。ピンクのバスローブを着てうろうろし、居間の床にゲロを吐く、涙もろい、やたらと自分を憐れみたがる人間。二人のドラのうち、僕は圧倒的に第

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

二のほうが好きだった。少なくとも、第二のドラが前面に出ているときは、僕にも優しかった。けれどこの酩酊せるドラは、僕を途方に暮れさせてしまうひとつの矛盾を生み出した。というのも、ドラが酔いつぶれると、ビクター伯父さんは不機嫌で悲しそうな顔になるのだ。僕にとって、伯父さんが苦しんでいるのを見るのはこの世の何よりもつらかった。しらふの、口やかましいドラには伯父さんも耐えられるのに、酔っ払ったドラは、伯父さんのなかの厳しさ、気短さを引き出してしまうのだ。伯父さんのそういう側面は、僕には何か不自然なものに思えた。真の伯父さんの歪曲に感じられた。いずれにせよ、我が家では善と悪がつねに戦闘状態にあることになった。ドラが善なるときは、伯父さんが悪。ドラが悪なるときは、伯父さんが善。善なるドラは悪なる伯父さんを生み出し、ドラが悪に切り替わらない限り善なる伯父さんも戻ってこない。一年以上にわたって、僕はこの地獄のようなシステムの囚人でありつづけた。

　幸い、ボストンのバス会社は相当の補償金を払ってくれていた。伯父さんの計算では、僕の大学四年間の学費と、一応の生活費に加えて、人間らしい暮らしを営むためのプラスアルファも出せるくらいの額だった。はじめは伯父さんもこの金にはいっさい手をつけず、僕の養育費も気前よく自分のポケットから出してくれた。自分の責任を果たすことを誇りに思い、僕が大学に上がるまで補償金はそのままにしておくつもりだったのだ。が、ドラが登場したいま、伯父さんの計画も変更を余儀なくされた。結局、元金についた利息と、「人間らしい暮らしを営む」分の一部を引き出して、伯父さんは僕をニューハンプシャーにある私立の寄

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

寄宿学校に入れた。こうすれば、自分が犯した計算ちがいの影響も帳消しにできると考えたのだ。というのも、伯父さんの期待に反して、ドラは僕の母親役にはなれそうになかったので、伯父さんとしてもさっさと別の解決策を講じねばと思ったのである。「人間らしい暮らしを営む」金がなくなってしまうのは残念だったが、まあそれも仕方がない。「いま」と「将来」のどちらかを選ばねばならないとなると、伯父さんはいつだって「いま」のほうを選んだ。伯父さんの人生全体がそういう論理に流されてきたことを思えば、ここでふたたび「いま」が選ばれるのも当然だった。

僕はアンセルム男子高校で三年間を過ごした。二年目が終わったところで家に帰ってみると、ビクター伯父さんとドラはすでに別々の道を歩んでいた。とはいえ、もう一度転校するのも無駄に思えたので、夏休みが終わって新しい学年がはじまると僕はニュー・ハンプシャーに戻っていった。離婚の経緯をめぐる伯父さんの説明はひどく混乱していた。実情はいかなるものだったのか、どうもいま一つ伝わってこなかった。貯金が消えたとか、皿が割れたとかいった話が出たかと思うと、今度はジョージなる男が話題に上ったりした。でも僕もそれ以上追及はしなかった。何といっても、独り者の身に戻った伯父さんは、気落ちしているというよりほっとしているように見えたからだ。結婚戦争を何とか生き延びはしたものの、伯父さんもまったく無傷というわけではなかった。見ていて心配になるくらい、身なりもみすぼらしくなっていた（ボタンはなくなっているし、カラーには垢がこびりつき、ズボンの折り返しもほころびている）。得意のジョークまで、何だか憂鬱気味の、ほとんど痛ましげな

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

響きが伴うようになった。それだけでも十分心配の種だったのに、加えて体まですっかり衰えてしまっていた。歩いている最中によろけたり（訳もなく膝(ひざ)がかくんと崩れてしまうのだ）、家具にぶつかったり、自分がどこにいるのか忘れてしまったような様子を見せることもあった。ドラとの暮らしがひどくこたえたことは間違いない。でもそれだけではなかったはずだ。自分の不安をこれ以上大きくしないようにと、僕はあれこれ理屈を並べて自分をごまかし、問題は伯父さんの肉体そのものではなく一時的な精神状態にあるのだと信じることにした。あるいはその通りだったのかもしれない。でも、いまふり返ってみると、その夏はじめて目にした一連の徴候を、三年後に伯父さんの命を奪うことになる心臓発作と結びつけないのは難しい。本人は何も言わなかったけれど、体は暗号を使って僕に語りかけていたのだ。そして僕は、その暗号を解くだけの知識も分別も持ちあわせていなかったのである。

　クリスマス休暇に僕がシカゴに帰ると、危機は過ぎ去ったように見えた。伯父さんはほぼ以前の陽気さを取り戻していたし、仕事のほうもにわかに動き出していた。その年の九月に、伯父さんとハウィー・ダンはムーンライト・ムーズを解散して、新しい楽団を結成したのだ。今回はドラムス、ピアノ、サキソフォンを担当する年下のミュージシャンと組んだ五人編成である。バンド名はムーン・メン。レパートリーの大半はオリジナルで、伯父さんが歌詞を書き、ハウィーがメロディーをつけた。五人全員がそれなりにボーカルに加わった。「もうナツメロはなしだ」帰ってきた僕に伯父さんはそう宣言した。「ダンスナンバーもなし。酔っ払い結婚式もなし。けちなドサ回りはもうやめて、ビッグな舞台を狙(ねら)うのさ」。どうやら

CamScannerでスキャン

新しいバンドは、何かオリジナルなものに行き当たったらしかった。翌日の晩、ステージを見にいってみると、彼らの歌は僕の耳にほとんど啓示のように響いた。それはユーモアと活気にあふれた、政治から愛にいたるありとあらゆるものを笑いとばす、何とも騒々しい諷刺歌だった。ビクター伯父さんの歌詞は、表面的には小粋な、戯歌のような味わいがあったが、その深い意味あいはほとんどスウィフト的といってよかった。もしそんなものが可能だとすれば、スパイク・ジョーンズとショーペンハウアーの出会い、といった感じである。ハウィーがまず、シカゴの繁華街のクラブでの仕事を見つけてきた。結局彼らはそこのレギュラーとして、十一月の感謝祭からバレンタイン・デーまで、週末ごとにステージに立つことになった。僕が高校の卒業式を終えて帰ってきたころには、すでにツアーの計画も進んでいて、ロサンゼルスでレコーディングをする話まで持ち上がっていた。ビクター伯父さんの本のコレクションが話題になったのも、こうした事情のなかでのことだった。バンドは九月末にツアーに出ることになっていて、いつ戻ってくるかも定かでなかったのである。

　夜遅くのことだった。僕がニューヨークに発つ予定の日まで、あと一週間もなかった。伯父さんは窓辺の椅子に座って、ローリーを立てつづけに喫いながら、安物のタンブラーに注いだシュナップスを飲んでいた。僕はソファに長々と寝そべり、バーボンと煙草の朦朧たる世界のなかに上機嫌に漂っていた。それまで三時間か四時間、我々は特に何の話をするでもなくあれこれお喋りをしていたが、その時点で会話は中休みに入っていて、二人とも自分の思考の静寂に浸っていた。ビクター伯父さんは喫っていた煙草の最後の一喫いを味わい、煙

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

がくるくると螺旋をのぼっていくのを細目で眺めてから、お気に入りの灰皿――一九三九年の万博記念の灰皿だ――でもみ消した。懐しく潤んだ目で像を見つめながら、伯父さんはシュナップスをもう一口すすり、舌つづみを打って、それからふうっと大きくため息をついた。「つらい場面が来たな」と伯父さんは言った。「結末。別れ。最後の一句。杭を引っこ抜く、と西部劇で言うやつだ。あまり便りがなくても、フィリアスよ、私がお前のことを思ってることは忘れんでくれよ。この先どこに落着くのか、わかっておれば話は簡単なんだが。何せ私もお前も、にわかに新しい世界が見えてきた。ゆっくり手紙を書く暇もなかろうと思うんだ」伯父さんはそこで一息ついて、もう一本煙草に火をつけた。マッチを持つ手が震えているのが見えた。「今度のバンドがどのくらい続くか、わかったもんじゃない」と伯父さんは話をつづけた。「でもハウィーは自信たっぷりなんだ。たしかにいまのところ、あちこちからどんどん仕事が入ってきておる。きっとまだまだ来るだろう。コロラド、アリゾナ、ネバダ、カリフォルニア。西へ向かってツアーするんだよ。荒野に突入ってわけさ。結果はどうあれ、なかなか面白い経験になると思うね。都会の伊達男の一団、カウボーイとインディアンの地をゆく。広漠たる大地を思え。私もわくわくしてるよ。砂漠の空の下で我らの音楽を奏でる。悪くない話じゃないか。彼の地で何か真理の啓示が訪れんとも限らんぜ」
こう言うとビクター伯父さんは、自分の科白の仰々しさに照れたみたいに、声を上げて笑った。「要するにだね」と伯父さんは続けた。「とにかく長旅になるだろうから、身軽にせにゃならん。いろんな物を、捨てるなり人にあげるなりするしかない。で、物が永久に消えて

しまうのは私としても忍びない。そこでお前に贈ることに決めたのさ。何といったって、信頼できる人間といえばお前しかおらん。伝統を引き継いでくれるのはお前だけなんだよ。まず本からはじめよう。そう、もちろん全部だ。実際、いまほどふさわしい時期はない。昼間数えてみたら、全部で一四九二冊あった。縁起のいい数じゃないか。コロンブスのアメリカ発見にまつわる数字だし、お前の行く大学もコロンブスにちなんだ名前だからね。大きい本もあれば小さいのもあるし、厚い本もあれば薄いのもある。でもどれもみな、言葉が書かれていることに変わりはない。そこに書いてある言葉を読めば、お前の勉強にも役立つと思うんだ。いや、何も言わんでくれ。遠慮の文句はいっさい抜きだ。お前がニューヨークに着き次第、郵便で送るからね。ダンテが二冊あるのは一冊もらっておくが、あとは全部受け取っておくれ。お次は木のチェスセットだ。マグネットのやつは私が使うことにするが、木のはお前が持っていっておくれ。それから、野球選手のサインを入れてあるシガー・ボックスだ。ここ二十年のカブスのメンバーはほとんど全部揃(そろ)っておる。スターのも何枚かあるし、ちょっと小粒となればリーグじゅうのプレーヤーが無数に集めてある。マット・パッツ、ミモ・ルーナ、リプ・レプルスキ、パッツィ・カバリェーロ、ディック・ドロット。いかにも無名らしい名前だろう、それだけでも不滅となる資格を有する連中なのさ。さて次は、こまごまとした小物やがらくた、その他大勢だ。ニューヨークやアラモ砦(とりで)で買った土産の灰皿。クリーブランド交響楽団の一員だったころ録音したハイドンとモーツァルトのレコード。家族のアルバム。子供のころ州の音楽コンクールで一等を取ったときの盾。一九二四年のことだよ、

信じられんね——遠い、遠い昔さ。そして最後に、何年か前の冬にシカゴの街で買ったツイードのスーツも引き取っておくれ。これから行くところじゃそんなものは要らないからね。最高級のスコットランド・ウールなんだよ。いままで二度着ただけだし、救世軍にでも寄付しようものなら、ドヤ街暮らしの薄汚ない男の背中に落着くのが関の山だ。お前に着てもらったほうがずっとありがたい。なかなか貫禄たっぷりに見えると思うよ。見てくれをよくしようとしたって、べつに犯罪じゃなかろう？　明日、朝いちばんに仕立屋へ行って、寸法を直してもらおうじゃないか」

「さあ、これで全部だ。本、チェスセット、サイン、その他大勢、スーツ。わが王国が処分できて満足だよ。おいおい、そんな目で見なくたっていいじゃないか。ちゃんと心得てやってることなんだ、かたがついて私は喜んでいるんだよ。フィリアス、お前はいい子だ。私がどこにいようと、お前はいつだって私と一緒にいるんだよ。当面のところ、私たちはそれぞれ反対の方向に出かけていく。でもいずれまた同じところに行きつくはずだよ、きっとね。何もかもいずれはうまく行くさ、すべてはつながっているんだ。九つの輪をめぐる、九つの惑星。九イニング。われらの九つの生（訳注「猫には九つの生がある」という諺を踏まえた表現）。考えてもごらん。対応関係は無限にある。だがまあ、与太はこれくらいにしておこう。もう夜も遅い。眠りが私たちを呼んでおる。さあ、握手しておくれ。そうだその意気、がっちり力強くな。よしよし。そして最後に手を振る。これでよし、別れの握手完了だ。時の果てまで効く握手だよ」

一週間か二週間ごとに、ロッキー伯父さんから絵葉書が届いた。それはたいてい、観光客向けのけばけばしいフルカラーの葉書だった。ロッキー山脈の日没の絵、街道沿いのモーテルの宣伝写真、サボテンやロデオ、観光牧場、ゴーストタウン、砂漠のパノラマ。投げ縄の絵のなかに歓迎の文句を刷ったのや、ロバが漫画式の吹き出しで喋っているものもあった。「シャバー・ガルチからこんにちは！」。葉書の文面は短い、謎めいた走り書きだった。でも僕にとっては、便りの中身より、伯父さんが生きているという証拠がときおり届くという事実のほうが大切だった。いちばんの楽しみは絵葉書それ自体だった。それが野暮で悪趣味であるほど、受け取る喜びも大きかった。葉書が届くたびに、目一杯おどけた調子のジョークをわかちあっている気分になれた。特に楽しい葉書（リノから届いた空っぽのレストランの写真や、シャイアンから来た、太った女が馬に乗っている写真）をもらうと、机の上の壁にセロテープで貼りつけたくらいだった。僕のルームメイトも、リノの空っぽのレストランまでは何とかついて来れたが（訳注 リノは離婚裁判所で有名）、馬上の女にはさすがに首をかしげた。伯父さんの元の奥さん、ドテッとしていたんだけどね、その人に似てるんだよ、と僕はルームメートに説明した。世の中いろいろあるからね、ひょっとするとこれも本人かもしれないよ、と。

伯父さんは一つの場所に長くとどまらなかったから、こちらからはなかなか返事が出せなかった。十一月末に、僕はニューヨーク市の郵便について一ページに及ぶ手紙を書いたが

（僕は二人の友人とともにエレベーターにとじ込められたのだった）、投函できたのはようやく翌年一月、ムーン・メンがタホーで三週間の舞台をスタートしたときだった。出す手紙の数こそ少なかったけれど、もらったスーツを着ることで、僕は伯父さんと霊的なつながりを保っていられた。当時、大学生がスーツを着るのはまるっきりの流行遅れだった。でもそのスーツを着ると、僕の気持ちは安らいだ。家に帰ったような気になれた。そして、事実ほかにどこにも家のなかった僕は、毎日明けても暮れてもそのスーツを着た。つらいとき、悲しいときも、伯父の服の温もりにくるまれていると思うと心が和んだ。このスーツこそが僕を支えてくれているのだと思えることさえあった。これを着なければ僕の体はばらばらになってしまう、そんな気がした。スーツは一種の保護膜、人生の殴打から僕を守ってくれる第二の皮膚になってくれた。いまからふり返ってみると、自分がいかに変てこな姿をしていたかがわかる。がりがりに痩せた、みすぼらしい身なりの、小難しい顔をした、世の中から明らかに歩調のずれた若者。だがそもそも、僕は世の中に歩調を合わせる気なんてまるでなかった。仲間の学生たちから変人の烙印を押されたとしても、それは僕の問題ではなかった。僕は荘厳なるインテリであり、つむじ曲がりで頑固者、未来の天才、群れから一人孤立した気難しいマレヴォーレ（訳注　ジョン・マーストン一六〇四年の戯曲『不平の徒』中の人物）だった。当時の自分がどれほど馬鹿げた真似をしていたかと思うと、ほとんど赤面してしまう。僕は臆病と傲慢のグロテスクな化合物だった。長い不器用な沈黙と、度しがたい騒々しさとを交互にくり返していた。その気になると夜どおし飲み屋に居座って、緩慢な自殺でも謀るみたいに煙草と酒に浸り、誰も知らな

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

い十六世紀の詩人の言葉を口にしたり、中世の哲学者について訳のわからないラテン語の文句を呟いてみたり、とにかく友人たちを恐れ入らせようと片っ端からいろんなことをやった。十八歳というのは恐ろしい年齢である。自分はクラスメートの連中よりも大人なんだ、と僕はわけもなく確信してふるまっていたが、実のところはただ、若くあることの別の方法を見出していたにすぎなかった。何よりもまず、スーツこそ僕のアイデンティティの証しであり、他人にこう見られたいという僕自身の紋章にほかならなかった。客観的に見て、スーツには何も悪いところはなかった。緑がかった黒のツイードで、細かいチェックが入っていて、襟は細い。どっしりした、丁寧な作りの一着の衣服である。けれど何か月も常時着用していたために、スーツは次第に奇妙な様相を呈してきた。いってみれば、痩せっぽちの体にひょいと乗せた、皺だらけの後知恵。だらんと垂れたウール製の混沌。むろん、友人たちには知るよしもなかったのは、僕がそれを感傷的な理由から着ているという事実だった。規範に収まるのを拒むポーズの下で、実のところ僕は、伯父さんにそばにいてほしいという願望を満たしていたのだ。服がどんな作りかは、ほとんど問題ではなかった。かりにビクター伯父さんが紫色のズートスーツ（訳注 肩幅の広い、膝まで届く長い上着と、裾の細いズボンから成るおそろしく派手な服）をくれていたとしても、僕はきっとそれを、ツイードを着たのとまったく同じ気持ちで着たことだろう。

春になり、最初の学年が終わると、ルームメートのジンマーが、次の年度も一緒にアパートに住まないかと誘ってくれたが、僕は断った。ジンマーとは結構気が合っていたけれど（実際、彼は僕の最良の友だった）、高校のはじめから四年間寮生活をつづけてきたので、一

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

人で暮らしてみたいという気持ちが強かったのだ。そして僕は西一一二丁目にアパートを見つけ、六月十五日、両手にバッグを下げて入居した。僕が到着したのとほぼ同時に、がっしりした体格の男が二人現われて、過去九か月のあいだ倉庫に眠っていた、ビクター伯父さんの本が入った七十六の箱を届けてくれた。僕の部屋はエレベーターのついた大きなビルの五階にあった。まずまずの広さのワンルーム・アパートで、南東の隅に簡易キッチンがあって、それにクローゼットとバスルームがつき、裏通りに面して窓が二つある。窓台で鳩たちが羽根をばたつかせてクークーと鳴いた。眼下にはでこぼこのゴミ缶が六つ立っていた。室内の空気は何となくくすんでいて、どこを見てもうっすら灰色に染まっていた。どんなに天気のいい日でも、ごく貧弱な光が広がるだけだった。はじめのうちは、一人暮らしを選んだことに対する心の痛みというか、かすかな恐怖感のようなものを僕は感じていた。けれどもじきに、まったく偶然に、ある奇妙な発見をしたことで、いっぺんにこの部屋に愛着を抱くようになった。そこに移って二日目か三日目の夜のことだ。僕はたまたま二つの窓の中間に立って、左側の窓からややそれた方向を向いていた。そして何げなく、視線をわずかにずらすと、突然、裏通りの二軒の建物にはさまれた、筋のように細い空間が見えた。それはブロードウェイだった。ブロードウェイをもっとも小さく、もっとも縮約した風景だった。しかも、僕の部屋から見えるその風景全体が、一つのネオンサインによって埋めつくされていたのだ。ピンクとブルーの文字が煌々と燃えて、MOON PALACEという言葉を書き出していた。それが通りに面した中華料理店の看板であることはすぐにわかった。けれども、その言

葉があまりに唐突に襲ってきたせいで、僕にとってはいっさいの現実的な意味も関係も吹き飛んでしまった。それらは魔法の文字だった。闇のなかにぽっかりと、空それ自体からのメッセージとして浮かんでいた。ムーン・パレス。僕はすぐさま、ビクター伯父さんとその楽団のことを考えた。その字が目に入ったとたんの、理屈を超えた一瞬のうちに、僕にのしかかっていた恐怖感がすうっと離れていった。いままで味わったことのない、突然の、絶対的な経験だった。がらんとした陰気臭い部屋が、いまや霊的なるものの住む場となった。不可思議な前兆と、神秘的で予測不能の出来事が交叉する地点となった。僕はなおもムーン・パレスの看板に見とれていた。そして徐々に理解した。僕は正しい場所に来たのだ、と。この小さなアパートこそ僕が住むべき場なのだ。

僕はその夏、本屋でアルバイトをするかたわら、映画を観たり、一時期はシンシアという名の、もう顔もとっくに忘れてしまった女の子に熱を上げたりした。新しいアパートはますます居心地がよくなっていった。秋が来て新しい学年がはじまると、気狂いじみた生活のなかに僕は入っていった。ジンマーら友人たちと飲み明かし、恋の道を追求し、かと思うと完璧な沈黙に浸って読書と勉学に没頭する、そんなことのくり返しだった。ずっとあとになって、何年もの距離を置いてこのころやったことをふり返ってみたとき、僕はそれがいかに実りある日々だったかを実感した。

やがて、二十歳になって何週間も経たないうちに、ビクター伯父さんから長文の、どうにも要領を得ない手紙が来た。それはフンボルト百科事典の黄色い購買申込書の裏に鉛筆で書

かれていた。理解できるところをつなぎ合わせてみると、要するにムーン・メンは悪運に見舞われたらしかった。不運な出来事がいくつも続いた末に（契約がキャンセルになった、タイヤがパンクした、サキソフォン吹きが酔っ払いに鼻をへし折られた）、バンドは解散してしまったのだ。十一月以来、ビクター伯父さんはアイダホ州ボイジーに住んでいて、百科事典の訪問セールスで食いつないでいた。でも事態は芳しくなかった。長年伯父さんを知ってきてはじめて、僕はその言葉のなかに敗北の響きを聞き取った。「私のクラリネットは質に入っている」と伯父さんは書いていた。「預金残高はゼロ、そしてボイジーの住民は百科事典なんてまるっきりお呼びじゃない」

　僕はまず伯父さんに電信でお金を送ってから、ニューヨークに来るよう勧める電報を打った。何日かして、誘ってくれてありがとうという返事が来た。今週の末までに身のまわりのことを整理して、いの一番でバスに乗る、と返事にはあった。だとすればこっちに着くのは火曜、どんなに遅くとも水曜だ。だが水曜が来て、夜になっても伯父さんは現われなかった。もう一回電報を打ってみたが、何の返事もなかった。不慮の事態が生じる可能性はほとんど無限にあるように思えた。ボイジーからニューヨークのあいだで、一人の人間に起こりうるありとあらゆる事件を僕は想像してみた。するとアメリカ大陸はにわかに、広漠たる危険地帯と化した。それは無数の罠と迷路から成る物騒この上ない悪夢だった。伯父さんの住んでいる下宿屋の大家に連絡を取ろうといろいろ手を尽くしたが、何の成果もなかった。万策尽きて、僕はボイジーの警察に電話をかけてみた。ニール・アームストロングという名の巡査

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

部長に、僕は問題を事細かに説明した。翌日、アームストロング部長が電話してきて、その知らせを伝えてくれた。北十二丁目の下宿で、ビクター伯父さんは死体で発見されたのだ。コートを着たまま椅子にだらんと座り、右手には組み立て途中のクラリネットがしっかりと握られ、荷物を詰めたスーツケースが二つ、ドアのそばに立ててあった。警察は室内を捜索したが、犯罪を匂わせるようなものは何も出てこなかった。検屍官の予備報告によると、死因はおそらく心臓発作だろうということだった。「お気の毒です」と巡査部長は言い足した。

僕は翌朝西行きの飛行機に乗った。そして死体安置所の遺体を確認し、伯父さんの残した借金を返済して、もろもろの書類にサインし、遺体をシカゴに送る手続きをした。死体の有様を見て、葬儀屋は困りはてていた。何しろほぼ一週間、アパートに放ったらかしになっていたのだ。いまさら手の打ちようもない。「ま、私が遺族でしたら奇跡は期待しませんな」と葬儀屋は僕に言った。

僕は電話で葬式の手はずを整え、伯父さんの友人に何人か連絡を取って（ハウィー・ダン、鼻をへし折られたサキソフォニスト、かつての教え子数人）、一応ドラにも連絡を試み（見つからなかった）、それから棺と一緒にシカゴへ帰った。ビクター伯父さんは僕の母親の隣に埋葬された。我らの友が土のなかに消えていくのを見守る僕たちの頭に、空が雨のつぶてを投げつけた。それが済むと、みんなでノースサイドにあるダンの家に行った。ダンの奥さんがささやかな食事を用意してくれていた。それまで四時間というもの、ずっとめそめそ泣いていた僕は、ダンの家に着くやいなやコールドカットの肉や熱いスープと一緒にバーボン

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

のダブルを立てつづけに五、六杯流し込んだ。それで気分も相当よくなって、一時間かそこら経ったころには大声で歌い出していた。ハウィーがピアノで伴奏してくれた。しばらくのあいだ、故人を偲ぶ集いは騒々しい宴に変貌した。ところがそのうちに、僕が床にゲロを吐いて、盛り上がった気分もいっぺんに白けてしまった。六時になると僕は暇を告げて、千鳥足で雨の街に出ていった。二時間か三時間のあいだ闇雲に街を歩き回って、どこかの家の玄関口でまたゲロを吐いたあと、ネオン街で傘をさして立っている娼婦に出会った。グレーの瞳をした痩せっぽちの、アグネスというその娼婦にくっついて僕はエルドラド・ホテルの一室に入り、彼女を相手にサー・ウォルター・ローリーの詩についてしばし講釈し、服を脱いで脚を開いた彼女に子守り歌を歌ってやった。あんた頭がどうかしちゃってるわね、と彼女は言ったが、僕が百ドルを渡すと、朝まで一緒にいてあげるわと言ってくれた。でも僕はよく眠れなかった。午前四時にベッドを抜け出し、濡れた服に体を押し込んで、タクシーを拾って空港に行った。十時にはニューヨークに戻っていた。

最終的には、問題は悲しみではなかった。はじめはそうだったかもしれないが、じきにそれは何か別のものに変わっていった。もっとはっきり手ごたえのある、目に見える影響力をもった、暴力的な傷をもたらす何ものかに。さまざまな力の連鎖がはじまっていた。ある時点で、僕は安定を失い出した。自分自身のまわりを僕はぐるぐる旋回しはじめた。その輪は

次第に大きくなっていき、やがて僕は軌道の外に飛び出してしまったのだ。

何よりもまず、経済状態が悪化してきていた。しばらく前から意識はしていたものの、それまでは脅威もはるか遠くにぼんやり見えているにすぎず、ことさら真剣に考えてはいなかった。けれども、ビクター伯父さんを亡くし、その後のつらい日々のあいだに何千ドルも使ってしまったために、卒業まで何とかもつはずだった貯金は激減していた。何か手を打たない限り、ゴール到達はおぼつかない。計算してみると、これまでの予算どおり暮らしていくと、四年生の三か月目、すなわち十一月に貯金は底をつくことがわかった。まったくのゼロ、十セント貨も五セント貨も一セント貨も一枚残らずなくなってしまうのだ。

まず思いついたのは、大学を辞めてしまうことだった。でも、一日か二日考えた末、結局この案は断念した。何といっても僕は、大学をちゃんと卒業すると伯父さんに約束したのだ。いまとなっては伯父さんに計画の変更を認めてもらうこともできないわけだし、勝手に約束を破るのは許されない気がした。それに徴兵の問題もあった。いま大学を辞めれば、徴兵猶予も無効になってしまう。アジアのジャングルで夭折を遂げるべく軍隊に加わるなんて、どう考えてもぞっとしない。やはりニューヨークにとどまって勉強を続けるほうが得策である。それが分別ある判断というものだろう。いままでだってちゃんとやってきたわけだし、それなりにやりくりしていくのは決して難しくないように思えた。奨学金、学生貸付金、勤労学生プログラム、と僕のような立場の人間が選びうる選択肢はいくらでもあった。けれども、それらを一つひとつ検討しているうちに、なぜかたまらなく嫌な気分になってきた。それは

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

まったく唐突な、意志とは無関係の反応だった。身を震わす嘔吐の発作だった。こんな手段に頼るのは御免だ、と僕は決断し、それらいっさいを却下した。頑迷にも、高慢にも、生き延びる唯一の道を断ち切ってしまうことになるのを十分承知しながら。それからというもの、僕はわが身を救うために何一つ手を打たなかった。指一本持ち上げなかった。どうしてあんな真似をしたかは神のみぞ知るである。その時点では自分でも、無数の理由をでっち上げはした。でも結局は、絶望ということに帰すると思う。要するに僕は絶望していたのだ。かくも大きな激変のなかに放り込まれたからには、何か劇的な行動に出る必要があるように思えた。僕は世界に唾をひっかけてやりたかった。これ以上はないというくらい常軌を逸した行為をしてみたかった。いろんなことを考えすぎた、本を読みすぎた若者の情熱と理想主義とに導かれて、僕は、自分がなすべき何かとは何もしないことである、という結論に達した。僕のなすべき行為とは、いかなる行為も戦闘的に拒絶するという行為なのだ。いってみれば、美的次元まで高められたニヒリズム。僕はわが人生を一個の芸術作品に仕立て上げるのだ。自分が呼吸する一息一息が、来たるべき破滅を味わうすべを教えてくれる——そんな美妙なる逆説のために、わが身を犠牲に供するのだ。星々の指すところ、行きつく先は明らかに皆既日食だった。違った予言を読みとろうと悪あがきするさなかにも、その暗闇のイメージに僕はじわじわと魅せられていった。その構図の簡潔さに引き込まれていった。僕は決心した。不可避の到達点から逃げたりはしない。でもわざわざ到達を早めるようなこともしまい、と。とりあえずいままでどおりの人生を続けられるなら、それに越したことはない。気長にやろ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

う、じっくり行こう。行きつくところ何が起きるかは承知している。それが今日起ころうと、明日起ころうと、とにかくいずれ起こるのだ。皆既日食。野獣はいまや討ち取られ、その内臓は解読された。月が太陽を覆いつくす瞬間に、僕も消滅するだろう。まったくの一文無しとなり、わが名に付すべきものとて何ひとつない、肉と骨の残滓となるだろう。

　ビクター伯父さんの本を読みはじめたのはこの時期だった。葬式の二週間後、僕はでたらめに箱を一つ引っぱり出し、ナイフで慎重にテープを切って、なかに入っていた本を全部読んだ。それは何とも奇妙な混合物だった。本の詰め方にはいかなる秩序も目的もないように思えた。小説があり戯曲があり、歴史書に旅行記があり、チェスのガイドに探偵小説、SFに哲学書があった。活字のまったき混沌。僕としてはそれで構わなかった。それらの本を一冊ずつ読み通しながら、僕はいっさいの価値判断を控えた。僕にしてみれば、どの本も同じ価値を有していた。それぞれの文はまさに持つべき語数から成り、それぞれの語はまさにあるべき位置に置かれていた。これがビクター伯父さんを悼む僕なりのやり方だった。一箱ずつ、すべての箱を開け、一冊ずつ、すべての本を読む。それが僕が自分に課した責務だった。そして僕はそれを最後までやり抜いた。

　どの箱を開けても、最初の箱と同じ、高尚も下世話も一緒くたのごった煮が出てきた。短命に終わった本が古典と同居し、ぼろぼろのペーパーバックが分厚いハードカバーのあいだにはさまり、けばけばしいベストセラーがジョン・ダンやトルストイと混じりあっていた。そもそもビクター伯父さんの書物収集には、いかなる意味における組織性もなかった。本を

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

一冊買うたびに、書棚の、すぐ前に買った本の隣に置くだけだった。本の列は次第に拡張し、時とともにどんどん大きなスペースを占めるようになり、やがてそのままの順番で箱へ入っていくことになった。したがって、少なくとも年代だけは完璧に保存されたわけである。何の組織化も企てなかったおかげで、買った順序はそのまま残っていたのだ。僕にとっては願ってもない方法だった。箱を開けるたびに、伯父さんの人生の新たな一断面に入っていくことができるのだから。ある決まった数の日、週、月を有する時空に僕は入っていく。かつて伯父さんが位置していたのと同じ精神空間にいま僕はいるんだ、伯父さんと同じ言葉を読んで同じ物語を生きて、ひょっとしたら同じことを考えているんだ、そう思うと気持ちが慰められた。それはずっと昔の探検家の道程をたどるのに似ていた。ジャングルを分け入り、前人未到の領域に踏み込んでいった探検家の足跡を一歩一歩模倣しながら、太陽とともに西へ向かってその光を追い、ついに光が果てるまで突き進むのだ。箱には番号もラベルもついていなかったから、伯父さんの人生のどの時期に入っていくことになるのか、前もって知ることはできなかった。したがってその旅は、連続性のない、いくつもの別々な小旅行から構成されることになった。たとえば、ボストンからレノックス。あるいはミネアポリスからスー・フォールズ。ケノーシャからソルトレーク・シティ。地図の上を行ったり来たりさせられることも、べつに気にならなかった。最終的にはどのみちすべての空白は埋められ、すべての道程は踏破されるのだ。

箱のなかには以前自分で読んだ本もたくさんあったし、伯父さんが朗読して聞かせてくれ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

た本もあった。『ロビンソン・クルーソー』、『ジキル博士とハイド氏』、『透明人間』。でも構いはしなかった。僕はすべての本に対し等量の情熱を注いで読み進んだ。古い本も新しい本も、同じ食欲をもって貪った。読み終えた本の山が部屋の隅でだんだんと高さを増していった。いくつも並ぶ本の塔が崩れ落ちそうな危険を呈してくると、僕は危機に瀕した本たちを二袋のショッピング・バッグに詰め込み、次に大学へ行くついでに古本屋に持っていった。ブロードウェイをはさんでキャンパスの真向かいにあった、チャンドラー書店という店である。狭苦しい、ごみごみした店だったが、商売は結構繁盛していた。一九六七年の夏から六九年の夏にかけて、僕は数十回にわたってその古本屋を訪れることになった。そうやって僕は自分の遺産を少しずつ手放していったのだ。このように、すでに所有しているものを活用すること、それが唯一僕が自分に許した行動だった。もちろん、かつてビクター伯父さんのものだった本と別れるのはつらかった。でも同時に、伯父さんもきっと許してくれただろうという思いはあった。それらの本を読むことによって、僕はいわば伯父さんに対する負債を解消したのだ。本を読み終え、金が底を尽きかけたいま、次は本を金に変換するというのは、いかにも理に適っているように思えた。

問題は、変換によって得られる金が十分ではないということだった。チャンドラーの言い値はずいぶん安かったし、書物というものに対する理解も僕とはまるで違っていて、言葉に窮してしまうこともしばしばだった。僕にとって、本とは単なる言葉の容器ではなく言葉それ自体であり、したがって本の値打ちも、その物理的状態ではなく精神的内容によって決め

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

られるべきものだった。ぼろぼろのホメーロスのほうがぴかぴかのウェルギリウスより貴重であり、デカルト三冊はパスカル一冊に及ばない。僕にとっての基本的区別はそういうものだった。でもチャンドラーにとってそんな区別は存在しなかった。彼にしてみれば本とは単なる物体であり、物たちの世界に属する一個の物にすぎない。したがってそれは、靴箱やトイレの吸引カップやコーヒーポットと本質的に何ら変わるところはなかった。僕がビクター伯父さんの蔵書を持ってくるたびに、チャンドラーはいつも同じ芝居をやり出した。嫌悪感もあらわに指先で本をつまみ、背表紙をじろじろ眺めて、書き込みやしみはないかとページを繰る。どう見てもそれは、汚物の山を扱う人間の態度だった。これが彼のやり口だった。品物をおとしめることによって、心置きなく底なしの安値をつけられるのだ。三十年の修練を積んだだけあって、演技も堂に入ったものだった。ぶつぶつ独り言を呟く、顔をしかめる、舌をちっと鳴らす、悲しげに首を横に振る。この演技の意図は、僕の価値観の無意味さを僕に思い知らせることにあった。そもそもこんな代物を持ってきたことの厚顔無知ぶりを認識させることにあった。君、このがらくたと引き換えに金をよこせというのかね？　君は何かい、ゴミを持っていってくれる清掃局にも金を要求するのかね？

　買い叩かれているのは承知していたが、僕はめったに異を唱えなかった。結局のところ、こっちに何ができるというのか？　権力はチャンドラーの側にある――その事実はどうあがいたところで動かしようがない。こっちはつねに、売ろうと必死であり、向こうはつねに、買っても買わなくても構わないのだ。売れなくたって平気さという態度を装っても無駄だ。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

事実売れなくなるだけの話である。売れないとすれば、結局は買い叩かれるよりなお悪い。やがて僕は、持っていく本の冊数が少ないほうが効率がよいことを発見した。一度に十二冊くらい、せいぜい十五冊。そうすると、一冊あたりの平均売値がごくわずかながら上昇するのだ。けれども、冊数を少なくすると、売りにいく回数も必然的に増えることになる。そしてその回数は必要最低限に抑えねばならない。取り引きの回数が多くなればなるほど、こっちの立場は弱くなっていくのだ。要するにどうあがいたところで、勝つのは絶対に向こうなのである。何か月かが経っても、チャンドラーは僕と口をきこうともしなかった。いらっしゃい、も言わないし、にこりともしないし、握手一つしなかった。その表情には何の感慨も読み取れなかった。そもそもこいつは僕のことを覚えているんだろうか、と考えさせられてしまうこともよくあった。チャンドラーにしてみれば、たびたびやって来る僕が、実はそのつど新しい客であってもまったく同じことだった。ばらばらの他人の寄せ集め、無秩序の集団と少しも変わらなかったのだ。

本を売り払うにつれて、僕のアパートはどんどん変貌していった。何しろ、箱を一つ開けるたびに、家具の一部を破壊することになるのだから。ベッドは解体され、椅子は収縮しやがて消滅した。机は何もない空間に退化した。いまや僕の人生は、次第に形をなしつつあるゼロにほかならなかった。それはこの目で見ることができる無、ほとんど手で触れられそうな、急速な成長過程にある空虚だった。伯父さんの過去に足を踏み入れるたびに、現実世界において物理的な変化がもたらされた。それらの変化の具体的な結果はいつも僕の眼前にあ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

った。逃れるすべはなかった。残存する箱の数と、消滅した箱の数の和は、つねに一定なのだ。部屋のなかを見回すだけで、事態は否応なしに目に入ってきた。部屋は僕が置かれた状況を測定する機器のようなものだった。僕というものがどれだけ残っていて、どれだけなくなってしまったか。僕はそうした変容の犯人にして目撃者であり、たった一人の劇場における役者にしてかつ観客だった。自分の四肢が切断されるのを、僕はつぶさに見届けることができた。自分自身が消えていく過程に、逐一立ち合うことができた。

　むろん当時は誰にとっても困難な日々だった。それは激動の時代だった。政治と喧嘩、憤怒、ハンドマイク、暴力の年月。一九六八年の春になると、毎日かならず世界のどこかで新たな大変動が吐き出されるように思えた。プラハでなければベルリンで。パリでなければニューヨークで。ベトナムにはおよそ五十万の兵士がいた。大統領は選挙に再出馬しないと宣言した。何人もの人間が暗殺された。何年も続いた戦争はいまやおそろしく肥大化し、どんな小さな思考もその影に染まるようになってしまっていた。僕自身、何をするにせよしないにせよ、自分もみんなと同じように状況の一部であることは意識していた。ある日の夕方、リバーサイドパークのベンチに座って川を眺めていると、向こう岸で石油タンクが爆発するのが見えた。突如として炎が空を覆い、見るみるうちに火の粉がハドソン川の上空を漂ってきて、僕の足元まで落ちてきた。そのとき僕は思った。もはや内と外を分けることはできな

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

いのだ、と。無理に分けたところで、真実を大きく歪めてしまうだけだ。同じ月の後半、コロンビア大学のキャンパスは戦場と化し、数百人の学生が逮捕された。そのなかにはジンマーや僕のような夢想家も混じっていた。こうした状況について、いまここであれこれ言い立てるつもりはない。それは誰でも知っている話だし、もう一度蒸し返したところで何の意味もあるまい。といって僕は、あんなことは忘れてしまえばいいと思っているわけではない。何といっても、あの時代の瓦礫のなかに僕自身の物語も位置している。その事実が理解されなければ、この話もまるで意味をなさないだろう。

一九六七年九月、大学の三年目がはじまったころには、僕のスーツはとっくの昔に引退してしまっていた。シカゴでずぶ濡れのまま痛めつけられたせいで、ズボンの尻はすり切れ、上着もポケットからパンツにかけて一直線に切れ目が入ってしまい、さすがに僕も見切りをつけたのだ。僕はそれを栄華だった日々の形見としてクローゼットに吊るし、買い物に出かけて、もっとも安価にしてもっとも長持ちする服を購入した——ワークブーツ、ブルージーンズ、フランネルのシャツ、そしてアーミーショップで仕入れた中古の革ジャケット。友人たちはこの変身に仰天したが、僕は何も釈明しなかった。人にどう思われようと、まったくどうでもよかった。電話についても同じだった。電話を外したのは、べつに自分を世界から隔離しようと思ったからではない。ただ単に金がなかったからなのだ。ある日、図書館の前で、ジンマーが僕にお説教を垂れた。このごろじゃ君に連絡を取るのも一苦労じゃないか、と彼はぶつぶつ文句を言った。話が金銭問題に及ぶのを避けようと、僕は無縁と、人の声と、

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

人間的接触の消滅とをめぐるナンセンスな演説をぶった。「伝送された声というのはだね、本当の声じゃないんだよ」と僕は弁じた。「みんなこういう自分の模造物に慣れっこになっちまってるけど、よく考えてみればだね、電話というのは歪曲と幻想を生む機器なんだよ。それは幽霊同士のコミュニケーションであり、肉体なき精神の言語的分泌物なのさ。僕は自分が話している相手をちゃんとこの目で見たいんだ。見られないんだったら、全然話さないほうがましだね」。こういう道化じみた物言いが、ますます僕の典型的言動になってきていた。完璧にまっとうな質問に対して、言い逃れや、論理のすり替えや、詭弁をもって応じるのである。自分の窮状を内緒にしておこうとすれば、嘘を並べて追及をかわすほかなかった。貧乏のどん底に落ちていけばいくほど、捏造する話もどんどん奇怪で歪んだものになっていった。禁煙した理由、酒を断った理由、外食をやめた理由――何であれ、何か途方もない論理に基づく説明を僕は造作なくひねり出した。いまや僕の口調たるや、アナーキストの隠者、世捨て人の現代版、十九世紀の機械破壊運動家の再来という趣だった。でもとにかく友人たちは面白がったし、僕も僕で首尾よく秘密を守り通せた。もちろん、こんなペテンじみたふるまいには、自尊心も大きく作用していたにちがいない。でも、いちばん大事な点は、自分で下した決断に関して、誰からも干渉されたくなかったということだ。その決断を話して聞かせれば、きっと相手は哀れに思ってくれただろう。ひょっとしたら援助を申し出てくれたかもしれない。そうなるとすべては台なしになってしまう。それよりは、みずから築き上げた錯乱のなかに自分をとじ込めて、とことん道化を演じきるほうがいい。そして時が尽きる

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

のを待つのだ。

いちばんつらかったのは最後の一年である。十一月から電気代も払わなくなり、一月になってコン・エジソン電力の人間が来てメーターを切っていった。その後の数週間、僕はさまざまな銘柄の蠟燭を使って実験を重ね、それぞれの価格、明るさ、寿命を比較した。意外にも、もっとも総合点が高いのはユダヤ教の儀式用蠟燭であることが判明した。ちらちらとゆらめくその光と影はこの上なく美しかったし、冷蔵庫も沈黙に陥ったいま（かつては突然思い出したように、ぶるっとその身を震わせたものだが）、どのみち電気なしのほうが快適ではなかろうかという気もしてきた。僕という人間について批判すべき点は多々あるにせよ、とにかく僕が順応性に富んでいることは確かだった。それぞれの欠乏が生み出す隠れた利点を僕は探し出し、ひとたび何かなしで暮らすすべを会得すると、その何かを綺麗さっぱり頭から追い払ってしまうことができた。もちろん、こんな調子でいつまでもやって行けるわけではないことも承知していた。いずれは、なしでは済まない物だけが残るだろう。でも目下のところは、なくなってしまった物たちを惜しむ気持ちがほとんど湧いてこないことに、我ながら呆れてしまうくらいだった。ゆっくりと、着実に、僕は発見しつつあった。自分がとことんやって行けることを。思ってもみなかったほど遠くまで行けることを。

最後の学期の授業料を払うと、残った金は六百ドルを割っていた。箱はあと十あまり、それに野球選手のサインのコレクションと、クラリネットがあった。僕はときおり暇つぶしにクラリネットを組み立てて、息を吹き込んでみた。奇怪な音が噴出し、室内を満たした。そ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

れはキーキー声とうめき声、笑いと嗚咽の織りなす混沌だった。三月になり、ミロ・フラックスという収集家にサインを売った。縮れ毛の金髪を後光のようにちょこんと頭に乗せた、一風変わったこの小男の存在を、僕は『スポーティング・ニューズ』の広告ページで知ったのだった。箱にぎっしり並んだ、カブスの面々のサインを見て、フラックスの目の色が変わった。畏敬のまなざしで一枚一枚じっくり見つめていた彼は、やがて涙にうるんだ目を上げ僕を見て、一九六九年はカブスの年になるだろう、と言いきってみせた。いうまでもなく、その予言はもう一歩で現実になるところだったわけであり、あの終盤戦のスランプと、弱小メッツの大躍進さえなかったら、まさに現実となっていただろう。フラックスはサインを一五〇ドルで買ってくれた。一月分の家賃を払ってお釣りがくる額である。食費は例によって本を売って捻出し、勉強のほうも蠟燭の炎を頼りに暗記とタイプに励み、どうにか沈没せずに四月、五月を切り抜けることができた。じきにタイプライターも二十六ドルで売り払って、その金でレンタルの制服制帽を借り、大学側が行なう正式の式典に対抗して学生たちが組織した反卒業式に出席した。

当初の目的はまさに達成されたわけだが、勝利感を味わっている余裕はとてもなかった。金は最後の百ドルまで減っていて、本も残りわずか三箱になっていた。もはや家賃を払うのは論外だった。敷金で一か月分はカバーできるが、それが過ぎればいずれは追い出されるはずだ。七月に立ち退き要求がはじまるとすれば、最後通牒が突きつけられるのは八月。九月には宿なしの身になるだろう。でも、六月一日の時点では、夏の終わりなんて何光年もの

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

彼方にあった。問題はそのあと何をするかではなく、そこまでどうやってたどり着くかだった。残った本はだいたい五十ドルで売れるだろう。ということは、手元の九十六ドルと合わせて、一四六ドルで今後三か月をやりくりすればいい。とうてい十分な額とはいえないが、食事を一日一度に減らし、新聞、バス、その他あらゆる贅沢を切り捨てれば、まあ何とかなるだろう。こうして一九六九年の夏がはじまった。それがこの世で僕が過ごす最後の夏になることは、ほぼ確実であるように思えた。

その年の冬から早春にかけて、食糧は窓の外に突き出た台の上に貯蔵していた。冷え込みがいちばん厳しかった時期にはかちかちに凍ってしまったものもあったが（バター、カッテージ・チーズ）、解凍すればどれもちゃんと食べられた。当初の主たる問題は煤とか鳩のフンとかが食べ物にかからないようにすることだったが、これはビニールの買物袋に入れておくことで解決した。嵐が来て、袋をひとつ吹き飛ばされてしまってからは、紐で室内のラジエーターにつないでおくようにした。僕は次第にこのシステムの管理に熟達していった。ありがたいことにガス代は家賃に含まれていたので（したがってガスレンジが使えなくなる心配はない）、食事に関してさしたる問題はないように思えた。だがそれはあくまで寒かった時期の話である。いまや季節は変わり、太陽は一日に十三時間も十四時間も顔を出しっぱなしになった。窓台の貯蔵庫も、むしろ害のほうが多くなってきた。牛乳は凝固し、ジュースは

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

蜜蝋を溶かした。バターは溶けて、ぎらぎら光る黄色い泥水と化した。こうした惨事を何度か経験した末に、僕は食事の全面的改革に取りかかった。暑さで傷むたぐいの食品はいっさい使わないようにするのだ。六月十二日、新たな食事計画ができ上がった。粉ミルク、インスタントコーヒー、小さな袋入り食パン、以上が主食となる。加えて毎日、人類の知るもっとも廉価にしてもっとも栄養豊かな食物、卵を食べる。ときおり贅沢をしてリンゴを一個、もしくはオレンジ一個。誘惑に耐えきれなくなったときには、清水の舞台から飛び降りるつもりで、ハンバーガーかシチュー缶。これなら食べ物は腐らないし、僕も（少なくとも理論的には）餓死せずに済む。卵を一日に二個、二分半で完璧な半熟に茹でる。パンは二枚、コーヒー一杯。水は好きなだけ飲んでよい。元気の出るプランとはいいがたいが、少なくともそこにはある種の幾何学的エレガンスがあった。選択肢の乏しさを思えば、これでベストなんだと自分に言い聞かせるしかなかった。

たしかに餓死は免れたが、空腹に悩まされない時間はほとんどなかった。その夏はしょっちゅう食べ物の夢を見たし、起きているあいだも、御馳走と飽食の幻影が夜ごと目の前に浮かんだ。大皿に載ったステーキやフライ、トレーで運ばれてくる肉汁したたる豚、城のごときケーキやデザート、巨大なボウルに入ったフルーツ。昼は昼で、胃袋がひっきりなしに嘆願の声を上げながら、満たされぬ胃液をごろごろと分泌し、その空虚さでもって僕を苛んだ。それを何とか無視することができたのは、ひとえに意志の力といってよかった。もともとどう見ても太目でなかったところに、夏が進むにつれて体重はますます減っていった。ときた

ま、一セントを投資してドラッグストアの体重計でわが身の現状を調べてみると、六月に七十キロあった体重は、七月には六十三キロ、八月には五十六キロになっていた。身長一八〇センチ台の人間としては、危険なまでに少ない数字である。何といっても、肉ならいざしらず、骨と皮はそうそう減るわけにいかない。一定の線を越えてしまったら、ただでは済むまい。

僕は自分を肉体から分離させようと努めた。こうした苦しみが実在しないふりをすることによって、問題を避けて通ろうとした。むろんこの企てには多くの先達がいる。そして僕もやがて、彼らみんなが到達したのと同じ認識に達することになった。すなわち――精神は物質を克服することはできない。ひとたびあまりに多くの重荷を負わされてしまえば、精神もまた、物質としての本性を明らかにしてしまうのだ。何とかして状況を超越しようと、僕は自分に向かって、お前はもう実在しないのだ、と言い聞かせた。ところがその結果、いっさいの現実の輪郭が揺らぎ出すことになってしまった。ありもしないものが突然目の前に現われ、またふっと消える。たとえば、冷えたレモネードの入ったコップ。見出しに僕の名前が載っている新聞。なつかしいわがスーツが、ぴかぴかの新品になってベッドの上に広げられている。あるときなど、かつての僕自身が室内をうろうろ歩き回る姿まで見えた。酔っ払ったみたいに部屋の隅をうろつきながら、かつての僕は、見つかるはずもない何かを探していた。こうした幻視は、それ自体はほんの一瞬現われて消えるだけだったが、その余韻は以後何時間も頭のなかに残った。時の流れがまったく見失われてしまうこともよくあった。ある

思いが頭に浮かぶ。それについて思いをめぐらし、結論までたどり着いて、ふと顔を上げると、もうすっかり夜になっているのだ。あいだの数時間がいったいどこに消えてしまったのか、まるで見当もつかなかった。またある場合には、はっと気がつくと、空想の食べ物を咀嚼していたり、空想の煙草を喫って空想の煙の輪をふかしていたりした。たぶんこのころが最悪の時期だったと思う。何しろ、もはや自分を信用することもできないのだ。僕の心はあてもなくあたりを漂いはじめた。いったんそうなってしまうと、自分ではどうすることもできなかった。

こうした症状が現われ出したのは、だいたい七月中旬である。それまでは、残り少ないビクター伯父さんの本を律儀に読み進み、チャンドラーの店に売りにいく、そのくり返しだった。だが、終わりに近づくにつれて、本を読むのもだんだん困難になってきた。目がページの上の言葉と結びついているのは感じられるものの、頭には何の意味も浮かんでこないし、耳に何の音も響いてこないのだ。黒い印たちの群れは、僕を困惑させるばかりだった。それ自身の沈黙以外何一つ明かしていない、無数の直線や曲線の無根拠な集合にしか見えなかった。やがて僕は、読んでいるものを理解しているふりもやめてしまった。箱から本を引っぱり出し、一ページ目を開いて、一行目にそって指を動かしていく。それが済むと、今度は二行目に取りかかり、次は三行目、といった具合にページの終わりまで進んでいく。そうやって、点字を読む盲人のようにして、作業を完遂したのである。言葉が見えないなら、せめてそれに触っていたかったのだ。もうそのころには、何もかもが落ちるところまで落ちていた

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

から、このやり方もちゃんと理に適っているように思えた。僕はそれらの書物に入ったすべての言葉に触り、それによって、書物を売却する権利を得たのだ。

　最後の数冊をチャンドラーの店に持っていったのは、たまたま宇宙飛行士たちが月に着陸したその当日だった。九ドルとちょっとの売上げを手に店を出た僕は、ブロードウェイの帰り道を歩いている最中にふと気が向いて、クィンズに寄ってみることにした。クィンズは一〇八丁目南東の角にあった、地元の連中のたまり場になっていた小さな飲み屋兼食堂である。おそろしく暑い日だったし、ひとつ気張って十セント・ビールを一、二杯飲んでも罰は当たるまいと思ったのだ。僕は三、四人の常連と並んでスツールに腰かけ、薄暗い光と、エアコンの涼しさとを満喫していた。大きなカラーテレビがついていて、ライウィスキーやバーボンのボトルに不気味な光を投げかけていた。そんなふうにして、僕はその出来事を目撃したのだった。もこもこに着込んだ二つの人影が、空気のない世界に最初の一歩を踏み出し、玩具の人形のようにあたりを跳ね回って、埃に囲まれてゴルフ・カートを引きずり、かつては愛と狂気の女神にほかならなかった星の、その目に旗を突き立てたのだ。光輝くダイアナよ、と僕は心のなかで言った。我らの内にひそむ暗きもののすべての象徴よ。やがて大統領が演説をはじめた。物々しい、抑揚のない声で、これぞ人類誕生以来最大の偉業であると大統領は宣言した。店にいた常連たちは、それを聞いて声を上げて笑った。たぶん僕も、にやっと笑うくらいはしてみせたと思う。だが、その科白がいかに馬鹿げたものであれ、誰にも否定できないことがひとつだけあった。すなわち、楽園から追放されて以来、アダムがこれほど故

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

郷から遠く離れたことはかつてなかったのである。

その後しばらく、僕は完璧に近い穏やかさに包まれて日々を過ごした。部屋にはもう何もなくなっていたが、予想していたように気が滅入るどころか、かえって安らぎのようなものを感じた。どう説明していいのかわからないけれど、僕の精神は突如安定を得たのだ。その後の三、四日、かつての自分がふたたび見えてきたような気持ちで僕は過ごした。こういう状況にこんな言葉を使うのも妙な話だが、ビクター伯父さんの本を売り尽くした直後の数日間、僕は幸福だったと言っていいと思う。癲癇の発作直前のように、僕もまた、すべてがまぶしく輝き出す不思議な世界、何もかもが驚くばかりの明晰さを帯びはじめる場に足を踏み入れかけていたのだ。べつに大したことをやったわけではない。部屋のなかを歩き回り、マットレスの上に大の字になり、考えたことをノートに書きとめるだけだった。でもそれは問題ではなかった。何もしないという行為さえ、いまの僕には重要なことに思えた。時を無為に過ごしてしまうのを疚しく思ったりもしなかった。ときおり、二つの窓の中間に陣取って、ムーン・パレスのネオンサインを眺めた。それすらも楽しい行為だった。それを見るといつも、興味深い思考が次々と湧いてくるような気がした。どんなことを考えたのか、いま思い出そうとしてもはっきりしない。たぶんそれは、気まぐれな連想のつらなり、あてもない夢想の堂々めぐりだったのだろう。でもそのときには、それがこの上なく意義深いものに感じられたのだ。月面をさまよう宇宙飛行士たちを見たことで、おそらく「月」という言葉の意味が僕にとって一変してしまったのだろう。あるいは、アイダホ州ボイジーでニール・アー

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ムストロングという男に会ったのちに、同名の人間が宇宙空間に飛び出たのを見たという偶然に惹かれたのかもしれない。それともただ単に、空腹のせいでただでさえ朦朧とした頭が、ネオンサインの光を浴びて完璧に麻痺してしまったのかもしれない。どれが正解かはわからない。でもとにかく、「ムーン・パレス」という言葉は、神託の持つ不可思議さと魔力とをもって、僕の心にとり憑くようになった。その言葉のなかで、何もかもが一緒くたに混じりあっていた。ビクター伯父さんと中国、宇宙船と音楽、マルコ・ポーロとアメリカ西部。顔を上げてネオンサインを眺めながら、電気について考えはじめる。その連想で、大学一年のときの停電に思いをはせる。そこから思考はリグリー球場での試合に移行し、やがてビクター伯父さんと、窓台で燃えている祭儀用蠟燭に戻っていく。ひとつの思いが別の思いへと、ぐるぐる螺旋を描いてつながっていった。結びつきの織りなす網ははてしなく広がっていった。たとえば、未知への旅という見地から見た、コロンブスと宇宙飛行士との並行関係。中国到達失敗の結果としてのアメリカ発見。チャイニーズ・フードと僕の空っぽの胃袋。思考の糧などと言うときの、滋養としての思考。あるいは、夢の棲む宮殿としての頭脳。僕は思った。アポロ計画。音楽の神アポロ。西部を旅するビクター伯父さんとムーン・メン。僕は思った。西部。インディアンとの戦い。かつてはインドシナと呼ばれたベトナムでの戦争。僕は思った。兵器、爆弾、爆発。ユタとネバダの砂漠に浮かぶキノコ雲。そして僕は思案した。なぜアメリカの西部は、あんなにも月面の風景に似ているのか？　そんなふうにして、思いはえんえんと続くのだった。こうした秘密の呼応関係に身を任せれば任せるほど、

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

自分が世界をめぐる何か根本的真理の理解に近づいているような気持ちが強まっていった。たぶん僕はただ発狂しかけているだけだったのだろう。だがそうだとしても、自分のなかにとてつもない力がみなぎりはじめているのを感じたことは否定できない。物事の奥深い核心にまで及ぶ、ほとんど霊的な悦びを僕は感じていたのだ。ところがやがて、訪れたときと同じくらい唐突に、その力は突然消えてしまった。三日か四日のあいだ、ひたすら自分の思考の内部で暮らしたのちに、ある朝目が覚めてみると、僕は全然別の場所にいたのだ。断片の寄り集まりの世界。空腹と、何もない白い壁の世界。またそこに逆戻りだった。ここ数日の静謐を取り戻そうとあがいても無駄だった。世界はふたたび僕の頭上にのしかかっていた。もはや息をすることさえ困難だった。

こうして、新たな苦境がはじまった。それまでは意地で何とか頑張り通していたものの、少しずつその意地も揺らいでいくのが自分でもわかった。八月に入ると、もう降参してもいいという気になっていた。僕は借金を頼む覚悟を決めて、何人かの友人に会いにいった。でも大した成果は挙がらなかった。うだるような暑さのなかを歩き回った末に、ポケット一杯の小銭をせしめた程度だった。夏のことで、もう街には誰も残っていないみたいだった。心底当てにできる唯一の友ジンマーでさえ、どうしたわけか姿を消してしまっていた。アムステルダム・アベニュー一一〇丁目のアパートに何度か行ってみたが、呼び鈴を鳴らしても誰も出てこなかった。郵便受けやドアの下に置き手紙をしていっても、いっこうに反応はなかった。ずっとあとになって、僕はジンマーがよそのアパートに引っ越したことを知った。ど

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

うして新しい住所を知らせてくれなかったんだい、とジンマーに訊くと、だって君、夏はシカゴにいるって言ったじゃないか、と答えが返ってきた。もちろん僕のほうは、そんな嘘をついたこともとっくに忘れていた。何しろいろんな嘘をつきまくっていたから、とてもいちいち覚えていられなかったのだ。

ジンマーが引っ越してしまったとは知らずに、僕は元のアパートに何度も足を運んでは、ドアの下にメッセージを置いていった。八月初旬のある日曜日、いつかは起きることがついに起きた。どうせ誰も出てこないだろうと思いつつ、例によって呼び鈴を鳴らし、ボタンを押している最中にもなかば帰りかけていると、アパートのなかから物音が聞こえた。椅子で床をこする音、どすどすという足音、誰かの咳払い。安堵の念がどっと体じゅうに流れた。でも、次の瞬間、ドアが開くと、それもいっぺんに消し飛んでしまった。ジンマーであるべき人物は、ジンマーではなかったのだ。まったくの別人がそこにいた。黒いもじゃもじゃの顎ひげを生やした若い男で、髪が肩まで垂れている。起きたばかりなのか、体にはブリーフをはいているだけだ。「何か御用ですか?」とその男は訊きながら僕をしげしげと眺めた。ちょっととまどっているふうでもあったが、表情は優しげだった。と、その瞬間、キッチンから笑い声が聞こえてきた。男の声も女の声も混じっていた。どうやら誰かのパーティーに迷い込んだらしい。

「どうも部屋を間違えたみたいです」と僕は言った。「デイビッド・ジンマーを探してるんです」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「じゃ君がフォッグだね」と見知らぬ男は間髪を入れず言った。「いつまた来るかと思っていたよ」

蒸し風呂の暑さのなかを歩いてきたせいで、僕はもうダウン寸前だった。立っていても汗はぽたぽた目に垂れてくるし、筋肉はスポンジみたいにへなへなだった。そんな有様だったから、自分の耳がまるで信じられなかった。僕はまずとっさに、この場を逃げ出そうと思った。でも、体の力がいっぺんに抜けてしまって、下手に動いたら卒倒してしまいそうだった。ドアの枠に寄りかかって体を支えながら、僕は言った。「すいません、もういっぺん言ってもらえませんか？　何だかよく聞こえなかったもので」

「君がフォッグだね、って言ったのさ」と見知らぬ男は答えた。「実に簡単な話だよ。ジンマーを探してる人間なら、フォッグにちがいない。ドアの下にどっさりメッセージを置いていったのはフォッグだからね」

「なるほど、見事な推理だ」と僕は言って、小さく力ないため息をついた。「ジンマーがいまどこにいるか、御存知じゃないでしょうね」

「申し訳ない。何も知らないんだ」

僕はふたたび、力をふり絞って帰ろうとした。だが、立ち去ろうとしたその瞬間、この見知らぬ男にじっと見つめられていることに気がついた。奇妙な、何もかも見通すようなまなざしが、まっすぐ僕の顔に向けられているのだ。「どうかしましたか？」と僕は訊いた。

「いやただ、君ひょっとしてキティの知りあいかな、と思って」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「キティ？」と僕は言った。「そういう名前の知りあいはいませんね。キティなんていう人、いままで一度も会ったことがないな」

「君はキティと同じシャツを着てるんだよ。それで何となく、彼女とつながりがあるんじゃないかと思ってね」

僕は自分の胸を見下ろした。そこにはメッツのTシャツがあった。その年にがらくた市で十セントで買ったシャツだ。「べつにメッツのファンなんかじゃないですよ」と僕は言った。「応援するのはもっぱらカブスだ」

「妙な偶然だな」と見知らぬ男は、僕の言葉にお構いなく続けた。「キティが見たらきっと面白がるよ。この手の話が大好きなんだ、彼女は」

断る余裕もないうちに、僕は腕をとられてキッチンに引っぱっていかれた。そこでは五、六人のグループがテーブルを囲み、日曜の朝食を食べていた。テーブルには食べ物が所狭しと並んでいる――ベーコンエッグ、コーヒーがなみなみ入ったポット、ベーグルとクリームチーズ、皿いっぱいの燻製（くんせい）の魚。何か月ぶりかに目にする光景だ。どう対応したらいいのか、よくわからない。まるで、突然おとぎ話の世界のただなかに連れてこられたみたいだった。僕は森で道に迷った飢えたる子供だった。それがいまこうして、魔法の館（やかた）を、食べ物でできた家を見つけたのだ。

「ご来場の皆様」とわが裸の胸のホストはにやにやしながら宣言した。「キティの双子の兄弟です」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

僕はみんなに紹介された。誰もが笑顔を向けて、こんにちは、と言ってくれた。僕も精いっぱい笑顔を返した。聞いてみると、居あわせた連中の大半はジュリアード音楽院の学生だった。器楽、ダンス、歌唱。ホストの名前はジムだかジョンだかで、この部屋に越してきたのはつい前日のことだった。ほかの連中は昨晩よそでパーティーをやっていて、家へ帰る代わりに、引越し祝いに朝食を適当に買い込んで、ジムだかジョンだかのアパートに押しかけることにしたのだ。彼が服を着ていないことや（みんながやって来たときはまだ寝ていた）食べ物が山とあることも、それで説明がついた。そんな話を聞かされている最中、僕は礼儀正しくうなずいていたが、実のところ聞いているふりをしているだけだった。正直いって、何がどうだろうと僕の知ったことじゃなかった。話が終わったころには、もう全員の名前を忘れてしまっていた。ほかにすることもないので、僕はわが双子の妹を観察してみた。中国系の小柄な女の子で、歳は十九か二十、両の手首に銀のブレスレットをはめていて、頭にはビーズのついたナバホ族のヘッドバンドを巻いている。彼女は僕に笑顔を返してくれた。それはとても暖かい、茶目っ気のある、内緒めかした微笑みだった。僕はふたたびテーブルに目を向けた。どう頑張っても、いずれ視線はそこに戻ってしまうのだ。みっともないとはわかっていても、さっきからずっと、食べ物から漂ってくる香りが僕を苛んでいた。僕はそこにつっ立って、座りませんかと誘われるのを待っていた。目の前にあるものをひっつかんで口につっ込んでしまわないよう、自分を抑えるのに一苦労だった。

ようやく状況を打開してくれたのはキティだった。「わが兄がはるばる来てくれたのです

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

から」と彼女は言った。明らかにその場の雰囲気に合わせたお芝居だ。「せめて朝食を御一緒していただかなくては」。僕の心をちゃんと読み取ってくれた彼女に飛びついてキスしたい思いだったが、あいにく僕の分の椅子が見つからず、ちょっと気まずい瞬間が生じた。ところがここでも、キティが助け舟を出してくれた。自分の右の、隣の人とのあいだの空間に座るよう、手招きしてくれたのだ。僕はただちにそこに体を押し込み、左右の尻を両方の椅子に一つずつ載せた。僕の目の前に、皿がしかるべき付属物とともに据えられた。ナイフとフォーク、グラスとカップ、ナプキンにスプーン。そのあとはもう、僕はひたすら貪食と忘却の沼に沈んでいった。それは幼児的な反応というほかなかった。いったん食物が口のなかに入りはじめると、もはや自分を抑えるのは不可能だった。次から次へと料理を咀嚼し、目の前に出されたもののすべてを無差別に平らげていくうちに、やがて正気も失われていった。みんな無限に気前がいいのか、とにかくどんどん出してくれるままに、僕はいつまでも食べつづけた。とうとう、テーブルの上の食べ物がすべて消えてしまった。少なくとも僕はそういうふうに記憶している。十五分か、二十分のあいだひたすら貪り食い、それが済むと、残ったのは白身魚の骨の山ばかりだった。あとはもう何もなかった。何かあったんじゃないかと、記憶のなかをいくらひっくり返してみても、何も出てこない。肉の一切れも、パン屑一かけらも。

そこまで来てはじめて、みんながぽかんとした顔で僕に見とれていることに気がついた。そんなにみっともなかったんだろうか？　餓鬼みたいにがつがつ食べて、ひどい醜態を演じ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

てしまったのだろうか？　僕はキティの方を向いて、弱々しく微笑んでみせた。キティの顔には、軽蔑よりむしろ、呆然とした驚きの念が浮かんでいるように見えた。それで僕もいくらかほっとした。でもとにかく、みんなに不快な思いをさせてしまったとしたら、その償いはしておきたかった。御馳走のお返しにせめて芸の一つもやってみせて、彼らが食べるはずだった食べ物をきれいに平らげてしまったことを水に流してもらうのだ。僕は会話に割り込むチャンスを待った。そうしているうちにだんだん、長いあいだ離ればなれになっていた双子の妹の隣にこうして座っていることがどんなに快いか、僕はしみじみと感じはじめていた。まわりの会話の流れからして、どうやら彼女はダンス専攻の学生らしかった。同じメッツのTシャツでも、彼女が着たほうがはるかに見栄えがすることは間違いなかった。その姿に惹かれずにいるのは難しかった。彼女がほかの連中と笑いながらお喋りに興じているあいだ、僕は何度もちらちらと彼女の方を盗み見た。彼女は化粧もブラジャーもしていなかったが、体を動かすたびに、ブレスレットやイヤリングがちりりんと鳴った。胸も素敵な形をしていて、彼女はそれを、とても感じのいい無頓着さで扱っていた。わざとらしく見せつけるのでもなく、そんなものがそこにないようなふりをするのでもなく。綺麗な女の子だった。でも綺麗という以上に、彼女の身のこなしが僕を惹きつけた。綺麗な女の子にありがちな、自分の美しさに凍りついてしまっているようなところが少しもないのだ。しぐさ一つひとつに感じられる奔放さや、その声に聞き取れる、率直で足が地についている様子からそう思ったのだろう。とにかくこの女の子は、ここにいるほかの連中とは違って、甘やかされた中流階級のお

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

嬢ちゃんではなかった。きちんと世の中というものを心得た、自分で物事を学んできた人間だった。そしてその彼女が、僕の体がすぐそばにあることを歓迎してくれているように思えるのだ。僕の肩や脚からことさら離れようともしないし、自分のむき出しの腕が僕の腕にくっついていることも気にしていないみたいだ。そう思うと、僕は頭に血がのぼってきた。

まもなく、会話に入り込むきっかけが見つかった。誰かが月着陸の話をはじめて、それから別の誰かが、あれは現実じゃないよと言い出したのだ。何もかもでっち上げだよ、国民の気を戦争からそらすために政府が仕組んだテレビショーさ。「信じろって言われれば人は何でも信じるんだ」とその人物はつけ加えた。「たとえそれが、ハリウッドで撮影したチャチながらくたでもね」。割り込むとっかかりとしてはこれで十分だった。僕は出し抜けに、思いつく限り最高にナンセンスな科白（せりふ）を口走り、いとも落着いた顔を装って、先月の月着陸は本物だったし、そもそも人間が月に行ったのはこれが最初ではないのだと宣言した。人類はもう何百年も前から、いやあるいは何千年も前から月に行っていたのだ、そう僕が言うとみんなはくすくす笑った。だがお楽しみはこれからである。僕一流の喜劇的かつ衒学的（げんがく）長広舌をふるって、僕はその後十分間にわたり、ルキアノス、ゴドウィンその他多くの人物に言及しながら、月にまつわる伝説の歴史を講釈した。僕は自分の知識をみんなに感心してもらいたかったが、と同時にみんなを笑わせたいとも思っていた。いままで出会ったどの人間とも違っていることをキティに知ってもらおうと、食べ終えたばかりの食事の勢いを借りて、精いっぱい道化を演じた。じきに、僕の甲高い、スタッカート気味の饒舌（じょうぜつ）に、みんなが笑い転

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

げた。やがて僕はシラノ・ド・ベルジュラックの月旅行の話をはじめた。すると誰かが口をはさんだ。シラノは実在の人物じゃないぜ、芝居に出てくる架空の人間じゃないか、と。僕としてはかような誤謬を放っておくわけにはいかない。そこでまず、話は若干それるけれども、シラノの生涯を語って聞かせることにした。軍隊で過ごした若き日々を手短に語り、哲学者、詩人としての経歴を論じる。それから、長い生涯においてシラノが遭遇したあまたの困難を一つひとつ述べてゆく——金銭上の苦労、梅毒との死闘、急進的思想をめぐっての当局との戦い。やっとのことでダルパジョン公爵という庇護者にめぐり遭ったものの、そのちょうど三年後、パリの街を歩いている最中に、屋根の石が崩れて降ってきて彼の頭を直撃し、あえなく最期を遂げたのであった……この悲劇のグロテスクさと滑稽ぶりとがじんわり伝わるよう、僕は芝居っ気たっぷりに間をとった。「当時シラノはまだ三十六歳でした」と僕は言った。「今日に至るまで、それが事故だったのか否か、誰一人知る者はおりません。彼を憎む者の仕業だったのでしょうか？　それとも単なる偶然の出来事、盲目の運命が空から投げ落とした悲運だったのでしょうか？　ああ、哀れなるシラノよ。みなさん、これは作り事などではありませんぞ。シラノは血もあれば肉もある生身の人間だったのです。現実の人間として現実の世界に生き、そして一六四九年、月旅行に関する書物を著わしたのです。それは当事者がみずからの体験を語ったものであり、僕としてはその記述に疑いをさしはさむ理由を見出しえません。さて、シラノによれば、月はこの世界とよく似ているのであります。彼方から見るならば、この地球もまた、ここから見る月と少しも変わらぬ姿をしております。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

エデンの園もほかならぬ月にあるのです。智恵の樹の実を食べてしまったアダムとイブは、神によって月から地球に追放されたのであります。月へ行こうとして、シラノはまず、空気よりも軽い朝露を入れた壜をわが身に縛りつけます。ところが、半分くらいまで行ったところで、ふわふわと地球に流し戻されてしまい、裸のインディアンたちの住むニューフランスに着陸いたします。そして彼の地において、やがて首尾よく彼を目的地へ運びゆくことになる乗り物を組み立てるのです。でありますから、ニューフランス、すなわちアメリカ大陸は、月ロケットを打ち上げる地として、歴史的にもまさに由緒正しき場なのです。さて、シラノが月において出会ったのは、身の丈五メートル半、四本足で歩く人々でした。月には二つの言語がありますが、そのどちらの言語も、言葉というものをいっさい持っておりません。第一の言語は、平民たちが使っているもので、身ぶりによる込み入ったコミュニケーションであり、体じゅうのたえざる動きを必要とします。第二の言語は上流階級によって用いられる、純粋なる音から成る言語でありまして、複雑な、しかし分節化されていないハミングであり、音楽によく似ております。月人間たちは食物を、飲み込むことによってではなく、その匂いをかぐことによって食します。彼らの貨幣は詩であります。紙に書かれた本物の詩がそのまま金銭であって、詩の中身の値打ちによって額も決まるのです。月における最大の犯罪は処女および童貞であります。両親に反抗することが若者のしかるべき義務とされております。鼻が長い人ほど徳も高いといわれております。鼻の短い男は去勢されます。そんな醜い姿を見ながら暮らすくらいなら、人類が死に絶えたほうがましだと月の人々は考えているからで

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

あります。月には喋る書物や旅する都市が存在します。誰か偉大な哲学者が死ぬと、友人たちはその血を飲み、その肉を喰らいます。男たちは腰に青銅のペニスをぶら下げております。まさに十七世紀のフランス人が剣を下げていたようにであります。当惑したシラノに、ある月人間は説きます。死の道具を讃えるより、生の道具を讃えるほうが気高い行ないではないか？　物語の大半にわたって、シラノは檻のなかにおります。月人間と較べてあまりに小さいので、羽根のないオウムだと思われてしまうのです。結局最後は、大男の黒人が、偽キリストともども、シラノを地球に投げ返したのでありました」

そんな具合に、僕はさらに数分間まくし立てたが、やがてさすがに喋り疲れてきて、インスピレーションが萎えていくのが自分でもわかった。最後の長広舌（ジュール・ベルヌとボルチモア射撃倶楽部をめぐる講釈）の最中に、霊感は完全に去ってしまった。頭がすうっと縮んで、それから今度はおそろしく肥大していった。奇妙な光が眼前に浮かび、目の裏側でほうき星が落ちた。腹がごろごろ鳴り出して、剣で刺されたような痛みをともなってふくれ上がった。突然、吐き気が襲ってきた。僕は唐突に講釈を打ちきり、テーブルから立ち上がって、これで失礼しますと宣言した。「ご親切に感謝いたしますが、急用に出向かねばなりません」と僕は言った。「みなさんはとてもいい方々です。僕の遺書に、みなさんのお名前を挙げさせていただくことをお約束いたします」。それはまさに狂気の沙汰だった。気の触れた男のつたない余興だった。僕はよたよたとキッチンから出て――その途中でコーヒーカップを一個落としてしまった――危なっかしい足取りでドアに向かった。やっとのことでド

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

アにたどり着くと、キティが僕のかたわらに立っていた。彼女がどうやって僕より先にそこに到達したのか、僕にはいまもってわからない。

「あなたはとても不思議なお兄さまね」と彼女は言った。「人間みたいに見えたと思ったら、獣に変身する。狼の次は、喋る機械。あなたにとってすべては口なのね――はじめは食べ物、次は言葉。片方は口から入れて、片方は口から出す。でもあなたは、口に与えられたいちばん素敵なものを忘れているわ。ねえいいこと、私はあなたの妹なのよ。さよならのキスもしないで帰るなんて許さないわ」

僕は台所の文句をもごもご呟きはじめたが、まとまった言葉を言う間もないうちに、キティがつま先立ちで背伸びをして、片手を僕のうなじに当て、僕にキスしてくれた。とても優しい、ほとんど同情のような気持ちがこもっていると思えるキスだった。どう考えたらいいのか、よくわからなかった。本物のキスと捉えるべきなんだろうか、それともこれもゲームの続きなのだろうか？　決めあぐねているうちに、僕がたまたま寄りかかったせいで、ドアが開いてしまった。僕にはそれが何かのメッセージのように思えた。お芝居は終わったんだ、という秘密の合図に。それで、もう何も言わずに、僕はそのまましろに下がり、敷居をまたぐと同時に回れ右して、立ち去った。

それからあとは、もう夕ダ飯は現われなかった。八月十三日、二回目の立ち退き通知が届

いたときには、金も三十七ドルまで減っていた。たまたまそれは、宇宙飛行士たちがニューヨークをパレードしに訪れた日だった。清掃局がのちに報じたところでは、そのお祭騒ぎのあいだに、三百トンに及ぶゴミが街頭に投げ捨てられたということだった。これは新記録であり、パレードそのものも史上最大の規模だった。僕はそういう騒ぎにはいっさいかかわらなかった。もう頼れる相手も思いつかないので、アパートを出る回数もぎりぎりまで減らし、なけなしの体力の温存を図った。必需品を買いに近所の店まで行って、まっすぐ帰ってくる。それだけだった。店でもらう茶色の紙袋で拭くせいで、尻がひりひり痛むようになった。でもいちばんつらかったのは暑さだ。部屋の熱気は最悪だった。蒸し風呂のなかのような空気が夜も昼も居座って、僕に重くのしかかった。窓をいっぱいに開けても、そよ風のかけらさえ入ってこなかった。汗がひっきりなしに毛穴からにじみ出た。じっと座っているだけでも汗をかくし、ちょっとでも動こうものなら滝のような奔流が吹き出てくる。僕は飲める限りできるだけ大量に水を飲んだ。冷水の風呂に入り、水道の水を頭にかけ、濡れタオルを顔や首筋や手首に押しあてた。大して足しにはならなかったが、少なくとも体を清潔に保つには役立った。バスルームの石鹸はもう紙切れのように薄くなっていたから、髭剃り以外の目的には使えなかった。剃刀の刃のストックも底を尽きかけていたので、髭を剃るのは週二日に限定し、買い物に出かける日に当たるよう綿密に予定を立てた。たぶんそんなことはもう問題でなかったのだろうが、外見だけは一応きちんと保っているんだと思うと、何となく慰められる気がしたのだ。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

いちばん大事な問題は、次にいかなる行動を取るべきかだった。でもそれこそまさに、いまやもっとも厄介な問題だった。僕はもうそういうことを決断できなくなっていた。先のことを考える能力がなくなってしまって、未来をいくら思い描こうとしても、何も見えてこないのだ。これまで僕に何らかの未来があったとすれば、いままさに生きている現在がそれだった。そしてその現在にとどまろうと苦闘するあまり、ほかのことは徐々に脇へ追いやられてしまっていた。頭にはもう何の考えも残っていなかった。一つひとつの瞬間が順ぐりに現われるばかりで、そのどの瞬間においても、未来は単なる空白としてしか浮かんでこなかった。何ひとつ定かでない、白い一ページ。ビクター伯父さんがよく言っていたように、もしも人生がひとつの物語であり、人はそれぞれ自分自身の物語の作者なのだとしたら、僕は自分の物語を、その場その場で捏造しながら進んでいた。決まったストーリーというものを持たず、一つひとつのセンテンスを思いつくままに書き綴り、次にどんなセンテンスが来るのか、いっさい考えようとしなかった。もちろん、べつにそれでいっこうに構わないともいえる。でも問題はもはや、出任せで物語をひねり出せるかどうかではなかった。それはもうできることを実践してみせたのだ。いま考えるべきなのは、インクがなくなったらどうするかだった。

　クラリネットは依然として、ベッドのかたわらに置いたケースに入っていた。いま白状するのも恥ずかしい話だが、実をいうと、僕はもう少しでクラリネットを売ってしまうところだったのである。ある日それを楽器店に持っていって、いくらくらいで売れるか訊いてみる

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ところまで行ったのだ。一か月分の家賃にもならないとわかって、結局売るのはやめにしたけれども、卑劣な真似をせずに済んだのは、あくまで店の付け値があまりに安かったからにすぎない。もう少しで許しがたい罪を犯してしまうところだったことに僕はじきに気がついた。クラリネットはビクター伯父さんとの最後の絆なのだ。それが最後であって、ほかには何一つ残っていない。だから、そのなかには伯父さんの魂の力がそっくりそのまま宿っているのだ。クラリネットを見るたびに、僕はその力を自分の内に感じることができた。クラリネットは命綱だった。何とか浮かびつづけているための、一かけらの残骸だった。

楽器店を訪れた数日後、ささいな災難が僕を溺死寸前まで追いやった。いつものようにその日唯一の食事を準備すべく、水の入った鍋に二つの卵を入れて茹でようとしたときに、手が滑って卵が指のあいだをすり抜け、床に落ちて割れてしまったのだ。それは目下の蓄えとしても最後の二個だった。こんな残酷な、こんなひどい出来事が自分の身に起こったことがあっただろうか、そう思わずにはいられなかった。べしゃっ、と醜い音を立てて卵は床に落ちた。中身が床にじわじわとにじみ出てくるなか、愕然と立ちつくしていたことを僕は覚えている。きらきら光る透明な中身が床のすきまに沈んでいき、見るみるうちにおぞましい光景が広がった。ぬめぬめしたかたまりと殻とが、小刻みに揺れながら床の上を流れていった。片方の黄身は、奇跡的に落下にも持ちこたえていた。ところが、かがみ込んでスプーンですくい上げようとすると、黄身はスプーンからつるりと滑り落ち、壊れてしまった。まるで星が爆発してしまったような気持ちだった。大いなる太陽が、たったいま死に絶えたような思

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

いだった。黄色が白色の上に広がり、それから渦を巻き出し、やがて巨大な星雲となって、星間ガスの残滓と化した。僕はもう耐えられなかった。それ自体はささいでも、これは最後の、とどめの一撃だった。あまりの思いに、僕は座り込んで泣き出した。

乱れる心を何とか抑えようと、僕はムーン・パレスに出かけていって、豪勢な食事を注文した。でも無駄だった。自分を憐れむ気持ちに駆られて贅沢に走ってみたものの、そんな衝動に屈してしまったことで、ますます自分が嫌になるだけだった。さらに情けないことに、僕は自虐的な洒落を抑えきれず、よりによって最初にかき玉スープを注文したのである。それにつづけて揚げ団子、海老のチリソース煮、中国ビールを一本。栄養的にはプラスになったかもしれないが、その滋養も、頭のなかで渦巻く思いの毒によって打ち消されてしまった。ライスを喉に詰まらせて、危うく窒息しかける有様だった。これはただの夕食じゃないんだ、と僕は自分に言い聞かせた。これは最後の食事なんだ、絞首台に連れていかれる直前の死刑囚に与えられた御馳走なんだ、と。おのれに鞭打って食べ物を咀嚼し、喉に押し込もうとあがきながら、ローリー卿が処刑前夜に妻に宛てて書いた手紙のなかの言葉を僕は思い出していた――私の脳は壊れてしまった。これ以上ぴったりの言葉はない。僕は切り落とされたローリーの首を思い浮かべた。妻によって、ガラスケースに保存された首。落ちてきた石につぶされてしまったシラノの首を僕は思い浮かべた。それから僕は、自分の首が真っ二つに割れて、床に落ちたあの卵のようにべちゃっと飛び散る姿を思い浮かべた。脳味噌がじわじわ流れ出ていくのが感じられた。ばらばらになった自分の姿が見えた。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

法外な額のチップをテーブルに残して、僕はアパートに帰っていった。ロビーに入って、いつものように郵便受けを覗いてみると、なかに何かが入っていた。その月にはじめて受け取る、立ち退き通告以外の郵便だった。ほんの一瞬、誰か未知の後援者が小切手を送ってくれたのかも、という思いが頭をよぎった。でも手紙を見てみると、それは別種の通告にすぎなかった。九月十六日に徴兵身体検査に出頭せよ、と手紙にはあった。そのときの精神状態からいって、僕はこの知らせを不思議なほど穏やかに受け止めた。もっとも、もうそのころには、どこで石が落ちてこようと構いやしない、という気になっていたことも確かだ。ニューヨークだろうがインドシナだろうが結局は同じことさ、と僕は胸のうちで呟いた。コロンブスだってアメリカと中国を混同したじゃないか。地理上のささいな相違をとやかく言う権利が僕ごときにあろうか？　僕は部屋に上がり、手紙をビクター伯父さんのクラリネット・ケースのなかにしまった。何分も経たないうちに、もうそのことはすっかり忘れてしまっていた。

誰かがドアをノックするのが聞こえたが、わざわざ行ってみるには及ばないと僕は判断した。僕は考えごとをしていたのであり、それを邪魔されたくなかったのだ。何時間か経って、また誰かがノックするのが聞こえた。第二のノックは第一のそれとだいぶ響きが違っていて、ノックをしているのは別人だろうと思えた。荒々しい、乱暴な叩き方で、怒りのこもったげんこつが蝶番をがたがた揺すぶった。これに対し第一のノックは、上品で、ほとんどためらいさえ感じさせた。関節を一点だけドアに接触させ、そのかすかな、親しげなメッセージを

ドアにそっと伝えている感じ。何時間かのあいだ、僕はこの違いに思いをめぐらせてみた。そのような単純な音に埋もれている人間的情報の豊かさに僕はつくづく感じ入った。かりに二つのノックをしたのが同じ人間だとしたら、二度目のノックの対照的な響きは、極度の苛立ちの結果と考えるべきだろう。だがそこまで必死に僕に会いたがっている人間がいるとは、とうてい思えない。ということはやはり、最初の推理が正しかったことになる。二人の人間がやって来たのだ。一人は友好的に、一人は非友好的に。たぶん一人は女性であり、一人は男性だったのだ。こんな具合に、僕は日が暮れるまで考察を続けた。ふと気がつくと真っ暗になっていたので、蠟燭に火をつけ、それからまた、じきに寝入ってしまうまでこの問題を考えつづけた。でも、その間ずっと、二人というのが誰と誰だったのかという点については、考えてみようとも思わなかった。さらに象徴的なことに、どうして自分がそれを知りたいと思わないのか、その点を理解しようともしなかったのである。

乱暴なノックは、翌朝ふたたびやって来た。それが夢でないことがはっきりわかるくらい目が覚めたころに、今度は鍵束がじゃらじゃら鳴る音が廊下から聞こえた。がんがんと騒々しく響く、雷みたいな音が、僕の頭のなかで轟いた。目を開けると同時に、鍵がかちっと鍵穴に入った。把手が回り、ドアが勢いよく開いた。そして、アパートの管理人サイモン・フェルナンデスが入ってきた。いつものように二日分の無精髭を生やしたフェルナンデスは、カーキズボンをはいて白いTシャツを着ていた。夏のはじめからずっと着ている服である。いまやそれはずいぶん黒ずみ、グレーっぽい煤やら、何十回分もの昼食のしみやらがあちこ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ちにくっついていた。フェルナンデスは僕の目をまっすぐ見据えたが、僕の姿がまるで見えていないふりをした。このアパートでは毎年クリスマスに住人みんなが管理人に心付けを贈ることになっていたが(僕にとってはさらなる支出削減の一例にすぎないのだが)、昨年僕が何も渡さなかったせいで、以来フェルナンデスの態度は一変していた。挨拶もしなければ天気の話もしない。クリーブランド・インディアンスで遊撃手の座にあと一歩というところまで行った、ポンセに住むいとこの話もしない。心付けをもらえなかった仕返しに、あたかも僕が存在しないみたいにふるまうことにしたのだ。我々はもう何か月も口をきいていなかった。ところが、よりによってこの日の朝、相手はにわかに戦略を変えてきた。しばらくのあいだ部屋のなかを歩き回って、壊れたところがないか点検するように壁をこつこつ叩いていたが、ベッドの前を二度目か三度目に通り過ぎたときに、ぴたっと立ち止まって僕の方を向き、たったいま僕の存在に気がついたかのように、わざとらしく驚いてみせたのだ。「こりゃたまげた」とフェルナンデスは言った。「あんた、まだいたのか?」

「まだいる」と僕は言った。「一応存在してる」

「今日じゅうに出ていきな」とフェルナンデスは言った。「来月の一日から借り手が決まってるんだ。明日の朝にはウィリーがペンキ屋を連れてくる。あんた、おまわりに引きずり出されたくはなかろう?」

「心配は要らない。さっさと出ていく」

フェルナンデスはまるで持ち主みたいに偉そうな顔で部屋を見回し、嫌悪もあらわに首を

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

振った。「やれやれ、大した部屋だよな。はっきり言って、これじゃまるで棺桶だぜ。ほれ、浮浪者を入れる箱だよ、松の木でできたやつ」

「インテリア・デコレーターが夏休みを取っているものでね」と僕は言った。「壁をロビンズエッグ・ブルーにしようって話だったんだけど、キッチンのタイルと釣りあうかどうか、二人ともいま一つ自信が持てなくてね。実行に移す前にもうちょっと考えてみようってことになったのさ」

「お前みたいな頭のいい大学生がなあ。お前、何かモンダイでも抱えてるのか？」

「モンダイなんてないさ。若干の財政的困難、それだけだよ。最近は株式市場もぱっとしないからね」

「金が要るんだったら、働くっきゃないじゃないか。お前ときたら一日中ぼさっと部屋にこもってるだけだ。まるっきり動物園のチンパンジーと同じだぜ。仕事もせんで家賃が払えるわけないだろうが」

「いやいや、仕事はやってるさ。朝が来れば人並みに起きてる。そして、今日一日も生き延びられるかどうか、じっくり考えるのさ。これはまさにフルタイムの仕事だよ。コーヒーブレークもなし、ウィークエンドもなし。健康保険も有給休暇もなし。言いたかないけど、給料もおそろしく安いんだぜ」

「お前、脳味噌がどうかしちまったらしいな。頭のいい大学生がなあ、脳味噌がどうかしちまったんだな」

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

「大学を過大評価するもんじゃない。世の中で言われてるほどのところじゃないぜ」

「俺だったら医者に行くね」とフェルナンデスは、にわかに同情を示して言った。「だってさ、お前の格好ときたら。情けないったらないぜ。肉なんて全然ないじゃないか。骨と皮ばっかしで」

「ダイエット中なものでね。一日に半熟卵二個じゃ、見るからに元気溌剌ってわけには行かないさ」

「まったくなあ」自分の思いに浸りはじめながらフェルナンデスは言った。「世の中みんな狂っちまったんじゃねえかって思うこともあるよなあ。俺に言わせるとだな、原因はあの宇宙に飛ばしてるやつだね。衛星だのロケットだの、訳のわからんもの打ち上げてさ。挙げ句のはてに月に人間を送っちまうんだからね、そりゃどうかなっちまわんほうが不思議さ。わかるか？　あんなことしたら、人間おかしくなっちまうのよ。空をあれこれいじくり回したりして、何もなしで済むはずがないのよ」

フェルナンデスは左手に持った『デイリー・ニューズ』を開き、第一面を僕に見せた。これぞその証し、決定的な証拠、ということらしかった。はじめは何なのかぴんと来なかったが、しばらく見ているうちに、それが人波を空から撮った写真だということがわかった。そこには何万という人が写っていた。人体の一大集合体――こんなに多くの肉体が一堂に会しているのを見るなんてはじめてだ。ウッドストック。でもその光景は、そのとき僕の身に起きていることとはほとんど何の関係もなかった。どう反応したらいいのか見当もつかなかっ

た。そこに集まった連中は僕と同世代だったたし、僕としても彼らと一応のつながりは感じた。でもかりに彼らが別の惑星に集まっていたとしても、話は何も変わらなかっただろう。

フェルナンデスが出ていった。僕はなおも数分間じっとしていたが、じきにベッドから這い出し、服を着た。準備はあっという間に済んだ。ナップサックに一握りの小物を入れて、クラリネット・ケースを小脇に抱え、部屋を出た。一九六九年八月末のことだった。いま思い出してみると、太陽が明るく輝く朝だった。わずかなそよ風が川の方から吹いていた。僕は南を向き、しばし立ち止まって、それから最初の一歩を踏み出した。それから次の一歩を歩み、そのようにして僕は通りを歩きはじめたのだった。僕は一度もふり返らなかった。

CamScannerでスキャン

2

ここから先、物語はだんだん込み入ってくる。もちろん、僕の身に起きたことを一つひとつ書き連ねることはできる。でもいくら正確に、詳細に綴ってみたところで、僕が語ろうとしている物語全体をカバーすることにはならないだろう。ほかにもいろんな人々がかかわってくる。結局のところ、僕の身に起きたことは、僕自身だけでなく、それらほかの人々とも等しく結びついている。その人々とはつまり、キティ・ウー、ジンマー、その他まだあの時点では知らなかった人たちのことだ。たとえば、ずっとあとになって、あの日アパートに来てドアをノックしていったのはキティだったことを僕は知った。日曜の朝食での僕の奇行を見て不安になった彼女は、何もしないでただ心配しているよりはと、僕の住んでいるところに行って様子を見てみることにしたのだ。住所を調べるのは容易でなかった。まず翌日に電話帳をめくってみたが、僕は電話を外してしまっていたから当然載っていない。キティはそれでますます心配になった。次に、僕がジンマーという名の人物を探していたことを思い出した彼女は、僕の居場所を知っている人間がニューヨークじゅうでおそらくジンマー以外に

いないことを見抜いて、自分でもジンマーを探してみることにした。ところがあいにく、ジンマーが新しいアパートに移ったのは八月後半、つまり僕がキティの前に現われて十日あまり経ってからのことだった。そして、やっとキティが電話局からジンマーの番号を聞き出したのとほぼ同時に、僕は自分の部屋で卵を落としていたのだ（僕らはあとでこれらの出来事を一つひとつ仔細に検討し、それぞれが起こった時間をほぼ分単位で割り出した）。キティはただちにジンマーに電話をかけたが、話し中だった。何分かして電話はようやくつながったが、そのときにはもう僕はムーン・パレスに座って、食べ物を前に茫然自失の体に陥っていた。キティは地下鉄に乗ってアッパー・ウェストサイドに向かった。のろのろと電車は進み、目的地まで一時間以上かかってしまった。ようやく僕のアパートにたどり着いたときには、もう手遅れだった。僕は考えごとに没頭していて、彼女のノックにも返事をしなかった。キティが言うには、彼女はドアの外に五分か十分ばかり立っていたが、その間、僕が何か独り言を言っているのも聞こえたし（声は低くこもっていて、何を言っているかまではわからなかった）、出し抜けに歌まで歌い出したらしい。めちゃくちゃな、メロディーも何もない歌だったわ、とキティは言ったが、僕自身はまったく記憶がない。彼女はもう一度ノックしてみたが、それでも僕は出てこなかった。あまりお節介な真似をするのも嫌だったので、結局彼女はあきらめて立ち去った。

　というのがキティの話である。これを聞かされて、最初は僕もなるほどと思ったが、考えているうちにだんだん合点が行かなくなってきた。「君がなぜ来てくれたのか、やっぱり

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

わからないんだよ」と僕は言った。「僕らはたった一回会ったきりだった。僕なんか君にとって何の意味もなかったはずだ。知りもしない他人のために、何でわざわざそこまでしてくれたの？」

　キティは僕から目をそらし、顔を伏せて床を見た。「あなたが私のお兄さんだったから」と彼女はひどく静かな声で答えた。

「あれはただのジョークじゃないか。単なるジョークのために、人はそんな面倒なことをやったりしないよ」

「そうでしょうね」と彼女は言って、軽く肩をすくめた。まだ続きがあるのかと思ったが、何秒か経っても彼女は何も言わなかった。

「で？」と僕は言った。「どうして来てくれたの？」

　彼女はちらっと顔を上げて僕を見て、それからまた目を伏せて床を見つめた。「あなたの身が危ないと思ったからよ」と彼女は言った。「あなたの身が危ないと思ったから、そして他人をあんなに気の毒に思ったのははじめてだったから」

　彼女は翌日ふたたび僕のアパートを訪れた。でもそのときにはもう僕はいなくなっていた。ドアは半開きになっていた。キティはドアを押して、敷居をまたいだ。と、フェルナンデスが部屋のなかを乱暴に歩き回っているのが見えた。ぶつぶつ悪態をつきながら、僕の持ち物をビニールのゴミ袋に片っ端から突っ込んでいた。キティが言うには、その姿はまるで、たったいま疫病の死者が出た部屋を片付けているみたいだったという。おぞましい嫌悪の念に

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

駆り立てられて室内を飛び回り、まるで伝染でも恐れているように、僕の持ち物にも最低限しか触らなかったそうだ。キティはフェルナンデスに、僕の行き先を知っているかと訊いてみたが、あまり足しになる答えは返ってこなかった。あいつはどうしようもない気狂いだね、とフェルナンデスは言った。脳味噌がどうかしちまったんだ、ありゃ。きっといまごろは、そのへんを這いつくばって死に場所を探してるんじゃないかね。そこまで聞いて、キティは部屋を去って表に出て、最初に見つけた公衆電話でジンマーに電話をかけた。ジンマーの新しいアパートはウェストビレッジのバンク・ストリートにあったが、キティの話を聞いたとたん、ジンマーも抱えていた用事を放り出し、アップタウンに直行して彼女に合流した。こうして僕は、やがて救出されることになった。キティとジンマーが、二人で僕の捜索に乗り出してくれたのである。もちろん僕のほうは、そんなことは知るよしもない。でも、何もかも知ったいま、あのころのことをふり返ると、僕はわが友たちをなつかしく想わずにいられない。ある意味で、彼らは僕の経験の意味を一から書き換えてくれたのだ。僕は崖っぷちから飛び降り、もう少しで地面と衝突せんとしていた。そしてそのとき、素晴らしいことが起きた——僕を愛してくれる人たちがいることを、僕は知ったのだ。そんなふうに愛されることで、すべてはいっぺんに変わってくる。落下の恐ろしさが減るわけではない。でも、その恐ろしさの意味を新しい視点から見ることはできるようになる。僕は崖から飛び降りた。そして、最後の最後の瞬間に、何かの手がすっと伸びて、僕を空中でつかまえてくれた。その何かを、僕はいま、愛と定義する。それだけが唯一、人の落下を止めてくれるのだ。それだ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

けが唯一、引力の法則を無化する力を持っているのだ。

これからどうするつもりなのか、自分でもよくわからなかった。アパートを出た最初の日の朝、僕はまさに足の向くままに、ただひたすら歩きはじめた。何か考えていたとすれば、それは、偶然にすべてを任せよう、衝動と成行きについて行こう、ということだけだった。足はまず南に向かった。そこで僕も南に歩きつづけた。一、二ブロック歩いたところで、どっちみち大学近辺からは離れたほうがよかろう、と判断した。悲惨な暮らしにも超然とした姿勢を保とうという決意が、見栄のせいでどれほど揺らいでしまうか、すでにもう証明済みだったのだから。見栄と、恥の意識。自分をこんな状態に追いやったことを恥に思う気持ちが、僕のなかには依然残っていた。できれば知りあいには顔を合わせずに済ませたかった。北に向かえば、モーニングサイド・ハイツへ行くことになる。あそこへ行けば知った顔がゴマンといるだろう。友だちでなくても、顔を見て僕だとわかる人間に出くわすに決まっている。ウェストエンドのバーでの飲み仲間、同じクラスの連中、授業で見知った教授連。彼らが僕に向けるにちがいない視線に耐える勇気が、僕にはなかった。呆然と見つめる目。とまどい、こっそりと見直す目。それ以上に、そういう連中と口をきかねばならないと思うと、心底ぞっとした。

僕は南へ向かい、それ以後路頭で暮らした期間ずっと、アッパー・ブロードウェイには一

度も戻らなかった。ポケットには十六ドルだったか二十ドルだったか、そのくらいの金が、ナイフ、ボールペンと一緒に入っていた。ナップサックのなかには、セーター、革ジャケット、歯ブラシ、剃刀と替刃三枚、予備の靴下一足、パンツ、背のバインディングに鉛筆をさした小さな緑色のノートが入っていた。わが巡礼を開始して一時間も経たない、コロンブス・サークルのすぐ北まで来た時点で、信じられない出来事が起こった。僕は時計修理店の前に立って、ウィンドウに飾られた骨董ものの時計のメカニズムをじっくり眺めていた。ふと足元を見ると、そこに十ドル札が一枚転がっているではないか。気が動転してしまって、一瞬どうしていいかもわからなかった。頭がすっかりこんがらがってしまった僕は、これを単なる幸運と考える代わりに、きわめて重要な事件が起きたのだと自分に言い聞かせた。これは宗教的な出来事、文字どおりの奇跡なのだ、と。身をかがめてその札を拾い、本物であることを確かめると、僕は嬉しさにぶるぶる震え出した。何もかもうまく行くさ、何もかも結局はうまく行くはずさ、と僕は胸のうちで言った。そしてそれ以上あれこれ考えるのはやめて、ギリシャ系のコーヒーショップに入り、ファーマーズ・ブレックファストを注文した。グレープフルーツジュース、コーンフレーク、ハムエッグ、コーヒー、全部揃った豪勢な朝食である。食事が済むと煙草まで買って、コーヒーもお代わりした。僕は抑えがたい幸福感に囚われていた。世界に対する新たな愛情に包まれていた。コーヒーショップのなかの何もかもが素晴らしく思えた。湯気を立てているコーヒー沸かし。回転椅子。四枚焼きのトースター。銀色のミルクシェーク・マシン。ガラスの容器に積まれた焼き立てのマフィン。僕は

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

生まれ変わったような思いだった。新大陸をいまにも発見せんとしている人間のような気持ちだった。二本目のキャメルを喫いながら、カウンター係が忙しく立ち働くのを眺め、それから、いささかくたびれた感じの、髪を赤く染めたウェイトレスに目を向けた。二人の姿には、何かいわく言いがたい、心に訴えるものがあった。二人が僕にとってどんなにいとおしく思えるか、彼らに伝えたかったが、言葉がうまく出てこなかった。その後の数分間、僕はあふれる幸福感に包まれてただそこに座り、みずからの思いに耳を傾けていた。僕の心はいまや、他愛もない言葉の奔流だった。無数の狂おしい思いが騒ぎ立てる修羅場だった。やがて、煙草がフィルターまで燃えつき、僕は重い腰を上げて店を出た。

午後もなかばになると、暑さが耐えがたくなってきた。ほかに時間をつぶす手も思いつかないので、僕は四十二丁目のタイムズ・スクェア近辺に並ぶ三本立ての名画座に入ることにした。映画館に惹かれたのは冷房が魅力だったからであり、何を上映しているかはどうでもよかった。入口の看板も見ずに、たまたま行き当たった館に僕は入っていった。何せ九十九セントだ。何を見せられたって文句はない。僕は二階の喫煙席に陣取り、キャメルをゆっくり一本、また一本と、全部で十本ばかり喫いながら最初の二本を見た。何という題だったかも、いまではもう覚えていない。映画館自体は、三〇年代の不況期に建てられた、けばけばしい、宮殿みたいな造りの建物だった。ロビーにはシャンデリアがぶら下がり、階段は大理石、壁にはロココ調の装飾が施してあった。映画館というより聖堂という趣だ。幻影を讃えるべく建てられた神殿。暑さのせいで、ニューヨークの浮浪者人口の半分以上が館内に集っ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ているように思えた。酔っ払い、麻薬中毒者、顔じゅうにかさぶたがある連中、ぶつぶつ独り言を言ったりスクリーンの俳優に言い返したりしている連中、いびきをかいたり屁をこいたり小便をもらしたりしている連中。館内係の一団が懐中電灯を手に通路を巡回し、眠りこけた奴がいないかどうか調べて回っていた。どうやらこの映画館では、音を立てるのは許されても、意識を失うのは規則違反らしかった。眠っている人間を発見するたびに、館内係はその男の顔に懐中電灯をつきつけ、目を開けろ、と命じた。反応がない場合は、そいつの席まで行って、反応するまで体を揺さぶるのだ。逆らう奴は館外に追い出された。そういう連中はたいてい、引きずり出されながらもなお、ぎゃあぎゃあ大声で文句を言っていた。その日の午後を通して、そういう事態が五、六回起きたと思う。ずっとあとになってから、館内係たちはたぶん死体を探していたのだということに僕は思いあたった。

　何があっても、僕はまるで気にならなかった。とにかくそこは涼しかったし、心は穏やかに満ち足りていた。いったん外に出れば、何ひとつ確かなことはない状況が待ち受けていることを考えると、僕は実に冷静に現状を受け止めているといってよかった。やがて三本目の映画がはじまった。と、突然、自分の内側で大地が揺らぐのが感じられた。それは『八十日間世界一周』だったのだ。シカゴでビクター伯父さんと一緒に見て以来、十一年ぶりである。久しぶりに見るのは楽しかろうと僕は思った。世界じゅうのほかのどの映画でもない、まさにこの映画が上映される日にたまたまこの映画館に入ってきたことの幸運を、しばし噛みしめもした。運命はちゃんと僕のことを見守ってくれているんだ、僕の人生は恵み深い聖霊に

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

護られているんだ、そんな気持ちになった。でもまもなく、不可解な、説明のつかない涙が瞼の裏にこみ上げてきた。フィリアス・フォッグとパスパルトゥーが熱気球のなかにもぐり込む瞬間（映画の最初の三十分のあいだのどこかだ）、ついに涙管があふれてしまった。熱い、塩からい涙の洪水が頬を焦がすのがわかった。子供のころのいろんな悲しみが、いっぺんによみがえってきた。それを遮るすべは何もなかった。いまの僕の姿をビクター伯父さんが見たら、きっとさぞがっかりするだろう。呆れはてて物も言えないだろう。僕は自分をまったくのゼロにしてしまったのだ。まっさかさまに地獄に堕ちていく死者になってしまったのだ。デイビッド・ニーブンとカンティンフラスはみずみずしいフランスの田園地帯の上空を漂いながら、眼下の風景にじっと見入っている。そして僕はといえば、酔っ払い連中と一緒に暗闇に埋もれて、喉を詰まらせめそめそ涙を流して、惨めというほかない人生を送っているのだ。僕は席から立ち上がり、階下の出口へ向かった。外に出ると、夕暮れの光が目を襲い、むっと生暖かい空気が僕を包み込んだ。これも自業自得なんだ、と僕は思った。ゼロを作り出したのは僕自身なのだ。これからはそのゼロのなかで生きていくしかないのだ。

そんなふうにして、はじめの数日間が過ぎていった。僕の気分は一方の極端から反対の極端へとめまぐるしく変化し、歓喜と絶望とのあいだをはてしなく往復することになった。その動きのあまりの苛酷さに、やがて僕の心はぼろぼろに疲れてしまった。気分が変化するきっかけは、ほとんど何でもよかった。過去との突然の対面。見知らぬ人から受けた、ちょっとした笑顔。歩道に落ちる光の具合。どうにかして自分のなかに平衡を築こうと頑張ってみ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

たが、駄目だった。何もかもが揺れ動き、荒れ狂い、目まぐるしい気分の変化に翻弄されていた。ある瞬間には、自分は哲学的探求に没頭しているのであり、いまや賢者の仲間入りを果たそうとしているのだと信じて疑わぬかと思えば、次の瞬間には、ただ涙に暮れ、苦悩の重みに崩れ落ちそうになっていた。あまりに強烈に自分自身に没頭するあまり、物事をありのままに見ることもできなくなってしまっていた。物はいつしか思考となり、すべての思考は、僕のなかでえんえんと演じられるドラマの一場面となった。

いざ街に放り出されてみると、アパートでじっと空が落ちてくるのを待っているのとは大違いだということを僕は思い知らされた。映画館を出て十分ばかり経つと、自分がいかなる事態に直面しているのかを僕はやっと実感した。日は暮れかけていた。あと数時間のうちに、寝る場所を確保しなくてはならない。いま思うと信じがたい話だが、僕はこの問題に関して、ろくに考えてもいなかった。何とかなるだろう、運を天に任せればいいさ、くらいにしか思っていなかったのだ。ところがいま、状況を検討してみると、展望がいかに悲惨であるかが見えてきた。浮浪者みたいに新聞にくるまって歩道で寝るわけにはいかないぞ、と僕は自分に言った。そんなことをしたら、ニューヨークじゅうの狂人に身をさらすことになる。喉をかき切ってください、とこっちから頼んでいるようなものじゃないか。かりに誰にも襲われなかったとしても、浮浪罪で逮捕されるのが落ちだ。かといって、ほかにどこで夜を過ごせばいいのか？　浮浪者用の宿泊所に泊まるのもぞっとしない。百人のルンペンと一緒に一つ部屋で横になって、連中の体臭をかがされ、おカマを掘りあっている老人たちのうめき声を

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

聞かされる、なんて冗談じゃない。タダだってお断りである。もちろん、地下鉄という手もある。でも地下鉄なんかじゃ一睡もできないことは見当がついた。揺れや音がすさまじいし、蛍光灯の光もまぶしい。それにいつ警官がやって来て、警棒で足の裏をこづかれるかわかったものじゃない。何時間かのあいだ、僕は暗い気持ちで街をうろつきながら、決断を下さねばと思い悩んでいた。結局はセントラルパークを選んだわけだが、それだって要するに、疲れ果ててもうほかに何も思いつかなかったからにすぎない。十一時ごろ、ふと我に返ると、僕は五番街を歩いていて、公園と道路を仕切る石壁にぼんやり手を走らせていた。壁の向こうに目をやると、広大な、誰一人住む者もない公園が見えた。こんな時間に、これ以上ましな場所が現われるはずもないことは明らかだ。ほかの条件はどんなにひどくても、とにかく土は柔らかだろう。芝生の上に横になって、誰にも見られない場所を寝床にできるかと思うと、ここでいいじゃないかという気になってきた。僕はメトロポリタン美術館付近から公園に入り、奥に向かって何分か歩いてから、茂みにもぐり込んだ。それ以上注意を払う気力はもう残っていなかった。セントラルパークにまつわる恐ろしい話はさんざん聞いていたものの、その時点ではもう、疲労が恐怖を上回っていた。この程度の茂みでは完全に身を隠せないにせよ、いざとなればナイフだってある。僕は革ジャケットを丸めて枕にし、しばらくのあいだ体をもぞもぞ動かして寝やすい姿勢を探した。動くのをやめたとたん、隣の灌木からコオロギの声が聞こえてきた。少し経って、かすかなそよ風が吹いてきて、僕の頭のまわりの小枝がざわざわ言い出した。もう何をどう考えたらいいのかわからなかった。月は出てい

なくて、空には星ひとつ見えなかった。ポケットからナイフを出しておこうと思いつく間もなく、僕は深い眠りに落ちていった。

目が覚めると、まるで貨物列車で眠っていたような気分だった。夜はまだ明けたばかりで、体じゅうが痛み、筋肉もかちかちにこわばっていた。悪態やうめき声を上げながら、僕はそろそろと慎重に茂みから這い出し、あたりを見回してみた。昨晩たどり着いたのは、ソフトボール・グランドの隅であることが判明した。ホームプレートのうしろの藪を寝床にしていたのだ。グランドは周囲に較べて地面が浅く沈んでいて、朝もまだ早いせいで、薄い灰色の霧が一点、芝生の上に浮かんでいた。あたりには人っ子一人見えなかった。雀が何羽か、二塁ベースのまわりをチュンチュンさえずりながら飛び交っていた。頭上の木の上で、アオカケスが一羽、しわがれ声を上げていた。ここはニューヨークである。でもこれは、僕がいままで見知ってきたニューヨークとは何の関係もない。ここはいっさいの連想を取り除いた、どこでもありうる場所なのだ——そんな考えを頭のなかでこねくり回しているうちに、ふと、とにかく最初の夜は生き抜いたんだという思いが湧いてきた。その達成感に、小躍りして喜んだとは言うまい。何しろこうも体が痛んでは、呑気に喜ぶわけにもいかない。でも、何はともあれ重要な仕事がひとつ片付いたのだという実感はあった。僕は最初の夜を切り抜けたのであり、一度それができたのなら、もう一度できないと考える理由は何もないのだ。

その後、僕は毎晩公園で眠った。公園は僕の聖域になった。街が押しつけてくる苛酷な条件を締め出してくれる、内なる領分になった。思うままにさまようことのできる、八四〇エ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

ーカーの地所。一歩外に出れば、街にはビルや塔がびっしり碁盤目に並んでいる。でも公園にいれば一人になれる。世界から自分を切り離していられる。街は肉体と喧噪にあふれている。街を歩こうと思えば、好むと好まざるとにかかわらず、厳格な行動規則を遵守するしかない。人波のなかを歩くということは、決して他人より速く歩かず、決して隣の人に遅れをとらず、人間の流れを妨げるような行為を絶対にしないことだ。ルールを守ってゲームをする限り、他人もひとまず放っておいてくれる。街を歩くニューヨーカーの瞳には一種独特の膜がかかっている。それは他人に対する無関心の、自然な——おそらくは必要な——一形態なのだ。だからたとえば、服装はどんなに突飛でも構わない。途方もないコスチューム、おどろおどろしいヘアスタイル、猥褻なスローガンを刷ったTシャツ。何を着ていてもニューヨークでは誰も何とも思わない。だがその一方で、服の中身がどうふるまうかについては実にやかましい。ちょっとでも不自然なしぐさをしようものなら、自動的に威嚇行動と受け取られる。大声で独り言を言う。体をぼりぼり掻く。誰かの目をじっと見る。こうした逸脱行為は、周囲の人間から、敵意に満ちた、ときには暴力を伴った反応を引き起こす。千鳥足で歩いたり、卒倒したりしてはならない。塀にしがみついてはならないし、歌うのもいけない。気分任せの、意志に制御されない行動はすべて、人々から睨まれ、辛辣な言葉を浴びせられる。小突かれたり、向こう脛を蹴飛ばされたりすることも珍しくない。僕自身はそこまでは行かなかったが、他人がその手の仕打ちを受けるのはさんざん見たし、僕にしても自分をきちんとコントロールできなくなる日がいずれ来ることは目に見えていた。それとは対照的に、

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

セントラルパークでの暮らしは、取りうる行動の選択肢もはるかに多様だった。芝生に長々と寝そべろうと、真っ昼間からぐうぐう眠ろうと、誰も文句を言わない。木蔭でぼさっと座っていようが、クラリネットを吹こうが、肺も破れんばかりの叫び声を上げようが、誰一人顔をしかめもしない。昼休みに公園の隅っこでこそこそしている会社勤めの連中は別として、公園に来ている人の大半は、休暇中の人間のように行動する。街なかだったら脅威の種になる行為も、ここではありふれた愛嬌で通ってしまう。人々はたがいに笑顔を投げかけ、手をつなぎ、体を妙な形にねじ曲げ、キスしあう。自分は自分、人は人の世界である。他人がやっていることを露骨に邪魔したりしない限り、何をしようと勝手なのだ。

公園が僕にとって実にありがたい場所だったことは間違いない。プライバシーを確保できるのはもちろん、こんな境遇もそれほど悪いものじゃないんだと思い込むのも公園にいれば可能だった。芝生と樹木は民主的である。午後遅くに日なたをぶらぶら歩いたり、夕暮れどきにねぐらを探して岩に上ったりしていると、自分がまわりの環境に溶け込んでいくのが感じられた。たとえ目のきく人が見ても、僕だってまわりにいる人たちと同じように、ピクニックか散歩に来た人間に見えるにちがいない、そう思った。街に出ればそんな幻想は吹っ飛んでしまう。人込みのなかを歩くたびに、僕はたちどころに自分の惨めさを思い知らされた。自分が一点のしみになったような気になった。一介の宿なし、人類の肌に浮かんだ敗北のできもの。僕は日ごとに汚ならしく、みすぼらしくなっていった。頭も朦朧としてきた。だんだんみんなと違った人間になっていった。公園ではそんな自意識の重荷を負わなくて済む。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

公園は僕に境界を与えてくれた。内側と外側を隔てる仕切りを作ってくれた。街にいるあいだは他人の目で自分を見ることを強いられるのに対し、公園では内省的な生活に戻ることができた。公園にいれば、あくまで自分の内部で起きていることに基づいて、自分自身とかかわり合っていられた。屋根なしでも生き延びられることはもうわかった。でも内と外の平衡関係を築くことなしには、人は生きていけない。公園はそれを可能にしてくれた。まあ家とまでは行かないかもしれない。でもほかにはどこにもねぐらはないのだし、限りなく家に近い場といってよかった。

公園では思いがけないことが次々に起きた。いま思い出すと、ほとんど信じられないような出来事が。たとえばあるとき、あざやかな赤毛の若い女性がすたすたと近づいてきて、五ドル札を一枚、僕の手のなかに押し込んだ——出し抜けに、何の説明もなく。またあるときは、芝生に座ってピクニックの弁当を広げた人たちが、一緒に食べようと誘ってくれた。その数日後には、午後の半日、ソフトボールをして過ごした。当時の肉体的状況を考えれば、僕はまずまずの実績を挙げたといってよい（シングルヒットが二本か三本、レフトを守ってはダイビングキャッチが一回）。僕の加わったチームの攻撃になると、みんなは僕に、食べ物や飲み物をひっきりなしに勧めてくれた。サンドイッチ、プレッツェル、缶ビール、葉巻、煙草。どれも本当に楽しい時間だった。悪いことが続いて、運が尽きたように思えたときも、そういう時間があったからこそ何とかやって行けたのだと思う。もしかしたら、そもそも僕が身をもって証そうとしていたのも、まさにこういうことだったのかもしれない。つまり、

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ひとたび人生を投げ捨ててしまえば、これまでまるで知らなかったこと、ほかの状況では決して知りえないことを、人は発見するのではないだろうか。空腹で死にかけていた僕は、何かいいことが起きるたびに、それを単なる偶然として片付けはせず、僕自身の精神状態にその原因を見出そうとした。欲望と無欲のあいだのバランスを保ってさえいれば、自分の意志によって、宇宙が僕に対して反応を示すよう働きかけることができる気がした。そうでも考えなければ、セントラルパークで経験した一連の途方もない親切をどう説明できるのか？僕は自分からは他人にいっさい何も要求しなかったし、進んで自分の居場所を離れたりもしなかった。なのに、知らない人が代わるがわる現われて、救いの手をさしのべてくれたのだ。人々をこれはきっと、何らかの力が僕のなかから世界に放射されたのだ、と僕は考えた。人々をこういう行為に駆り立てる、何かいわく言いがたい力が。やがて僕は、いいことが起きるのは、いいことが起きるのを願うのをやめた場合に限られるという事実を発見した。これが正しいとすれば、逆もまた真ということになる。すなわち、物事が起きるのを願えば願うほど、それが起こるのを妨げてしまうのだ。論理的にはそうなる。すでに実証したように世界を引きつける力が僕にあるとすれば、世界を退ける力だって僕にはあるはずだ。換言するなら、欲しいものを手に入れるには、それを欲しがってはならないのである。筋の通る話ではない。でも、そういう筋の通らなさが、かえって僕は気に入った。もしも僕の欲求が、それらについて考えないことによってのみ満たされるのなら、自分の状況について考えることはすべて、必然的に反生産的だということになる。この論理にとり憑かれたとたん、僕は不可能という

ほかない意識の綱渡りを強いられる破目になった。年がら年じゅう空腹だというのに、どうやって空腹について考えないでいられよう？　胃袋がひっきりなしに悲鳴を上げ、この空虚を満たしてほしいと嘆願しているのに、どうやってそれを沈黙させられよう？　そんなことは至難の業だ。何度も何度も、僕はその哀願に耳を貸してしまうことになった。そしてそのたびに、救いの手が現われるチャンスをまたも逃してしまったことを思い知るのだった。結果は不可避だった。それは数学の定理のごとく厳格で精密だった。僕が自分の問題について思い悩んでいる限り、世界は僕に背を向けた。そうなったら、何とか自分でしのいで行くしかない。一人でどうにか切り抜けるしかないのだ。時が経つ。一日、二日、あるいは三、四日が過ぎて、少しずつ僕のなかから、救いの手という想念が抜け出ていく。もはやこれまで、とあきらめの境地が訪れる。と、そのときはじめて、奇跡が起きる条件が成立するのだ。何度起きても、それはいつも青天の霹靂だった。起きるのはいつも、まるで予想もしなかった出来事であり、いったん起きたからといって、もう一度それが起きるのを当てにすることはできなかった。したがって、一つひとつの奇跡が、つねに最後の奇跡だった。最後であるがゆえに、僕はつねにふり出しに投げ返された。また一から苦闘をはじめなくてはならなかった。

　僕は毎日一定時間、公園を回って食べ物を漁った。こうすれば出費も減らせるし、街に出ねばならない時期も引き延ばせる。時が経つにつれて、僕は街を何より恐れるようになっていった。街を避けるためなら、ほとんど何だってする気になっていた。この点で週末は実に

ありがたかった。天気がよければ、莫大な数の人が公園にやって来る。そしてその大半が、公園にいるあいだに何がしかの食べ物を口にする。ありとあらゆるたぐいの弁当やおやつを、心行くまで腹に詰め込む。当然そこには無駄が生じる。まだ食べられる食物が大量に捨てられることになるのだ。たしかに、はじめは少しためらいがあった。すでに他人の口に触れたものを、自分の口に入れるのだから。でもいったん割りきってしまうと、無限の栄養が僕のまわりに転がっていた。ピザの皮、ホットドッグのかけら、フランスパンサンドの端、缶に残っているソーダ。草地にも岩にもそれがわんさと転がり、屑かごなどはもうはち切れんばかりになっていた。少しでも気後れを減らそうと、僕は屑かごに代わる変てこな名称をあれこれ考案した。円筒形レストラン、闇鍋ディナー、公共福祉ランチパック。本当の名を言わずに済むなら何だっていいのだ。あるとき、例によって屑かごを漁っていると、警官が寄ってきて、何をしているのかと訊いた。不意をつかれた僕はしばらくしどろもどろしていたが、そのうちに、実は僕、学生なんですと言い出した。都市研究のプロジェクトをやってまして、夏休みじゅうずっと、ニューヨーク市の屑かごの中身を統計学的社会学的見地から調査しているんです、と。そしてその証拠として、ポケットに手を突っ込み、コロンビアの学生証を引っぱり出して、有効期限が六月で切れているのを気づかれないよう祈りつつ警官に差し出した。警官はしばらく学生証の写真を眺め、それから僕の顔を見て、ふたたび写真をじっくり眺めて比較し、そして肩をすくめた。あんまり奥まで顔を突っ込むんじゃないぜ、と警官は言った。引っかかって抜けなくなっても知らんからな。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

こんな生活が楽しかったなどと言うつもりはない。這いつくばってパン屑を探す暮らしに、ロマンもへったくれもあったものではない。はじめのうちこそ少しは物珍しかったかもしれないが、それもあっという間に色褪せてしまった。僕は前に読んだ『ラサリリョ・デ・トルメス』のある場面を思い出した。腹をすかせた下級貴族が、たったいま豪勢な食事を終えたように見せかけようと、爪楊子を口にくわえて歩く場面だ。僕もこのカムフラージュを使ってみることにした。コーヒーを飲みに安食堂に入るたび、爪楊子を一握り頂戴してくるようにした。食間の口寂しさも紛らわせるし、見てくれにも一種世慣れた、いかにも独立独歩という感じの貫禄が加わるにちがいない。大した小道具ではないかもしれない。でも僕としては、思いつく限りの手立てを使って、何とか自分を支えていくしかなかったのだ。とりわけつらかったのは、他人の視線を感じながら屑かごに近づいていくときだった。できる限りさりげなくふるまうよう僕は努力した。たいていは空腹のあまり、じきに抑制も忘れてしまったけれども、それだって要するに、空腹があまりに強烈だったことの証しにすぎない。他人に笑われているのが聞こえたことも何回かあった。小さな子供が僕を指さしているのが見えたことも二度ばかりある。ねえママ見て、あの人ゴミ食べてるよ、と子供たちは母親に言っていた。こういう経験はいくら時が経ってもなかなか忘れられるものではない。こみ上げてくる怒りを僕は必死に抑えつけたが、少なくとも一度は、小さな男の子をものすごい顔で睨みつけたので、その子がわっと泣き出してしまったことを覚えている。でもたいていは何とか、こういう暮らしにこの手の屈辱は付きものなんだと割りきることができた。気を強く持

てるときなどは、これは精神の鍛練である、わが自己信頼に試練を与えるべく行く手に投げかけられた障害なのである、そう考えることができた。これを克服できるようになれば、やがてはさらに高次元の意識に到達することができるのだ、と。それほど気分が高揚していない場合には、自分を政治的視点から捉えてみることも多かった。これはアメリカ式の生活に対する挑戦なのだ、そう考えてみずからの状況を正当化しようとした。僕はサボタージュを遂行しているのだ、と自分に言い聞かせるのである。僕は国家という機械から外れてしまった部品であり、システムの妨害を本分とする不適応者なのだ。僕を見れば、人はかならず、恥か、怒りか、憐れみを感じずにはいられない。僕はまさに、システムが破綻してしまったことの生きた証しなのだ。自己満足に浸り、飽食に明け暮れた豊饒の国がついに崩壊しかけていることを、身をもって証明しているのだ。

目覚めている時間の大半が、こういった考察に費やされた。自分の身に起きていることを僕はいつも鋭敏に意識していた。けれども、何かが起きるやいなや、僕の精神はたちどころに混沌と化し、火のように激しく燃え上がるのだった。頭のなかには小難しい理屈や、たがいに葛藤をくり広げるさまざまな声や、こんがらがった内的対話がじゅうじゅうと燻っていた。のちに救い出されてから、ジンマーとキティに何度も訊かれたものだ。何日ものあいだ、いったいどうやって何もせずに過ごしたのか？　退屈しなかったのか？　うんざりしなかったか？　まっとうな問いである。でも僕は、一度として退屈しなかったのだ。公園にいるあいだ、あらゆるたぐいの気分や感情を味わわされたものの、退屈とはついぞ無縁だった。現

実的問題（夜のねぐらを探す、胃袋の訴えに応える）にかかずらわっていないときでも、すべきことはいくらでもあるように思えた。朝の十時ころになると、たいていどこかの屑かごで新聞が拾えたから、その後一時間ばかりは、全ページをじっくり嘗めるように読み、世界の情勢に乗り遅れぬよう努めた。もちろん戦争はまだ続いていたし、フォローすべき出来事はほかにもあった。チャパクィディック（訳注　エドワード・ケネディ上院議員の車に同乗していた女性が溺死した事件）、シカゴ・エイト（訳注　急進派活動家八人の裁判）、ブラック・パンサー裁判、二度目の月着陸、メッツ。カブスのすさまじい転落を、僕はとりわけ強い関心をもって追った。チームが一気に崩壊してしまった有様に、つくづく感じ入らされた。彼らの首位転落と、僕自身の状況とのあいだに、対応関係を見ないでいるのは困難だった。でもそれで自分が傷つけられたような気になったわけではない。むしろメッツの活躍を喜ぶ気持ちのほうが強かった。メッツといえば、カブス以上にその歴史は惨めである。それが突然こうして、どん底からあれよあれよという間に上昇してきたのだ。それは、この世では何だって可能なんだということの証しに思えた。そう考えると大いに慰められた。宇宙を支配しているのはもはや、隠れた創造者たる因果律ではなかった。下は上であり、最後は最初であり、終わりは始まりなのだ。ヘラクレイトスはいまや糞の山から救出された。彼の教えこそ、もっとも単純にして明快な真理にほかならない――現実とは上下に揺れつづけるヨーヨーであり、変化こそが唯一の定数なのだ。

その日のニュースをめぐる考察が終わると、たいていはしばらく公園内をぶらぶらして、まだ行ったことのない領域を探索した。人工の自然界に暮らすという逆説はなかなか愉快だ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

った。ここはいわば、高められた自然である。本物の自然ではまず見られないきわめて多様な世界が、限られたスペースのなかに凝縮されている。丘や原っぱがあり、露出した岩やこんもり茂る木の葉があり、なだらかな草地があり、無数の洞穴が網のようにつながっている。いろんな場所を行ったり来たりするのは楽しかった。ミニチュアの世界のなかで、居ながらにして大旅行の気分を味わえた。それともちろん、公園南端の動物園。貸しボートでにぎわう池。貯水池。子供の遊び場。ただ単に人々を見物して過ごす時間も多かった。人々のしぐさや歩き方を観察し、その人生の物語を想像しながら、彼らの姿に心を委ねきってしまうのだ。頭がいつになく空っぽのときなどは、知らないうちに、単調で偏執的なゲームをやり出していることもしばしばだった。ある地点を通過する人間の数を数えたり、似ている動物によって人々の顔を分類したり（豚、馬、鼠、鳥、カタツムリ、カンガルー、猫）。ときおり、感じたことをノートに書きとめたりもしたが、たいていは、まわりの世界から離れてしまうような気がして、書きたいという気持ちもあまり起こらなかった。これまでの人生で、僕はもうさんざん、言葉を介して生きてきたのだ。いまこの時間に何か意義を持たせようとするなら、できる限り時間のなかで生きなくてはならない。いま・ここ以外のいっさいを退けて、五感で感じ取れるものに集中しなくてはならない。肌に伝わってくる膨大な知覚のなかで生きるのだ。

　むろん危ない目にも遭ったが、取り返しのつかない惨事というのは一度もなかったし、結局はいつも無事逃げおおせた。ある朝、ベンチに座っていたら、年配の男がやって来て隣に

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

腰かけ、手を突き出して握手を求めながら、自分の名はフランクだと名乗った。「何ならボブと呼んでくれてもいい」と男は言った。「うるさいことは言わん。あんたが俺のことをビルと呼びさえしなけりゃ、俺たち仲よくやって行けるさ」。そして間髪を入れず、男はギャンブルにまつわる込み入った話をはじめた。一九三六年に賭けた千ドルをめぐる、シガリーリョという馬やデュークというギャングやテックスという騎手がからんだ、えんえんと続く話である。三番目のセンテンスが終わったころには、僕はもう話の流れを見失っていた。でもそのまとまりのない、ネジの一本外れたお喋りを聞くのはそれなりに快かったし、どう見ても危険な人間には思えなかったので、わざわざ立ち去りもしなかった。ところが、独演をやり出して十分くらい経ったところで、男は突然ベンチから飛び上がり、僕の膝に載っていたクラリネット・ケースをつかんで、病人がジョギングをするみたいによたよたと舗道を駆けていった。腕や脚をめちゃくちゃに振り回しながら、足を引きずるようにして走る姿は、見るも哀れなものだった。僕は難なく男に追いつき、うしろから男の腕をつかまえて、その体をぐいと回転させ、クラリネットを取り返した。男は僕がわざわざ追いかけてきたことに驚いているみたいだった。「年寄りに乱暴するもんじゃないぞ」と言ったきりで、反省している様子はまるでなかった。むかっときた僕は、顔に一発お見舞いしてやろうかとも思ったが、相手はもうすっかり脅えて身をぶるぶる震わせていたので、それは思いとどまった。ところが、僕が帰ろうとしてうしろを向きかけたとたん、男は恐れと軽蔑の混じった顔を上げ、僕にめがけてぺっと大きく唾を吐いた。半分くらいはそのまま男の顎を垂れていったが、あ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

との半分は僕のシャツの胸あたりに命中した。シャツの被害状況を見ようと僕が目をそらしたすきに、男はまたよたよた逃げ出し、僕が追ってこないかどうかちらちらふり返りながら走っていった。これで終わりかと思ったら、もう大丈夫という距離まで離れると、男はぴたっと立ち止まってこっちを向いた。そして僕に向かってげんこつをふり回し、憤怒の念もあらわに腕を突き出した。「アカの糞ったれ！」と男は叫んだ。「アカの回し者の糞ったれ！とっととソ連に帰れ！」。男は明らかにお芝居を続けたがっていた。僕を挑発して、追いかけてくるよう仕向けているのだ。でもその手には乗らなかった。何も言わずに、僕は回れ右して、男を置き去りにして立ち去った。

　これはまあささいな事件だが、もっと怖い目にも遭った。ある夜には、シープス・メドウで不良少年の一団に追い回された。そのうちの一人が転んで足を挫いたからよかったものの、そうでなかったらどうなったかはわからない。またあるときは、喧嘩腰の酔っ払いにビール壜の破片で脅かされた。この二件もきわどかったが、いちばん怖かったのは、公園暮らしも終わり近くに起きた、ある曇った夜の出来事だ。茂みに迷い込んで、三人の人間——男が二人に女が一人——がセックスをしているところに行き当たったのが事のはじまりである。暗くてよく見えなかったが、どうやらみんな裸らしかった。そして僕がそこにいることに気づいたときの声の調子から察して、三人とも酔っているみたいだった。僕の左足の下で小枝がぱちんと鳴ってまもなく、女の声が聞こえ、葉や枝が急にがさがさ言い出した。「ねえジャック、あそこに変態がいるわよ」と女は言った。二つの声が同時にそれに答えた。どちらも

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

敵意をみなぎらせたうなり声だった。あんなに殺意のこもった声はそうざらにあるものではない。やがて、人影がひとつ立ち上がり、僕に向かって拳銃のようなものを突き出した。「一言でも喋ってみろ、変態野郎」と男は言った。「六倍にして返してやるぜ」。要するに六発の弾ということだろう。それから、恐怖が認識を歪めたのでないとすれば、かちっという、撃鉄を起こす音も聞こえたように思う。自分がどれほど怖がっているかを確かめる間もなく、僕は逃げ出した。何も考えず一目散に駆け出したのだ。肺がダウンしてしまわなかったら、朝まで走りつづけていただろう。

あのままいつまで持ちこたえることができたか、いまとなってはわからない。誰かに殺されなかったと仮定して、冬が来るまでは何とかなったかもしれない。予測しがたい出来事もいくつかあったものの、ひとまず事態は軌道に乗っていたのだ。金を使うにも、これ以上はないというくらい細心の注意を払った。一日にだいたい一ドルか、使ってもせいぜい一ドル半。これだけでも、最後の審判の瞬間を相当引き延ばせたことだろう。それに加えて、財産が限りなくゼロに近づいてしまったときでも、土壇場になると決まって何かが現われるのだった。道で金を拾ったり、誰か知らない人がやって来て、すでに述べたような奇跡を起こしてくれたり。ろくなものは食べていなかったが、それでも、まる一日何も腹に入れずに過ごしたことは一度もなかったと思う。たしかに、最後にはおそろしく痩せていた。五十キロ。でも体重が大きく減り出したのは、救出される直前になってからのことだ。インフルエンザだかビールスだか、何やら訳のわからない病気にかかったのが原因だった。病気になってか

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

らは、最後の一日まで、何も食べられなかった。体が弱りきってしまって、何とか食べ物を口に入れても、結局すぐに吐いてしまうのだ。わが二人の友にあのとき見つけてもらわなかったら、僕は間違いなく死んでしまっていただろう。僕の鉱脈は尽きてしまっていた。戦いを続ける余力はもう残っていなかった。

天気は最初からずっと僕に味方してくれた。あんまりいつもいい天気なので、それを問題として考えることを僕はじきにやめてしまった。ほとんど毎日が、前の日のくり返しだった。美しい晩夏の空がふたたび広がり、燃える太陽が地面を焦がして、やがて空気は、コオロギの歌声に満ちた夜の涼しさのなかに流れ込んでいく。はじめの二週間は雨もほとんど降らなかったし、降ってもほんのにわか雨だった。僕は次第に油断するようになった。だんだん気も大きくなり、どこで寝ようと自分は安全なんだと高をくくって、ろくに覆いもないところで眠るようになった。ある晩、芝生に横になり、空に体をさらけ出して呑気に夢を見ていると、とうとう、怒濤のような雨が降ってきた。天地も揺らぐ激しい雨だった。空が突如真っ二つに割れ、バケツをひっくり返したみたいに水が落ちてきて、耳をつんざく轟音が響きわたった。目が覚めたころには、僕はもうびしょ濡れだった。体じゅうに雨粒の弾丸が降ってきて、散弾のように飛び散った。雨をしのげる場所を探して、僕は暗闇のなかを必死に駆け回った。何分か経って、やっとのことで花崗岩の岩棚の下に避難したが、もうそのころにはどこにいようと関係なくなってしまっていた。体じゅう、海を泳いで渡ったみたいにずぶ濡れだった。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

雨は朝まで降りつづいた。ときには霧雨に弱まり、ときには世も終わりかというほどの轟音を立てながら。絶叫せる大猫の大部隊、雲から転げ落ちてくる神の怒り。いつまたわっと来るかは予想しがたい。もう一度集中砲火を浴びるのは御免だった。僕はそのちっぽけな避難所で、水浸しのブーツ、べっとり貼りついたブルージーンズ、濡れて光る革ジャケットという格好で、なすすべもなく突っ立っていた。ナップサックも同じ目に遭っていたから、着替えもやっぱりずぶ濡れだ。迷子の駄犬みたいに闇のなかでぶるぶる震えながら、雨が止むのをひたすら待つしかない。最初の一時間かそこらは、自分を憐れむ気持ちに落ち込まないよう、精いっぱい頑張った。でもやがてその努力も放棄してしまい、今度は声を限りにわめき出した。思いつく限り最高に悪意のこもった罵倒の文句を、ありったけの力を絞って絶叫するのだ。下劣な悪態の連発、卑屈で冗長な怨み言、神と国家を罵る空威張りの啖呵。しばらくすると、気持ちの昂ぶりも極限に達していた。僕は絶叫しながらしくしく泣き出し、罵倒としゃくり上げを同時に進行させた。それでも悪口の生産だけはいっこうに衰えなかった。トルコの殺し屋にすら感銘を与えたであろう、技巧あふるる長大なフレーズを次から次へと叫んでいた。たぶんそんなことを、三十分くらい続けていたと思う。やがて、さすがに疲れはてて、立ったままその場で眠り込んでしまった。数分間うとうとしてから、またしても激しくなった雨の音で目が覚めた。こっちも悪態の反撃を再開したかったが、もうくたくただったし、叫ぼうにも喉が嗄れてしまっていた。あとは夜どおし、ただぼうっと突っ立ったまま、自己憐憫の念に酔いながら朝が来るのを待っていた。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

六時になって、僕は西四十八丁目の大衆食堂に入り、スープを注文した。たしか野菜スープだったと思う。黄色っぽい汁に、脂を吸ったセロリや人参のかたまりが浮かんでいた。ある程度体は暖まったが、何しろ濡れた服が肌にぴったりへばりついたままでは、スープをもってしても何ら長期的効果を及ぼすことはできなかった。僕は地下のトイレに行って、ハンドドライヤーの下に頭を突っ込んで髪を乾かした。ところが、強い熱風を浴びたせいで、髪が何とも奇妙にもつれて突っ立ってしまい、まるっきり、ゴシック様式の鐘塔から突き出た水落としの怪物みたいな面相になってしまった。何とかしなくてはと、衝動的に新しい替刃——最後の一枚だ——を剃刀に装填し、蛇のようにうねった髪をめったやたらに切り落とした。終わってみると、髪の毛はすっかり短くなり、およそ自分とはわからない姿に変わりはて、痩せこけているのがぞっとするほど目立つようになっていた。耳はぴんと突き出し、喉仏はふくれ上がり、頭全体も子供の頭みたいに小さく見えた。僕は縮みかけているんだ、そう思った。と、突然、鏡に映った顔に向かって、僕自身が大声で喋っているのが聞こえてきた。「怖がるんじゃない」と僕の声は言っていた。「誰だって死ぬのは一度きりなんだ。喜劇はもうじき終わる。そうしたらもう二度とやらなくていいんだ」

その日の午前中、僕は公共図書館の読書室に二時間ばかりいた。読書室なら概して蒸し暑いから、服を乾かすには好都合だと思ったのだ。あいにく、乾くことは乾いたものの、本格的に乾燥してくると、今度は匂いが出てきた。まるで僕の衣服の襞という襞、凹みという凹みが、突如みずからの秘密を世界に公表する決断を下したかのような具合だった。こんな事

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

態ははじめてだった。自分の体からかくもおぞましい悪臭が発生しうると知って、僕は大きな衝撃を受けた。たまりにたまった汗と、昨夜の雨水とが混じりあい、何か奇怪な化学反応を生み出したにちがいない。乾燥が進むにつれて、匂いはいっそうおぞましく、強烈になっていき、やがては足の匂いまではっきりわかるようになった。凄絶をきわめた悪臭がブーツの革を突き抜け、立ちのぼる毒ガスのごとくに鼻孔を直撃するのだ。これが本当に自分の身に起きているなんて、とても信じられなかった。僕は『ブリタニカ百科事典』のページを繰りながら、まわりの人に気づかれませんようにと祈っていた。だがその願いも空しかった。やがて、テーブルの向かいに座った老人が新聞から顔を上げ、鼻をくんくんやり出し、嫌悪もあらわな目を僕に向けたのだ。一瞬、席から飛び上がって、おい、失礼じゃないか、とその老人をどやしつけてやりたい誘惑に駆られたが、もうそんな力は残っていないことに気づいてやめにした。老人が何か言い出す間もなく、僕は椅子から立ち上がり、図書館を出た。

外はどんよりした天気だった。じめじめと陰気な日で、何もかもが霞み、不機嫌そうに見えた。自分のなかの思考がだんだんと枯れていく気がした。味わったことのない無力感が骨のなかにしみ込んできて、よろけて転ばぬようにするだけで精いっぱいだった。コロシアム近くのデリカテッセンでサンドイッチを買ったものの、食べることに気を集中するのも一苦労だった。何口か噛んだあと、僕はサンドイッチを包み直し、あとで食べようとナップサックにしまった。喉がひりひり痛み、汗がどっと出てきた。僕はコロンブス・サークルで道路を横断して公園に戻り、横になれる場所を探した。昼のあいだに眠ったことはそれまで一度

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

もなかった。夜の帳をはぎ取ってみると、にわかにいままでのねぐらが、どこも危なっかしい、外から丸見えの、役立たずの場所に思えてきた。僕は北に歩きつづけながら、ぶっ倒れてしまう前に何か見つかりますようにと念じていた。体のなかで熱がどんどん上がってきていた。朦朧たる疲労感が脳味噌をじわじわ蝕んでいるように思えた。公園にはほとんど人けがなかった。どうしてだろう、と思う間もなく、小雨が降り出した。喉があれほど痛んでいなかったら、きっと僕は笑い出したことだろう。と、突然、激しく、僕は嘔吐しはじめた。野菜スープやサンドイッチの断片が口から飛び出し、目の前の地面に飛び散った。僕は両膝をつかんで地面を見下ろし、嘔吐が過ぎるのを待った。これが人間の孤独なんだ、と僕は心のなかで言った。独りぼっちというのはこういうことなんだ、と。けれどもう憤りはなかった。それらの言葉を、僕は一種残酷な率直さ、絶対的な客観性とともに呟いたのだ。二分か三分経つと、一部始終が、もう何か月も前に起きたことのように感じられた。僕はまた歩き出し、なおも場所探しを続けた。もしそこに誰かが現われたら、たぶん僕は、病院へ連れていってくれませんかと頼んだことだろう。でも誰も現われなかった。たどり着くのにどれくらいかかったか自分でもわからないが、やがて、こんもり茂る樹木が岩を囲んでいる場所が見つかった。岩がいくつも集まって、自然の洞穴ができている。それ以上何も考えずに、僕はその浅い凹みにもぐり込んで、枝を何本か引っぱりこんで入口をふさぎ、あっという間に眠りに落ちた。

　そこでどれだけの時間を過ごしたのかはわからない。たぶん二日か三日だと思う。いまと

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

なってはどうでもいいことだ。ジンマーとキティに訊かれたときは、三日、と答えたが、それは三が文学的数字だからにすぎない。ヨナが鯨の腹のなかで過ごした日数が三日なのだ。その間ほとんど、僕の意識は朦朧としていた。自分では目覚めているように思えるときでも、わが肉体にふりかかったもろもろの試練で頭が一杯で、どこにいるかなんてまるで念頭になかった。何回も長いあいだ吐いたことは覚えている。体の震えが止まらなくて気が変になりそうになったこともあったし、自分の歯ががたがた鳴る音以外何も聞こえないこともあった。熱も相当高かったらしく、そのせいで怖い夢もずいぶん見た。はてしなく続く、目まぐるしく形を変えるさまざまな幻影が、焼けるように熱い体からじかに湧き出てくるように思えた。本来の形をとどめているものは何ひとつなかった。あるとき、目の前にムーン・パレスのネオンサインが見えたことも覚えている。あのサインがあんなにあざやかに見えたことは、現実にも一度もなかった。ピンクとブルーのネオン文字はおそろしく大きく、その輝きでもって空全体を満たしていた。と、突然文字は消え、Ｍｏｏｎのｏｏだけが残った。そして、一方のｏからぶら下がっている僕自身の姿が見えた。危険な芸をしくじったアクロバットみたいに、何とか落ちまいと僕は必死にあがいていた。ちっぽけな毛虫のようにｏの輪に体を巻きつけてずるずる動いていたが、まもなくその姿も見えなくなってしまった。二つのｏはいつしか目玉に変わっていた。二つの巨大な人の目が、蔑むように、苛立たしげに、僕を見下ろしていた。目は長いあいだじっと僕を睨みつけていた。やがて僕は、あれは神の目なのだと確信するに至った。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

最後の日に、太陽が顔を出した。自分では記憶にないのだが、どこかの時点で僕は洞穴から這い出し、芝生の上に大の字に横たわったらしい。頭のなかはもうめちゃくちゃにこんがらがっていて、太陽の暖かさを浴びれば体の熱も蒸発してしまうものと僕は考えていた。日の光が、骨から文字どおり病を吸い出してくれると思っていた。小春日和（インディアン・サマー）、という言葉を何度も何度も呟いたことも覚えている。あまりくり返し口にしたせいで、そのうちに意味が失われてしまったほどだった。頭上には茫漠（ぼうばく）たる空が広がり、目もくらむばかりにはてしなく澄みわたっていた。このままずっと見つめていたら、自分が光のなかに溶けてしまうような気がした。それから、自分では眠ってしまったとも気づかずに、インディアンの夢を見はじめた。それは三五〇年前の出来事だった。半裸の男たちにくっついて、マンハッタンの森のなかを歩く僕自身の姿が見えた。それは奇妙な躍動感に満ちた夢だった。くっきりと、輪郭のあざやかな夢で、まだらの光を浴びた木の葉や枝のあいだを、いくつもの肉体が飛び交っていた。優しい風が樹木を吹き抜けて、男たちの足音をこもらせた。僕は黙って彼らについて行った。彼らにならって精いっぱい敏捷（びんしょう）に身を動かしながら、一歩前進するたびに、いまや僕は森の霊を理解しつつあるのだ、と感じていた。こんなにもはっきり覚えているのは、たぶん、まさにこの夢の最中にジンマーとキティが僕を見つけてくれたからだと思う。芝生に大の字になった僕の頭には、この奇妙で快い幻影が躍っていたのだ。最初に僕を見つけたのはキティだった。でも僕には彼女が誰だかわからなかった。どこかで見た顔だな、と思っただけだった。このあいだと同じナバホ族のヘッドバンドをしていたせいで、僕ははじめキ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ティのことを夢の残影だと思った。僕の夢の暗闇のなかで生まれた影の女、と。あとでキティが言うには、僕はそのとき彼女を見てにっこり笑ったそうだ。そして、僕の様子をよく見ようとかがみ込んだキティを、僕はポカホンタス（訳注　探検家ジョン・スミスの命を救ったといわれるインディアンの娘）と呼んだらしい。日光のせいで彼女の姿が見づらかったことを僕は覚えている。でも、ひとつはっきり目に焼きついているのは、かがみ込んだキティの瞳に、涙が浮かんでいたことだ――彼女自身は絶対に認めなかったけれど。少し経って、ジンマーも視界に登場し、ほどなくその声も聞こえてきた。「この馬鹿野郎」とジンマーは言った。少し間があり、やがて、それ以上長い説教で僕を混乱させても仕方がないと思ったか、ジンマーはまた同じことを言った。「この馬鹿野郎。この大馬鹿野郎」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

3

僕はジンマーのアパートに一か月以上居候していた。熱は二、三日で引いたものの、体力がなかなか戻ってこなくて、立ち上がろうとするだけでよろけてしまう有様だった。キティははじめのうち、週に二回くらいの割合で見舞いに来てくれたが、来ても口数は少なく、たいていは二、三十分で帰ってしまった。僕の頭がもう少しはっきりしていたら、そのことを不思議に思ったかもしれない。特に、僕が救出されるまでの経緯をジンマーから聞かされたあとはなおさらそうだっただろう。まる三週間、僕を探して世界をひっくり返して回っていた人物が、見つかったとたん、急にひどく控え目な態度をとる。考えてみれば妙な話ではないか。でもとにかく現にそうだったわけであり、僕はそれについて何の疑問も抱かなかった。そもそもその時点では、何かに疑問を抱くだけの気力もまだなかったのだ。キティが来て、帰っていくという事実を、ただそのまま受け入れただけだった。それは自然の出来事だった。天気や、惑星の運動や、毎日午後三時に窓からさし込む光と同じ力と必然性とを備えた事象だった。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

回復期の僕を介抱してくれたのはジンマーである。ジンマーの新しい住みかは、ウェストビレッジのおそろしく古いアパートの二階のうらぶれた穴ぐらで、本とレコードが空間を占領していた。ドアなしでつながった二部屋、ごく簡単なキッチン、窓のないバスルーム。僕を泊めてくれることが、ジンマーにとってどれほど重荷かはよくわかった。でも、それについて礼を言おうとするたびに、ジンマーは手を振って僕の言葉をさえぎり、どうでもいいことだという顔をするのだった。自腹を切って僕に食べ物を与え、自分のベッドまで譲ってくれながら、ジンマーは何の見返りも要求しなかった。と同時に、ジンマーは僕に対してひどく腹を立ててもいた。君にはほとほとうんざりしたね、とジンマーは言い立てた。君ときたら白痴同様にふるまって、危うく命まで落とすところだったじゃないか。君ほどの知恵がある人間があんな真似をするなんて、許しがたい話だよ。醜悪だ。愚かだよ。狂気の沙汰だよ。困ってるんだったら、どうして相談してくれなかったんだ？　君のためなら何だってしてやるさ、それを知らなかったとでも言うのか？　こうしたもろもろのお説教に対し、僕はろくに返事もできなかった。ジンマーの気持ちを傷つけてしまったことはわかっていたし、そのことで自分を恥ずかしく思いもした。そして、時が経つにつれて、みずから招いた災難にどんな意味があるのか、僕にもだんだんわからなくなってきた。自分では勇気をもって行動してきたつもりだったのに、結果的には単に、とことん卑屈な臆病ぶりを露呈しただけのように思えてきた。僕はただ、世界を蔑む思いに一人酔いしれ、物事を正面から見据えるのを避けてきただけではなかったのか。いまや湧いてくるのは自責の念ばかりだった。自分の馬鹿

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

き加減が身にしみて感じられた。ジンマーのアパートで毎日を過ごし、少しずつ自分を立て直していくうちに、人生を一からやり直さなくてはという気持ちが湧いてきた。僕はこれまでの過ちを贖いたかった。いまでも僕のためを思ってくれる人たちに償いをしたかった。僕は自分が嫌になっていた。自分の思考にうんざりし、自分の運命について思い悩むことに飽きあきしていた。何よりもまず、自分を浄める必要を僕は感じた。自分のことしか考えない性分を改めたかった。掛け値なしの自分勝手から、転じて、今度は掛け値なしの無私の境地をめざそうと決心した。自分よりも先に人のことを考え、いままでに行なった悪行を帳消しにするよう日々努めていれば、そのうちに何とか、世界のなかで何ごとかを成し遂げるきっかけがつかめるのではないか。もとより現実離れした計画である。でも僕は、ほとんど狂信者の熱意をもってそれにしがみついた。自分を聖者に変えようと僕は努めた。善行を行ないながら世をさすらう、神なき聖者に。いまにして思うといかにも滑稽に響く。でもそのときには、まさしくそれが僕の願いだったのだ。確かなものを手にしようと、僕は必死だった。それを見つけるためなら、何だってする覚悟だった。

だがそれにはもうひとつ障害があった。結局は幸運によって切り抜けられたものの、それだってまさに間一髪というところだったのだ。熱が平温に下がってから二日ばかり経って、トイレへ行こうとまたまたベッドを出たときのことである。日はもう暮れていたと思う。ジンマーは隣の部屋で勉強していた。用を済ませた僕がよろよろとベッドに戻ろうとする途中、ふと、ビクター伯父さんのクラリネット・ケースが床に転がっているのが目に飛び込んでき

た。救出されて以来、クラリネットのことはすっかり忘れていた。それをいままた突然目にして、その状態のあまりのひどさに僕は愕然としてしまった。表面の黒い革は半分なくなっていて、残った部分もぶつぶつ穴が開いたりひびが入ったりしていた。セントラルパークでの暴風雨にさんざん痛めつけられてしまったのだ。水がなかまで入って、楽器も駄目になってしまっただろうか？　僕はケースを手に取り、最悪の事態を覚悟しながら、ベッドまで持っていった。止め金を外し、開けてみる――と、クラリネットの状態を調べる間もないうちに、白い封筒が床に舞い落ちた。トラブルはまだはじまったばかりであることを僕は悟った。徴兵委員会からの通知。僕は身体検査の日時を忘れていたばかりか、そんな手紙が送られてきたことも忘れていたのだ。一瞬のうちに、世界はふたたび四方から僕を閉ざしてしまった。僕はおそらく法に追われる身の上なのだ。身体検査に来なかったとなれば、政府はすでに僕の逮捕令状を発行しているだろう。だとすれば、その代償はおそろしく大きなものにちがいない。どんな目に遭うことになるのか、まるで想像もつかない。僕は封筒を破って開けた。書類の空欄に、タイプで日付が打ってあるのが目に入った。九月十六日。といっても僕には何の意味もない。今日が何月何日かなんて全然わからなくなっているのだから。時計やカレンダーを見る習慣もなくしてしまっていた。見当をつけようにも、何も頭に浮かんでこない。

「一つささいな質問がある」と僕は、相変わらず机の上にかがみ込んでいるジンマーに言った。「今日は？」

「月曜日」とジンマーは顔も上げずに言った。

「日にちだよ。月と、日。年は要らない、だいたいわかってるつもりだから」

「九月十五日」とジンマーはなおも顔を上げずに言った。

「九月十五日？　それ、確かかい？」

「確かだとも。疑念の余地もない」

僕はへなへなと枕に倒れ込み、目を閉じた。「信じられん」と僕は呟いた。「まったく信じられん」

ジンマーはようやく机から目を離し、怪訝そうに僕を見た。「何がそんなに信じられないんだ？」

「え？」

「僕が犯罪者じゃないことになるからさ」

「僕が犯罪者じゃないことになるからさ」

「ちゃんと聞こえてるよ。二度言ったって、さっぱり訳がわからん」

僕は手紙を高く掲げ、振り回した。「これを読めばわかる」

僕は翌朝ホワイトホール・ストリートに出頭を命じられていた。ジンマーはすでに七月に検査を受けていて、喘息のおかげで徴兵猶予を受けていた。僕らはそれから二時間か三時間、僕を待ち受けている運命について話しあった。基本的にそれは、あのころアメリカじゅうで何百万もの若者が交わした会話と変わるところはなかった。でも大半の連中とは違い、僕の場合、決定的瞬間に備えて何ひとつ準備をしていなかった。医者の診断書も取っていないし、

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

体をドラッグ漬けにして運動機能を麻痺させてもいない。神経衰弱のお芝居を積み重ねて、精神障害の病歴を築いてもいない。僕はずっと以前から、軍隊には絶対に入らないと決めていた。そして決めたが最後、あとはろくに考えもしなかった。いつもの悪い癖で、惰性に流されて、問題を頭の外に葬り去ってしまったのである。ジンマーにも呆れられた。でももう手遅れであることはジンマーも認めざるをえなかった。身体検査を受けて、合格するか、落ちるか、そのどちらかなのだ。かりに合格してしまったとして、取れる道は二つしかない。国外に逃げるか、刑務所に入るかである。ジンマーは外国に行った連中の話をいろいろ聞かせてくれた。カナダ、フランス、スウェーデン。でも僕はあまり気が乗らなかった。金もないしね、と僕は言った。海外旅行って気分じゃないんだよ。

「じゃやっぱり犯罪者になるわけか」とジンマーは言った。

「囚人だよ」と僕は言い直した。「政治犯の囚人さ。ただの犯罪者とは違う」

当時僕はまだ回復の初期段階にあった。翌朝、起きて服を――僕には数サイズ小さすぎるジンマーの服を――着ようとすると、とても外出できる状態ではないことが判明した。力がすっかり衰えてしまっていて、部屋の端から端に行くだけで体力も気力も尽きてしまうのだ。それまでは、ベッドを一、二分以上離れたことは一度もなかった。のろのろとトイレまで行って、帰ってくる、それだけだった。ジンマーに支えてもらわなかったら、部屋の外に出られたかどうかも怪しいものである。ジンマーは僕を人形みたいに立たせ、両腕で抱きかかえて階段を歩かせてくれた。そうやって支えられたまま、僕は地下鉄まで歩いていった。とほ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

とぼ歩む我々の姿は、さぞや情けない、気の滅入る見世物だったことだろう。僕を連れてホワイトホール・ストリートの建物の玄関までたどり着くと、ジンマーは真向かいのレストランを指さして、あそこで待っていると言った。そして激励の意をこめて、僕の腕をぎゅっと握った。「心配するな」とジンマーは言った。「君は大した兵士になるさ、フォッグ。一目見りゃわかる」。「そうだとも」と僕は答えた。「糞ったれ軍隊でピカ一の糞ったれ兵士さ。どんな阿呆が見たってわかる」。ジンマーに向けて敬礼の真似事をしてから、転ばぬよう壁にへばりつきながら、僕はよたよたと建物に入っていった。

そのあとに何があったか、もうほとんど覚えていない。ところどころの断片は浮かんでくるけれど、それを組み合わせてもまとまった記憶は出てこない。確信をもって語れるような話は何もない。僕がいかに衰弱していたかが、この点からもわかる。とにかくただそこに立って、倒れないようにしているだけで精いっぱいで、とても周囲に注意を払うどころではなかったのだ。実際、そこにいた大半の時間、目も閉じていたんじゃないかと思う。何とか目を開けても、たいていはまたすぐ閉じてしまい、まとまった世界が僕のなかに入ってくることはめったになかった。一緒に検査を受けた人間はほかにも五十人か百人いた。みんなで大きな部屋の机の前に座らされて、係の軍曹の指示を受けたことは覚えているが、指示の中身までは思い出せない。いくら頭をひねっても、一言も記憶に戻ってこない。我々は記入すべき書類を与えられ、それから何やら筆記試験を受けたと思うが、ひょっとしたら試験が先で書類があとだったかもしれない。それまで属していた団体に印をつけて——大学でのSD

S（訳注 民主社会学生連盟）、高校でのSANE（訳注 核兵器廃絶運動委員会）とSNCC（訳注 全米学生非暴力調整委員会）――前の年に逮捕されたときの状況を記述するのにひどく手間どったことを覚えている。結局いちばんビリになってしまい、最後のほうになると軍曹が僕のうしろに立って、ホーチミンがどうのアメリカ国旗がどうのとぶつぶつ呟いていた。

それからしばらく、休憩があった。数分だったかもしれないし、三十分くらいだったかもしれない。いま目に浮かぶのは、廊下や、蛍光灯の光や、パンツ一丁で所在なげに立っている若者の群れだ。そのときどれほど心細い思いがしたか、それだけははっきり覚えているが、ほかの細かいこと（どこで服を脱いだか、並んで待つあいだにみんなで何を話したか）は綺麗さっぱり忘れてしまった。もっと具体的にいうと、我々の足についてのイメージが、僕にはまるで湧いてこない。膝から上は、ブリーフしか身につけていなかった。それは間違いない。でも膝から下となると、いくら考えてもまったくの神秘なのだ。靴か、靴下か、もしくはその両方の着用を許されていたのだろうか？　それとも裸足で廊下から廊下を引き回されたのだろうか？　この点に関しては、とにかくほんのかすかな光も見えてこない。

やがて、僕はある部屋に入るように言われた。医者が僕の胸と背中をぽんぽんと叩き、両眼をのぞき込んで、睾丸をぎゅっと握り、咳をしてみろと命じた。ここまではさしたる手間もかからなかったが、次に血液を採る段になって、検査はにわかに劇的になった。あまりに衰弱し、貧血状態に陥っていたものだから、医者がいくら探しても血管が見つからなかったのだ。二度か三度針で腕をつっついて、皮膚に傷はついたものの、血はいっこうに出てこな

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

かった。もうこのあたりになると、僕はさぞ哀れな様子をしていたにちがいない。顔は真っ青、目はうつろ、いまにも意識を失いそうに見えたことだろう。とうとう医者もあきらめて、そこのベンチに座りなさいと言った。割合優しい言い方で、少なくとも怒っているふうではなかったと思う。「また眩暈(めまい)がしたら」と医者は言った。「構わんから座り込んで、気分がよくなるのを待ちなさい。倒れて頭でも打ったら大変だからね」

ベンチに腰かけたことは僕もはっきり覚えている。でもその次に浮かんでくるのは、別の部屋でテーブルの上に横になっている自分の姿だ。この二つの出来事のあいだに、どのくらい時間が経過したかはまったくわからない。気を失ったわけではないと思う。だがとにかく、今度は周到に準備した上でもう一度採血してみようということになったのだろう。ゴムバンドを二頭筋に巻きつけて血管を浮き立たせたのち、やっとのことで針が入った。さっきと同じ医者だったかどうかは覚えていないが、針を入れながらその医者は、ずいぶん痩(や)せてるな、朝飯は食ってきたのか、といったようなことを訊(き)いた。その瞬間、明らかに僕の頭脳はその日のうちでいちばん冴(さ)えわたっていた。僕は医者の方を向き、思いつく限りもっとも単純な、もっとも誠意ある返答を口にした。「先生」と僕は言った。「僕が朝食を取らずにいられる人間に見えますか?」

検査はさらに続いた。まだまだたくさんあったはずだが、その大半は曖昧模糊(あいまいもこ)としている。どこかで(建物のなか? 外のレストラン?)昼食も与えられたが、食事に関し唯一(ゆいいつ)思い出せるのは、誰も僕の隣に座りたがらなかったことだけだ。午後になり、二階の廊下で、いよい

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

よ身長と体重の測定がはじまった。僕が体重計に乗ると、針は信じがたいほど低い数字を指した。たしか五十キロ、あるいは五十一キロだったかもしれない。その時点で僕はほかの連中と別にされて、精神科医のところに連れていかれた。精神科医はずんぐりした体つきで、指も丸っこくて短く、医者というよりレスラーみたいな人だな、と思ったことを覚えている。この医者を相手に嘘をつくわけにはいかない。何しろ僕は聖者への道を歩みはじめたのだ。あとで後悔するような言動は絶対に避けねばならない。会話の最中、医者は二度ばかりため息をついたが、それ以外には僕の言葉や外見に動揺している様子もなかった。きっともう慣れっこになっていて、いまさら何が出てきても驚かないんだな、と僕は思った。一方、医者の質問が非常に漠然としているのが僕にはちょっと意外な気がした。ドラッグはやるのか、と訊くので、いいえと答えると、医者は眉を釣り上げ、もう一度同じ質問をした。こっちもまた同じ答えをすると、それ以上は追及しなかった。ありきたりの質問がその後いくつか続いた。便通の具合はどうか、夢精はするか、自殺を頻繁に考えるか、云々。僕はできる限り単純明快な返答をするよう努め、装飾やコメントはすべて排除した。医者は答えを聞きながら、用紙に印刷された小さな四角にチェックマークをつけるばかりで、僕を見もしなかった。相当プライベートなことが話題になっているのに、何だか会計士か自動車修理工とでも話しているみたいである。でも僕としてはかえって気が楽だった。ところが、用紙の最後にたどり着くと、医者はようやく顔を上げ、四秒か五秒、僕をじっと見据えた。

「ずいぶん情けない状態だな」と医者は口を開いた。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

「わかってます」と僕は答えた。「ずっと病気だったんです。でも少しずつよくなってきているると思います」
「そのことを話したいかね？」
「先生がそうおっしゃるなら」
「じゃまず体重の話をしてもらおうか」
「風邪のせいなんです。二週間ばかり前に風邪で腹をこわして、ろくに食べられなかったもので」
「どのくらい減った？」
「さあ。十五キロか、二十キロかな」
「二週間でかね？」
「いえ、二年くらいでです。でも一気に痩せたのはこの夏です」
「どうしてかね？」
「ひとつには金がなかったからです。食べるにも事欠いていました」
「仕事はしていないのか？」
「してません」
「探してはいたのかね？」
「いいえ」
「それはちょっと説明してもらわんとな」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「ずいぶん複雑な話なんです。話してもわかっていただけるかどうか」

「それは私が決めればいい。とにかく話してごらん。どう思われるか、なんて気にせんでよろしい。時間はたっぷりある」

僕はなぜかそこで、この赤の他人に一部始終を聞いてもらいたい、という激しい欲求に襲われた。これほど場違いな話もなかっただろう。でも、自分にブレーキをかける間もないうちに、言葉がすでに口から流れはじめていた。自分の唇が動くのはちゃんと実感できたが、と同時に、まるで誰か他人の話を聞いているような気もした。僕自身の声が、母親のことや、ビクター伯父さんのこと、セントラルパーク、キティ・ウーのことをえんえんと喋りつづけるのを僕は聞いた。医者は礼儀正しくうなずきながら聞いていたが、何の話だかさっぱりわからずにいることは明白だった。僕の人生における過去二年間の物語を聞きながら、医者はだんだん落着かなくなってきていた。それを見て僕も余計にのぼせてしまい、相手がわからない顔をすればするほど、話を明快にしなくてはとあせるのだった。これは僕の人格にかかわる問題なんだ、そんな気になってきた。軍隊の医者だって構うものか、同じ人間じゃないか。とにかくこの人にわかってもらうこと、それが何よりも大切に思えた。「人間の人生というのは、無数の偶発的要素によって決められるのです」と僕は精いっぱいの明晰さをめざして言った。「人は日々、これらの衝撃や偶然に耐え、何とか平衡を保たんとあくせくしています。二年前、個人的かつ哲学的理由から、僕はこの苦闘をやめてしまおうと決意しました。自殺しようと思ったんじゃありません。それとはぜんぜん別の話です。世界の混沌に身を委

ねてしまうことによって、何か隠れた調和を世界が啓示してくれるんじゃないか、おのれを知るに役立つ何らかの形なりパターンなりが見えてくるんじゃないか、そう思ったのです。要は物事をありのままに受け入れるということでした。宇宙の流れに身を任せることでした。この企てがうまく行ったとは言いません。むしろ惨めな失敗に終わったと言うべきでしょうね。でも失敗したからといって、企ての誠意まで無効になってしまうわけじゃありません。たしかに危うく死にかけるところでしたが、それでもやはり、人間としては向上したと思っています」

ぶざまというほかない迷演説だった。喋れば喋るほど、言葉はますますしどろもどろになり、話は具体性を失っていった。やがて医者は聞くのをまったくやめてしまった。僕の頭上の、見えない一点をただ凝視していた。目には混乱と憐憫の混じりあった雲がかかっていた。僕の独白が何分くらい続いたかはわからない。でもとにかく、これは見込みなしと医者が判断するに十分な長さだったことは間違いない。にせの狂人を見抜く習練を積んだ人間の目にも、掛け値なしにネジが外れている男と映ったのだ。「そこまでで結構」と医者はセンテンスの途中で僕をさえぎって言った。「だいぶわかってきたよ」。その後一分ばかり、僕は黙って椅子に座ったまま、ぶるぶる震え、汗をかきながら、医者が公式の便箋に何やらごりごり書いているのを眺めていた。医者はそれを二つに折りたたんで、机ごしに手を伸ばして僕に渡し、「これを検査官長のところに持っていきなさい。あっちの方だ」と言った。「それと出ていくとき、次の人間に入るよう言ってくれたまえ」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

渡されたメモを手に握って廊下を歩きながら、中身を見てみたいという欲求を必死に抑えたことを僕は覚えている。監視されていると思わずにはいられなかった。僕の考えを読み取れる人間が建物のどこかにひそんでいる気がしてならなかったのだ。行ってみると、検査官長は制服をきちんと着た大男で、胸にはジグソーパズルみたいにメダルや勲章をたくさんぶら下げていた。机の上の書類の山から顔を上げると、ぞんざいに手を振って僕を招き入れた。僕は精神科医のメモを渡した。それをちらっと一目見るやいなや、検査官長は顔じゅうをほころばせて、歯をむき出してにっと笑い、「こいつぁ助かった」と言った。「おかげで二日分の仕事をやらずに済んだ」。そして何の説明もなしに、机の上の書類をびりびり破き、片っ端から屑かごに投げ入れた。心底嬉しそうな様子だった。「落ちてくれて本当によかったぜ、フォッグ」と検査官長は言った。「お前のことを徹底的に調査せにゃならんところだったが、不合格となったからには、もうどうでもいい」

「調査？」と僕は言った。

「ほれ、お前いろいろ組織に入っておっただろうが」と検査官長はほとんど陽気といっていい口調で言った。「軍隊にだな、アカだのアジテーターだのを入れるわけにゃいかんだろうが。士気に影響するでな」

その後どういう順序でことが進んだか、はっきりとは覚えていないが、とにかくしばらくして、僕はほかの不合格の連中と一緒にどこかの部屋にいた。たぶん全部で十人ばかりいたと思う。ここまでとことん情けない風采の人間たちが一堂に会しているのを見るのもはじめ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

てだった。顔と背中一面におぞましいニキビが広がったある若者は、部屋の隅っこに座ってぶるぶる震えながら、何やら独り言を呟いていた。片腕がすっかり萎えてしまっている者もいた。かと思うと、一三〇キロは優にありそうなのが壁を背にして立ち、屁のような音を立てて、そのたびに、たちの悪い七歳の子供みたいにげらげら耳ざわりに笑った。誰もがみんなネジの外れた、グロテスクな、どこにも居場所のない連中だった。僕はもうそのころにはほとんど意識を失いかけていて、誰とも口をきかなかった。ドア付近の椅子に腰を下ろして、目を閉じていた。ふたたび目を開けると、係の将校が僕の腕を揺さぶって、起きろ、と言っていた。もう帰ってよろしい、これで終わりだ、と将校は言った。

夕暮れ近くの陽ざしを浴びながら、僕は道路を渡った。ジンマーは約束通りレストランで待っていてくれた。

それからというもの、僕の体重は急速に増えていった。その後の十日間で、たぶん八キロか九キロは増えたと思う。月末になると、かつての僕自身に少しは似かよってきた。ジンマーはあらゆる種類の食べ物を冷蔵庫にストックし、細心の注意を払って僕に食事を与えてくれた。外出する元気が戻ってきたと見ると、今度は毎晩、近所の酒場に連れていってくれるようになった。客もあまりいない、暗い静かな店で、僕らはビールを飲みながらテレビの野球中継を見た。店のテレビで見ると、芝生はつねにブルーで、バットはオレンジ色の霞だっ

た。選手たちも何だか道化師みたいに見えた。でもそうやって小さなブースにこもって、将来のことを何時間も話しあったりするのはとても気持ちがよかった。それは僕にとってもジンマーにとっても、この上なく静かで落着いた日々だった。人生における次の一段階に足を踏み入れる前の、一瞬ふっと立ち止まる瞬間だった。

そうやって語りあうなかで、キティ・ウーのことが僕にも少しずつわかってきた。ジンマーはキティを絶賛していた。キティについて語るその声に、賞賛の響きを聞き取らないのは難しかった。あるときなどジンマーは、僕だってもしすでにほかの女の子に恋していなかったら、きっとキティに参っていただろうね、とまで言った。あんなに完璧に近い女の子は見たことがないよ、と。実際、はっきり言って、ジンマーにとって唯一不可解なのは、それほどの女の子が、何でまたよりによって僕みたいに情けない奴に惹かれたのかという点だった。

「べつに惹かれたってわけじゃないと思うね」と僕は言った。「要するに優しい子なんだよ。僕を憐れに思って、それで助けてくれた。それだけだよ。まあ、怪我をした犬を憐れに思うみたいなものだね」

「いいかMS、僕はキティと毎日会っていた。三週間近く、毎日だ。そのあいだ彼女はずっと君のことばかり話していたんだぜ」

「まさか」

「本当さ、冗談で言ってるんじゃない。彼女は君にぞっこんなのさ」

「じゃあどうして会いにこないんだ?」

「忙しいのさ。ジュリアードの授業がはじまったからね。アルバイトもしてるし」
「それは知らなかった」
「そりゃ知らんだろうよ。君は何も知らないんだよ。一日じゅうベッドでゴロゴロして、冷蔵庫まで出張していって、僕の本を読んで。ときたま思い出したみたいに皿洗いの真似事をやって。それでいったい何が知れる？」
「いまは体力を取り戻している最中なんだ。何日かしたら普通の体に戻るさ」
「肉体的にはな。でも頭のほうはまだまだだぜ」
「どういう意味だ？」
「物事の表面しか見ないいんじゃ駄目だって意味さ。なあＭＳ、想像力を働かせろよ」
「自分じゃいままでずっと想像力が働きすぎるつもりだったんだがね。これからはもっと現実的に、地に足をつけて生きようと思ってる」
「君自身に関してはそれでいいさ。でも他人についてはそうは行かない。どうしてキティが引っ込んじゃったと思う？　どうして会いに来なくなったと思うんだ？」
「忙しいからだろ。君いまそう言ったじゃないか」
「それは理由の半分にすぎない」
「おいデイビッド、君の話は同じところをぐるぐる回ってるぜ」
「事態は君が思ってるより複雑だってことを言おうとしてるだけさ」
「わかったよ。で、あとの半分は何だ？」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「遠慮」
「冗談じゃない。それほどキティに似つかわしくない言葉もないぜ。僕に言わせりゃ、あんなに率直で、思ったままに行動する人間はそういないね」
「その通り。でもその奥には、すごく控え目で、繊細な気持ちの持ち主が隠れている」
「キティははじめて会ったばかりの僕にキスしたんだぜ。帰ろうとする僕をつかまえて、両腕で抱きついてきて、僕の唇に思いっきりキスしたんだ。繊細とか、控え目なんてお呼びじゃないよ」
「素敵なキスだったか？」
「素敵なの何の、あんなに素晴らしいキスはちょっとない。これまで受ける恩恵に浴したすべてのキスのなかでも最高の部類に属するといっていい」
「だろう？　まさに僕の言ってることの証明じゃないか」
「何の証明なもんか。ただのはずみでやったことだよ」
「違うね。キティは自分のやっていることを十分承知していたさ。たしかに衝動に従う人間ではある。でもその衝動も、彼女の場合には、ある種の叡智なんだよ」
「ずいぶん自信たっぷりじゃないか」
「キティの立場になって考えてみろよ。彼女は君に恋をして、君の唇にキスして、何もかも放り出して君の行方を探す。そのお返しに、君は何をしてあげた？　何もしてないじゃないか。指一本動かしちゃいない。キティがほかの人間と違うのはね、それでもいいって思って

CamScannerでスキャン

しまうことなんだ。なあフォッグ、考えてもみろよ。彼女は君の命を救った。でも彼女から見れば、君は彼女に何の借りもない。君に感謝してもらおうなんて思っちゃいない。友好の念さえ期待していない。君がそうしてくれれば嬉しいとは思っているかもしれないが、自分からは絶対に要求しないんだ。他人の気持ちをすごく尊重する人間だから、その気もないのに人に無理強いするなんてことはできないのさ。そりゃたしかに率直で、思ったままに行動する女の子だよ。でもそれと同時に、自分を押しつけていると君に思われるくらいなら、死んだほうがましだと思っているんだ。だからこそ遠慮しているのさ。もう自分からは十分前に出た。あとはもう立ち止まって、待っているしかないんだよ」

「何が言いたいんだ、君は？」

「君の番だってことだよ、フォッグ。次は君がことを起こさなくちゃいけないんだよ」

キティがジンマーに語ったところによると、彼女の父親は革命以前の中国において国民党将軍の座にあり、一九三〇年代には北京で市長だか軍総指揮官だかを務めた。蔣介石陣営の一員でありながら、国民党と共産党との会合を開くという口実で蔣介石が周恩来を北京におびき寄せたときには、周恩来を無事市外に誘導しその命を救ってやったこともあった。それでも国民党に対する忠義は捨てず、革命後にはその他の側近ともども蔣介石について台湾に移った。ウー家は非常な大家族で、正妻のほかに側妻が二人、子供が五、六人、召使いも一通り揃っていた。キティは一九五〇年二月に第二側妻の子として生まれた。その十六か月後、ウー将軍が在日大使に任命されて、一家は東京に移った。これは蔣介石の巧妙な措置といえ

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

よう。表向きには要職を与えることになる一方で、ずばずば物を言う扱いにくい人間を、台北の中枢から取り除いたわけである。ウー将軍は当時六十代後半になっていた。影響力のある人物としての日々は、どうやらすでに終わっていた。

　キティは少女時代を東京で送り、アメリカン・スクールに通って（英語が完璧なのもそのせいだった）、大使の娘にふさわしいあらゆる贅沢を与えられて過ごした。バレエのレッスン、アメリカ式のクリスマス、運転手付きの車。にもかかわらず、それは寂しい日々だった。いちばん歳の近い異母姉とも十歳離れていたし、スイスの銀行で要職にある一人の兄などとは三十歳も違っていたのだ。さらに、第二側妻としての母親の地位は、家族内の権力構造にあって、召使いのそれとさして変わるものではなかった。六十四歳の正妻と、五十二歳の第一側妻は、若く美しいキティの母親に嫉妬して、ことあるごとにその地位をおとしめようとした。キティがジンマーに言うには、みんながたがいに張りあったり、閥を組んだり、陰で足を引っぱりあったり、ひそかに策謀をめぐらしつつ表では偽りの笑みを浮かべたり、まるっきり帝政期中国の宮廷で暮らすような感じだったという。将軍本人はめったに姿を現わさなかった。職務を遂行する以外も、たいていの時間は、いささか怪しげな若い女性たちの愛情をかち得ることに忙しかったのである。東京は誘惑の豊かな都市である。アバンチュールの機会は無限にあった。やがて将軍は一人の愛人を囲うようになった。豪奢なマンションに住まわせ、彼女を喜ばせるために湯水のように金を使った。服や宝石はいうに及ばず、スポーツカーも与えた。だが結局は、こうした努力でも十分ではなかった。苦痛を忍び、大金を

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

払って受けた精力回復治療をもってしても、流れを食い止めることはできなかった。愛人の目は次第によそに向くようになった。ある夜、将軍が前触れなしにマンションに入っていくと、彼女は若い男の腕に抱かれていた。すさまじい喧嘩が起きた。悲鳴、尖った爪、血に染まり破れたシャツ。愚かな老人の迷妄もこれまでだった。将軍は家に帰り、ずたずたに裂けたシャツを部屋の真ん中に吊るして、その日の日付を書いた紙を結びつけた。一九五九年十月十四日。打ち砕かれた虚栄心の形見として、シャツは終生そこに吊るされていた。

やがてキティの母親が亡くなったが、これに関しては原因も状況もジンマーの話ははっきりしなかった。当時将軍は八十を過ぎていて、健康も衰えていたが、いちばん下の娘を想う気持ちがいま一度燃え上がったのか、キティをアメリカの寄宿学校に入れようと思い立った。フィールディング・アカデミーの一年生クラスに入るべくマサチューセッツに到着したとき、キティはちょうど十四歳になったところだった。その性格からして、新しい環境になじみ、自分の居場所を見出すのに大して時間はかからなかった。演劇とダンスに励んで、友だちもできたし、勉強もちゃんとやって成績も悪くなかった。アカデミーでの四年間が終わるころには、もう日本に戻る気がないことをキティは自覚していた。台湾に帰る気もないし、ほかのどこへ行く気もない。いまやアメリカこそ自分の国だった。父が亡くなった際に相続したささやかな遺産を巧みに操って、ジュリアードの授業料を捻出した。こうしてニューヨークにやって来てから一年ちょっとが経ち、いまちょうど第二学年がはじまったところというわけだった。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「聞いたような話だろう？」とジンマーが言った。
「聞いたような話？　僕にはこれほどエキゾチックな話はないと思えるがね」
「それは表面だけさ。異国色を削り取ってみろよ。僕の知ってる誰かさんの話と、ほとんどそっくりになるはずなんだがね。ま、もちろん、細かいところはちょっと調整が必要だが」
「うーん、なるほど。嵐の孤児、というわけか」
「その通り」
僕はちょっと黙って、いま聞かされた話について考えてみた。「まあたしかに似ているところもある」と僕はやがて言った。「でも、彼女の話は本当だと思うかい？」
「僕には確かめようがないよ。でも、これまで彼女を見てきた限りでは、かりに嘘だとしたら相当のショックだね」
僕はビールをもう一口すすり、うなずいた。ずっとあとになって、キティのことがもっとわかるようになると、彼女が何事についても絶対に嘘をつかない人間であることを僕は知った。

ジンマーのアパートに居候している時期が長引くにつれて、僕はだんだん居づらくなってきた。ジンマーは僕の回復に要する費用をすべて肩代わりしてくれたし、それについて一言も文句を言わなかった。でも、ジンマーの財政がそれほど豊かでないことは僕も知っていた。

こんなことをいつまでも続けていられるはずはない。ニュージャージーの両親から少しは仕送りしてもらっていたが、基本的にはジンマーだって自活の身なのだ。九月二十日ころに、大学院の授業がはじまった。ジンマーはコロンビアの比較文学の大学院に入学していた。優秀な学生だったから、大学のほうから特待生待遇を提示してきたのである。授業料は免除、プラス、奨学金が年二千ドル。当時としては相当の額だが、それでも一年食いつなぐにはとても足りない。なのにジンマーは、せっせと僕の面倒を見てくれて、乏しい蓄えをどんどん使ってしまっていた。もちろんジンマーが人格者だったことは確かだ。でも、そこには義侠心以外の要素も働いていたんじゃないかと僕は思う。大学一年のルームメート時代からいつも感じていたことだが、ジンマーはつねづね、僕に何となく引け目を感じていたような気がする。いってみれば、僕の馬鹿さ加減のあまりの壮大さに、圧倒されていたように思うのだ。そして、僕が困った状態に陥ったいま、ひょっとするとジンマーは、やっと自分が上に立つチャンスが来たと思ったのかもしれない。僕らの友好関係の内的なバランスを正す機会、といってもいい。本人が自覚していたかどうかは疑わしいが、いまや僕と話すジンマーの口調には、どこかとげとげしい優越感のようなものが入り込んでいた。僕をからかうのを楽しんでいることが、嫌でも伝わってくるのだ。でも僕はそれも我慢した。べつに腹も立たなかった。自分自身に対する僕の評価はどん底まで落ち込んでいたから、ジンマーの叱責にしても、一種正義の裁き、これまでの罪に対し当然受けてしかるべき罰として、ひそかに歓迎することができた。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ジンマーは小柄で痩せっぽちで、髪は黒い縮れ毛、つねに背筋をしゃんと伸ばした、落着きのある男だった。当時の学生がよくかけていた金ぶちの眼鏡をかけ、ちょうど顎ひげも生やしかけているせいで、一見若きユダヤ教司祭という風采だった。コロンビアで知りあった全学生のなかでも、ジンマーほど頭もよくかつ誠実な人物を僕は知らない。そのまま勉強を続ければ、いずれ一流の学者になることは疑いなかった。僕らは知られざる書物、忘れられた本に対する情熱を共有していた。リュコフロンの『カッサンドラ』、ジョルダーノ・ブルーノの哲学対話、ジョゼフ・ジュベールの随想録、その他数々の書物を我々は一緒に発見した。でも、僕が熱しやすく冷めやすい性格で、書物に対してもむらっ気があるのに対し、ジンマーの読み方は厳密かつ組織的で、その洞察の奥深さには何度も驚嘆させられたものだ。なのにジンマーは、批評家としての自分の才を自慢したりもせず、そんなのは大したことじゃないさと片付けていた。ジンマーの主たる関心は詩を書くことだった。何時間ものあいだ、真剣に、一語一語に全精神を注ぎ込みながら、まるで世界の運命がそれによって左右されるかのように——むろん、それこそ唯一まっとうな詩の書き方なのだが——詩を書いていた。いろんな意味で、ジンマーの詩は彼の体に似ていた。コンパクトで、バネが効いていて、きっちり抑え込まれている。思いがあまりに濃密に織りあわされているせいで、容易には理解できないこともしばしばだった。それでも僕は、ジンマーの詩の不思議な感触、火打ち石のような言葉の手触りを素晴らしいと思っていた。ジンマーは僕の意見を信頼してくれたから、意見を求められたときは僕もできるだけ正直に答えた。なるべく励みになることを言うよう

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

に努める一方で、何か間違っていると思ったら言葉を濁すようなことはしなかった。たぶん、僕自身が文学的野心に縁がなかったことも幸いしていたと思う。かりに僕に批判されても、それが隠れたライバル意識のせいではないかなどと疑う必要はなかったのだ。

ジンマーはかれこれ二年か三年、ずっと一人の女の子に恋をしていた。アンナ・ブルームという名の女の子で――Bloom だか Blume だか、綴りはわからずじまいだった――ジンマーと同じくニュージャージーの郊外育ちで、家もジンマーの家から道路をはさんで向かいにあった。ジンマーの妹と学校で同じクラスになったこともあり、ジンマーより二つ年下ということになる。僕自身はアンナに一度か二度しか会っていない。小柄な黒髪の女の子で、可愛らしい顔だちの、見るからに元気一杯の人物で、ジンマーの地味な性格からして、この子はちょっと手に負えないんじゃないかなどと思ったものだ。その夏、アンナは突然ニューヨークを去って、どこか外国でジャーナリストをしている兄のウィリアムのもとに行ってしまっていた。それからというもの、ジンマーには何の連絡もなかった。手紙も葉書も、まったく何も来なかった。何週間かが経ち、ジンマーはだんだんと絶望に陥りかけていた。毎日が、階下の郵便箱を確かめにいく儀式とともにはじまった。アパートから出たり入ったりするたびに、空っぽの箱を開け閉めせずにはいられなかった。何時だろうと同じことだった。夜中の二時でも三時でも、新しい手紙が届いている可能性などまったくないのに、どうしても誘惑に屈してしまうのだ。近所の飲み屋〈ホワイト・ホース〉からの帰り、二人ともビールでほろ酔いになったところに、わが友が郵便箱の鍵をポケットから引っぱり出し、箱のな

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

かに手を突っ込んで、そこにありもしないもの、決してあるはずのないものを探してごそごそやっている痛ましい姿を、僕は何度も目にすることになった。ジンマーが僕の居候にあんなに長く我慢してくれたのも、もしかしたらこれが原因だったかもしれない。少なくとも話相手にはなったわけだし、つらい思いから気をそらす上では役に立ったのだ。変てこな、何が出てくるかわからない息抜きのギャグ。

それでもやはり、僕がジンマーの蓄えを食いつぶしていることは確かだった。それについてジンマーが何も言わなければ言わないほど、僕のほうはいっそう申し訳ない気持ちになっていった。僕としては、体力が十分回復したらすぐに仕事を探し（どんな仕事だっていい、とにかく働くのだ）、ジンマーが僕のために使った金を返済しはじめようと考えていた。住居の問題となるとまた話は別だが、とりあえずは、夜は僕が勉強部屋の床で寝るということでジンマーを納得させ、とにかく彼が自分のベッドで眠れるようにした。寝場所を交換して二、三日後に大学院の授業がはじまった。最初の週のある日、ジンマーは大きな紙束を抱えて帰ってきた。いかめしい顔で彼が告げたところによれば、知りあいの仏文科の女の子が急ぎの翻訳を引き受けたものの、時間がないことがわかり、それを聞いたジンマーが、自分にやらせてくれないかと持ちかけて、話がまとまったのである。かくして、ニューヨークのフランス領事館の組織再編成をめぐるおよそ百ページに及ぶ退屈きわまりない文書がアパートに出現したわけだ。これを聞いたとたん、絶好のチャンスが訪れたことを僕は悟った。フランス語なら僕だって君と同じくらい得意だぜ、と僕は切り出した。目下のところ、緊急に果たす

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

べき任を負ってるわけじゃなし、ここはひとつ僕に任せてくれないか？　ジンマーは案の定はじめは拒んだが、僕はそれでもしぶとく粘り、だんだんと彼の抵抗を崩していった。借りを返したいんだよ、と僕は言った。そのためには、この仕事ほど手っ取り早くて、現実的な手段もちょっとないと思うんだ。金——二百ドルだか三百ドルだかの約束だった——は君にそっくり渡す。それで貸し借りなしになるってわけさ。ここまで言うとジンマーも一応納得してくれた。ジンマーとしては殉教者の役柄を楽しんでいたわけだが、僕の心の安寧を左右する問題だとわかると、やっと折れて出た。

「そこまで言うんなら」とジンマーは言った。「金は折半ということにすればいいかな」

「そうじゃないよ」と僕は言った。「まだわかってないな、君は。金は全部君に行くんだよ。そうでなくちゃ、まるで無意味になってしまう。最後の一セントまで君のものにならなくちゃならん」

結局は僕の望みどおりに話は決まった。何か月ぶりかで、僕の人生にも目的があるんだという気持ちが湧いてきた。ジンマーが朝早くコロンビアに出かけたあとは、一日じゅう存分に仕事ができた。ジンマーの机にへばりついて、誰にも邪魔されずにひたすら働くのだ。訳すべき文書自体はひどくお粗末な代物で、ありとあらゆるたぐいの官僚的たわごとに満ちていた。でも、翻訳が厄介であればあるほど、僕はいっそう熱心に取り組んだ。不細工で筋の通らないセンテンスの彼方から、意味らしきものの光が見えてくるまで、絶対にあきらめなかった。仕事が困難だったことで、僕の士気はかえって高まったといっていい。もしこれが

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

楽な翻訳だったら、過去の過ちに対する相応の償いをしている気にはなれなかっただろう。むしろある意味では、内容的にはまったく無意味な仕事だったからこそ、そこに価値が生じたともいえる。これなら、鎖につながれて重労働の刑に服す人間のような気持ちになれる。僕の仕事はハンマーをふるって石を細かく砕くことであり、全部砕けたら、それをさらに細かく砕くこととなのだ。この労働に目的は存在しない。でも僕は、結果なんかに興味はなかった。労働それ自体が目的だった。模範囚の決意をもって、僕は我を忘れて仕事に没頭した。

天気がいい日には、頭をすっきりさせようと近所に散歩に出ることもあった。時は十月、ニューヨークでいちばん気持ちのいい月だ。初秋の光を眺めるのは楽しかった。煉瓦造りの建物に斜めに射す光がだんだんと澄みわたっていくさまを、僕は飽かずに眺めた。夏はもう終わっていたが、冬はまだずっと先である。暑さと寒さの絶妙なバランスが快かった。街じゅうどこへ行っても、メッツの話で持ちきりだった。誰もが同じことを話題にする、めったに起こらない瞬間がいま起こっていた。人々はトランジスターラジオを持ち歩いて野球中継に耳を澄ませ、電器店のウィンドウの前に群がって無音のテレビの画面を見守った。突然の喝采が、街角のバーや、アパートの窓や、見えない屋上から湧き起こった。まずアトランタでのプレーオフ、それからボルティモアでのワールドシリーズ。十月に戦った八試合のうち、メッツが敗れたのは一試合だけだった。すべてが終わると、ニューヨークでふたたびパレードが行なわれた。二か月前に宇宙飛行士たちのために開かれたパレードをもしのぐ、実に盛大なお祭りだった。その日一日で、五百トン以上の紙くずが街に捨てられた。この記録はい

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

まだに破られていない。

　僕はやがて、アビンドン・スクェアでよく昼食を食べるようになった。それはジンマーのアパートから一ブロック半東に行った小さな公園で、申し訳程度の子供の遊び場がついていた。自分が訳している報告書の生命なき言語と、僕のまわりをきゃあきゃあ叫びながら飛び回る子供たちのすさまじいエネルギーとの対照が、何とも愉快に思えた。その対照が精神集中に有益であることを発見して以来、僕は何度か仕事を持って出かけるようになり、とてつもない喧噪のなかで翻訳に取り組んだ。そして、十月なかばのそんな午後に、ようやくキティ・ウーに再会したのだった。いつにも増してごちゃごちゃ込み入った文章と格闘していたものだから、キティがベンチにやって来て隣に腰かけるまで、僕はまるで気がつかなかった。パーでジンマーに説教されて以来、キティに会うのはこれがはじめてだった。思わぬところで出くわしたせいで、僕はすっかり虚を突かれてしまった。それまでの何週間か、彼女に会ったらこう言おう、ああ言おう、と気のきいた文句をあれこれ頭のなかでこねくり回していたのに、本人が目の前に現われたいま、ろくに口もきけなかった。

「こんにちは、作家先生」とキティは言った。「元気になってよかったわね」

　キティはサングラスをかけて、唇には明るい赤の口紅を塗っていた。暗いレンズで目が見えないせいもあって、僕としては彼女の口に見とれてしまわないようにするのに一苦労だった。

「いや、作家ってわけじゃないんだ」と僕は言った。「翻訳なんだ。アルバイトだよ、要す

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

るに」

「知ってるわ。昨日デイビッドにばったり会って、話を聞いたわ」

だんだん緊張も解けて、僕は会話に没頭していった。キティには人をリラックスさせる才能があった。彼女に歩調を合わせるのは楽だった。一緒にいると、心が和んだ。ずっと前にビクター伯父さんも言っていたが、会話というのはキャッチボールのようなものである。上手なパートナーは、こっちが何もしないでもすっぽりグラブに収まる、取り落としようのないボールを投げてくる。受ける側に回れば、どんなに下手糞な、とんでもない球が飛んできても、難なくキャッチしてしまう。キティはまさにそんなパートナーだった。彼女が投げてくるゆるやかな球は、かならず僕のグラブの、まさしくボールを受ける部分にぴたっと収まった。そして僕の球を受ける段になると、ほとんど守備範囲内とは考えがたいボールまで、一球残らず捕ってくれた。頭上高く上がったライナーを見事なジャンプでとらえ、左右にそれた球も柔軟な身のこなしで難なくさばき、前方に落ちるボールは体をくるっと回転させてダイビングキャッチ。キティの球さばきがあんまり見事なものだから、何だかまるで、ゲームを面白くするために僕がわざと悪い球を投げたような気にさえなってくる。彼女といると、自分が実際よりいい人間に思えてきた。それで僕も自信が出てきて、彼女に投げる球もだんだんとましなものになっていった。別の言い方をすれば、僕は次第に、自分自身にではなく彼女に向かって話すようになっていった。そうやって話していると、本当に気持ちがよかった。こんなにいい気分は何か月ぶりかだった。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

十月の陽光を浴びてキティと話しながら、僕はどうやってこの会話を長引かせたものかと思案しはじめていた。こんなに盛り上がった、楽しいお喋りを終わらせてしまうのは惜しい。でもキティは大きなショルダーバッグを持っていて、その上からはダンスの用具があれこれはみ出している。レオタードの袖、トレーナーの襟、タオルの端。僕は心配になってきた。いまにも彼女は立ち上がって、次の用事に飛んでいってしまうのではないだろうか？　あたりはほんの少し肌寒くなってきた。ベンチでの話が二十分ばかり続いたあたりで、彼女がかすかに震えていることに僕は気がついた。僕は勇気を奮い起こし、寒くなってきたからジンマーのアパートに寄っていかないか、コーヒーを淹れるよ、と誘ってみた。奇跡的にも、キティはこっくりうなずき、いいわね、それ、と答えた。

僕はいそいそとコーヒーを淹れはじめた。リビングルームとキッチンはベッドルームで隔てられていたので、話が続けられるようにと、キティはリビングルームで僕を待つ代わりにベッドの隅に腰かけた。家のなかに入ったことで、会話のトーンは変化していた。二人とも、自分の新しい科白の意味を考えながら喋っているみたいに、大人しく、ためらいがちになっていた。何かを待っているような、不思議な気分が漂っていた。僕はにわかにとまどってしまった。そのとまどいを隠すのにコーヒーを淹れる仕事があるのはありがたかった。何かが起ころうとしていたが、それについてきちんと考えるのは怖かった。変に期待してしまったら、起こるはずのことも起こらなくなってしまうんじゃないか、そんな気がしたのだ。やがて、キティがひどく静かになった。彼女は二十秒か三十秒くらい、何も言わなかった。僕は

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

相変わらずキッチンを動き回り、冷蔵庫のドアを開けたり閉めたり、カップやスプーンを取り出したり、ミルクをピッチャーに注いだりしていた。ほんの一瞬、僕が背中を向けた瞬間、気がつくとキティはベッドを離れてキッチンに入ってきていた。そして何も言わずにうしろにすっと寄ってきて、僕の腰に両腕を回し、頭を僕の背中に寄りかからせた。

「誰だろう？」と僕はわざとらしく言った。

「龍女よ」とキティは言った。「あなたをつかまえに来たのよ」

僕は彼女の両手を握った。震えないようにと努めながら、その肌の滑らかさを感じていた。

「もうつかまっちゃったみたいだよ」と僕は言った。

一呼吸間があった。やがてキティは、僕の腰に回した腕をぎゅっと締めた。「ねえ、私のこと、少しは好きでしょう？」

「少し以上さ。わかってるだろう。少しどころじゃないよ」

「私には何もわからないわ。あんまり長いこと待っていたから、もう何もわからなくなっちゃったわ」

何もかもが想像のなかの出来事のように思えた。現実とわかってはいても、そう思うには素晴らしすぎるのだ。まるで僕の願望がそのまま外界に投影されたような感じだった。僕の欲求はとても強かった。自分ではどうしようもないくらい強かった。でもキティのおかげで、その欲求が形をとる道がはじめて与えられたのだ。彼女の反応がすべてを決めてくれた。そのしぐさ一つひとつにこまやかな励ましや確固たる自信が表われていて、ぎくしゃくしたと

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ころは微塵もなかった。キティは自分を怖がっていなかった。自分の体について恥じたり、思い悩んだりすることもなく、体のなかで生きていた。ダンスをしているからそうなったといえるかもしれないが、むしろ逆だろう。自分の肉体を楽しめるからこそ、踊ることも可能になるのだ。

アパートのなかの、翳りゆく午後の光に包まれて、僕たちは何時間も愛しあった。それは間違いなく、僕の身に起きたもっとも素晴らしい出来事のひとつだった。いまにして思えば、僕という人間はそれによって根本的に変わったと思う。単にセックスとか欲望の交わしあいとかいうだけの話ではない。内なる壁の劇的な崩壊、ある孤独の深奥で起きた地震、そういうことを僕は言っているのだ。一人でいることに慣れきってしまっていたものだから、こんなことが自分に起きうるなんて、まるで思ってもいなかった。独りぼっちの身の上を、一種の諦念をもって受け入れていた僕の前に、理由もまったく謎のまま、美しい中国人の女の子が、あたかも別世界から来た天使のように降り立ったのだ。彼女に恋をしないことなんて不可能だった。ただ単に彼女がそこにいるという事実に酔いしれないことなんて不可能だった。

それからというもの、僕の毎日は忙しくなった。朝から夕方まで翻訳に励み、それからキティに会いに、たいていはアップタウンのコロンビア＝ジュリアード近辺に出かけていった。難があるとしたら、それは、二人きりになるチャンスがあまりないことだった。キティは寮

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

暮らしでルームメートがいたし、ジンマーのアパートにもリビングルームとベッドルームをさえぎるドアはなかった。もっとも、かりにドアがあったとしても、キティを連れて帰るのは論外だっただろう。ジンマーの恋の現状を考えると、僕らが愛しあう音、うめき声やため息を、隣の部屋で勉強している彼に聞かせるなんて、とてもできなかったと思う。一度か二度、キティのルームメートが晩に外出したことがあって、そんなとき僕らはキティの狭いベッドを目いっぱい活用した。そのほかにも何度か、誰もいないアパートでひそかに会ったりもした。キティが友だちや友だちの友だちに声をかけて、空いているベッドルームを何時間か使わせてくれるよう交渉して回ったのだ。何かと苛々させられるやり方だったが、その反面スリリングでもあり、おかげで僕らの情熱には危険とサスペンスの要素が加わることになった。いまから考えると信じられないような真似もいろいろやった。一歩間違えばすごく恥ずかしいトラブルにつながりかねないリスクも平気で冒した。エレベーターを階と階のあいだで止めてしまったこともある。かんかんに怒った住人たちが怒鳴ったりドアを叩いたりしているのをよそに、僕はキティのジーンズとパンティを引き下ろし、舌で彼女をオーガズムに導いた。誰かの家のパーティーで、バスルームの床でことに及んだこともある。ドアには鍵をかけ、廊下に並んでトイレの順番を待っている人々のことなどまるでお構いなしだった。それはエロスの神秘主義だった。信者が二人きりに限定された秘密の宗教だった。恋愛がはじまって間もないこの時期、僕らが欲情するにはたがいの姿を目にするだけで十分だった。キティがそばに来た瞬間に、僕はセックスのことを考えはじめた。彼女に手を触れずにはい

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

られなかった。彼女の体を知れば知るほど、ますます触れたくなった。ダンスのリハーサルが済んでほかの連中が帰ったあと、更衣室で愛しあったこともある。キティは翌月に舞台に上がることになっていて、夕方のリハーサルには僕もなるべく顔を出すようにしていた。キティが踊るのを見るのは、彼女を抱くことの次に楽しかった。ステージの上を動き回る彼女の体を、幻覚でも見ているような思いで、一心不乱に目で追うのだ。すごく気持ちがよかった。でも同時に、訳がわからないという気もした。ダンスとは僕にとってまったく異質な何かだった。それは言葉で把握できる域の外にあった。僕はただ黙ってじっと座り、純粋な動きのスペクタクルに没入するしかなかった。

翻訳は十月の末に完成した。その数日後、ジンマーが友人からしかるべく金を受け取った日の晩、僕らは三人でムーン・パレスへ食事に出かけた。ムーン・パレスを選んだのは僕だった。食事の質というより、その象徴的価値を重んじて選んだのである。でもそれは実に美味しい食事だった。キティが中国語でウェイターと話せたので、メニューにない品をいろいろ注文してくれたからだ。その夜はジンマーも上機嫌で、トロツキーや毛沢東や永久革命理論について滔々と述べ立てた。やがてある時点で、けだるそうな、美しい笑みを浮かべながら、キティが僕の肩に頭を載せたことを覚えている。僕らは一緒に長椅子の背もたれに寄りかかり、一人喋りつづけているジンマーが人間存在のジレンマを解決してみせるのを聞きながら、ひたすらうんうんとうなずいていた。それは僕にとって至上の時間だった。信じがたいほどの歓喜と平穏の瞬間だった。まるで僕が生者の世界に帰ってきたのを祝うために友が

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

集まってくれたような気分だった。皿が下げられると、僕らはみんなで占いクッキーを開け、大真面目にその文句を分析しあった。不思議なことに、自分のクッキーに入っていた占いの言葉を、いまもそれが手のなかにあるように僕ははっきり思い出すことができる。そこにはこう書いてあった。「太陽は過去であり、地球は現在であり、月は未来である」。ずっとあとになって、僕はこの言葉にもう一度出会うことになる。そしてそのとき僕はこう思うことになる。かつて自分がムーン・パレスで偶然それに出会ったという事実には、不可思議な、予兆のような真理がひそんでいたのだと。その晩、なぜそんなことをするのか考えもせずに、僕は占いの紙切れを財布にしまった。そしてその後九か月にわたって、そんなものを持っていることを忘れてしまったあともずっと持ち歩いていた。

翌日の朝に、僕は職探しを開始した。その日は何の成果もなく、翌日も同じだった。新聞に頼っていても埒があかないと悟って、大学の学生課に行ってみることにした。コロンビアの学生は学生課のアルバイト斡旋を受ける権利があり、しかも学生課なら仕事が見つかっても手数料は取られない。何はともあれ当たってみる価値はある。ダッジ・ホールに入って十分後、わが問題に対する解答が、求人掲示板の左下隅に貼られた小さなカードにタイプされているのを僕は目にした。仕事の内容はこう書かれていた。「車椅子の高齢男性、住込みの若い男性を求む。毎日の散歩、事務的な軽作業。週五十ドル、三食個室付」。決め手は最後の一言だった。これなら金を稼げる上に、やっとジンマーのアパートを出ることもできる。さらに好都合なことに、住所はウェストエンド・アヴェニュー八十四丁目、キティの寮にもい

まよりずっと近くなる。まさに願ってもない話だ。まあ仕事自体は、故郷に知らせるというほどのものじゃない。でも僕には、そもそも知らせるべき故郷もありはしないのだ。

誰かに先を越されてしまっては大変と、僕はその場で面接を申し込んだ。二時間も経たないうちに、僕は雇用主候補のマンションのリビングルームで、当の雇用主候補と向きあっていた。その日の夜八時、彼はジンマーのアパートに電話をかけてきて、君にお願いすることにした、と知らせてきた。その言い方からすると、どうやらほかにも有望な候補者がたくさんいて、苦労して選考した末にようやく僕に決めたという感じだった。長い目で見れば結局は同じことだっただろうが、そのとき彼が嘘をついていることがわかっていたら、この先自分がどんな目に遭うことになるか、前もって少しは見当がついたんじゃないかと思う。実のところ、候補者なんてほかに一人もいなかったのだ。応募してきたのは僕一人だったのである。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

4

トマス・エフィングを一目見てまず感じたのは、こんなに弱々しい人間を目にするのははじめてだという思いだった。かすかに震える皮膚が骨に貼りついただけと見える老人が、チェックの模様の入った毛布にくるまって車椅子に座っていた。骨の折れたちっぽけな鳥みたいに、体が一方に傾いでいる。八十六歳ということだったが、もっと歳とって見えた。そんなはずはないと思っても、百歳か、それ以上に見えてしまう。数えることを超越した年齢という風情である。老人のすべてが、壁のなかに閉ざされていた。何もかもがはるか遠くにあり、スフィンクスのように不可知だった。節くれだった、しみだらけの手が肱掛けをぎゅっとつかみ、ときおりぴくっと動いた。でもそれ以外には、意識ある生命の徴候は何ひとつなかった。視線を通して彼と触れあうのも不可能だった。なぜならエフィングは盲目だったからだ。あるいは、少なくとも盲目を装っていた。面接を受けに家に行った日にも、黒いパッチを二つ、目にかぶせていた。こういう出だしをふり返ってみると、その日が十一月一日だったことが何ともふさわしく思えてくる。十一月一日、死者の日。知られざる聖者や殉教者

を放棄する日、

マンションのドアを開けてくれたのは、ぱっとしない風采の、ずんぐりした、はっきりと齢は察しかねる中年女性だった。ピンクとグリーンの花模様がついた、たっぷりふくらんだスモックを着ている。僕が約束どおり午後一時の面接を受けにきた人物であることがはっきりすると、彼女は片手を差し出し、私はリタ・ヒューム、九年前からミスター・エフィングの看護婦兼家政婦をしています、と言った。そう自己紹介しながらも僕のことをじろじろ眺め回し、通信販売で買った夫をはじめて目にする女性、という感じで好奇心もあらわに吟味するのだった。でもその臆面もないまなざしには、何かしら率直な、人のよさそうなところがあって、僕としてもべつに不快ではなかった。ミセス・ヒュームを嫌うのは難しいことだっただろう。ぽっちゃりとした丸顔、がっしり逞しい肩。セメント製かと見まごう巨大な胸。これだけの大荷物を、のっしのっしと大股で運び歩いている。うしろにくっついて廊下をリビングルームに向かって歩いていくと、彼女の鼻息が聞こえてきた。

そこはウェストサイドによくある巨大なマンションだった。廊下は長く、部屋と部屋は樫の引き戸で仕切られ、壁には凝った刳形がある。その場全体に、ビクトリア朝ふうの、濃密で雑然たる雰囲気が漂っていた。自分のまわりに突如現われた事物の氾濫に、僕はしばし圧倒されていた。書物、絵画、小さなテーブル、乱雑にたたんだカーペットの山、ごっちゃに集められた家具。廊下を半分くらい行ったところで、ミセス・ヒュームは僕の腕をつかみ、小声で耳打ちした。「少し変わり者に見えるかもしれないけど、気にしないのよ」と彼女は

言った。「よく興奮するたちなのよ、でも何でもないの。ここ何週間か、つらい思いをしていたのよ。三十年仕えてくれた人を九月に亡くして、その人なしの暮らしに慣れるのに大変だったの」

この人は味方だ、と僕は思った。いまからどんな奇妙なことが起きるにせよ、そう思うと心強かった。リビングルームは途方もなく広かった。窓からはハドソン川と、その向こうのニュージャージーの岸壁が見えた。エフィングは部屋の真ん中に置かれた車椅子に座って、低いテーブルをはさんだ向こうのソファの方を向いていた。僕が抱いた第一印象もたぶん、僕たちが部屋に入ってきても彼が何の反応も示さなかったことがきっかけで生じたのだろう。「ミスター・M・S・フォッグが面接においでになりました」とミセス・ヒュームが告げても、何も答えず、筋肉ひとつ動かさなかった。超自然的な生命感の欠如といってよかった。一瞬僕は、この人は死んでるんじゃないか、と思った。でもミセス・ヒュームは何ごともないみたいに僕に笑顔を見せ、ソファに腰かけるよう手で合図した。彼女が部屋から出ていって、エフィングと二人きりになった僕は、相手が沈黙を破るのを待った。

長い時間、何の音もしなかった。だが、ようやく出てきたエフィングの声は、驚くべき力強さで部屋を満たした。この体からこんな音が出てくるなんて、とても信じられなかった。耳ざわりに轟きわたる言葉が、激しく荒々しい活力とともに気管から飛び出してくるのだ。まるで、ラジオのスイッチを入れたとたん、夜中にときどき聞こえる遠くの放送局が突如鳴り響いてきたという感じである。思ってもみなかった事態だ。あたかも電子の神経細胞の

連接部が、たまたま千マイルの彼方からこの声を運んできたかのように思えた。そのあまりの明瞭さに、僕はただ唖然とするばかりだった。一瞬、部屋のどこかに腹話術師が隠れているんじゃないか、とまで思ったくらいである。

「エメット・フォッグ」と老人は軽蔑をこめて吐き捨てるように言った。「何て女々しい名前だ」

「M・S・フォッグです」と僕は答えた。「Mはマーコの略、Sはスタンリーの略です」

「同じようなもんだ。いや、むしろもっと悪い。君、その名前をどうするつもりだね？」

「どうするつもりもありません。いろいろ苦労を共にしてきた名前ですから、愛着もありますし」

エフィングはふんと鼻を鳴らして笑った。それっきり話題を切り捨ててしまうような、意地悪な感じの笑い方だった。と、息をつく間もなく、エフィングが車椅子の上ですっと身を起こした。驚いたことに、その外見は一変した。エフィングはもはや、黄昏どきの物思いに沈む昏睡状態の半死体ではなかった。いまやその体は筋肉のかたまりとなり、全身に集中力があふれていた。よみがえった力をみなぎらせた、きわめてコンパクトな肉体がそこにあった。やがてわかったことだが、こっちのほうが本物のエフィングだった。もっともそれも、この人物について「本物」という言葉を使えるとしての話である。エフィングという人物の、あまりに多くの部分が嘘とごまかしを土台に築かれていたので、彼が真実を語っているかどうか判断を下すのは至難の業だった。思いつきの実験やアイデアで世界をだますことをエフ

CamScannerでスキャン

イングは愛した。そして、レパートリーに持つ無数のペテンのなかでも、死んだふりをするのが何より好みだったのである。

面接が本格的にはじまることを告げるかのように、エフィングは椅子の上で身を乗り出した。両目にパッチをつけているにもかかわらず、そのまなざしはまっすぐ僕に向けられていた。「教えてくれ、ミスター・フォッグ」と彼は言った。「君は物事を見通す力というものがある人間か？」

「以前はそう思っていました。でもいまは確信がありません」

「目の前に何か物を見たら、それが何だかお前にはわかるか？」

「たいていの場合はわかります。でも難しいこともあります」

「たとえば」

「たとえば、街で見かける人間が男かなかなかよくわからないことがあります。最近は長髪の人間が多いですから、ちらっと一目見ただけでははっきりしません。相手が女っぽい男だったり、男っぽい女だったりするとなおさらです。手がかりを見ても、かえって余計に混乱してしまうこともあります」

「では、わしを見て、どんな言葉が浮かんでくる？」

「車椅子に座った老人が見える、ですね」

「老人？」

「ええ、老人です」

「相当な老人か？」
「ええ、相当な老人です」
「何か目立った特徴は？」
「目につけたパッチ、でしょうね。それと、両脚が麻痺（まひ）しているらしいという点」
「そう、病める老体だ。ちょっと見ただけで、目に飛び込んでくるだろう？」
「まあ、そうも言えます」
「パッチについて、何か結論に達したかね？」
「確かなことはまだ何も。まず思ったのはあなたが盲目だということですが、それは筋が通りません。目の見えない人間が、絶対に見えないようにわざわざダメを押す必要はありませんからね。そこで新たな可能性が浮かび上がってきます。ひょっとしたらパッチの向こうには、盲目より悪いものが隠されているのかもしれない。たとえば醜い傷跡とか。あるいは、手術を受けたばかりで、医学上の理由からパッチをつけさせられているとも考えられる。あるいはまた、視力が完全にゼロではなくて、強い光を浴びると目が痛むのかもしれません。さらには、ただ単にパッチをつけたくてつけているのかもしれない。パッチが魅力的だと思っているのかもしれない。まだまだいくらでも考えられます。現時点では、どれが正解か決めるには情報が足りません。つきつめていえば、確かなのは、あなたが両目にパッチをつけているということだけです。パッチがそこにある、とは断言できる。でもなぜそこにあるのかはわかりません」

「いいかえれば、君は何ごとも、うわべどおりには受け取らない」

「そうするのは危険な場合がありますからね。物事はしばしば見かけとは違っているものです。早合点をすると、厄介なことになりかねません」

「では、わしの脚は？」

「その問いのほうがいくらか単純そうですね。毛布の下の様子からして、あなたの脚は衰えて縮んでしまっているようです。ということはたぶん、あなたはもう何年も脚を使っていない。だとすれば、あなたが歩けないと仮定しても大丈夫そうです。もしかしたら生まれつき歩けないのかもしれない」

「見ることも歩くこともできない老人。それについてどう思うかね？」

「そういう人間は、本人が望む以上に他人に頼らざるをえない、ということでしょうね」

エフィングはふむ、と喉を鳴らし、車椅子の背にもたれかかって、それから顔を上げて天井を仰いだ。十秒か十五秒のあいだ、二人とも黙っていた。

「君はどんな声をしているかね？」とエフィングはようやく言った。

「わかりませんね。喋っている最中に自分では聞けませんから。テープレコーダーに録音したのを何回か聞かされたことがありますが、ひどい声だと思いました。でもどうやらみんなそう思うみたいです」

「長もちはするか？」

「長もち？」

「ぶっ続けで喋れるかってことだ。二時間も三時間も、声を嗄らさずに喋っていられるかね。そこに座って、午後のあいだずっとわしに朗読を聞かせて、それでもまだ口から言葉を出せるかね。長もちするかというのはそういうことだ」
「できると思います、できます」
「君自身も言ったように、わしは視力を失っている。君との関係は言葉で成り立つことになる。だから、声が長もちしなけりゃ、君はわしにとって何の値打ちもない」
「わかります」
エフィングはふたたび身を乗り出して、わざとらしく間を置いた。「君はわしのことが怖いか？」
「いいえ、べつに」
「怖がるべきだ。もしわしに雇われたら、君は恐怖の何たるかを学ぶはずだ、保証してもいい。見ることも歩くこともできないかもしれんが、わしには別の力があるんだ。ほんの一握りの人間しか身につけていない力がな」
「どんな力です？」
「精神的な力だよ。物理的世界を、思った通りに曲げる意志の力だ」
「念力ですか」
「さよう、お望みならそう言ってもいい。念力。君、何年か前の大停電は覚えておるか？」
「一九六五年の秋」

「その通り。あれはわしが起こしたんだ。視力をなくしたばかりのころだった。ある日、この部屋に一人で座って、運命の仕打ちを呪っておったんだ。五時ごろになって、わしは胸のうちでこう言った。世界じゅうがわしと同じ闇のなかで生きる破目になっちまえばいい、とな。すると、一時間もしないうちに、ニューヨークじゅうの電気が消えてしまったんだ」

「偶然ということもありえます」

「偶然なんてものはありゃしない。そんな言葉を使うのは無知な人間だけだ。この世界のものはすべて、生物も無生物も、電気でできている。思考だって電荷を放出するんだ。その電荷が十分強ければ、人間の思考はまわりの世界を変えることができるのさ。これは忘れちゃいかんぞ」

「忘れません」

「で、君はどうなんだ。マーコ・スタンリー・フォッグよ、君はどんな力を持っておるのかね？」

「特に思いつきませんね。人間としてのノーマルな能力は一応あると思いますが、それ以上のものはありません。食べたり眠ったりはできます。ある場所から別の場所へ歩いてもいけます。痛みを感じることもできます。たまには、考えることだってできます」

「煽動者か。君は世間をそそのかす煽動者なのか？」

「全然違います。他人をけしかけて何かさせるなんて、相手が誰であれ、何についてであれ、できやしません」

「では、犠牲者だ。どちらか一方でしかないからな。人間、自分で何かするか、人にされるかのどっちかだ」

「我々はみんな何かの犠牲者です、ミスター・エフィング。かりにその何かというのが、我々が生きているという事実でしかないとしても」

「君は自分が生きていると確信できるのかね？　自分でそう想像しているだけじゃないのか？」

「何であれ、絶対に不可能ということはないですからね。あなたも僕も、虚構の産物かもしれない。本当は我々はここにいないのかもしれない。おっしゃる通りです、その可能性も受け入れますよ」

「君は口をつぐむすべを知っているか？」

「必要とあらば、隣の人間と同じくらい黙っていられるつもりですが」

「で、その人間とは誰のことだ？」

「誰でもいいんです。単なる言葉の綾です。とにかく僕は、状況に応じて、喋ることも黙っていることもできます」

「いいかフォッグ、わしに雇われたら、君はたぶんわしを憎むようになるだろう。だが覚えておけよ、それもみんな君のためなんだ。わしがやることにはすべて隠れた目的がある。そしてそれは君が口を出すべき事柄ではない」

「覚えておくようにします」

「よろしい。ではこっちへ来て、君の筋肉を触らせてくれ。ひょろひょろの弱虫に街なかを押されるのはかなわんからな。筋肉が一人前に働かなけりゃ、君はわしにとって何の値打ちもない」

僕はその夜ジンマーに別れを告げ、翌朝、わずかな荷物をナップサックに詰めて、エフィングのマンションめざしてアップタウンに向かった。結局僕はその後十三年ジンマーに会わなかった。いろんな状況が僕たちを引き離してしまったのだ。ようやく一九八二年の春に、マンハッタン南のバリック・ストリートとウェスト・ブロードウェイの交差点でばったり出くわしたときには、ジンマーはもうすっかり変わってしまっていて、はじめは彼だとわからなかったくらいだ。以前より十キロか十五キロは太っていて、妻と二人の小さな子供と一緒に歩く姿は、まさに絵に描いたような中年男だった。中年に入った時期特有の、太鼓腹と、薄くなりかけた髪。いろんな苦労を重ねてきたよき父親の、穏やかで、どこかぼんやりしたような表情。我々はそれぞれ反対の方向から歩いてきて、たがいにすれ違った。と、突然、彼が僕の名前を呼ぶのが聞こえたのだ。むろん、過去に知っていた人間にばったり出くわすことは、決して珍しい出来事ではない。でも、そうやってジンマーに会ったことで、忘れていた世界が僕のなかでどっと一気によみがえってきた。ある意味では、ジンマーがその後何をしていたかはほとんど問題でなかった。彼はカリフォルニアのどこかの大学で教えていて、

フランス映画に関する四百ページの著書があり、もう十年以上詩を書いていなかった。でもそれはどうでもいいことだった。大事なのは、とにかく僕がジンマーに会ったということなのだ。僕らは街角に立って、十五分か二十分のあいだ昔のことを話しあった。やがて、ジンマー一家は、どこへであれその行き先に向かって、そそくさと歩き去っていった。それ以来僕は一度も彼に会っていないし、連絡も受けていない。でも、そもそもこの本を書くというアイデアが生まれたのも、そうやって四年前に再会したのちに、ジンマーが街なかに消えていき、僕がふたたび彼の姿を見失った、まさにあの瞬間ではなかったかと思う。

エフィングのマンションに着くと、ミセス・ヒュームが僕をキッチンに座らせて、コーヒーを出してくれた。ミスター・エフィングは朝の仮眠中です、十時までは起きていらっしゃいません、とミセス・ヒュームは言った。そこで僕はまず彼女から、仕事の具体的内容や、食事は何時かとか、毎日どのくらいの時間をエフィングと過ごすことになるのかといった説明を受けた。「体の仕事」は私の領分です、とミセス・ヒュームは言った。服を着せる、体を洗う、ベッドからの出入りを手伝う、髭を剃る、トイレの手助け、等々。これに対し、僕の仕事はもう少し複雑で、定義も曖昧である。彼の友となるべく雇われた、というのとは少し違うが、まあかなりそれに近い。きちんと聞く耳を持った話相手、孤独の単調さを紛らすべき人間、というところだ。「どのみち、先行き長いわけじゃないでしょうからね」とミセス・ヒュームは言った。「せめて私たちで、最後の日々があんまり惨めにならないようにしてあげなくちゃ」。わかります、と僕は答えた。

「若い人がそばにいれば、あの人も元気が出るでしょうしね」と彼女は続けた。「もちろん私の元気だって出るし」

「とにかくこの仕事につけて嬉しいです」と僕は言った。

「あの人も昨日の会話を楽しまれたようよ。あなたの答えが気に入ったと言ってたわ」

「実を言うと、どう答えていいかよくわからなかったんですけどね。ときどき話についていけなくなります」

「それは私も経験済みよ。でもとにかく、あの脳味噌のなかは、いつも何かぐつぐつ煮えてるのよ。たしかに、ちょっとおかしいところはある人です。でも、決してボケちゃいないわ」

「ええ、実に鋭い人ですね。気が抜けそうにありません」

「あなたの声も快いって言ってたわ。少なくとも幸先はよさそうね」

「あの人が快いという言葉を使うなんて、ちょっと想像がつかないな」

「厳密には違う言葉だったかもしれないけど、とにかくそういうようなことを言ったのよ。昔知っていた人間のことを思い出す声だって」

「嫌いだった人のことじゃないといいけど」

「その点は何とも言わなかったわ。いずれわかるでしょうけど、ミスター・トマスっていう人はね、自分が言いたくないことは絶対に言わない人なのよ」

僕の部屋は長い廊下のいちばん奥にあった。裏庭に面した窓が一つあるだけの殺風景な部

い部屋で、修道僧の独房もかくやという感じだった。僕にとっては勝手知ったるたぐいの空間である。部屋になじむのにさして時間はかからなかった。家具も最低限しかなく、四隅に棒が垂直につき出た古めかしい鉄製ベッド、洋服ダンスが一つ、そして主にフランス語とロシア語の本を収めた本棚、それだけだった。一枚だけ絵が掛かっていた。ニスを塗った黒の額縁に入った大きなエッチングで、いろんな人間の姿や、細部までびっしり描き込んだ建物でひしめきあった、神話の一シーンという趣の絵だった。あとになって僕は、それがトマス・コールによる、新世界の勃興から没落までを幻視した連作『帝国の興亡』の一枚を白黒模写したものだということを知った。ナップサックから服を出して、持ち物をタンスの引き出しに入れてみると、一番上の引き出しに楽々収まってしまった。本も一冊しか持ってきていなかった。ジンマーが餞別にくれた、パスカルの『パンセ』のペーパーバックである。それをひとまず枕の上に置き、一歩身を引いて、新しいわが部屋をとくと眺めてみた。まあ大した部屋ではない。でもとにかく、ここは僕の部屋なのだ。何か月も宙ぶらりんの暮らしを続けたあとに、そうやって四つの壁の内側に立って、自分の場所と呼べるところがやっとできたんだと思うと、それだけで心が和んだ。

住み込んで最初の二日間は、ずっと雨続きだった。午後の散歩に出かけるわけにもいかないので、我々は一日じゅうリビングルームにいた。エフィングは面接のときほど攻撃的ではなかった。だいたいは黙って座って、僕の朗読に耳を傾けていた。この沈黙がいかなる性質のものなのか、何とも見当がつきかねた。何か予想もつかないようなやり方で僕をテストし

CamScannerでスキャン

ているのだろうか。それとも、ただ単に黙っていたい気分なのだろうか。このときもそうだが、マンションに住み込んでいたあいだじゅう、僕は何度も、エフィングの行動の意味を測りあぐねたものだ。そこに暗い目的を読み込むべきか、あるいは単にその場の衝動の産物と解すべきか。彼が僕に言った言葉、朗読用に指定した書物、僕を使いに出した奇妙な用件。これはみんな、手の込んだ秘密のプランの一部だったのだろうか？　それとも、あとからふり返ってみるとそう見えるというだけの話なんだろうか？　ときおり、ひょっとしてこの人は僕に何か不可解で神秘的な知識を授けようとしているんだろうか、と思えることもあった。僕の人格陶冶の師範役をひそかに買って出て、だが僕にはそれを知らせず、ルールを伝えることなくゲームを強いているのだろうか、と。変わり種の導師としてのエフィング。僕を世界の神秘へ招き入れようと腐心する、エキセントリックな先達。けれどもその反面、とんでもない身勝手と傲慢が前面に出てくるときなど、ただの意地悪爺さんとしか思えないことも多かった。狂気と死の境界に生きる、燃えつきた癇癪男エフィング。僕に浴びせる罵倒の文句たるや、実にすさまじいものだった。たしかに一方では彼に惹かれる気持ちも強まったものの、また一方では、もうこんな奴はうんざりだと思うようになっていった。仕事を辞めてしまおうと思ったことも何回かあったが、そのたびにキティに説得された。長期的には、僕自身も本気で辞めたいとは思っていなかったと思う。でも瞬間的には、もうあと一分だって我慢するもんかという気になったのも一度や二度ではなかった。エフィングの方に目を向けることさえおぞましく思える気分が何週間も続いたりした。そんなときは単に彼と同じ部屋

にいるためにも、懸命に自分を抑えつけていなくてはならなかった。でもとにかく僕は辞めなかった。僕は最後までやり抜いた。

どんなに穏やかな気分のときでも、エフィングは何かにつけて人を驚かせるのを好んだ。たとえば一日目の朝、車椅子で部屋に入ってきた彼は、盲人用の黒眼鏡をかけていた。前日の面接であれだけ話題になった黒いアイパッチは影も形もなかった。この変化に関して、エフィングは何も説明しなかった。それで僕も、どうやらこれは余計な口を出すなということだなと見当をつけて、やはり何も言わなかった。翌朝、今度はエフィングは普通の眼鏡をかけて現われた。よくあるメタルフレームの眼鏡で、レンズはおそろしく厚い。レンズの向こうの目は拡大され歪められ、鳥の卵みたいに大きく見えた。青い球体が、いまにも頭部から飛び出しそうにふくれ上がっている。その目に物が見えているのかどうかは、よくわからなかった。これはみんなはったりなんだ、こいつは僕とまったく同じにちゃんと何もかも見えているんだ、そう思えるときもあれば、いや、この人は完全に盲目なんだ、という確信が同じくらい強く訪れることもあった。もちろんそれこそまさにエフィングの魂胆だった。意図的に曖昧な信号を発し、黒とも白ともつかない状況を作り出して、一人悦に入っていたのだ。いかなる場合にも、事実はどうなのか、絶対に明かしてくれなかった。日によっては、パッチもつけず眼鏡もかけず、目をさらして出てくることもあった。またある日には、まるで銃殺直前の囚人みたいに、頭に黒い目隠しを巻きつけて現われた。こうしたさまざまなコスチュームが何を意味するのか、僕にはまったくの謎だった。向こうは一言も言ってくれないし、

こっちにも訊ねるだけの度胸はない。要はカッカしたら負けということだ、と僕は考えた。勝手に何だってやるがいい。こっちが平静を保ってさえいれば、あちらがいくら奇妙な手に出てこようと関係ないさ、そう自分に言い聞かせた。でも、そうやって腹を決めても、防御が揺らいでしまうこともやはりあった。特に、エフィングが目に何もつけていない日は厄介だった。自分でも知らないうちに、その目にしみじみ見とれてしまうこともしばしばだった。それは見ずにいられない目だった。人を惹きつけてやまない、魔力のようなものが備わっていた。あたかも自分が、その目のなかに何かの真理を探し求めているような気がした。エフィングの頭蓋の暗闇に直接通じた入口、そんなものを見出そうとしているような気分だった。でも何の成果も上がらなかった。僕はエフィングの目を何百時間も凝視した。にもかかわらず、その目は何も語ってくれなかった。

朗読用の本は前もって全部選んであった。自分が何を聞きたいか、エフィングはすべて心得ていた。この朗読は娯楽というよりもひとつの探求だった。きっちり限定された、狭い分野内の主題を、執拗に掘り下げていく営みだった。それがわかったからといって、彼がそれらの本を選んだ動機がいっこうに見えてこないことに変わりはなかったが、少なくとも、隠れた論理が全体を貫いていることは確信できた。まず最初に指定された書物群は、旅の問題を扱った本、それもたいていの場合、前人未到の領域を探検する話や、新たな世界を発見する話だった。聖ブレンダヌスとサー・ジョン・マンデビルの旅行記を皮切りに、我々はコロンブス、カベサ・デ・バカ、トマス・ハリオットと読み進んだ。ダウティの『アラビア砂漠

の旅』の抜粋を読み、コロラド川流域の地図を製作したジョン・ウェズリー・パウェルの探検記を読破した。そして締めくくりには、十八、十九世紀にインディアンにさらわれた白人移住者が書いた捕囚体験談を数篇読んだ。僕にとってはどの本も一様に面白かった。長時間読みつづけることに喉が慣れてからは、朗読にもそれなりのスタイルが加わっていったように思う。何より大事なのは一語一語を明確に発音することであり、そうするためには、適切な抑揚を保ち、細かく間を取り、ページの上の言葉に終始一定の注意を払うことが肝要だった。僕が朗読しているあいだ、エフィングはめったにコメントしなかったが、特に込み入った一節や、とりわけ面白い箇所などに来ると、聞きながら何か低い音を立てていることからして、じっくり耳を傾けているのは間違いなかった。たぶんこの朗読の時間が、彼といちばん一体感を持つことができた時間じゃないかと思う。でも僕はじきに、その無言の集中を、好意と混同してはならないことを思い知らされた。旅の本を三冊か四冊読んだあたりで、僕は何げなく、シラノの月旅行の話なんかも面白いんじゃないでしょうかね、と言ってみた。返ってきたのは、つっけんどんな答えだけだった。「余計な口を出すんじゃない」とエフィングはだみ声で言った。「お前の意見が必要になったら、わしのほうから訊く」

リビングルームの奥の壁には、床から天井まで本棚が据えつけられていた。いくつもの棚にいったい何冊の本があるのか、確かなことはわからなかったが、控え目に見積もっても五、六百冊はあったと思うし、ひょっとすると千冊くらいあったかもしれない。どこにどの本があるのか、エフィングはすべて把握しているように思えた。新しい本を読みはじめる段にな

ると、どこからそれを取ってきたらいいかを、きっちり正確に指定するのだ。「二番目の棚、左から数えて十二冊目から十五冊目のあいだ。ルイス・アンド・クラークだ。布表紙の赤い本」。間違っていたことは一度もなかった。驚異的な記憶力の証拠が積み重なっていくとともに、僕は感銘を覚えずにいられなかった。あんまり感心したので、キケロやライムンドゥス・ルルスの記憶術に通じていらっしゃるんですか、と訊いてみたこともある。だがエフィングは、僕の質問を払いのけるように片手を振るだけだった。「こういうのは勉強したって駄目だ」とエフィングは言った。「生まれつきの才能の問題だよ」。そして一息間を置いてから、秘密めかした、からかうような口調で続けた。「だが、どうして確信できるのかね、わしが本のありかを知っていると？　考えてもみたまえ。もしかしたら、わしは夜中にここに忍び込んで、君が眠っているあいだに本を並べ替えているかもしれんじゃないか。あるいは、君が背を向けている最中に、テレパシーで本を動かしておるかもしれない。そうとは考えられんかね、え？」。本気で返答を求められているとは思わなかったので、僕もあえて反駁しなかった。「いいかフォッグ、覚えておけよ」とエフィングはさらに言った。「何ごとも鵜呑みにするんじゃないぞ。特にわしみたいな奴を相手にしているときはな」

十一月の冷たい雨が窓を打つなか、我々は最初の二日間をリビングルームで過ごした。家のなかはひどく静かだった。朗読の息継ぎに言葉を切ったときなど、聞こえるいちばん大きな音が、炉棚に載せた時計のコチコチという音、といった場合も少なくなかった。ときおり、ミセス・ヒュームが台所で立てる音や、表を通りかかる車のくぐもった響きが聞こえてきた。

CamScannerでスキャン

街の車道を進むタイヤがひゅうっと鳴った。世界が着々と仕事を進めているというのに、こうして室内にじっと座っているのは、何だか妙でもあり、同時に快くもあった。読んでいる本の内容も、世界との隔たりをいっそう大きくしていたと思う。それらの書物のなかでは、何もかもが遠くの出来事だった。影のようにおぼろげで、驚異に満ちていた。紀元五〇〇年に大西洋を横断し、そこで発見した島をエデンの園だと思ったアイルランド人の僧侶。プレスター・ジョン（訳注　中世の伝説のキリスト教君主）の謎の王国。ニューメキシコでズーニー・インディアンと和睦のパイプを味わう片腕のアメリカ人科学者。何時間かが過ぎていった。僕もエフィングも、自分の持ち場から一歩も動かなかった。エフィングは車椅子、僕はその向かいのソファ。朗読に夢中になるあまり、自分がどこにいるのかなかば忘れてしまうこともあった。そんなときはもう、自分が自分の皮膚の内部にいないような気がした。

　食事はダイニングルームで取った。昼食は正午に、夕食は六時にはじまる。このスケジュールをエフィングはきわめて几帳面に遵守した。ミセス・ヒュームがドアから首を突っ込み、食事の用意ができました、と宣言するやいなや、それまで本に向けていた注意をぷつんと断ち切ってしまうのだ。物語がいかなる局面に達していようと、少しも変わりはなかった。終わりまであと一、二ページというところでも、センテンスの途中で朗読をさえぎり、そこまで、と命じるのだった。「さ、食事の時間だ。残りはまたあとだ」エフィングは決まってそう言った。特に腹をすかせていたというわけではない。実際、彼はひどく少食だった。だが、毎日を厳密かつ合理的に組み立てようという意志はあまりに強かった。一度か二度、いかに

も残念そうなそぶりを示したこともあったが、だからといってスケジュールを破りはしなかった。「あいにくだな」とエフィングはそんなときに言ったものだ。「ちょうど面白くなりかけていたのに」。はじめてそう言われたときは僕も、もう少し続けましょうか、と言ってみた。するとエフィングは、「それはいかん」と答えた。「つかの間の楽しみのために世界を混乱させてしまってはならん。明日またゆっくり読めばいい」

大して食べるほうではなかったけれども、わずかの量を食べるにあたって、その食べ方は何ともすさまじかった。べちゃべちゃよだれを垂らし、うなり声を上げ、食べ物をこぼす。見ていて胸が悪くなる光景だったが、僕としてはただ我慢するしかなかった。見られているのに気づくと、エフィングはいっそうおぞましい芸をやり出した。口から食べ物を少しずつこぼして顎にしたたらせ、ゲップを出し、嘔吐や心臓発作に襲われた真似をし、入れ歯を外してテーブルの上に置く。なかでも得意としたのはスープである。冬のあいだずっと、毎食違ったスープが出された。すべてミセス・ヒュームの手作りで、野菜スープ、クレソンスープ、ニラネギとジャガイモのスープ、どれもすごく美味しかった。でも僕はじきに、エフィングがそれを口に吸い込むのを見せられる瞬間を恐れるようになった。音を立てて飲む、なんていう生易しいものではない。まるっきり掃除機のように吸い上げるのだ。調子の悪いフーバー掃除機さながらに、すさまじい騒音と振動で空気を揺さぶるのである。何とも神経にこたえる、一度聞いたら忘れられない音だった。やがてその音は、僕の耳のなかで一日じゅう響くようになった。食卓についていないときにまで聞こえてくるのだ。いまでも、精神を

CamScannerでスキャン

集中すれば、その情景を細部までありありと思い起こすことができる。エフィングの杖がスプーンに触れた瞬間、魔法のように荒々しく息が吸い込まれ、静寂が引き裂かれる。甲高い騒音がやにわに続く。喉を洩れ落ちるスープが、あたかも砂利とガラスの破片に変貌したかのような、圧倒的というほかない轟音だ。ごくんと呑み込み、ややあって、スプーンがボウルにがちゃんと当たる衝撃。それから、全身をぶるっと震わせながら大きく息を吐く。ここでエフィングは唇をぴちゃぴちゃ鳴らし、ときにはさも美味そうに歪んだ笑みを浮かべた。これがまた一からくり返される。スプーンにスープが満たされ、口元に持っていき（ボウルと口との距離を縮めるべく頭がつねに前かがみになっているにもかかわらず、手が震えるせいで、スプーンが唇に近づくあいだにスープはかなりこぼれてあらかたボウルに戻ってしまう）、また新たな災禍がはじまる。吸引機のスイッチがふたたび入り、耳をつんざく轟音が響きわたる。ありがたいことに、エフィングが一皿全部を呑みほすことはめったになかった。すさまじい騒音とともに三口か四口呑むと、たいていはもうくたびれてしまって、ボウルを脇に押しやり、穏やかな声で、メインコースは何かね、とミセス・ヒュームに訊ねるのだ。全部で何回この騒音を聞かされたかはわからない。でも、もうそれが二度と僕の耳を離れないと確信できるくらい聞いたことは間違いない。生きている限り、僕はその音を頭のなかに抱えているだろう。

　こうした見世物が続くあいだ、ミセス・ヒュームは超人的な忍耐力を発揮した。驚きや嫌悪の表情などこれっぽちも見せずに、すべてがごく自然な出来事であるかのようにふるまっ

集中すれば、その情景を細部までありありと思い起こすことができる。エフィングの唇がスプーンに触れる瞬間、龍巻のように荒々しく息が吸い込まれ、静寂が叩き壊される。甲高い騒音が次に長々と続く。喉を流れ落ちるスープが、あたかも砂利とガラスの破片に変貌したかのような、壮絶というほかない轟音だ。ごくんと呑み込み、ややあって、スプーンがボウルにがちゃんと当たる衝撃。それから、全身をぶるっと震わせながら大きく息を吐く。ここでエフィングは唇をぴちゃぴちゃ鳴らし、ときにはさも美味そうに歪んだ笑みを浮かべた。これがまた一からくり返される。スプーンにスープが満たされ、口元に持っていき（ボウルと口との距離を縮小すべく頭がつねに前かがみになっているにもかかわらず、手が震えるせいで、スプーンが唇に近づくあいだにスープは少しずつこぼれてあらかたボウルに戻ってしまう）、また新たな怒濤がはじまる。吸引機のスイッチがふたたび入り、耳をつんざく轟音が響きわたる。ありがたいことに、エフィングが一皿全部を呑みほすことはめったになかった。すさまじい騒音とともに三口か四口呑むと、たいていはもうくたびれてしまって、ボウルを脇に押しやり、穏やかな声で、メインコースは何かね、とミセス・ヒュームに訊ねるのだ。全部で何回この騒音を聞かされたかはわからない。でも、もうそれが二度と僕の耳を離れないと確信できるくらい聞いたことは間違いない。生きている限り、僕はその音を頭のなかに抱えているだろう。

　こうした見世物が続くあいだ、ミセス・ヒュームは超人的な忍耐力を発揮した。驚きや嫌悪の表情などこれっぽちも見せずに、すべてがごく自然な出来事であるかのようにふるまっ

ていた。線路や空港のすぐそばに住んでいる人と同じように、定期的に響いてくる大音響にも慣れっこになっていた。ぴちゃぴちゃ、ずぶずぶといった音がはじまると、ただ単に話すのをやめて、騒音が静まるのを待つのである。シカゴ行き特急列車が闇夜を駆け抜け、家の窓をがたがた鳴らし、屋台骨を揺さぶる。それから、やって来たときと同じように、あっという間に列車は走り去る。ときおり、エフィングの立てる音がとりわけおぞましいときなど、ミセス・ヒュームは僕の方を向き、片目でウィンクしてみせた。気にしちゃ駄目よ、この人は頭がおかしいんだから、私たちにはどうしようもないのよ、と言っているようなウィンクだった。いま思うと、家のなかに一応の安定を保つ上で、ミセス・ヒュームの役割がいかに大きかったかがわかる。かりにもっと激しやすい人だったら、エフィングの醜悪な行為を平然とやり過ごしてはいられなかっただろう。そしてそうなれば、事態はさらに悪くなっていただろう。エフィングという人物は、他人から批判されると、手がつけられないくらい怒り出す性質だったからだ。ミセス・ヒュームのおっとりした人柄は、醜悪なドラマや不愉快なもめ事を未然に防ぐ上でまさに理想的だった。大きな体に合わせて心も広く、たいていの物事は難なく受け止められる人だった。はじめのうちは、エフィングの罵詈雑言に彼女が黙って耐えているのを見て、僕も心配したものだが、やがて実はそれが、エフィングの奇行に対処する唯一まっとうな手段であることがわかってきた。笑って済ませなさい、肩をすくめて忘れなさい、相手に合わせてしまいなさい。エフィングに対応するすべを僕に教えてくれたのはミセス・ヒュームである。彼女が範を示してくれなかったら、とてもあそこまで長続き

しなかっただろう。

ミセス・ヒュームはいつも、洗い立てのタオルとエプロンを抱えて食卓に現われた。食事をはじめる前に、まずエプロンをエフィングの首に巻きつける。タオルは何かあったときに顔を拭くのに使う。このへんは小さな子供に食事をさせるのとそんなに変わらなかった。揺るぎない確信をもって、ミセス・ヒュームは世話好きの母親の役割を演じていた。自分の子供も三人育ててきたし、いちいち考えなくてもやれるのよ、と彼女はあるとき僕に言った。だが、こうした物理的任務とはべつに、エフィングの言葉が常軌を逸せぬよう、巧みに会話を操るのもミセス・ヒュームの務めだった。この点に関する彼女の巧妙さたるや、気難しい客を御するベテランの娼婦もかくやという見事さだった。いかなる要求も、無理だと退けたりはしない。いかなる提案にもたじろぐことなく、いかなる発言も馬鹿馬鹿しいと笑いとばしたりはしない。エフィングは週に決まって一度か二度、ミセス・ヒュームが陰謀を企んでいると言って責め立てた。食べ物に毒を盛ったとか（そう言いながら、噛みかけの人参や肉の切れ端を、憎たらしげにぺっと皿に吐き出すのだ）、金を盗もうとしているとか。でも彼女は腹を立てるどころか、落着き払った声で、だったら私たちみんなじきに死にますよ、三人とも同じものを食べてるんですからね、とやり返した。それでもエフィングがまだしつこく言ってくると、今度は戦術を変えて、陰謀を白状するのである。「おっしゃる通りです」と彼女は言った。「マッシュポテトに砒素を六匙入れました。十五分ばかりで効いてくるはずですよ。それで私の苦労も終わります。私はお金持ちになるんですよ、ミスター・トマ

ス」――彼女はエフィングのことをいつもミスター・トマスと呼んだ――「そしてあなたは墓場で腐りはてるんですよ」。この種の返答を、エフィングはいかにも愉快そうに聞いていた。「ふん!」と彼は鼻で笑って言った。「ふん! わしの金が目当てか、この強欲女め。こっちはそんなこと、はじめからお見通しだわい。次は毛皮とダイヤか、え? ふん、そんなものお前みたいなデブには何の足しにもならんぞ。どれだけ着飾ろうと、お前はしょせん脂肪太りの洗濯女さ」。それから、さっきの言葉と矛盾するのも構わずに、ふたたびすさまじい勢いで、毒入りの食べ物を口のなかに放り込むのだった。

ずいぶん苦労はさせられたにせよ、心の底では、ミセス・ヒュームはエフィングに忠誠心を抱いていたと僕は思う。たいていの人は、年寄りの世話をするとなると、相手を知恵遅れの子供か木偶の坊みたいに扱いがちだが、彼女はそんなことはなかった。エフィングがわめき散らしたり、騒ぎ立てたりする自由を彼女は認めていた。その一方で、必要とあらば毅然たる態度に出ることも辞さなかった。エフィングを罵る呼び名がいくつもストックしてあって、相手の出方によってはためらうことなくそれらを並べ立てるのだ。意地悪爺い、ろくでなし、御託屋、大法螺吹き……いくらでも出てきた。いったいどこでそんな言葉を見つけてきたのか、とにかく束になって舌から飛び出すのである。でもその罵りの口調には、いつもどこか、荒っぽい情愛の響きがこもっていた。彼女がエフィングの世話をはじめて、もう九年が経っていた。苦労自体を楽しむような人には見えなかったから、やはりどこかで、この仕事に満足を見出していたのだろう。僕から見れば、九年も持ちこたえたというのは驚異以

外の何ものでもなかった。しかも毎月一日しか休みを取らないというのだから、まさに想像を絶する話である。僕の場合、少なくとも夜は好きに使えた。一定の時刻を過ぎれば、外出も自由だった。それに僕にはキティがいたし、そもそも、この仕事はべつに僕の人生の中心をなす目的じゃないんだ、いずれは違うことをはじめるさ、そう考えて自分を慰めることもできた。ミセス・ヒュームにはそういう出口は何もなかった。彼女にとっては一日じゅうが勤務時間であり、家を離れる唯一の機会といっても、毎日午後一、二時間買い物に出かけるときだけだった。それは本物の人生とはいいがたい暮らしだった。彼女は『リーダーズ・ダイジェスト』や『レッドブック』を読み、時おりペーパーバックのミステリー小説を読み、エフィングを寝かしつけたあと、自分の部屋で、音量をぎりぎりに絞って小さな白黒テレビを見た。夫は十三年前に癌で亡くなっていた。三人の子供たちはみな成人して遠くに住んでいた。カリフォルニアに娘が一人、カンザスにも娘が一人、そして軍隊に入ってドイツにいる息子。彼女は三人みんなに手紙を書いた。最大の楽しみは孫の写真が送られてくることで、それらの写真は化粧台の鏡の縁に飾られた。休みの日には、ブロンクスの退役軍人病院に入っている弟のチャーリーを見舞いにいった。第二次大戦中に爆撃機のパイロットだったこの弟について彼女は多くを語らなかったが、どうやら頭の具合が悪いらしかった。毎月欠かさず、チョコレートの入った小さな袋と、スポーツ雑誌の束を抱えて、病院まで律儀に足を運んだものだが、一緒に仕事をしていたあいだ、それについて彼女が愚痴をこぼすのを聞いたことは一度もなかった。ミセス・ヒュームは岩だった。つきつめて考えるなら、彼女ほど僕

に多くを教えてくれた人はほかにない。

エフィングは厄介な相手だったが、厄介ということだけで捉えるのも誤りだろう。もしエフィングが、ただの気難しい、口やかましい老人にすぎなかったなら、その気分の変化にも何らかのパターンがあったはずであり、対処するのもある程度容易だっただろう。次はどう出てくるか見当もついただろうし、こっちがどういう立場に置かれているかも一応計算が立ったにちがいない。けれどもこの老人は、そういう読みが成立するには、あまりに捉えどころがなさすぎた。エフィングが厄介だったのは、何よりもまず、彼がつねに厄介だったわけではないからだ。だからこそ彼は、相手をいつも宙ぶらりんの状態にしておくことができたのだ。何日ものあいだ、ひたすら呪詛と罵倒の言葉ばかりがその口からあふれ出る。それで僕もとうとう、ああ、この人には優しさや人間らしさなんてひとかけらも残っちゃいないんだ、と確信するに至る。するとまさにその瞬間、今度は、はっとするほど深い共感のこもった言葉が出てくる——他人のことを心底理解し、知り抜いていなければ言えない、奥の深い言葉が。こっちはまた考えを修正せざるをえない。僕の誤解だったんだ、この人はそんなに悪い人じゃないんだ、と。やがて、少しずつ、エフィングのもうひとつの側面が見えてきた。センチメンタルな面、とまでは言わないが、ときにそれにきわめて近いものになったことは確かだ。はじめのうちは僕も、どうせお芝居さ、例によってこっちを惑わそうとしているんだ、と片付けようとした。だがそう解釈するなら、そういう感傷的な気分をエフィングがあらかじめ計算して演じていることになる。でも実際には、それらはいつも、ごく自然に湧き

CamScannerでスキャン

上がってきたものに思えた。ふとした出来事や会話の、何かささいな点が、たまたま心の琴線に触れたように見えたのである。けれどその反面、かりにこうした好ましい側面が本物であるなら、なぜもっとそれを出そうとしないのか？　それは本来の彼自身からの逸脱にすぎないのだろうか？　あるいはそれこそが真のエフィングの精髄なのだろうか？　この問題に関して、はっきりとした結論は最後まで得られなかった。しいていえば、どちらの可能性も全面的には排除できないということがはっきりしただけだった。エフィングは同時にその両方の存在だったのだ。彼は怪物であり、と同時に、善人としての、尊敬してもいいと思える人物としての要素も備えていた。それゆえ、彼を徹底的に憎むことは不可能だった。ただ憎んでいられれば僕としても楽だっただろう。ひとつの感情だけで割りきって、頭から彼のことを追い払ってしまえただろう。だがそれができないために、僕は四六時中彼について考えさせられる破目になった。僕はエフィングのことを、苦悶せる魂として眺めるようになった。過去にとり憑かれた男として、内側から彼を蝕むひそかな苦悩を何とか隠し通そうと苦闘している男として。

　このもう一人のエフィングをはじめて垣間見たのは、雇われて二日目の晩の食事の最中だった。ミセス・ヒュームが僕の子供のころについて訊ねていたときのことだ。僕はふと、母親がボストンでバスに轢かれたことを口にした。と、それまで我々の会話に何の関心も示していなかったエフィングが、突然フォークを置いて、僕の方に顔を向けた。そして、それまで彼の口から聞いたこともなかった、優しさと暖かさのこもった声で、「それはつらかった

ろう。本当につらかったろうな」と言った。どう考えても、心からそう言っているとしか思えない口調だった。「ええ」と僕は答えた。「すごくショックでした。僕はまだ十一歳で、その後も長いあいだ、母がいなくなったことを悲しんでいました。白状すれば、いまでもそうです」。ミセス・ヒュームは僕の言葉を聞きながら首を横に振っていた。同情の涙が目をうるませているのが見えた。少し間を置いて、エフィングが言った。「自動車というのは凶器だ。気をつけんと、いずれみんなやられてしまう。二か月前に、わしのロシア人の友人も同じ目に遭ったんだ。朝、新聞を買いに出かけて、ブロードウェイを渡ろうと歩道から踏み出たとたん、黄色いフォードにはねられたのさ。車はそのまま逃げちまった。止まろうともしなかった。あの気狂いさえいなかったら、パベルだっていまも、フォッグ、君が座っている椅子に座っているはずなんだ。君がいま口に入れている食べ物を食べているはずなんだ。それがどうだ、ブルックリンのどこかの片隅で、冷たい土のなかに眠ってるんだからな」

「パベル・シュム」とミセス・ヒュームがつけ加えた。「一九三〇年代に、パリでミスター・トマスの下で働きはじめたのよ」

「そのころはシュマンスキーという名だったんだが、三九年にアメリカに渡ってきたときに短くしたんだ」

「それで僕の部屋にあんなにたくさんロシア語の本があるんですね」と僕は言った。

「ロシア語の本、フランス語の本、ドイツ語の本」とエフィングは言った。「パベルは六つか七つの言語に通じていた。実に教養ある男だった。本物の学者だよ、あれは。三二年に知

りあったとき、奴はレストランで皿洗いをしながら、水道も暖房もない六階の女中部屋に住んでいた。パリには当時、革命騒ぎで着の身着のまま逃げてきた白系ロシア人が大勢いたが、パベルもその一人だった。奴らはみんな一文無しの身になっていた。わしはパベルの身柄を引き受けて、住みかも見つけてやった。そのお返しに、奴もいろいろ助けてくれたんだ。なあフォッグ、これが三十七年続いたんだよ。わしが唯一残念なのは、自分が奴より先に死なななかったことだ。あいつはわしにとって、たった一人の、本当の友だちだった」

突然、エフィングの唇が震え出した。いまにも泣き出しそうに見えた。それまでのことはすべて忘れて、その瞬間、僕は彼を気の毒に思わずにいられなかった。

三日目になって、太陽がやっと顔を出した。エフィングはいつものように午前中に仮眠をとったが、十時にミセス・ヒュームに車椅子を押してもらって寝室から出てきたときには、第一回の散歩に出かける用意がもうすっかり整っていた。分厚いウールの衣服を着込み、右手でステッキを振り回していた。彼についてほかに何が言えるにせよ、エフィングは何ごとも中途半端にやる人間ではなかった。近所の通りを散歩するにも、北極探検に乗り出さんとする探検家の情熱をもってことに当たった。検討しておくべき事項は無数にあった。温度と風速をチェックし、あらかじめルートを決定して、適量の服を着ていることを確認する。寒い日にはありとあらゆるたぐいの防寒具を装着した。セーターとマフラーで上体をすっぽり

包み、くるぶしまで届く巨大なオーバーを着て、さらには毛布、手袋、耳当てつきのロシア製毛皮帽。とりわけ冷え込みの厳しい、気温が零下に落ちた日には、スキーマスクまでかぶった。もこもこに着込んだせいで、本人は服のなかにすっかり埋もれた格好になり、いつにも増して弱々しい、常軌を逸した姿になった。だがエフィングは、物理的な不快感に耐えられない人間だった。人目を引くことは全然気にしなかったから、とにかく目いっぱい重装備することになった。第一回の散歩の日、外は相当な寒さだった。出発の支度をしている最中、エフィングは僕に、君、オーバーは持ってるのかね、と訊ねた。いいえ、革ジャケットだけです、と答えると、それじゃ駄目だ、まるっきり駄目だ、と彼は言った。「散歩の最中に君のケツが凍っちまったら、わしはどうなる。寒さにも長もちする格好をしてもらわにゃ困る」。エフィングに命じられてミセス・ヒュームが、かつてパベル・シュムが着ていたコートを取りにいった。それはぼろぼろに着古したツイード製の年代物だったが、サイズは僕にほぼぴったりだった。色は茶色っぽく、全体に赤と緑の点が入っている。こっちがいくら断っても、エフィングはコートを僕にくれると言って聞かず、それ以上言い返すと喧嘩になってしまいそうだった。かくして僕は、わが前任者のオーバーコートを相続する破目になった。それを着て歩き回るのは、何だか妙な気分だった。何といってもそれは、いまや死んでしまった人間の所有物だったのだ。でも結局、その冬のあいだずっと、僕は散歩のたびにかならずそれを着ていくことになった。気遅れを少しでも減らそうと、僕はそのコートを仕事に付随する一種の制服と考えようとしたが、あまり足しにはならなかった。それを着るたびに、

CamScannerでスキャン

死人の体に入り込んだように思わずにはいられなかった。自分がバベル・シュムの幽霊になったような気がしてならなかった。

車椅子を動かすこつをつかむのに大して時間はかからなかった。一日目は何度かがくんと揺れてしまうこともあったが、縁石を乗り降りするときに椅子をしかるべき角度に傾けることを覚えてからは、おおむねうまく行くようになった。エフィングの体はおそろしく軽かった。街じゅう押して回っても、腕に大した負担はかからなかった。けれども、ほかの面では、毎日の散歩は僕にとっていささかつらい時間だった。外に出たとたん、エフィングはステッキを宙にかざし、それで指した先に何があるかを大声で訊ねるのだ。答えを聞くと、すかさず今度は、それを描写しろと命じる。屑かご、商店のウィンドウ、戸口。何であれ、僕はそれを正確に描写せねばならなかった。彼の思いどおりのスピードで言葉が出てこなかったりすると、エフィングはかんかんに怒り出した。「何をしとるか」と彼は言った。「目を使え、目を！　わしは何も見えんのだぞ、なのに何だ貴様は、『ごくあたりまえの街灯』だの『何の変哲もないマンホールのふた』だの！　この世に二つと同じものはないんだぞ、馬鹿野郎。どんな阿呆だってそのくらい知っとるわい。しっかり目を開けて見ろ、あほんだら、ちゃんとわしの頭のなかに見えてくるように説明せんか！」。街なかでそんなふうにどやしつけられるのだから、恥ずかしいといったらない。エフィングがわめき散らすあいだ、こっちはそこに突っ立って、何の騒ぎかとふり返る人たちの視線を浴びながらその罵倒に耐えねばならないのだ。一度か二度、このまま彼を置き去りにして帰ってしまおうかという誘惑に駆られ

たこともあった。でも、ある意味ではエフィングの言うとおりだった。僕は決して有能な説明役ではなかった。これまで自分が、物をじっくり見ることをいかに怠ってきたかを僕は痛感した。いざ命じられてやってみると、その出来栄えたるや惨憺たるものだった。僕にはそれまで、何ごとも一般化してしまう癖があった。物同士の差異よりも、類似のほうに目が行きがちだった。それがいま、無数の個別性から成る世界に放り込まれて、五感が直接受けるデータを言葉によって再現しようとあがいてみると、自分の無能ぶりをつくづく思い知った。エフィングが本当に満足しようと思ったら、フロベールを雇って、フロベールに車椅子を押してもらって街をまわるしかなかっただろう。もっともフロベールだって、決して仕事が速かったわけではない。ときにはたった一つのセンテンスを書くのに、納得がいくまで何時間も苦吟することもあったのだ。なのに僕は、事物を正確に描写するだけでなく、それをものの数秒のうちに行なわねばならないのである。そして何より、パベル・シュムと比較されるのが癪の種だった。あるとき、僕がいつにも増して言葉につっかえていると、エフィングは亡き友に関してえんえん何分間もまくし立てた。あれこそ詩的表現の達人だった、適切にして斬新なイメージの比類なき発明者だった、事物の確固たる真理を魔術のごとくあざやかに伝える名文家だった、云々。「しかも奴にとって英語は外国語だったんだからな」とエフィングは言った。この問題について僕が口答えしたのは、あとにも先にもそのときだけである。でも相手の言い草にあんまり腹が立ったものだから、何か言い返さずにはいられなかったのだ。「外国語がお望みでしたら、ご要望に応じますよ。ラテン語はどうです？　よかったら

これはまさにラテン語を話しますけどね」「いや、豚のラテン語（[illegible]）のほうがもってこいかな。豚のラテン語だったら君におわかりでしょう」。我ながらくだらないことを言ったものだと思う。エフィングにもぴしゃっとやり返されただけだった。「つべこべ言わんで、さっさと次を話さんか。雲の形を説明しろ。西の空に出てる雲全部だ。見える限りのを、一つひとつ説明しろ」

エフィングの要求に応えるために、僕はまず、自分を彼から切り離すすべを学ばねばならなかった。肝腎なのは、その命令を重荷と感じる代わりに、自分は好きでこんな真似をしているのだと信じ込むことである。そもそもこの行為には、本来的に間違っているところは何もない。翻って考えるなら、事物を正確に描写する訓練こそ、実のところ、僕がいちばん身につけたいと思っているもの――謙虚、忍耐、厳密さ――を体得する上でも格好の手立てではないか。単に義務としてではなく、僕はこの仕事を精神的鍛錬として捉えるようになった。これは、あたかも世界をはじめて発見しているような目で物を見る訓練なんだ、と。すると何が見えるか？ その見えた物を、どう言葉に置き換えるか？ 世界は目を通して我々のなかに入ってくる。だが、それが口まで降りてこなければ、世界を理解したことにはならない。その隔たりがいかに大きなものであるか、僕はやっと実感しはじめていた。長大な距離を移動した末に、事物はようやく目から口にたどり着くのだ。物理的にはほんの七、八センチの距離でしかない。だがその途中でいかに多くの事故や損失が起きうるかを考えてみるなら、それはほとんど地球から月への旅と同等といってよい。エフィングに命じられて取りかかっ

CamScannerでスキャン

てみたものの、わが成果たるや当初はひどく朧げなものでしかなかった。焦点のぼけた背景の前をかすめていく、ぼんやりした影にすぎなかった。前にも見たことがある物じゃないか、描写するのにそんなに苦労するわけないじゃないか、と僕は自分に言い聞かせた。消火栓、タクシー、車道から勢いよく立ちのぼる蒸気。どれもさんざん目にしてきた、脳裡に焼きついているはずの事物である。だがそういう考え方は、それらの事物が刻一刻変わるものだという事実を見落としている。光の強さや角度によって、物はつねに姿を変える。人が通りかかったり、突然さっと風が吹いたり、ひょんなところで光が反射したり、といった周囲の状況によって、その様相はいくらでも変化しうる。何もかもがつねに流動のただなかにあるのだ。壁を構成する二つの煉瓦は、一見ほぼそっくりに見えるかもしれないが、決してまったく同一と考えてはならない。さらに重要なことに、同じ煉瓦でさえ、決して同じではない。外気にさらされ、寒さや暑さや風雨の影響を受けて、煉瓦は少しずつ崩壊していく。かりに何世紀ものあいだ観察を続けられるなら、いずれそれが消えてなくなるのが見えることだろう。すべての無生物は崩壊しつつあり、すべての生物は死につつある。そう思うと、頭がくらくらしてきた。分子たちの激しく狂おしい運動、物質のたえざる爆発、さまざまな衝突、すべての物の表面下で煮えたぎる混沌、そういったものを僕は思い描いた。はじめて会ったときにエフィングにも忠告されたように、何ごともうわべどおりに受け取ってはならない。

最初は表面をぞんざいに眺めるだけだったのが、僕はじきに、強迫観念にも似た熱心さをもって事物を観察するようになった。僕の描写は過度に厳密になった。見えているもののあら

なるニュアンスを捉えようと躍起になって、何ひとつ言い逃すまいとめったやたらに言葉を並べるあまり、細部は混沌をきわめた。機関銃の連射射撃のように、言葉のスタッカートが口から飛び出した。おかげでエフィングにも、もう少しゆっくり喋れ、そんなふうにまくし立てられちゃついて行けんじゃないか、としじゅう叱られる始末だった。問題は僕の喋り方ではなく、僕の方法そのものにあった。僕はあまりに多くの言葉を積み重ねすぎていた。その結果、目の前にある物の姿を明かすどころか、むしろそれを隠してしまっていた。微細な表現や抽象的な形状描写の雪崩の下に、物の姿を埋もれさせてしまったのだ。忘れてならないのは、相手が盲目であることだった。僕の仕事は、長大なカタログでエフィングを疲労させてしまうことではなく、彼が自分で物を見るのを助けることである。つきつめて考えれば、言葉自体はどうでもよかったのだ。言葉の務めは、彼がなるべく速く事物を把握できるようにすることである。そのために僕は、言葉が発音されたとたんに消滅するよう工夫しなくてはならない。センテンスを簡潔にしよう、外来的なものと本質的なものを切り離そう、と僕は何週間も努力を重ねた。そうしているうちに、むしろ物のまわりに空間をたっぷり残しておいたほうが、いい結果が出ることがわかった。そのほうが、いちばん肝腎な作業をエフィングが自分で行なう余地を残せるからだ――すなわち、一握りのヒントを元に一個のイメージを構築する作業、僕の描写を聞きながら自分の心を事物に接近させていく作業を。描写のあまりの拙さに我ながらうんざりした僕は、一人でいるときも練習を積むようになった。たとえば夜ベッドに横になっているときも、部屋のなかの事物一つひとつと取り組み、もっと

うまく言えないものかと知恵を絞るのだ。気を入れて練習を重ねるほど、僕はますます真剣になっていった。僕はいまやそれを、美的次元ではなく、道徳的次元に属す行為として捉えるようになった。エフィングの叱責もそれほど気にならなくなった。彼の短気ぶりや文句の多さにしても、いずれは何かもっと高次の目的に役立つのではないかという気さえしてきた。僕は啓示を追い求める修道士であり、エフィングはわが毛衣（訳注 修道士が苦行のために着る硬いシャツ）、おのれの身を苛むべき鞭だった。僕の描写力が向上したことは間違いない。でもだからといって、僕がその結果に満足したというわけではない。これでいいんだと思えるには、言葉の要求はあまりに大きかった。失敗はあまりに多く、たまの成功を喜ぶ気にはとうていなれなかった。時が経つにつれて、エフィングの文句もだんだん減っていったが、それだって、本当に僕の描写が彼の求めるものに近づいたせいかどうかはわからない。ひょっとすると、見込みなしと匙を投げただけかもしれない。興味をなくしてしまっただけかもしれない。僕としては何とも言えない。早い話、要するに彼が僕という人間に慣れてきた、というだけかもしれないのである。

冬のあいだ、我々は散歩の区域を近所に限定していた。ウェストエンド・アベニュー、ブロードウェイ、七十、八十丁目台を碁盤目に走るもろもろの通りである。すれ違う人々のなかには、エフィングのことを見知っている人も大勢いた。いささか意外なことに、みんなエフィングの姿を見て喜んでいるようだった。わざわざ寄ってきて声をかけてくれる人も結構いた。八百屋、新聞売り、自分も散歩中の老人たち。エフィングも彼らの声を覚えていて、

いくぶんよそよそしいとはいえ丁寧な口調で挨拶を返した。城から下りてきて下々の村人と交わる貴族、といった趣である。彼は人々の敬意を得ているらしかった。はじめの何週間かは、パベル・シュムのことがたびたび話題に上った。シュムもみんなに知られていて、好かれていたようだった。亡くなった顛末についても近所じゅうが知っていた（事故を目撃した人も何人かいた）。熱のこもった握手やお悔やみの言葉をエフィングはさんざん浴びせられることになったが、べつだん取り乱しもせず応対していた。驚いたことに、その気になれば、エフィングは実に優雅にふるまうことができた。人前での礼儀作法もきちんと心得ていた。「新しい助手です」と彼は、僕の方を身振りで示しながら言うのだった。「ミスター・M・S・フォッグ、つい先日コロンビア大学で学業を終えられたところです」。何もかも作法通りである。まるで僕がひとかどの人物で、抱えていた無数の仕事をすべてなげうってわざわざ彼のところに来てくれた、と言わんばかりだ。帰路につく前に、我々はときどき七十二丁目の洋菓子店でお茶を飲んでいったが、ここでもやはり一八〇度の大転換が見られた。お茶は一滴もこぼさないし、ずるずるすすったりもしない。その唇からは何の音も漏れてこないのだ。他人に見られているとき、エフィングは完璧な紳士だった。正しいマナーの申し分ないお手本だった。

　外出の最中に会話をするのは楽ではなかった。二人とも同じ方向を向いていたし、僕の頭はエフィングの頭よりずっと高い位置にあったから、エフィングの言葉は僕の耳に届かぬうちに失われてしまいがちだった。ちゃんと聞き取ろうと思うと、こっちの体を曲げねばなら

CamScannerでスキャン

ない。でも止まったりペースを緩めたりするのをエフィングは好まなかったから、たいていは、角で止まって信号が変わるのを待つまで、言いたいことも言わずにいた。何かの描写を求めていないときは、エフィングの言葉も、概してごく短い発言や質問の域にとどまっていた。ここはどの通りだ？　いま何時だ？　寒くなってきたな。日によっては、はじめから終わりまでほとんど一言も喋らないこともあった。そんなときのエフィングは、ゆらゆらと歩道を進む車椅子の揺れに身を任せ、顔を太陽に向けて、その心地好さに柔らかなうめき声をもらすばかりだった。風が肌に当たるのを感じることをエフィングは好んだ。自分のまわりにさんさんと注ぐ、見えない光に身を沈めるのを好んだ。僕のほうも、安定したリズムで車椅子を前進させ、自分の歩みを車の回転にうまく合わせられる日などには、エフィングがその音楽のなかにじわじわと埋没していくのを感じることができた。乳母車に乗った赤ん坊のように、彼の体から力がだらんと抜けていくのだ。

　翌年の三月末から四月上旬にかけて、我々は散歩の範囲をだんだんと広げ、アッパー・ブロードウェイの外まで足を伸ばすようになった。暖かくなっても、エフィングは相変わらずどっさり防寒具を着込んでいた。どんなにうららかな日でも、まずオーバーを着て、脚をチェックの毛布でくるまないことには、絶対に外に出ようとしなかった。天気に対するその神経過敏さたるや、がっちり防御しないことには外気が体の内部にまで浸透してしまうとでも思っているみたいだった。でも、寒さから身を護っている限り、彼は空気に触れることを楽しんだ。力強い、快いそよ風ほど彼の機嫌をよくするものはなかった。さっと風を浴びると、

CamScannerでスキャン

ゆすって笑い声を上げ、にぎやかに悪態をついて、ステッキを宙に振り回しながら何やかやと騒ぎ立てるのだった。冬のさなかでも、お気に入りの散歩場所はリバーサイドパークだった。居眠りでもはじめるのかと思うとさにあらず、何時間も黙ってそこに座り、ひたすらじっと耳を澄ませて、自分のまわりで起きている出来事の流れをたどろうとするのだ。葉や小枝のあいだをかさこそと動き回る鳥やリス。木の枝をはためかせる風。公園の下のハイウェイを走る車の音。灌木や花の名を訊かれても大丈夫なように、公園に行くときは僕も動植物ガイドを持っていくようになった。おかげで何十もの植物を識別できるようになった。それまで感じたこともなかった興味と好奇心をもって、葉やつぼみの構成をじっくり眺めるようにもなった。ある日、エフィングがいつにも増してまわりの自然を楽しんでいるように見えたとき、僕は彼に、田舎に住んだらどうです、と訊いてみた。まだ僕がこの仕事をはじめて間もない、十一月末か、十二月はじめあたりだったと思う。僕がまだ、彼に質問をするのが怖くなる前のことだ。公園にいるのがそれほどお好きなんだったら、四六時中自然に囲まれていないのはもったいないじゃないですか、と僕は言った。エフィングは長いあいだ返事をしなかった。あまり長いこと黙っているので、質問が聞こえなかったのかと思いかけたところで、ようやく彼は「もう住んでみたさ」と答えた。「もうやってみたよ。いまでも頭のなかにみんな入っている。どこでもない場所のど真ん中の、何もない荒野に、独りぼっちで何か月も何か月も……まる一生だよ。そういうことはな、一度やったら絶対に忘れられるもんじゃない。わしはどこへも行く必要なんかないんだ。ちょっとでも考えれば、とたんにもう

そこに戻っているんだから。このごろじゃ一日の大半はそこにいるのさ――どこでもない場所のど真ん中に戻っているんだよ」

十二月中旬になって、エフィングは突然、旅行記に対する興味を失った。我々はそれまでに十冊あまりの本を読み終えていて、目下フレデリック・S・デレンボーの『峡谷(きょうこく)の旅』(パウェルの第二回コロラド川探検の記述)と格闘している最中だった。センテンスの途中で、エフィングは出し抜けに僕の朗読をさえぎり、こう宣言した。「さあ、もう十分だ、ミスター・フォッグ。だんだん退屈になってきたし、ぐずぐずしている暇はない。やらなくちゃならん仕事が控えてるんだから」

仕事というのが何のことなのか、さっぱりわからなかったが、とにかく僕はいそいそと本を棚に戻し、指令を待った。いざ聞いてみると、いささかがっかりさせられる指令だった。

「角まで行って、ニューヨーク・タイムズを買ってきたまえ。金はミセス・ヒュームが出してくれる」

「それだけですか?」

「それだけだ。そして、さっさとやることだ。これ以上のんびりしちゃおれんからな」

それまでエフィングは、時事問題を追うことなどに少しも興味を示していなかった。ミセス・ヒュームと僕が食事中にときおりニュースの話をしても、仲間に加わることは一度もな

く、一言もコメントしなかった。ところがいまや、エフィングはひたすらニュースばかりを求めるようになった。その後二週間にわたって、僕は毎朝ニューヨーク・タイムズの記事を一つひとつ丹念に読み上げることになった。紙面の中心は何といってもベトナムのニュースだったが、ほかのさまざまな話題についてもエフィングは朗読を求めた。議会での討論、ブルックリンの大火事、ブロンクスの刺殺事件、株式市場、書評、バスケットボールのスコア、地震。どの話題をとっても、最初に僕に新聞を買いにいかせたときのあの切迫した口調とは、まるで釣りあわないように思えた。エフィングが何かを目論んでいることは間違いない。でもそれが何なのか僕にはさっぱりわからなかった。まわりくどいやり方で、猫が鼠をいたぶるみたいに、目標のまわりをゆっくり旋回しているという感じである。僕を惑わそうとしているのは確かだが、同時にそのやり方がいかにも見えすいていて、気をつけたほうがいいぞ、とわざわざ警告しているみたいでもあった。

朝のニュース朗読の締めくくりはいつも、死亡記事を精読する作業だった。死亡記事になると、ほかの欄に較べてエフィングの注意力も高まるようだった。その味気ない記述に彼がじっくり耳を傾けている姿を見て、僕は何度もはっとさせられたものだ。財界の大物、政治家、発明家、軽業師、サイレント映画のスター、あらゆる死者が等しくエフィングの好奇心を惹いた。日が経つにつれて、死亡記事に割かれる時間はだんだん長くなっていった。いくつかの記述については、二度も三度もくり返し読むよう言われたし、記事が少ないときには、ページのいちばん下に小さな字で印刷された有料広告まで読まされた。ジョージ・〇〇、六

十九歳、よき夫にして父親、家族と友人に悼まれつつ本日午後一時アワレディ・オブ・ソロウズ墓地に埋葬予定。この種の単調な朗読にも、飽きたようなそぶりはいっこうに見えなかった。ほぼ二週間、死亡記事で締めくくるという手順を踏んだのち、エフィングはとうとう、ほかのニュースに対する興味を装うのもやめてしまい、はじめから死亡記事を読むよう僕に言った。この順番の変化について僕は何も言わなかったが、死亡記事を吟味し終えてもほかの欄を読めと命じられなかったことで、ついに転換点が訪れたことを僕は悟った。

「死亡記事というのがどういうふうに書いてあるか、だいたいわかったかね?」とエフィングは言った。

「ええ、まあ」と僕は答えた。「これだけ読めば、一通りの感じをつかむには十分でしょうね」

「たしかに気は滅入る。それはわしも認める。だがな、我々の計画をはじめる前に、少し研究しておくべきだと思ってな」

「我々の計画?」

「わしの番ももうじきだ。どんな阿呆だってそれくらいはわかる」

「たしかに僕だって、人が永遠に生きるとは思いません。でもあなたはすでにたいていの人より長生きしていらっしゃるし、それがまだ当分続くと考えていけない理由はないと思いますが」

「そうかもしれん。だが、もしわしの考えが間違ってるとしたら、これはわしの生涯はじめ

この職業だということになる」

「ちゃんとわかっている、とおっしゃるんですね」

「その通り、わかってるのさ。いろんな細かい徴候からわかるんだよ。わしにはもうあまり時間がない。手遅れにならんうちに、はじめなくちゃならんのだ」

「おっしゃっていることがまだわかりませんが」

「わしの死亡記事だよ。いますぐ取りかからなくちゃならん」

「自分の死亡記事を書くなんて聞いたことありませんよ。あれは他人がやるものじゃないですか。本人が亡くなってから」

「他人に事実が伝わっているなら、それでよかろう。だがな、記録が何も残っていなかったらどうする？」

「なるほど。基本的事実を整理なさっておくわけですね」

「その通り」

「でも、なぜそれを新聞社が載せるはずだとお考えになるんです？」

「五十二年前には載せた。今回だってそのチャンスを逃す理由はないと思うね」

「お話の意味がわかりませんが」

「わしは死んだんだよ。生きてる人間の死亡記事なんて誰も載せやせんだろうが。わしは死んだんだ。少なくとも死んだと思われたんだ」

「それであなたは黙ってたんですか？」

「黙っていたかったのさ。死人でいたかったのさ。新聞が書き立ててくれたおかげで、死人のままでいることができた」
「あなたは重要人物だったんですね」
「非常に重要な人物だった」
「じゃあ、どうして僕はあなたの名前を聞いたことがないんだろう？」
「前は別の名だったのさ。死んでからその名前は捨てたんだ」
「何という名前だったんですか？」
「女々しい名前だよ。ジュリアン・バーバー。昔から気に入らなかった」
「ジュリアン・バーバーというのも聞いたことありませんね」
「もうずっと昔の話だから、誰も覚えちゃおらんのさ。いいかフォッグ、これは五十年ばかり前の話なんだ。一九一六年、一七年、そのあたりだ。わしは世にいう忘却の淵に落ちて、二度と戻ってこなかったのさ」
「ジュリアン・バーバーだったころは、何をなさっていたんです？」
「画家だった。偉大なるアメリカの画家だ。もしあのまま続けていたら、いまごろはあの時代最大の画家と言われておるだろうな」
「さっと控え目におっしゃってるんでしょうね」
「単に事実を話しているだけさ。画家生活が短かったから、作品の数も少ない」
「その作品はいまどこにあるんです？」

CamScannerでスキャン

「まるっきり見当もつかんね。たぶん全部なくなってしまったと思う。宙に消えちまったのさ。いまのわしにはどうでもいいことだ」
「じゃあどうして死亡記事を書きたいんです？」
「わしはじきに死ぬからさ。死んだら秘密を守ろうが守るまいが同じことだ。前回のはでき損ないだった。今回はいわば本番だ。ちゃんとやってもらわにゃ困る」
「わかります」と僕は言ったが、さっぱりわからなかった。
「もちろんこれには、わしの脚が大きく関係している」とエフィングは続けた。「きっと君も、わしの脚がどうしてこうなったのか不思議に思ってるんじゃないかね。誰だってそう思うさ、当然のことだ。萎びた、役立ずの脚だ。生まれつきこうなっていたわけじゃない。まずそれははっきりさせておこう。かつてはわしも威勢のいい若僧だった。みんなと一緒に遊び回ったもんだ。ロングアイランドでの話だ。大きな家があって、夏はそこで過ごしたんだよ。いまじゃ建売住宅と駐車場ばっかりだが、そのころは天国だった。どこもかしこも草原と浜辺で、まさに地上の楽園だった。一九二〇年にパリに移ってからは、もう誰にも事実を伝える必要がなくなったんだ。他人に何と思われようとどうでもよかった。話に真実味さえあれば、現実に何があったかなんてどうでもいいじゃないか？　わしはいくつかの話をでっち上げた。作り直すたびに、話の質もだんだん上がっていった。で、状況と気分に応じて、そのなかから適当なのを引っぱり出して使うことにしたのさ。いつも少しずつ違ったふうに、エピソードをつけ加えたり、細部を修正してみたり、何年もあちこちいじっているうちに、

やがてどの話も完璧の域に達した。いちばん出来がよかったのはたぶん戦争の話だな。これにはいくつかあって、どれを語るのも堂に入ったものだった。戦争というのはあの大戦争、世の中を根こそぎひっくり返した戦争、あらゆる戦争を終わらせるための戦争ってやつだよ（訳注 第一次世界大戦のこと）。塹壕や泥沼を舞台に展開されるわしの話を聞かしてやりたかったね。わしは実に雄弁だった。恐怖というものを、誰にも真似できないやり方で物語ることができた。夜中に銃声が炸裂し、間抜け面の歩兵どもがゲートルに糞をもらす。榴霰弾なんですよ、とわしは言うのさ。この両脚に破片が六百ばかり入っちまいましてね。フランス人ときたら、これっぽちも疑わんでの。ラファイエット戦闘機隊（訳注 フランス支援のために戦ったアメリカ人義勇兵部隊）の話なんてのもあってな、ドイツ野郎に撃墜された一部始終を語る、背筋も凍る生々しい物語だ。これなんかは本当に受けたね。もっと聞かせてくれ、とせがまれたものだ。問題は、いつどこでどの話をしたのか、こんがらがらないようにしておくことだった。頭のなかできちんと整理しておいて、同じ人間に違う話をしてしまわんよう気をつけなくちゃならん。これを何年も続けるんだ。まあそれでさらにスリルが増したってこともある。いつばれたって不思議はない。いつ何どき、出し抜けに誰かに、嘘つき呼ばわりされんとも限らない。どうせ嘘をつくんだったら、綱渡りをしているほうが面白い」

「で、その何年かのあいだで、誰かに真実を話したことはあるんですか？」

「ないね、誰にも」

「バベル・シュムにも？」

CamScannerでスキャン

訊ねなかったし、わしのほうからも言わなかった」
「とりわけパベル・シュムには、だ。何しろ思慮深さのお手本みたいな男だ。一度もわしに
「それがいまになって言う気になったんですか？」
「いずれはな。いずれは、だ。まあそうせっつくな」
「でもどうして僕に話す気になったんです？　知りあってまだほんの二か月かそこらじゃないですか」
「ほかに手がないからさ。わがロシア人の友は死んでしまった。ミセス・ヒュームはこういうことには向いていない。だとすれば、ほかに誰がおる？　好むと好まざるとにかかわらず、フォッグ、君はわしにとって唯一の聞き手なのさ」

翌朝、僕は当然昨日の続きを聞かされるものと予想していた。前日の様子から考えれば、そうなるのが道理だっただろう。だが、エフィングから道理を期待することの愚を、僕は承知していてしかるべきだった。昨日の話にはこれっぽちも触れずに、彼はただちに、かつて知りあいだったらしい一人の男をめぐって、込み入った、まとまりのない物語をはじめた。話題はあちこちめちゃくちゃに飛び、さまざまな回想の断片がつむじ風のように舞った。さっぱり訳がわからない。ついて行こうにも、いってみれば話はすでに僕抜きで動き出していて、聞きはじめた時点では、もう追いつこうにも手遅れという感じだった。

「小人でな」とエフィングは言った。「みすぼらしい、小人みたいに見える奴でな。三十五キロ、四十キロもあれば上々ってところだ。くぼんだ目がはるか遠くを見ている。ありゃあ狂人の目だよ。恍惚と悲惨の入りまじった目つきだ。病院に放り込まれる直前の話で、わしが会ったのもそれが最後でな。ニュージャージーでのことだ。まるっきり地の果てみたいな所だった。オレンジだか、イーストオレンジだか、まあ名前はどうでもいい。そのへんのどこかの町に、エジソンも住んでいた。でもエジソンはラルフのことを知らなかった。たぶん名前を聞いたこともなかったろうよ。何も知らない阿呆だからな。まあエジソンなんかどうでもいい。あんな電球野郎は放っとけ。で、ラルフは金がないってわしに言うんだ。そりゃあそうだろうよ、何せ家には餓鬼が八人もいて、女房はあの通りだ。わしもできるだけのことはしてやった。そのころは金持ちだったから、そういう話ならお安い御用だった。さあ、とわしはポケットに手をつっ込んで言った。これを持ってけよ、俺にはどうせ要らない金だからさ。いくらやったかは覚えておらん。百ドルか、二百ドルってところだろう。ラルフの奴、ひどくありがたがりよってな、わしの目の前で赤ん坊みたいにわあわあ泣き出す始末だ。惨めったらしいったらありゃしない。いま思い出してもむかついてくるね。史上最大の偉人の一人だというのに、頭はばらばらで、気が触れる一歩手前というんだからな。西部を旅したときの話をよく聞かされたよ。何週間も、誰にも会わずに荒野をさまよったんだ。あっちには三年行っていた。ワイオミング、ユタ、ネバダ、カリフォルニア。あのころはまだ未開の地だった。電球も映画もありゃしないし、自動車だってないから轢かれる心配もない。イ

ンディアンはいい連中だったよ、と奴は言っていた。みんな親切にしてくれて、行く先々で泊めてもらっていたんだ。だもんだから、とうとうネジが外れちまったときもな、二十年ばかり前にどこかの酋長にもらったインディアンの衣裳を着て、ニュージャージーの町なかを練り歩いたのさ。頭には羽根飾り、そこらじゅうにビーズやら肩帯やらをくっつけて、髪は長いし腰には短剣、全部揃ってるのさ。まったく哀れったらないね。あげくの果てに、自分の金を作ろうと思い立ってな。これが手描きの千ドル札で、自画像が入ってるときてる。まるっきり建国の父みたいな顔して、札の真ん中に収まってるわけだよ。そして銀行に行って、窓口でそいつを一枚出して、両替してくれって言ったんだな。冗談にもなりゃしない、誰も面白がるもんか。おまけにぎゃあぎゃあ騒ぎ出したもんだから、なおさら始末が悪い。全能なるドルにちょっかいを出して、無事でいようってほうが無理というもんだ。かくして、薄汚ないインディアンの衣裳を着たまま、ずるずる外に引きずり出された。ばたばた暴れようがわめこうが、誰も知ったこっちゃない。それからまもなく、奴をずっと放り込んでおこうという話が決まったんだよ。たしかニューヨーク州のどっかの病院だな。結局死ぬまでそこにいることになった。だがな、驚くなかれ、絵だけは描きつづけたんだ。あの馬鹿野郎、やめようにもやめられなかったんだな。手当たり次第何にでも描いた。紙、段ボール、葉巻の箱、ブラインドにまで描いた。しかも皮肉なことにだな、そのうちに、奴の昔の絵が売れ出したんだよ。ものすごい値段がついた。二、三年前は誰一人見向きもしなかった絵に、前代未聞の値がついた。モンタナの上院議員だか何だかが、『月光』に一万四千ドル積んだんだ。

CamScannerでスキャン

存命中のアメリカ人画家の作品についた最高の高値だよ。といって、ワイフや家族には一銭の足しにもならなかったがね。女房はキャッツキル近辺の、トマス・コールがよく絵に描いたあたりで掘立て小屋に住んで、年五十ドルで食いつないでいた。癲狂院にいる亭主を見舞う車代もありゃしない。とにかく小さいくせに派手に騒ぐ男での、いつもさッさとしておって、絵を描きながらもピアノをザンザン叩くんだ。わしもいっぺん見たことがある。ピアノとイーゼルを、すさまじい勢いで行ったりきたりするんだよ。ありゃあ一度見たら忘れられるもんじゃない。まったくなあ、いまもありありと目に浮かぶよ。筆、パレットナイフ、軽石。叩きつけて、さっと伸ばし、こすり取る。それを何度も、何度もくり返すんだ。叩きつけて、さっと伸ばし、こすり取る。あんなのはよそじゃ見たことがない。絶対に、一度も。あんなものは見たことがない」。エフィングはそこで言葉を切って息をつき、やがて、はっと我に返ったかのように、[illegible]と思うかね？」

「ラルフというのが誰だかわかると足しになると思いますが」と僕は礼儀正しく答えた。

「ブレイクロック」とエフィングは小声でささやいた。あふれる感情を懸命に抑えようとしているみたいだった。「ラルフ・アルバート・ブレイクロック」

「聞いたことがないように思いますが」

「君、絵のことを何も知らんのかね。大学を出たんじゃなかったのかね。一流大学で何を教わったんだ、[illegible]

[illegible]、ブレイクロックについては何も」

「それじゃ駄目だ。何も知らん奴を相手に話すわけにはいかん」

弁解しても無駄らしかったので、僕は黙ってエフィングの出方を見ることにした。長い時間が経った。二分か三分、相手が口を開くのを待つ時間としては永遠の長さだ。と、エフィングが頭をがくんと胸の前に垂らした。すっかりうんざりして、昼寝でもすることにしたのだろうか。その頭がふたたび持ち上がったとき、僕はクビを言い渡されるのを覚悟した。とにかくいまはこいつしかいないんだ、という気持ちがエフィングにあったからよかったものの、そうでなかったら絶対あそこでクビになっていたと思う。

「台所に行って、ミセス・ヒュームに地下鉄代をもらえ」とエフィングはようやく言った。「それからコートを着て手袋をはめて、出かけたまえ。エレベーターで下りて、外に出て、最寄りの地下鉄の駅まで歩いていくんだ。着いたらなかに入って、乗車コインを二枚買いたまえ。一枚はポケットにしまって、もう一枚を改札口に入れて、階段を下りて、南行きの一号線に乗って七十二丁目まで行くんだ。七十二丁目で降りて、向かいのプラットホームでダウンタウン方面の急行を待ちたまえ。二号線、三号線、どっちでも構わん。ドアが開いたらさっさと乗って、座席を確保しろ。ラッシュアワーはもう過ぎているから、席を取るのは訳ないはずだ。座っても、誰とも口をきくな。これはとても大事な点だ。ここを出てから帰ってくるまで、一言も喋っちゃならん。絶対に何も言うんじゃないぞ。誰かに話しかけられたら、声が出ないふりをしたまえ。窓口で乗車コインを買うときも、指を二本突き出して合図するんだ。ダウンタウン行きの急行で席に座ったら、ブルックリンのグランドアーミー・プ

ラザまでそのまま乗っていろ。だいたい三十分か四十分で着くはずだ。そのあいだ、ずっと目を閉じていなさい。できるだけ何も考えないようにするんだ。まったく何も考えないのがいちばんだが、それが無理なら、自分の目のことを考えるようにしたまえ。自分に与えられた、世界を見る驚くべき力のことをだ。目が見えなくなったらどうなるか、考えてみたまえ。あるひとつの物を、いろんな光の下で見るところを想像してみたまえ。日光、月光、電球の光、蠟燭の光、ネオンの光、世界を目に見えるものにしてくれるもろもろの光の下で、その物を見るところを想像するんだ。なるべく簡単な、ありふれた物がいい。石とか、小さな木片とか。いろいろ違った光の下に置かれると、それがどんなふうに変わって見えるか、じっくり考えるんだ。何も考えないのがいちばんいいが、何か考えにゃならんのならそういうことを考えて、それ以上は何も考えるな。グランドアーミー・プラザに着いたら、目を開けたまえ。電車を降りて、階段を昇れ。そこから、ブルックリン美術館に行くんだ。イースタン・パークウェイにあって、駅から五分とかからん。人に道を訊くんじゃないぞ。迷子になっても、とにかく誰とも口をきくな。いずれ見つかるはずだ、そんなに手間はかからん。石造りの大きなビルで、マッキム・ミード・アンド・ホワイト社の設計だ。君がこないだ卒業した大学の建物を設計した会社だよ。見れば何となく見覚えがあるはずだ。ちなみにスタンフォード・ホワイトはマジソンスクェア・ガーデンの屋上でヘンリー・ソーという男に撃ち殺されたんだ。一九〇〇年代のことで、ホワイトがソーの女房にちょっかいを出したのが原因だった。当時は相当騒がれたものだが、まあいまの君にはどうでもいい話だ。とにかく美

CamScannerでスキャン

術館を探すことに集中したまえ。見つかったら、階段を上って、受付に座った制服の係員に入場料を払うんだ。いくらだか知らんが、一ドルか二ドル、そんなものだろう。その金も地下鉄の料金と一緒にミセス・ヒュームからもらえ。忘れるなよ、金を払うときも、口をきくんじゃないぞ。何もかも黙ってことを進めるんだ。アメリカ絵画の常設展をやっている階を探して、ギャラリーに入りたまえ。なるべくどの絵も見ないようにして歩け。二番目だか三番目の部屋に、ブレイクロックの『月光』があるはずだ。そこで止まって、絵を見なさい。まる一時間のあいだ、ほかの絵はいっさい無視して、『月光』だけを見るんだ。精神を集中してな。見る距離もいろいろ変えてみなさい。三メートル、五十センチ、二センチ。全体の構図を考えたり、細部を吟味したり、見方もいろいろ変えるんだ。メモを取ってはならん。その絵のあらゆる要素を記憶するようにしろ。人影や自然の事物の位置を正確に覚えて、カンバスのありとあらゆる地点の色を頭に入れるんだ。目を閉じて、自分でテストしてみたまえ。それからまた目を開けろ。目の前の風景のなかに入っていこうとしたまえ。目の前の風景を描いた画家の心のなかに入っていこうとしたまえ。ブレイクロックのつもりになってみろ。自分がこの絵を描いているつもりになってみろ。これを一時間続けたら、少し休憩だ。何ならギャラリーのなかを歩き回って、ほかの絵を眺めても構わん。それからブレイクロックの絵に戻れ。世界じゅうにこの絵しか存在しないつもりになって、絵に心を委ねるんだ。十五分そうやったら、その場を離れろ。もと来た道順で美術館のなかを歩いて、外に出て、地下鉄の駅まで歩いていきたまえ。マンハッタン行きの急行に乗って、七十二丁

目で各駅停車に乗り換えて、ここに帰ってくるんだ。地下鉄に乗っているあいだは、行きと同じことをしていなさい——目を閉じて、誰にも何も言うな。『月光』のことを考えたまえ。絵を頭のなかに思い描いてみたまえ。それを記憶に刻み込むよう努めるんだ。できるだけ長いあいだ、それにしがみついているんだ。わかったか？」

「と思いますが」と僕は言った。「ほかに何か？」

「何もない。だが覚えておけよ、ちゃんと言われたとおりにやらなかったら、君とは二度と口をきかんからな」

地下鉄に乗ると、僕はずっと目を閉じていたが、何も考えないというのは大変だった。小さな石をひとつ思い浮かべて、それに精神を集中してみようとしても、思ったより難しかった。そうするには周囲が騒がしすぎるのだ。大勢の人がぺちゃくちゃ喋り、電車が揺れると隣の人の体が僕の体に触れた。当時はまだ、次の駅を知らせるアナウンスが導入されていなかったから、頭のなかで進行状況をたどっていなくてはならなかった。僕は指を使って、止まった駅の数を記録した。一駅通過、あと十七駅。二駅通過、あと十六駅。そうすまいとしても、まわりに座っている人々の会話に引き込まれてしまいそうになった。ぐいぐい迫ってくるそれらの声を締め出すすべはなかった。新しい声が聞こえてくるたびに、その持ち主がどんな人物なのか、目を開けて見てみたい誘惑に駆られた。それは抗いがたい、強い誘惑だった。人は誰かの声を聞くと、ただちにその話し手のイメージを作り上げるものだ。ほんの数秒のあいだに、主たる要素はだいたい揃う。性別、おおよその年齢、階級、生まれた地方、

そして顔の色まで、目が見えるなら、そのイメージがどこまで本物と一致しているか確かめてみたいと思うのが人情だろう。たいていは結構合っているものだが、とんでもない見当違いだったりする場合も少なくない。喋り方からトラックの運転手と思いきや大学教授だった、小さな女の子だと思ったらお婆さんだった、黒人と聞こえたのが実は白人だった、等々。がたごと揺れながら暗闇を進むなか、僕はそういったことについて考えずにはいられなかった。無理に目を閉じつづけていると、世界の姿を一目見てみたい、という気持ちになってきた。飢えにも似たその欲求のなかで、ふと僕は自分が、盲目であるとはどういうことかを考えているのに気づいた。そしてそれこそまさに、エフィングが僕に望んだことだったのだ。数分のあいだ、僕はこの考えをもてあそんでいた。と、駅を数えるのを忘れてしまっていたことに気づいて、にわかにパニックに襲われた。もしも、ある女性が誰かに、次はグランドアーミー・プラザでしょうかと訊ねているのが聞こえてこなかったら、ブルックリンの果てまで行ってしまったかもしれない。

冬の平日の午前中のことで、美術館はがらがらだった。受付で入場料を払ってから、僕はエレベーター係に指を五本広げてみせ、黙って階上に向かった。アメリカ絵画は五階にあって、最初の部屋で居眠りをしている警備員以外、そのウィングには僕しかいなかった。厳粛な雰囲気が高められたような感じがして、いい気分だった。エフィングに言われた通り、ほかの絵をなるべく無視するよう努めながら、がらんとした部屋をいくつか通過する。色が目に飛び込んできたり、名前がぱっと頭に浮かぶことも何度かあったが（チャーチ、ビアスタ

CamScannerでスキャン

ット、ライダー）、ちゃんと見てみたいという欲求は何とか退けた。そして、ブレイクロックの絵が見つかった。この奇妙で手の込んだ訪問の目的たる『月光』が僕の眼前にあった。突然訪れた、その最初の瞬間、僕は失望を覚えずにいられなかった。自分がどういうものを予想していたかはわからない。たぶん何か壮大な、派手派手しい、見るからに大作といった感じの代物を想像していたのだろう。少なくとも、いま目の前に見えている、何とも地味な小品を思い描いていたのでないことは確かだ。寸法はわずか六十×八十センチ。一見、色らしい色もほとんどない。濃い茶、濃い緑、隅っこにかすかに赤があるだけ。よく描けた作品であることは間違いないが、エフィングが惹かれそうな（と僕が勝手に想像していただけなのだが）劇的要素は何もない。おそらく僕の失望は、絵それ自体にではなく、自分がエフィングを読み違えていたことに向けられていたのだろう。それはきわめて瞑想的な作品だった。内省と平穏の風景だった。これがわが狂える雇用主に何かを語りえたのかと思うと、どうにも訳がわからなくなってきた。

　僕はエフィングのことを頭から追い払うように努め、それから二、三歩うしろに下がって、自分の目で絵を見はじめた。完璧に丸い満月が、カンバス中央に居座っている。どうやら数学的にもぴったり中央に位置しているらしい。この青白い円板が、その上下のあらゆるものを照らしている。空を、湖を、蜘蛛の巣のように枝を伸ばした一本の大木を、地平線に広がる低い山々を。前景には開けた土地があって、中央を流れる小川で二つに仕切られている。川の左岸に、インディアンの円錐形テントと焚き火がある。何人かの人物が火を囲んでいる

ように見えるが、はっきりしたことはわからない。人間の輪郭を示すとおぼしき、ごく簡単な筆あとが五つ六つあるだけで、それが残り火を浴びて赤く光っている。大木の右手に、ほかの人影と離れて、馬に乗った一人の男の姿があり、川向こうを眺めている。瞑想にふけるかのように、男の体はぴたっと凍りついて見える。背後の大木は男の十五倍か二十倍の背丈がある。そのコントラストのせいで、男はいかにもちっぽけな、取るに足らない存在に見える。男も馬も単なる影絵でしかない。深みも個性もない、黒い輪郭だけの姿。向こう岸は風景もいっそう霞み、ほぼ完全に影に埋もれている。例の大木と同じく蜘蛛の巣のように枝を伸ばした、小ぶりの木が何本か立っている。それから、底の方に目をやると、ごくわずか、ほんのり明るいものが見える。人影のようにも思えるし（仰向けに横たわった人物が、眠っているようにも、死んでいるようにも、夜空に見入っているようにも見える）、あるいは、これもやはり焚き火の残り火であるようにも見える。どちらなのか、何とも決めかねた。こんなふうにして、下の方の、不明瞭な細部にしばらく目を凝らしていたものだから、もう一度空を吟味しようと顔を上げると、上方の何もかもがひどく明るいのを見て、僕ははっと驚いてしまった。満月を計算に入れるにしても、この空はどう考えても見えすぎる。表面を覆っている、ひびの入った上塗りの下で、絵の具が不自然な強烈さをもって輝いているのだ。背景の地平線の方に視線をのばすと、輝きはなおいっそう増してくる。まるで地平線の彼方は昼で、山々には陽でも照っているかのように。いったんこの点に気づくと、ほかにも奇妙なところがいくつも目についてきた。たとえば空は、大部分が緑がかった色をしている。緑

CamScannerでスキャン

の黄色い雲をところどころに配したその空は、次第に厚みを増すうねるような筆あとでもって、大木のかたわらを覆っている。奥深い空間のなかで、天空が螺旋のように渦を描いている。どうして空が緑なんだろう、と僕は自問してみた。それは下の湖と同じ色をしている。でもそんなはずはない。真っ暗闇に包まれた夜ならともかく、天と地はつねに違っているものだ。これほどの技巧の持ち主が、それくらい承知していなかったはずはない。では、単なる現実の風景の再現が目的でなかったとすれば、ブレイクロックの狙いは何だったのか？　懸命に想像してみても、緑色の空を見るたびに思考は止まってしまう。大地と同じ色の空、昼のように見える夜。人物たちは壮大な情景のなかに埋もれ、にわかには判別しがたい影にとどまっている。いってみれば、生命を表わすごく簡単な象形文字だ。見当はずれな象徴的解釈などしたくはなかったが、絵をじっくり眺める限り、結論は避けられないように思えた。風景に較べてごくちっぽけな姿であるにせよ、インディアンたちは恐怖も不安も示していない。みずからの環境に快く身を浸し、自分自身と調和し、世界と調和している。そう考えれば考えるほど、ますますそうした静謐が絵を満たしているように見えてきた。空を緑に塗ったのも、このハーモニーを強調するためだったのだろうか。天と地の結びつきを示そうとしたのだろうか。人がおのれの環境のなかで快く生きられるなら、自分をまわりの事物と一体に感じることができるなら。この世の生にも神聖な感覚が染みわたるはずだ――そうブレイクロックは語っているように思えた。もちろんこれはみな僕の臆測にすぎない。でも僕には、ブレイクロックがアメリカ先住民の田園風景、すなわち白人がやって来て破壊してしまう以前

のインディアンの世界を描いているように思えてならなかった。壁の銘板を見ると、製作は一八八五年。僕の記憶が正しければ、ちょうどカスター最後の反撃（訳注 白人側の全滅に終わった）と、ウーンデッドニーの虐殺（訳注 インディアン一四六人が無差別に殺された）とのはざまにあたる年だ。いいかえれば、事態はすでに終局を迎えていて、ここに描かれているような風景を生き残らせようにも、もう手遅れになってしまっていた時期だ。きっとこの絵は、我々が失ってしまったあらゆるものを表わすべく描かれているのだ、と僕は思った。これは風景画ではなく記念碑なのだ。消滅してしまった世界を悼む挽歌なのだ。

僕は一時間以上そこにとどまっていた。離れて立ってみたり、すぐそばに寄ってみたりしながら、少しずつ絵を頭のなかに刻み込んでいった。自分が発見したものが、エフィングが意図した通りのものかどうかは自信がない。でも、美術館を出るころには、何をかはわからないが、とにかく何かを発見したんだという思いはあった。僕はくたくたに疲れていた。精力を使い果たしてしまった気がした。ふたたびIRTの急行に乗って、目を閉じると、眠らないようにするのに一苦労だった。

マンションに戻ったのは三時ちょっと過ぎだった。ミセス・ヒュームが言うには、エフィングは昼寝をしているということだった。この時刻にエフィングが昼寝をするなんて、いままでなかったことだ。つまりいまは僕と話す気がないということだろう。それで結構。こっちだって彼と話す気分ではない。僕は台所でミセス・ヒュームと一緒にコーヒーを飲み、それからまたコートを着て出かけ、アップタウン方面、モーニングサイド・ハイツ行きのバス

CamScannerでスキャン

に乗った。八時にキティと待ちあわせしていたので、それまでの時間、コロンビアの美術資料館で少し調べものをしようと思ったのだ。行ってみると、ブレイクロックに関する資料はごくわずかしかなかった。論文が数点、古いカタログが二冊、その程度だ。けれども、それらをつなぎ合わせてみると、エフィングが嘘をついていなかったことは確認できた。僕としてはそこがいちばん知りたい点だったのだ。細かい事実や年代には勘違いもあったが、肝腎なところは全部合っていた。ブレイクロックの生涯は悲惨きわまるものだった。彼は苦しみ、発狂し、誰にも顧みられずに死んでいった。精神病院に入れられる前に、自画像入りの紙幣を何枚も描いたという話も本当だった。ただしエフィングが言ったように千ドル札ではなく、百万ドル札である。何とも壮大な額だ。若いころ西部を旅してインディアンとともに暮らしたこと、並外れて小柄だったこと（一五〇センチ足らず、四十キロ未満）、子供が八人いたこと、どれもみな真実である。僕がとりわけ興味を惹かれたのは、一八七〇年代に描かれたブレイクロック初期の作品に、セントラルパークを舞台にしたものが数点あることだった。そこには、公園が出来て間もないころに立っていた丸太小屋が描かれていた。かつてニューヨークだったところの、ひなびた風景を写し取った絵を眺めていると、自分がそこで過ごした惨めな日々を僕は思わずにいられなかった。ブレイクロックは画家としての全盛期を、もっぱら月光の情景を描くことに費やしていた。ブルックリン美術館で見たのとだいたい同じような作品を、ほかにも何十点と描いていた。同じ森、同じ月、同じ沈黙。これらの絵において、月はつねに満月である。つねに同じ、小さな、完璧に丸い円がカンバスの中央に陣取り、

かすかに青みがかった白い光を発している。そういった絵を五つ、六つと眺めているうちに、月は次第に周囲から分離していった。僕はもはやそれを月として見ることができなくなった。それはカンバスに開いた穴になった。別世界に通じる白い裂け目になった。あるいは、ブレイクロックの目。虚空に宙づりになった空白の円が、もはやそこになくなってしまったものをじっと見下ろしていた。

翌朝エフィングは、いよいよ仕事に取りかかろうと張り切っていた。ブレイクロックにもブルックリン美術館にも触れずに、いきなり、ブロードウェイへ行ってノートを一冊とまともなペンを一本買ってこい、と僕に言いつけた。「さあ、やるぞ」とエフィングは言った。「真実の瞬間だよ。今日から書きはじめるんだ」

買い物から帰ってくると、僕は例によってソファに座り、ノートの一ページ目を開いてエフィングが口を開くのを待った。たぶんまず前置きに事実や数字が列挙され（誕生日、両親の名、出身校等々）それから本題に入るものと思っていた。だが予想は見事に外れた。彼はいきなり喋り出したのだ。出し抜けに、話のど真ん中から。

「言い出したのはラルフだった」とエフィングは言った。「だがそそのかしたのはモランだ。トマス・モラン、白い顎ひげに麦わら帽子の爺さんだ。当時ロングアイランドの端っこに住んで、あたりの景色を小さな水彩画に描いていた。砂丘や芝生、波と光、よくある毒にも薬

にもならん間の抜けた絵だよ。いまでこそあそこに描きにいく絵描きはゴマンといるが、一番最初にやったのはモランだ。奴がすべてをはじめたんだ。そんなわけでわしが名前を変えたときも、奴に敬意を表して、ファーストネームはトマスにしたのさ。エフィングのほうはまた別の話だ。こっちは思いつくのにちょっと時間がかかった。まあ君も察しがつくだろう、ちょっとした言葉遊びさ」

「そのころはわしもまだ若かった。二十五か六、結婚だってまだだ。ニューヨークの十二丁目に家があったが、たいていはアイルランドにいた。そっちのほうがずっと気に入っていたんだ。そこで絵を描き、夢を見ていた。家はもうなくなっちまったが、それはまあ仕方ない。何せずいぶん昔の話だし、物事は変わっていくものだ。進歩ってやつだな。いまじゃバンガローと建売ばっかりで、どんな阿呆でも自分の車を持ってる。めでたい話さ」

「その町は名前をショーラムといった。わしが知る限り、いまもその名で通ってるはずだ。おい、ちゃんと書いてるか？　一度しか言わんからな、書きとめておかなかったら永遠に失われてしまうんだぞ。忘れるなよ。ちゃんとやらなきゃぶっ殺すぞ。この手で絞め殺してやるからな」

「その町は名前をショーラムといった。偶然だが、テスラがウォーデンクリフ・タワーを建てたのもこの町だ。一九〇一年か、二年ごろの話だよ。世界無線装置、といってもまあ君は知らんだろうが。J・P・モーガンがスポンサーで、設計はスタンフォード・ホワイトがやった。ホワイトのことは昨日話したな。奴がマジソンスクェア・ガーデンの屋上で撃ち殺さ

れて、計画も途中で頓挫しちまったのさ。でも建ったものはそのまま、十五年か六年残っていた。高さ六十メートル、どこにいても絶対に見えた。とにかく大きいんだ。頭上高くそびえるロボットの見張りという感じだよ。わしはそれを、バベルの塔として考えていたものだ。あらゆる言語が飛び交うラジオ放送、世界じゅうがぺちゃくちゃ喋りあう。そんな代物が、わしの住む町にあったのさ。第一次大戦中に、ドイツがスパイ通信に使っているという噂が立って、壊すことにしたのさ。どっちにしろ、そのころにはもうわしは町を離れていたから関係ないがね。かりにまだいたとしても、取り壊しに涙する、なんてことはなかったろうよ。何もかも壊してしまえ、というのがわしのモットーだ。何もかも壊して、きれいさっぱり消滅させてしまえ、とね」

「テスラをはじめて見たのは一八九三年だ。わしはまだほんの子供だったが、見た年だけははっきり覚えている。シカゴでコロンビア万博があった年で、親父に連れられて汽車で出かけていったんだ。よその町に行ったのもあれがはじめてだった。コロンブスのアメリカ発見四百年を祝って、発明品やら最新の機械やらを片っ端から集めてわが国の科学者たちの偉大さを世に知らしめる、という謳い文句の万博だ。二五〇〇万人が見にきた。まるでサーカスみたいだったな。ジッパーも、観覧車も、そこではじめて公開された。新時代のあらゆる驚異が、あそこではじめて人目に触れたんだ。テスラはウェスティングハウス社の展示の責任者だった。〈コロンブスの卵〉と名のついたその会場に入っていくとな、白いタキシードを着たのっぽの男が舞台に立っている。そいつが変な訛りのある喋り方で（あとでセルビア

CamScannerでスキャン

訛りだとわかった）話をしているのさ。あんなに悲しげな声は聞いたことがないね。で、何をするかというと、電気を使って手品をやるんだ。金属の卵をテーブルの上でぐるぐる回したり、指先から火花を散らしてみたり、客はみんな、わしもそうだったが、息を呑んで見とれたものさ。あんなものは誰も見たことがなかったからな。そのころはちょうど、エジソンとウェスティングハウスの、直流・交流論争の真っ最中だった。だからテスラの芸も宣伝効果があったんだ。奴が交流電流を発見したのは、その十年くらい前のことだった。周期的に変化する磁場とかいうやつだな。それまではエジソンの使っていた直流電流しかなかったわけだが、交流は直流よりはるかに優れていた。力が断然違うんだ。直流だと二キロか三キロごとに発電所を置かなきゃならんが、交流なら一つの発電所で都市全体がまかなえる。テスラはアメリカに渡ってきてまず、自分のアイデアをエジソンに売ろうとした。ところがメンローパーク（訳注 エジソンの研究所があった町）の馬鹿野郎ときたら、まるで相手にしなかった。そんなものが使われた日には自分の電球が時代遅れになっちまうと思ったんだな。ここでもまた、諸悪の根源は電球というわけさ。そこでテスラは交流の発見をウェスティングハウスに売った。で、ナイアガラの滝で例の発電所の建設がはじまった。全国で最大の発電所だよ。エジソンは反撃にかかった。交流は危険である、そばに寄っただけで死んでしまう、と宣伝をやり出したんだ。それを証明しようと、手下どもを国じゅうに送り出して、祭りの会場なんかでデモンストレーションをやらせたんだ。わしもすごく小さかったころいっぺん見たことがある。怖くて小便を洩らしちまったよ。舞台に動物を上げてな、電気で殺すんだ。犬、豚、なかには

牛までいた。それを目の前で殺すんだ。電気椅子の発明も、元はといえばこれさ。エジソンの奴、交流の危険を示すためにあんなものをでっち上げて、シンシンの刑務所に売り込んだのさ。あそこじゃいまだに使われてるはずだ。麗しい話じゃないか、え？　世界がこれほど美しい場所でなかったら、わしらみんな、夢も希望もなくしちまうかもしれんな」

「〈コロンブスの卵〉で論争もけりがついた。大勢の人間がこの目でテスラを見て、交流のことをもう怖がらなくなった。もちろんテスラは気が変になっていた。だが少なくとも、金もうけが目当てじゃなかった。何年か経って、ウェスティングハウスが借金をしょい込んだとき、テスラは友情を発揮して、特許権使用料の契約書を引き裂いちまったんだ。何百万、何千万ドルの金がからんでいたのに、それをあっさり破り捨てて、また別のことをやり出したのさ。当然の話、死んだときは無一文だったよ」

「テスラを自分の目で見て以来、わしは奴の動向を新聞で追うようになった。あのころは年じゅうテスラの記事が載っていた。新しい発明品や、奴が喋ったとんでもない科白が書き立てられておった。新聞のネタとしてはうってつけだったんだな。ウォルドーフ・ホテルに一人住まいの、年齢不詳、悪鬼みたいな面相の男が、細菌を病的に怖がり、あらゆるたぐいの恐怖症にとり憑かれていて、しじゅう神経過敏の発作を起こして発狂寸前まで行っている。隣の部屋で蠅がぶんぶんいう音も、奴にとっては飛行大隊みたいなものだった。橋の下を歩くだけで、頭蓋骨をぎゅっと圧迫されているような気になってしまう。橋がいまにも落ちてくるみたいに思っちまうんだ。マンハッタンの南側に研究所があってな、たしかウェスト・

ブロードウェイだ、ウェスト・ブロードウェイとグランドの角だよ。あそこで奴が発明しなかったものがあったら聞きたいもんだね。真空管、リモコン魚雷、無線で電流を通すプラン。そうさ、無線でだよ。地面に金属棒を埋め込んでな、空中からじかにエネルギーを吸わせるのさ。音波で大地のパルスを集める機械を発明した、と言ってのけたこともあった。集めたパルスを、ある小さな一点に集中させるんだ。その機械をブロードウェイのビルに押しつけると、五分と経たないうちに建物全体がぐらぐら揺れ出した。そこでやめたからいいようなものの、あのままやっていたらいずれビルごと崩れ落ちただろうという話だった。子供だったわしは、そういう記事を読むのが大好きだった。頭のなかがそういう話でいっぱいになっていった。世間じゃテスラについて実にいろんな臆測が飛び交った。来たるべき世の預言者という感じでな、誰一人その魔力に逆らえなかった。自然の全面的征服！ あらゆる夢が実現された世界！ いちばん馬鹿馬鹿しい話の出どころは、ジュリアン・ホーソーンという男だ。偉大なるアメリカ作家ナサニエル・ホーソーンの息子だよ。ジュリアン、というのは君は覚えてるかどうか知らんがわしの名前でもある。それでまあ何となく興味があって、このホーソーンの息子がどんな仕事をしているか気をつけて見ていたんだ。当時は結構売れっ子の物書きだった。掛け値なしの三文文士で、親父がずば抜けた名作家だったように、息子はずば抜けた駄文家だった。情けないったらない。考えてもみたまえ、メルビルやらエマソンやらがしょっちゅうわが家に出入りしてるなかで育った末に、とびっきり安っぽい物書きになっちまうんだからな。著書は五十数冊、雑誌の記事となればそれこそ何百と書いた。一つ

殺らすならべただよ。あるときなんか、株券を偽造したか何かで刑務所に入れられたこともある。役務署をだまそうとしたんだったかな。細かいことは忘れたが、まあとにかくこのジュリアン・ホーソーンという男、テスラと知りあいだったんだ。一八九九年、ひょっとして一九〇〇年だったかもしれんが、テスラはコロラド・スプリングズに行って、稲妻の球電現象を研究しようと山のなかに研究所を建てた。ある晩、夜遅くまで仕事をしていて、受信機のスイッチを切り忘れたことがあった。と、奇妙なノイズが機械から聞こえてきた。単なる雑音か、ラジオ信号か。何だったのかは誰にもわからない。翌朝テスラは新聞記者たちに、これは宇宙空間に知的生物が存在する証しである。火星人が私にメッセージを送ってきたのである、と宣言した。あろうことか、誰一人その発言を疑いはしなかった。かのケルビン卿（訳注　イギリスの物理学者。王立協会会長）まで、どこかの晩餐会で一杯機嫌になったときに、あれぞ史上まれに見る科学的大発見であると持ち上げた。このことがあってからまもなく、ジュリアン・ホーソーンがテスラについて書いた記事が、全国誌に載ったんだ。テスラの頭脳はあまりに優秀であり、およそ人間とは思えない、あれはどこかほかの惑星で生まれたにちがいない、という記事だ。たしか金星生まれという説だったな。それが特別な使命を帯びて地球に送られてきたのだ、というのさ。すなわち、地球人に自然界の秘密を教え、神の行ないを知らしめるためにやって来たのである、とね。とんだお笑い草、と思うだろう？　だがまたしても、誰も笑わなかった。真剣に受け止める人間が大勢出てきた。そして六十年、七十年経ったいまも、まだ信じてる奴が何千といるはずだ。カリフォルニアには、テスラを異星人として崇拝

する宗派がいまもあるんだ。信じなくても構わん。この家に資料があるはずだから、自分で確かめてみるといい。雨の日にはよく、パベル・シュムに読んでもらったものさ。いやあ、とんでもない代物だよ。とにかく笑える。腹が二つに裂けちまいそうなくらい笑える」

「こんな話を長々とするのも、テスラという人物がわしにとってどんな意味を持っていたかを伝えるためだ。テスラはそんじょそこらの人間とは違っていた。だから、例のタワーを建てに彼がショーラムにやって来たとき、わしは自分の幸運が信じられなかった。わが最大の偉人が、こんなちっぽけな町に毎週通ってくるというんだからな。彼が汽車から降りてくるのを、いつもじっと眺めていたものさ。あの人を眺めているだけで何か学べるんじゃないか、そばにいるだけで頭のよさが伝染するんじゃないか、そんなふうに思っていたんだな。話しかける勇気なんかとてもなかった。でもそんなことはどうでもよかった。テスラがあそこにいるんだ、見たくなったらいつでもその姿を見られるんだ、そう思うだけで気分が高揚してくるのさ。あるとき、テスラと目が合ったことがあった。よく覚えているよ。ものすごく重要な瞬間だった。テスラと目が合って、わしは感じたんだ、相手がわしをつき抜けてその向こうを見ているのを。まるでわしなんか存在しないみたいに。信じがたい瞬間だった。テスラの視線がわしの目を貫いて、頭のうしろから出ていくのを感じたんだ。わしの脳味噌はジュージューと音を立てて焼け、燃えつきて灰になった。生まれてはじめて、わしは自分がゼロだと悟った。俺はまったくのゼロなんだ、と。いや、べつにそれで落胆したわけじゃない。はじめはとにかくただ呆然としていた。そして、いったんそのショックが和らいでくると、

今度は逆に元気が湧いてきた。まるで自分自身の死をくぐり抜けたみたいな気分だった。いや、それとも違うな。わしはまだ十七の若僧だった。テスラの目に射ぬかれて、死というのはきっとこういうものだという実感を生まれてはじめて味わった、そう言ったほうがあのときの気持ちに近いな。口のなかに死の味を感じて、わしは悟ったのさ、俺は永遠に生きられるわけじゃないんだ、と。そういうことを学ぶには時間がかかる。だがいったん学んでしまえば、自分のなかで何もかもが変わってくる。もう二度と、前の自分には戻れない。十七のわしは、そうやって突然、疑念のかけらもなしに、自分の人生が自分自身のものだと悟ったんだ。それは自分に属しているのであって、ほかの誰のものでもないんだと」

「いいかフォッグ、これは自由についての話なんだ。あまりにも大きな絶望、あまりに圧倒的で、すべてが崩れ落ちてしまうほどの絶望、そういうものを前にしたとき、人はそれによって解放されるしかないんだよ。それしか選択はないんだ。さもなきゃ、こそこそ隅っこに這っていって、死んじまうしかない。テスラはわしに、わしの死を与えてくれたんだ。そしてその瞬間、わしは自分が画家になるんだということを理解した。それこそわしが求めているものだった。それまでは、そう認めるだけの度胸がなかったんだ。わしの親父は株ひとすじの、金もうけのことしか頭にない男だった。わしが言うと、そんなものは女子供のすることだと言って相手にしなかった。だがわしはお構いなく絵の道に進み、画家になった。それからほんの数年後、親父はウォール街のオフィスで仕事中あっさりくたばった。わしが二十二か三のころだ。遺産は全部わしのふところに転がり込んできた。一セン

ト残らずだ。ハ！　かくしてわしは、史上最大の金持ち画家になった。百万長者の芸術家だ。なあフォッグ、考えてもみたまえ、わしはいまの君と同じ年ごろで、何でも持っていたんだ。欲しいものは一つ残らずすべて持っていたんだよ」

「わしはその後もう一度テスラを見た。でもそれはまだずっと、ずっと先の話だ。わしが行方をくらましてから、わしが死んでから、わしがアメリカを去ってまた戻ってきてからのことだ。一九三九年、四〇年ごろに、わしはパベル・シュムと一緒にフランスを出た。ドイツ軍が進軍してこないうちにと、荷物をまとめて逃げ出したのさ。パリはもうわしたちの場所じゃなかった。脚の悪いアメリカ人と、ロシア人の詩人の居場所なんかじゃなかった。はじめはアルゼンチンに行こうかとも考えたんだが、どうせならニューヨークをもういっぺん見てやろうじゃないか、ひょっとしてまた元気が出てこないとも限らないし、と思ったのさ。何しろもう二十年も離れていたからな。わしらが着いたのは、ちょうど万国博がはじまったときだった。またしても、進歩の賛歌というわけさ。だが今回のは、わしにとっては何の意味もなかった。あのころのヨーロッパの修羅場を見てきた人間からすりゃ、あんなのはみんなまやかしだ。このまま進歩が続けば人類は破滅だよ、それくらいどんな阿呆にだってわかるさ。君、ミセス・ヒュームの弟にいっぺん会ってみるといい。チャーリー・ベーコン。戦争中にパイロットをやっていてな、終戦近くにユタに行って、日本に原爆を落とす予定のグループに入って訓練を受けていたんだよ。やがてチャーリーは、自分がどういう仕事にかかわっているのかを知って、気が狂っちまった。かわいそうに、誰が奴を責められる？　進歩

なんてそんなものさ。毎月毎月、もっと大きな、もっと強力な鼠取りが作られるだけの話だ。この調子じゃそのうち、いっぺんに世界じゅうの鼠を殺せるようになるだろうよ」

「わしはニューヨークに戻ってきて、パベルと一緒に街を見て回るようになった。いま君とやっているのと同じように、車椅子を使って、途中で立ち止まっては物を見るんだ。ただし、時間はいまよりずっと長かった。まる一日やっていたものさ。パベルはニューヨークがはじめてだった。奴をあちこちの場所に案内して、いろんな地域をさまよいながら、わしももう一度この街を知り直そうとしてみたんだ。一九三九年夏のある日、四十二丁目と五番街の角の図書館に行ったあと、わしらは一休みしようとブライアントパークに寄った。そのときだ、テスラをもう一度見たのは。パベルはわしと並んでベンチに座っていた。と、わしらからほんの三メートルばかりのところで、どこかの爺さんが鳩に餌をやっている。そこにつっ立った爺さんのまわりを、鳩たちがぱたぱた飛んだり、頭や腕に止まったりしている。何十羽という鳩がくーくー言いながら、爺さんの服に糞を落としたり、手から餌をもらったりしているんだ。爺さんは鳩たちにひっきりなしに話しかけて、連中をダーリンだの恋人だの天使だのと呼んでいる。その声を聞いた瞬間、わしはそれがテスラだとわかった。やがて彼が、ふとわしの方を向いた。間違いない、テスラだ。八十歳の年寄りが、幽霊みたいに色が白くて、痩せっぽちで、いまのわしと同じくらい醜い姿だった。それを見て、わしは思わず笑い出したくなったよ。異星から来たかつての天才、わが青春のヒーロー。それがいまじゃ、尾羽打ち枯らした老いぼれでしかない。まるっきりただの浮浪者だ。ニコラ・テスラさんですね、

とわしは声をかけた。まわりくどい挨拶は抜き、あっさりそう切り出したんだ。ニコラ・テスラさん、昔のあなたを知っていましたよ、と。彼は笑顔を浮かべて、軽くお辞儀をした。いまちょっと忙しいところでしてな、またいつかお話しましょう、と彼は答えた。わしはパベルの方を向いて、パベル、テスラさんにお金をさし上げてくれ、鳥の餌を買う足しにしていただこう、と言った。パベルは立ち上がり、テスラのいるところに歩いていって、十ドル札を一枚差し出した。なあフォッグ、あれは何十年に一度の瞬間だったよ。あんな瞬間はもう二度とないだろうよ。ハ！　あの目に浮かんだ混乱を、わしは絶対忘れんよ。ミスター・トゥモロウ、新たな世界の預言者！　パベルが十ドル札を差し出す。テスラが知らん顔をしようと必死になっているのがありありとわかった。金から目をそらそうと、懸命にこらえているんだ。でも無駄だった。奴はそこに立ちつくし、気の触れた乞食みたいに、ぽかんとその金を眺めていた。そして奴はそれを受け取った。パベルの手からひったくるみたいにして、そのままポケットに突っ込んだんだ。どうも誠にご親切に、とテスラはわしに言った。ありがたいことです。可愛いダーリンたちにたっぷり食べさしてやりたいですからな。それから奴はわしらに背を向けて、鳥たちに向かってまた何かぶつぶつ言い出した。それとともにパベルもわしの車椅子を押しはじめて、ことはそれでおしまいになった。わしはそれっきり二度とテスラに会わなかった」

エフィングはしばし間を置いて、自分がやったことの残酷さを噛みしめていたが、やがてもう少し落着いた口調で、ふたたび口を開いた。「大丈夫、話はちゃんと進んでおる。心配

CamScannerでスキャン

せんでよろしい。とにかくペンを動かしていなさい、そうすりゃうまく行く。おしまいには、語られるべきことはすべて語られ、何もかも明るみに出る。さっきはロングアイランドの話だっただろう？ トマス・モランの話、どうやってこの一件がはじまったかという話。どうだ、忘れちゃおらんだろうが。君はただ言葉を書いておればいい。君が言葉を書きとめんことには、死亡記事もできやせんからな」

「わしを焚きつけたのはモランだった。奴は一八七〇年代に西部に行っていて、上から下まで全部見て回ってきていた。もちろん、ラルフみたいに、ネジの外れた巡礼者よろしく荒野を一人さまよったわけじゃない。どう言ったらいいかな、要するに、ラルフとは探求のやり方が違っていたんだな。モランの旅はもっと豪華だった。一八七一年にヘイデン探検隊の専属画家として行って、七三年にもパウェルの一隊に同行した。パウェルの本は二か月ばかり前に読んだろう、あの挿絵はみんなモランさ。パウェルが崖っぷちにぶら下がって、片手で必死にしがみついている絵は覚えてるか？ よく描けておったろう、あの腕前は認めにゃならん。あいつは西部の絵で有名になった。西部がどんなところかをアメリカじゅうに教えたのは奴の手柄だ。グランドキャニオンを最初に描いたのも奴だ。あの絵はいまワシントンの議事堂の壁に掛かっているはずだ。イエローストーンの最初の絵、グレートソルト砂漠の最初の絵、南ユタの峡谷地帯の最初の絵、どれもみんなモランだよ。明白なる運命！（訳注 アメリカ合衆国は北米全土を支配してしかるべきだという十九世紀の理念）モランの絵はその運命のための地図となり、それに姿かたちを与え、それを凝縮して、アメリカの一大利潤追求システムに組み入れたのさ。西部は大陸最後

の秘境だった。まだ誰も探検したことのない、空白の領域だった。それがモランのおかげで小綺麗なカンバスに並べられて、誰もが見られるようになった。我らの胸を突き抜ける、黄金の大釘！」

「わしはモランのようなタイプの画家じゃなかった。そこのところは間違えるなよ。わしは新しい世代に属していて、ああいう甘ったるいがらくたは認めなかった。一九〇六年、七年にパリに行っていたから、新しい流れをちゃんと知っていた。フォービスム、キュビスム、若いころからみんな見聞きしていた。いったん未来を味わってしまったら、人間、後戻りできるもんじゃない。五番街にあったスティーグリッツのギャラリーの常連とも知りあいで、よく一緒に飲みにいって芸術談義を戦わしたもんだ。連中もわしの絵を気に入ってくれてな、新進気鋭の画家ともてはやしてくれた。マリン、ダブ、デムース、マン・レイ、みんな知りあいだった。あのころはわしも結構切れ者でな、頭のなかには気のきいた考えがぎっしり詰まっておった。いまでこそ誰でもアーモリー・ショウ（訳注　一九一三年にニューヨークで開かれた、ヨーロッパの前衛美術をアメリカに紹介した画期的な展覧会）の話をするが、あんなのは当時からわしには目新しくも何ともなかった。ともかく、わしは大方の連中とはちょっと違っていた。わしは線なぞに興味はなかった。機械的抽象、世界としてのカンバス、インテレクチャル・アート——どれもわしに言わせりゃただの袋小路だ。わしにとって大事なのは色だった。わしの主題は空間だった。純粋な空間と光、目を打つときの光の力だ。そのころはまだ自然を描いていたから、モランのような奴と話すのもそれなりに楽しかった。まあ古臭いことは古臭いが、ターナーに感化されているという点で

はわしと共鳴していた。それと風景に対する情熱、リアルな世界に対する情熱、という点でもな。モランには年じゅう西部の話を聞かされた。君、あそこに行かなきゃ空間の何たるかはわからんよ。西部に出かけんことには、君の芸術はこれ以上成長せん。あの空はぜひとも経験せにゃならん、人生が変わるはずだ、そう説教するんだ。何度も何度も、いつも同じ話が、会うたびにかならず出てくる。そうこうするうちに、わしも思ったのさ。そうかもしれん、まあ行ってみたところで損はなかろう、と」

「一九一六年のことだ。わしはそのとき三十三歳で、結婚して四年ばかり経（た）っていた。いままでいろんなへまもやってきたが、あの結婚は一生の不覚だ。エリザベス・ウィーラーという女でな、家は金持ちだったから、金目当てでわしと結婚したわけじゃない。だが夫婦生活の実態を見る限り、そうだったとしても不思議はなかったろうよ。問題が明らかになるのに大して時間はかからなかった。結婚式の夜、あいつは女学生みたいにしくしく泣いた。そしてそのあと、門はばったり閉ざされた。そりゃあわしも、ときには城を急襲したりもした。でもそれだって、ただ腹が立ってそうしただけの話だ。そういつも逃げられるもんじゃないぞ、と向こうに思い知らせようというだけさ。いまでも不思議だよ、何だってあんな女と結婚する気になったのか。可愛らしい顔だちだったからか、体がふっくら丸かったからか、よくわからん。あのころは結婚するときはみんな処女だった。だから、どうせそのうちだんだん好きになってくるさとわしも思ったわけだよ。だが状況はちっとも変わらなかった。涙、抵抗、悲鳴、嫌悪（けんお）、それればかりさ。わしはまるで、野獣か、悪魔の手先扱い。まったくいま

いましい不感症女だ！　どうせなら尼寺にでも行けばよかったんだ。世界を動かしている闇と不浄を、わしはあいつに教えてやった。そしてそのことで、あいつはわしを絶対に許さなかったんだ。勃起せる人類（ホモ・エレクトゥス）、男体の神秘、そういうのはあいつにとって恐怖以外の何ものでもなかった。男の体に何が起きるのかをやっと自分の目で見たときなんか、もう失神せんばかりだったよ。まあこれくらいにしておこう。よくある話さ、君も聞いたことがあるだろう。そこでわしもお愉しみはよそに求めることにした。チャンスはいくらでもあったさ。わがペニスは孤独に悩んだためしがなかった。わしはダンディな青年紳士で、金はいくらでもあったし、股間はつねに炎に包まれていた。ハ！　この話もする時間があったらなあ。わしが入り込んだ、脈打つ数々の大奥。わが真ん中の脚の冒険と遍歴。兄貴二本は役立たずになっても、弟は立派に自分の人生を生きてきたんだ。実をいえば、いまだって元気なものだ。このチビ助ときたら、ずっと現役で通しておる」

「わかった、わかった、もうよそう。どうでもいい話さ。わしはただ、背景を伝えているだけだ。舞台設定だよ、これは。あの出来事を理解してもらうには、エリザベスとの結婚生活も知っておいてもらったほうがいいのさ。もちろん、それが唯一の原因だったとは言わん。だが一つの要因だったことは間違いない。話が持ち上がったとき、わしは消滅してしまうことに何のためらいも感じなかった。自分が死ぬチャンスを見てとり、それに飛びついたのさ」

「はじめからそういう計画を立てていたわけじゃない。三か月か四か月出かけて、それで戻

ってことごとく言ってやった。あんなところに行くなんて気狂い沙汰だ、と芸術家連中にも言われた。西部なんかに行って何の意味があるんだい、それよりヨーロッパに行きたまえ、アメリカには学ぶものなんて何ひとつありゃしないよ、と。わしは自分が行く理由を連中に説明した。説明していると、ますます行きたい気持ちが募ってきた。わしはさっそく準備に取りかかった。早く出かけたくて、うずうずしてきた。支度をはじめてまもなく、仲間を一人連れていくことになった。エドワード・バーンという名の若い男で、両親にはテディと呼ばれていた。この親父というのがわしの友だちでな、よかったらうちの息子も連れていってやってくれんかね、と頼んできたのさ。こっちもべつに異存はなかった。仲間がいたほうが楽しかろうし、バーンみたいに元気な若者なら文句はない。前にも何度か一緒に船旅をしたことがあって、頭のいい奴だとわかっていた。しっかり者で、呑み込みも早いし、体も丈夫で運動神経もいいときている。歳は十八か十九だった。バーンの夢は地誌学者になることで、全米地質調査協会に入って広大な国土を歩き回る人生を送りたいと思っていた。そういう時代だったんだよ、フォッグ。テディ・ローズベルト、金てこ髭、そういう男っぽいはったりが受ける時代だったんだ。バーンは親父にどっさりいろんな器具を買ってもらってな。六分儀、コンパス、経緯儀、一切合財だ。わしのほうも画材を二年分ばかり揃えた。鉛筆、木炭、パステル、油絵の具、絵筆、カンバス、画用紙。とにかくたっぷり描きまくるつもりだったからな。そのころにはモランの話にすっかり感化されて、旅への期待もものすごくふくらんでいた。自分の最高傑作を向こうで描くんだ、そんな気でいたから、材料がなくなったりしち

やたまらんと思ったのさ」

「ベッドでは石のように冷たいくせに、エリザベスの奴、わしが旅に出るとなると急に心配しはじめよってな。出発の日が近づくにつれて、だんだんふさいだ顔になってきた。出し抜けにわっと泣き出して、お願いですから出かけるのはやめて下さい、と頼み込むのさ。いまだに理解できんね、わしがいなくなってせいせいしそうなものなのに。訳のわからん女だよ、いつだってこっちの見通しと反対のことをやるんだ。出かける前の晩なんか、あいつにとって最高の犠牲まで払ったんだ。たぶん先に一杯ひっかけていたと思う。勇気を奮い起こすためにな。こともあろうに、向こうから寄ってきて、わが身を差し出すのさ。両腕を広げて、目を閉じて、まるっきり殉教者気取りだ。あれは絶対に忘れられんね。ああ、ジュリアン、とあいつは何度も言ったよ。ああ、わが愛しき夫。頭のおかしい人間によくある話だが、あいつもたぶん、これから何が起きるかがわかっていたんだな。何もかもが永久に変わってしまうってことを、直感で悟っていたんだ。その晩、わしはあいつと交わった。何といっても、それが夫としての務めでもあるわけだからな。でもだからといって、翌日の出発を取りやめたりはしなかった。結局、わしはあいつの顔をそれっきり二度と見なかった。というわけだ。わしはただ事実を伝えているだけさ。どう料理するかは君次第だ。その晩の出来事には続きがあってな、それにもいずれ触れにゃならんだろうが、わしがそのことを知ったのはずっとあとの話だ。三十年経ってからだ。人生がまる一つ済んだ先の話だよ。続き。そういうことなんだ。いいか、物事にはつねに続きがあるんだ。好むと好まざるとにかかわらず」

「バーンとわしは汽車で出かけた。シカゴ、デンバー、そこからさらにソルトレーク・シティまで。あの当時は途方もない長旅だった。やっとたどり着くと、一年くらい旅を続けてきたみたいな気がしたよ。一九一六年四月のことだ。ソルトレークでガイド役の男が見つかったんだが、その日の午後、何とそいつが鍛冶屋で脚を火傷しちまってな、また別の人間を探さにゃならん破目になった。いまから思えば不吉な前兆だが、その時点ではそんなこと考えやしない。さっさと次へ進んで、やるべきことをやるだけさ。そうして雇ったのが、ジャック・スコーズビーという男だった。元は騎兵隊の兵士で、歳は五十に届くか届かないかというところだった。あの地方じゃもう年寄りの部類に入る歳だが、あたりの地理には詳しいと町の連中も言うし、それ以上の奴も見当たらなかったから、雇うことにしたのさ。わしとしては連中の言葉を信じるしかなかった。そいつらはみんな赤の他人で、その気になればどんな嘘だってつけたはずだ。どうせ自分には関係ないんだからな。奴らからすりゃ、わしなんかただの青二才だ。東部からのこのこやって来た金持ちの青二才、そんな奴のことなんかどうだっていいじゃないか？　そういうわけさ、フォッグ。とにかく目をつぶって飛び込んでいって、いいほうに転ぶのを期待するしかなかった」

「スコーズビーについては、わしとしても最初から迷いはあった。でもとにかく早く山に入りたくてうずうずしていたんだ。人を小馬鹿にしたように笑う、いけすかない小男でな。頬ひげがぼうぼうに伸びて、体じゅうバッファローの脂だらけ。だが話はうまかった。それは認めなくちゃならん。いままでほとんど誰も足を踏み入れたことのない場所へあんたらを連

れてってやろう、と奴は言った。いままで神様とインディアンしか見たことのない物をあんたらに見せてやろう、とな。もちろん、大方ははったりだってことくらい、こっちにもわかった。だがそれでもやはり気をそそられる話だった。我々はホテルのテーブルに地図を広げて、旅のルートを計画した。スコーズビーはいかにも慣れたような口ぶりで、ときおりちょっとしたコメントや余談をはさんで自分の知識をひけらかした。馬やロバは何頭要るかとか、モルモン教徒にはどう接したらいいかとか、南に行って水が乏しくなったらどうするかとか。奴がわしらのことを阿呆だと思っているのは間違いなかった。風景を見にわざわざ荒野まで出かけていくなんて、奴にはまるっきり理解できない話だったし、わしが画家だと聞いたときも吹き出すのをこらえるのがやっとだった。でもとにかく、我々は一応まっとうと思える取り引きを結んで、三人で握手を交わした。おたがいもっと知りあえばまあ何とかなるだろう、とわしは思っていたのさ」

「出発の前の晩、わしはバーンと夜遅くまで話しあった。バーンに測量器具を一つひとつ見せてもらって、その説明を聞いているうちに、わしも何だかわくわくしてきた。何もかもが突然、新しいやり方で結びあわさるように思えることがあるものだが、そのときもそんな具合だった。空のなかのある一点を基準として定めなければ、地上における自分の位置を正確に決めることはできない、とバーンは言った。三角法とか測量の技法とかそういう話だったが、細かいことは覚えておらん。でも、肝腎な点にはひどく感銘を受けた。それ以来、ことあるごとに思い出してきたくらいだ。月や星との関係においてのみ、人は地上でのみずから

う位置を知ることができる。つまり、まずはじめに天文学があって、そこから地上の地図が出てくる。ふだん何となく思っているのとは正反対さ。じっくり考えてみると、脳味噌がひっくり返るみたいな気になってくる。〈ここ〉は〈そこ〉との関連においてのみ存在し、その逆ではない。〈これ〉があるのも〈あれ〉があるからだ。上を見なければ、下に何があるかはわからない。考えてみたまえ。自分でないものを仰いではじめて、我々は自分を見出すんだ。空に触れなければ、大地に足を据えることもできない」

「はじめのうち、絵のほうはなかなかうまく行った。我々はソルトレーク・シティからまっすぐ西へ向かって、湖のほとりで一日か二日キャンプしてから、グレートソルト砂漠に入っていった。あんな風景ははじめてだった。地球上のどこよりも平らな、どこよりも荒涼とした場だ。忘却の骨捨て場だ。何日も旅を続けても、何ひとつ目に入ってこない。木一本、藪一つ見当たらないんだよ。見渡す限り白一色、ひび割れた地面が四方にはてしなく広がっている。土は塩からい味がする。はるか彼方の地平線を縁取る山脈は、巨大な輪のように連なって、光のなかで揺れている。そこらじゅうゆらゆらとゆらめいたり、光ったりしているものだから、水はもうすぐだと思えるんだが、それは錯覚だ。あれは死せる世界だよ。どこまで行っても、出会うのは同じ無ばかり。いったい何人の開拓者が、あの砂漠に迷い込んでくたばっちまったことか。そういう連中の白骨が、地面からまっすぐ突き出しているのさ。ドナーの一行もここでやられちまったんだ。みんなが知ってる話だよ。塩地でさんざん手間取って、やっとカリフォルニアに出てシエラ山脈まで来たと思ったら、雪にさえぎ

CamScannerでスキャン

られてもうそれ以上行けやしない。生き延びるには仲間を食うしかなかったんだ（訳注 一八四六〜四七年に実際に起きた事件）。みんな知ってる話だよ。国民的伝承だ。だが事実であることに変わりはない。真の、文句のつけようのない事実だ。馬車の車輪、頭蓋骨、空の薬莢。わしは何もかもこの目で見たんだ。一九一六年になってもまだみんなそこにあったのさ。巨大な墓場、あそこはまさにそれだった。死に覆われた、何も書かれていない一ページだ」

「はじめの二週間ばかり、わしは狂ったように描きまくった。奇妙な絵だった。いままで描いていたのとは全然違う絵だった。大きさで違いが出るなんて予想もしていなかったが、やってみると大違いなんだ。とにかくこの広大さと取り組むすべは一つしかなかった。紙の上のしみが、どんどん小さくなっていった。どんどん小さくなって、しまいにはほとんど消えてしまわんばかりだった。手にそれ自身の命が宿ったみたいな具合だった。とにかく描くんだ、とわしはくり返し自分に言い聞かせた。とにかく描くんだ、心配するな、考えるのはあとでもできる、と。我々はウェンドーバーにしばらくとどまって、体を綺麗にしてからネバダに入り、コンフュージョン山脈にそって南へ下っていった。ここでもまた、わしは不意打ちを喰らった。山また山、山々に積もった雪、雪のまわりに浮かぶ雲。しばらくすると、それがみんな一つに溶けあって、見分けがつかなくなってくるんだ。白、その向こうもまた白。物がそこにあるかどうかも定かでないのに、どうして絵が描ける？ わかるだろう？ もう、人の力の及ぶ世界じゃないんだよ。風が激しく吹き荒れて、自分の考えも聞こえやしない。と、突然風が止んで、しんと静まり返る。こっちは呆然として、耳がいかれちまったんだろ

CamScannerでスキャン

うかと思ってしまう。いいかフォッグ、この世のものとは思えない沈黙なんだよ。聞こえる音といえば、自分の胸で鳴っている心臓の鼓動、脳味噌を駆けめぐる血の流れ、それだけなんだ」

「スコーズビーのおかげで旅が楽になった、とはとうてい言えん。まあ仕事は一応やってくれた。先頭に立って進み、火を起こし、食べ物も見つけてくれた。だがわしらを馬鹿にしきった態度は相変わらずだった。体からにじみ出る悪意に、あたりの空気まで染まっていた。むすっと陰気な顔で、唾を吐いたり、小声でぶつぶつ言ったりしながら、わしらのことをせせら笑っていたのさ。しばらくすると、バーンもスコーズビーのことを信用しなくなって、奴がいる前では何も言わないようになった。スコーズビーが食べ物を探しにいっているあいだ、わしらはそれぞれ自分の仕事をした。バーンは岩のあいだを這いつくばって測量に明け暮れ、わしはその辺の岩棚に座り込んで絵筆や木炭を動かしていた。日が暮れると、三人で焚き火の前に集まって夕食を作った。あるとき、少しでも雰囲気を和らげようと、わしはスコーズビーに、トランプをやらないかと持ちかけてみた。奴も乗り気なようだった。だが、頭の悪い人間にありがちな話だが、奴は自分の知恵を過大評価していた。どうやら、わしからたんまり巻き上げてやろうと思ったらしい。トランプだけじゃなくて、ありとあらゆることでわしの上手を行く気でいたんだな。誰がボスだか思い知らせてやろう、というわけだ。我々はブラックジャックをやった。わしはひどくついていて、六回か七回続けて勝った。それで奴も慌てちまって、だんだんやり方が無茶苦茶になってきた。とんでもない額を賭けた

り、下手なはったりをかませたり、何から何まで最悪の手を打ってくるんだ。その夜、わしは五十ドルか六十ドル勝ったと思う。あいつにしてみりゃ大金だよ。奴があんまりカッカしているもんだから、わしは何とかその場を取りつくろおうと、金の話はなしにしよう、と言った。金なんかわしにとってはどうでもよかったからな。気にするなよ、こっちがちょっとついてただけさ、水に流そうじゃないか、恨みっこなしだよ、とか何とかそんな科白を並べ立てた。おそらくこれほどまずい言い方もなかったろうよ。スコーズビーの奴、わしに見下されたと思っちまったんだ。馬鹿にされたと思ったんだ。それでますますプライドを傷つけられたんだな。それからというもの、わしと奴のあいだにはいつも悪意が漂うようになってしまった。ここまで来るとわしにはもうどうしようもなかった。何せこっちも相当な頑固者だったからな、まあそれは君ももう承知しておるだろう。わしは奴の機嫌をとる努力を放棄してしまった。向こうが阿呆みたいな真似をしていたいなら、好き勝手に鳴かせておくさ、とね。いいか、我々は巨大な山地のただなかにいた。まわりには何もなかった。周囲何マイルも、空っぽの空間ばかりだった。なのにまるで牢屋にとじ込められたような気分なんだ。一緒に留置場にいる男がこっちをじっと睨んでいて、一瞬でも背中を向けたらナイフをお見舞いしてやろうと虎視眈々待ち構えている、そんな気分なんだ」

「問題はそこにあった。土地が大きすぎるのさ。あんまり大きくて、そのうちに、土地に呑み込まれちまうんだ。やがてわしの我慢も限界に達してきた。はてしない沈黙、はてしない空虚。自分の位置を見きわめようにも、何もかもあまりに大きすぎるんだよ。あまりに広す

ぎるんだ。そしてじきに、これよりほかに言い方が思いつかんのだが、もう何もなくなってしまうんだ。世界も、土地も、何もなくなってしまうんだよ。いいかフォッグ、最後はそうなっちまうんだ。おしまいにはすべてがただの幻になってしまう。もはや自分が、頭のなかにしか存在しなくなるんだよ」

「我々は州の中央部をとぼとぼ進み、やがて斜めに折れて、南東部の峡谷地帯に入っていった。世にいう四つ辻(フォー・コーナーズ)ってやつだよ、ユタ、アリゾナ、コロラド、ニューメキシコの四州が交わるところだ。どこにも増して、あそこがいちばん不思議な場所だった。あれは夢の世界だった。見渡す限り、赤土とねじくれた岩だ。べらぼうに大きな岩のかたまりが地上からぬっと突き出ていて、まるで巨人が建てた都市の廃墟みたいに思える。方尖塔(オベリスク)、光塔(ミナレット)、宮殿。何もかもが、いかにも見覚えがあるような、まるで見たこともないような感じがする。むろんすべては単なる偶然だ。しょせんみんな、氷河や浸食の分泌した唾液が石化しただけの話で、要するに何百万年もの風食作用の結果にすぎない。それでもつい、見慣れた形を見つけてしまうんだ。親指、眼のくぼみ、ペニス、マッシュルーム、人間、帽子。雲から絵を読み取るようなものさ。もちろんいまじゃ、あそこがどんなところなのか誰だって知っている。君も飽きるほど見ておるだろう。グレン峡谷、モニュメント谷、神々の谷。カウボーイ映画はみんなあそこで撮るし、マルボロのコマーシャルで男が馬を走らせるのもあそこだ。毎晩テレビでやっておるだろうが。だがなフォッグ、映画なんかじゃ何もわからんのだよ。絵に描くにも、とにかくあまりに大きすぎるんだ。写真だってあの感じは伝わらん。何もか

もが歪曲されてしまうんだ。宇宙空間の広がりを再現しようとするようなものさ。眺めれば眺めるほど、こっちの絵筆は無力になっていく。見ているうちに、いっさいが消滅してしまうのさ」

「我々は数週間その峡谷をさまよった。ときおり、インディアンの遺跡で夜を過ごすこともあった。絶壁に作られた、千年前に消滅したアナサジ族の住居だよ。アナサジ族の身に何が起こったのか、誰にもわからない。石造りの街、絵文字、陶器の破片、みんな残っている。でも本人たちは地上から姿を消してしまったのさ。そのころはもう七月末か、八月はじめになっていて、スコーズビーの敵意もますます露骨になってきていた。いずれ何かがぶっつり切れるのは時間の問題だった。空気のなかに、それがはっきり感じられるんだよ。乾いた不毛な土地で、どこを見てもヤマヨモギばかり、一本の木もありゃしない。気温はおそろしく高かった。蓄えがなくならないよう飲み水も配給制にする破目になって、みんなますます不機嫌になった。そのうちロバを一頭殺すしかなくなった。残り一頭の負担はますます大きくなった。馬たちもへばってきていた。ブラフの町まで、あとまだ、六日の距離だった。できるだけ早く町に着いて態勢を立て直そう、とわしは思っていた。一日か二日分早い近道がある、とスコーズビーが言うんで、言われるとおり、太陽をもろに顔に浴びながら岩だらけの大地を旅していった。難儀な道だった。それまででいちばんきつい道行きだった。と、そのうちにわしはだんだんわかってきたんだ。スコーズビーの奴、わしらを罠にはめようとしているにちがいない、と。バーンもわしも、馬の扱いはスコーズビーには及ばない。とにかく先へ

[illegible]が先頭に立ち、バーンが真ん中、わしが最後だった。た。あたりは静かで[illegible]、やがててっぺんに出て、尾根にそって進みはじめた。うんと狭い道で、おまけにそこらじゅう岩や石だらけだ。日光が岩からはね返って、目もくらむほどだ。ここまで来てしまったら引き返すわけにもいかないが、かといってこれ以上先へ進むのもとうてい無理なように思えた。と、突然、バーンの馬が足を踏み外した。バーンはわしの前三メートル足らずのところにいた。覚えているよ、石ころががたがたとすさまじい音を立て、馬はヒンヒン鳴きながら何とかひづめで足場をつかもうともがいていた。でも足元の土はどんどん崩れていくばかりだ。こっちが手を出す間もないうちに、バーンが悲鳴を上げたと思うと、馬もろとも崖っぷちから転げ落ちて、そのまま崖を跳ねるように落ちていった。ひどく長い落下だった。距離にして百メートルばかりあったと思う。その間、上から下までずっとぎざぎざの岩だ。わしは馬から飛び下り、救急箱を抱えて崖を下りていった。バーンを一目見て、もう死んでしまったかと思ったが、手をあててみるとまだ脈はあった。といって、それ以上明るい材料は何もなかった。顔は一面血まみれだし、左脚と左腕の骨が折れていることも一目瞭然だった。仰向けに寝かせてみると、肋骨のすぐ下に一本、大きな裂け目が入っている。醜い、ぴくぴく震える傷口が、少なくとも十五センチか二十センチ開いているのさ。ひどいもんだった。体じゅうもうめちゃくちゃさ。と、救急箱を開けようとしたところで、背後で銃声が響いた。見ると、スコーズビーが倒れた馬を見下ろして立ち、手にはまだ煙の出ている拳銃を握っている。脚が折れちまったからな、こうするしかないさ、

と奴は吐き捨てるように言った。人間が大怪我をしているんだ、馬よりこっちが先だぞ、とわしが言うと、スコーズビーはのそのそとやって来て、ふんと鼻で笑って言った。こんな奴に時間をつぶしても無駄だぜ、治してやる手はただ一つ、たったいま馬にくれてやったのと同じ薬をやることさ。そして拳銃を上げ、バーンの頭に狙いを定めた。わしはその腕から銃を叩き落とした。奴が本気で引き金を引くつもりだったかどうかはわからない。だがとにかく、危険を見過ごすわけにはいかん。と、スコーズビーは険悪な顔でわしを睨みつけ、もう一度俺に触ってみろ、ただじゃおかんからな、とすごんだ。あんたが無力な人間に銃を向けるのをやめたらこっちも触らんさ、とわしも言い返した。するとスコーズビーはわしの方を向いて、わしに銃をつきつけた。誰に銃を向けようが俺の勝手だ、と奴は言って、それから、出し抜けににっと笑みを浮かべた。満面に広がる、歪んだ笑みだった。わしの上に立ったのを楽しんでいたんだな。無力、と奴はわしの言葉をくり返した。お前さんがまさにそれじゃないか、え、絵描きの先生よ。お前こそまるっきり、無力な戯言だよ。撃たれるんだ、とわしは思った。奴が引き金を引くのを待ちながら、弾が心臓に入ってから死ぬまでどれくらいかかるんだろう、と考えた。わしは思った――これが俺のこの世で最後の思いなんだ、と。永遠の時間が過ぎるように思えた。二人でじっと睨みあいながら、わしは奴の動きを待った。やがて、スコーズビーが笑い出した。いかにも満足げな、何かとてつもない大勝利をかちとったような笑い声だった。そして奴は銃をホルスターに戻し、地面にぺっと唾を吐いた。何だかまるで、もうすでにわしを殺したような様子だった。わし自身、もう死んでしまったよ

CamScannerでスキャン

うな気分だった」

「スコーズビーは馬のところに歩いていって、鞍と鞍袋を外しにかかった。わしはまだ銃をつきつけられたショックから覚めていなかったが、とにかくバーンのかたわらにひざまずいて、傷口を洗ったり、包帯を巻いたり、できるだけのことをやってみた。二分ばかりしてスコーズビーが戻ってきて、もう出かけるぜ、と告げた。出かける？　何の話だ？　とわしは言った。バーンはまだ動けないんだぞ、出かけられるわけがないじゃないか。するとスコーズビーは、置いてきゃいいんだ、どうせもうお陀仏だよと答えた。冗談じゃないぜ、こんなケツの穴みたいな峡谷で、そいつがくたばるのを待つなんて。いつまでかかるかわかったもんじゃない。そんなことしたって何にもならんだろうが。あんたは勝手にするがいい、とにかく俺はバーンが生きているあいだは置き去りになんかしないからな、とわしが言うと、スコーズビーはまた鼻を鳴らした。ふん、まるっきり英雄気取りだな。下手すりゃお前、こいつがくたばるまで、一週間ここに釘付けだぜ。そんなことして何の意味がある？　俺はこの男に責任があるんだ、とわしは答えた。それだけのことだ。俺はこの男に責任がある、置き去りになんかできない」

「スコーズビーが立ち去る前に、わしはスケッチブックを一ページ引き裂いて、妻に手紙を書いた。何と書いたかは覚えていない。大方、何やらメロドラマふうの文句だったと思う。私からの便りもおそらくこれで最後になるだろう、たしかそんな科白まで書いたはずだ。町へ着いたらスコーズビーが投函してくれるという約束だった。だがそんなのはしょせんただ

の約束だ。相手にそれを守る気がさらさらないことくらい、わしだって百も承知だった。そんなことをしたら、わしの失踪をめぐって、自分の身を危うくするだけの話だからな。奴がわざわざそんな危険を冒すはずはない。さっさとよそへ行って、何もかも忘れちまうほうが得策さ。案の定、まさにそのとおりの結果になった。少なくともわしはそう思っている。ずっとあとになって、失踪の記事や死亡記事を読んだが、スコーズビーの名前はどこにも載っていなかったからな。手紙のなかに、ちゃんと奴の名を明記しておいたにもかかわらず、だ」

「一週間以内にあんたが姿を見せなかったら捜索隊を出すからな、ともスコーズビーは言ったが、それだって口先だけというのは見え見えだった。わしは面と向かってはっきりそう言ってやった。すると、奴は否定もせずに、例によって傲慢そうな歪んだ笑いを見せただけだった。最後のチャンスだぜ、絵描きさんよ、と奴は言った。一緒に来るのか、来ないのか？わしは黙って首を横に振った。あんまり腹が立って、もう何も言う気になれなかった。スコーズビーは別れの挨拶に帽子をひょいと持ち上げ、崖を上って自分の馬のところに戻っていった。それだけだった。それ以上一言も言わなかった。崖の上に着くまで何分かかかったが、その間わしは奴から目を離さなかった。油断するわけにはいかない。立ち去る前に俺を殺そうとするにちがいない、と思ったんだよ。間違いない、きっとそうなるとわしは思った。証拠は湮滅すべし、目撃者の口はふさぐべし。何しろこんな荒野のど真ん中で、まだ半分子供の人間を、瀕死の状態で置き去りにしていこうとしてるんだからな。でもスコーズビーは一

度もふり返らなかった。断言してもいいが、それは善意からなんかじゃない。唯一考えられる説明は、その必要もないと思ったってことさ。わざわざこいつを殺す必要はない、どうせ一人で生きて帰れるわけがないんだから、と」

「やがてスコーズビーは去っていった。それから一時間と経たないうちに、わしはもう、スコーズビーなんて人間ははじめからいなかったような気になっていた。それがどんなに奇妙な感覚だったか、口ではとても言えん。奴のことは考えまいと決めた、というのとは違う。考えたところで、もうほとんど何も思い出せなくなってしまったんだよ。顔立ちとか、声の感じとか、何ひとつ記憶によみがえってこないんだ。なあフォッグ、これもみんなあたりの静けさのせいなんだよ。静けさというのはすべてを抹殺してしまうのさ。スコーズビーはわしの頭から消し去られた。そのあと奴について考えようにも、夢のなかで見た誰かのことを思いだそうとするみたいなのさ。どこにも存在したためしのない誰かを探すみたいなんだ」

「バーンが死ぬには三日か四日かかった。わし自身にとっては、それだけ長くかかったのがよかったんだと思う。看病で何かと忙しかったから、怖がっている暇もなかった。怖くなったのはもっと先のことだ。バーンを埋葬して、一人になってしまってからだ。一日目なんか、十ぺんぐらい崖を上り下りしたと思う。ロバにしょわせた食べ物や道具を外しては、下へ運んでいった。イーゼルを壊して副木にして、バーンの腕と脚にあててやった。毛布と三脚で小さな差掛け屋根を作って、顔に陽が当たらないようにした。馬とロバの世話もした。包帯代わりの布切れも取り替えた。火を起こし、食事を作り、とにかくやるべきことは何でもや

った。罪の意識が、わしの行動の原動力だったった。こんなことになってしまって、わしは自分を責めずにいられなかった。でもそういう罪の意識ですら、一種の慰めになってくれた。それは人間的な感情だ。それを感じるということは、自分がまだ他人と同じ世界に結びついているという証しなんだ。ひとたびバーンが死んでしまえば、考えるべきことはもう何もなくなってしまう。わしはその空虚を恐れていた。それを死ぬほど怖がっていた」

「バーンに望みがないことはわしだってわかっていた。それくらいははじめから承知だったさ。でもわしは自分をごまかして、そのうち元気になるさと思い込もうとした。バーンは結局一度も意識を取り戻さなかったが、ときおり何かもごもご言いかけることはあった。夢を見ている人間がやるみたいにな。うなされたような、訳のわからない言葉の羅列だ。本当の言葉には決してならない音だ。でもそれが聞こえるたびに、もうじき目を覚ますかもしれない、とわしは思ったものさ。バーンとわしとのあいだに、薄いベールが垂れ下がっているような気がした。目に見えない膜が、バーンを世界の反対側にとどめているような気がした。わしはバーンに自分の声を聞かせて、何とか元気づけようとした。四六時中話しかけたり、歌を歌ってやったりした。何かが伝わりますように、何とか目を覚ましますように、そう祈りながら。でも何の役にも立たなかった。容態は悪くなる一方だった。食べ物を口に入れさせることもできなかった。水を浸した布で口を濡らしてやるのが精いっぱいだった。でもそれじゃ足りなかった。栄養にも何もなりゃしない。少しずつ少しずつ、バーンから力が抜けていくのがわかった。腹の出血は止まっていたが、傷の治り具合は芳しくなかった。黄色っぽい

緑色になって、膿も出ていたし、蟻が包帯の上をひっきりなしに這い回っていた。あれじゃ誰だって助かるはずはない」

「わしは山のふもとにバーンを埋葬した。細かい話はやめておく。とにかく墓を掘って、縁まで遺体を引きずっていって、押して穴に落とし、バーンがわしから離れて落下していく感触を味わったんだよ。たぶんわしは、もうそのころから気が狂いかけていたんだと思う。なかなか穴を埋める気になれなかった。バーンの体を覆ってしまう、その死んだ顔に土をかける、そう思うとたまらんでな。結局、目を閉じ、何も見ない、というやり方で問題を解決した。あとは十字架も作らなかったし、神に祈りもしなかった。神が何だ、とわしは胸のうちで言った。神が何だ、神なんかを喜ばせてたまるか、と。そして地面に棒を一本つき立て、それに紙切れを貼りつけた。紙にはこう書いた。エドワード・バーン、一八九八―ダッシュ―一九一六、友人ジュリアン・バーバーによって埋葬さる。それからわしは声を限りに叫びはじめた。そういうふうだったんだよ、フォッグ。このことを話したのは君が最初だ。わしは声を限りに叫びはじめ、そのあとはもう、自分が狂うに任せたんだ」

5

その日の話はそこで打ち切りになった。エフィングが最後のセンテンスを口にし、一息ついたところで、先に進む間もなくミセス・ヒュームが入ってきて、昼食の時間だと告げたのだ。これだけ恐ろしい話をしたあとでは、落着きを取り戻すのも難しかろうと僕は思ったが、話の腰を折られてもエフィングはべつに何とも思わないようだった。「ありがたい」と彼は言って両手をぱんと叩いた。「さあ、昼めしだ。もう腹ぺこだよ」。どうしてこうもあっさり気分を変えられるのか、僕はいささかとまどってしまった。ついさっきまでは、感きわまって声も震え、いまにも泣き崩れてしまいそうだったのに、突如また元気満々、すっかり上機嫌になってしまうのだから。「続きはまたあとだ」僕に車椅子を押されて食堂に入りながらエフィングは言った。「いまのはまだほんの前置きだよ。序文みたいなものさ。まあ見てなさい、じき本調子になるから。お楽しみはこれからだ」

テーブルにつくと、死亡記事の話はいっさい出てこなかった。いつもと同じように、ズルズルという音や見苦しいしぐさを伴って食事は進行し、ふだんに較べてよくも悪くもなかっ

た。これまで三時間、向こうの部屋で僕を相手に胸のうちをさらけ出していたことなど、エフィングはすっかり忘れてしまったみたいだった。我々は例によって世間話を交わし、食事が終わりに近づくと、午後の散歩に備えて天気予報を検討した。その後三、四週間はだいたいいつもそんな調子が続いた。朝は死亡記事に取り組み、午後は散歩。エフィングの話を聞き書きしたノートはやがて一ダース以上に達した。一日およそ二、三十ページのペースである。話に遅れないようにするには相当のスピードで書かねばならず、あとで見てみるとほとんど読めないこともあった。あるとき、テープレコーダーを使ってみてはどうか、と持ちかけてみたが、相手にされなかった。電気はなし、機械はなしだ、とエフィングは言った。「あんな雑音は我慢ならん。ブンブンヒューヒュー、まったくうんざりしてくるわい。わしが聞きたいのは君のペンが紙の上を動く音だけだ」。でもこっちはプロの秘書じゃないんですよ、と僕は反論した。「速記も知らないし、自分の書いた字を読むのだって一苦労です」。「それじゃわしがいないところでタイプで清書したまえ。パベルのタイプライターを君にやろう。実に立派な年代物でな、三九年にアメリカに渡ってきたときに買ってやったんだ。アンダーウッド社のだよ。いまじゃもうあんな製品は作っておらん。重さにして三トン半はある」。その晩、僕は自分の部屋のクローゼットからそのタイプライターを引きずり出し、小さなエンドテーブルの上に据えた。以来、毎晩の何時間かは、朝のセッションの記録をタイプする仕事に費やされることになった。それは根気の要る作業だった。でも朝の話はまだはっきり頭に残っていたから、それほどたくさんの言葉を失わずに済んだ。

　バーンが死んでわしは希望をなくしてしまった、とエフィングは言った。あまり気も入らないまま、渓谷から抜け出そうと一応試みてはみたものの、崖や絶壁や登頂不可能なビュート（訳注　山頂は平らでまわりが絶壁の丘）など、迷路のように連なる障害の連続に、じきにすっかりやる気をなくしてしまった。馬は二日目でダウンしたが、火を起こす薪も見つからないので、その肉を食べることもできなかった。ヨモギを燃やそうにも煙が出てバチバチ鳴るばかりで、火はいっこうに点かなかった。何とか空腹を癒そうと、馬の死骸から肉片を薄くそぎ落とし、マッチで焙って食べた。一食分はこれで何とかなったが、マッチが尽きてしまってからは、生のまま食べる気にもなれないので、死骸を置き去りにして先へ進んだ。その時点で、自分の人生は終わったんだとエフィングは確信した。一頭だけ残ったロバを引きながら相変わらず岩のあいだをさまよってはいたが、一歩前に進むたびに、救出の可能性から自分がどんどん遠ざかっているのではという疑念に苛まれるのだった。画材はまだ揃っていたし、食糧と水もあと二日分あった。もうどうでもいい、という気分だった。たとえ生き延びたとしても、自分はもうおしまいなのだ。バーンの死ですべては決まったのだ。どうしていまさら家に帰れよう？　さまざまな質問、非難、屈辱。その恥を思うと、とても帰る気になんかなれない。

　バーンと一緒に死んだと思ってもらったほうがずっといい。少なくとも名誉は保たれるし、自分がいかに残酷で無責任な真似をしたかも知られずに済む。こうして、ジュリアン・バーバーは抹殺されたのだった。砂漠のまっただなかで、岩山にとじ込められ灼熱の太陽を浴び[illegible]そのときには、まさしく、[illegible]な決断だと

も見えなかった。どうせじきに死ぬのは間違いないわけだし、たとえ死ななかったとしても、もう死んだも同然だ。彼の身に何が起きたのか、誰にもわかるまい。

わしは狂ってしまったんだ、とエフィングは言ったが、僕としてはそれをどこまで文字どおりに受け止めていいのかよくわからなかった。バーンが死んでから三日間、わしはほとんど休みなく吠えつづけた、とエフィングは言った。大声で叫びながら、岩で傷だらけになった両手から出てくる血を顔に塗りたくっていたんだ、と。でも僕に言わせれば、事情を考えるならこの行為も決して異常とは思えない。僕だって嵐のセントラルパークで、喉を嗄らして吠えた覚えがある。しかも僕の置かれた状況なんか、エフィングのそれに較べたら楽なものだ。万策尽きた人間が、声を限りに叫びたくなる。至極当然の話ではないか。肺のなかで空気がどんどん膨らんでいき、そいつを追い出さないことには息もできないのだ。ありったけの力をこめてそいつを吠え出してしまうしかないのだ。さもなければ、みずからの息で窒息してしまう。大気そのものに息の根を止められてしまうのだ。

四日目の朝になって、食糧も尽き、水もコップ一杯分を残すばかりとなったところで、近くの崖のてっぺんに洞穴のようなものが見えた。あそこなら死ぬにはいい場所だ、とエフィングは考えた。陽も当たらないし、禿鷹もあそこまでは来るまい。すっかり陰になっているから、誰にも見つからずに済む。エフィングは最後の気力をふり絞って、難儀な岩を上りはじめた。ほぼ二時間かかってようやくてっぺんに上りついたころには、もう精根尽きはてて、立っているのもままならなかった。洞穴は下から見たよりもずっと広くて、かがまずに入れ

るくらいの高さがあった。入口をふさいでいる木の枝を引き抜いてなかへ入ってみると、驚いたことに、洞穴は空っぽではなかった。奥に六メートルばかり伸びているその空間には、何点かの家具が揃っていた。テーブル一卓、椅子四脚、食器棚、ぼろぼろのだるまストーブ。機能的にはれっきとした一軒の家である。家具はどれも手入れが行き届いているし、部屋じゅうきちんと片付いていて、粗末ではあれ住みよいわが家といった風情だ。エフィングはテーブルの上にあった蠟燭に火を点け、日の光の差し込まない奥の闇の方を探索しにいった。左の壁にそってベッドが置かれていて、その上に一人の男が横になっていた。眠っているのだろう、とエフィングは思って、それとなく咳払いをしてみたが、何の反応もないので、かがみ込んで蠟燭の炎を男の顔の上にかざしてみた。男が死んでいるのを知ったのはそのときだった。それも単に死んでいるのではない、殺されているのだ。右目があったはずの場所に、大きな弾丸の穴が空いている。左目は無表情に闇を見つめ、頭の下の枕は血まみれだった。

死体から回れ右して、食器棚のところに戻ってみると、なかには食糧がぎっしり詰まっていた。缶詰、塩漬け肉、小麦粉、調味料、一人なら一年はもちそうな量が棚を埋めている。エフィングはただちに食事を作り、パン半斤を食べ、ビールを二缶飲んだ。ひとたび食欲を満足させると、今度は死体の処理に取りかかった。頭のなかにはすでに計画ができ上がっていた。あとはそれを実行に移すばかりだ。こんなふうに山奥で一人暮らしをしていたからには、死んだ男は隠者のような人物だったにちがいない。だとすれば、男がここにいたことを知る者もそう多くはあるまい。見たところ殺人が起きたのはごく最近のことだ（死体はまだ

腐敗していないし、悪臭もなく、パンもまだ新しい。ひょっとしたらほんの数時間前の出来事かもしれない。ということは、この隠者が死んだのを知っているのは、彼を殺した人間だけだろう。それなら自分が隠者になり代わって悪い理由は何もない。歳も背丈もだいたい同じくらいだし、髪の色も同じ明るい茶だ。あとは顎ひげを伸ばして、死んだ男の服を着ればいい。さして難しいことではない。隠者の生活を受け継ぎ、彼に代わってそれを生きつづけるのだ。あたかもこの男の魂が、いまや自分の所有するところとなったかのようにふるまうのである。もし誰かが訪ねてきたら、とにかくこの自分でない何者かのふりをしてみるのだ。うまく行ったらおなぐさみ、である。いざとなったら、身を護るためのライフルだってある。だがどのみちそう問題はあるまい。何しろこっちは隠者だ。そう大勢来客があるとも思えない。

死体の服を脱がせてから、洞穴の外に引きずり出し、崖の裏側まで運んでいった。と、そこに、さらに驚くべき風景が現われた。洞穴から十メートルばかり下に小さなオアシスがあって、ハコヤナギの木が二本すくっとそびえ、小川が勢いよく流れて、名も知らぬ低木が無数に茂っている。広漠たる不毛の地のただなかに、ミニチュアの生の飛び地が出現したのだ。小川のほとりの柔らかな土に隠者を埋め終えながら、ここにいれば何だってできる、とエフイングは思った。食べ物も水もあるし、家もある。新しい自己も見つかった。思いもよらぬ新たな人生が開けたのだ。運命のあまりの急転に、何だかいま一つ実感が湧かなかった。ほんの一時間前には死を覚悟していたのが、いまや幸福に震えている。死人の顔にシャベルで

土を一山、また一山と浴びせながら、エフィングはこみ上げてくる笑いを抑えることができなかった。

何か月かが過ぎた。はじめのうちは、降って湧いた幸運に圧倒されるあまり、周囲の事物もろくに目に入らなかった。食べて、眠って、陽ざしがそれほど強くないときは洞穴の外の岩に腰かけて、きらきらと色とりどりのトカゲたちが足元をせわしなく動き回るのを眺めていた。崖からの眺めは何とも壮大だった。前人未到の荒野が何マイルもはてしなく広がっていた。だがその景色を眺めることはあまりなく、もっぱら身近な状況のことだけ考えるようにした。小川に水を汲みにいく、薪を集めてくる、洞穴のなかを片付ける。風景はもうたくさんだった。しばらく忘れていようという気分だった。やがて、まったく唐突に、こうした穏やかな気持ちは消え去った。耐えがたいほどの孤独の日々がはじまった。過去何か月かの出来事の恐ろしさがエフィングを包み込み、その後の一、二週間、もう一歩で自殺というところまで落ち込んでいった。頭のなかは妄想や恐怖にあふれ、自分はすでに死んでいるのだという思いに一度ならず襲われた。この洞穴に入った瞬間に俺は死んだんだ、いまの俺はどこかの呪われた来世の囚人なんだ、と。ある日、狂気の発作に襲われた彼は、隠者のライフルを持ち出して、ロバを撃ち殺してしまった。隠者の霊がロバの体に入り込み、その悪意ある鳴き声で彼にとり憑こうとしていると思ったのである。ロバは真相を知っている。彼の犯した不正の目撃者である。ゆえに彼としてはロバを抹殺するしかなかった。やがて今度は、死んだ男の身元を知りたいという激しい欲求に駆られて、隠者の名を知る手がかりはないか

と洞穴をしらみつぶしに探してみた。だが何も出てこなかった。日記、手紙、本の白ページ、ごくわずかな情報も見つからなかった。

二週間が経つと、少しずつ自分を取り戻してきて、ひとまず平穏といえなくもない精神状態が徐々に訪れた。こんな暮らしがいつまでも続くわけじゃないんだ、と彼は胸のうちで思った。そう思うだけでも慰められたし、生きつづける勇気も湧いてきた。いつかは食糧も尽きるはずだ。そうなればどこかよそへ行くほかあるまい。だいたいあと一年、気をつけて暮らせばもう少し先だろうか。そのころにはもうみんな、自分やバーンが帰ってくるという望みを捨ててしまっているだろう。スコーズビーはあの手紙を投函しないだろうし、かりにしたとしても、結果としては同じことだろう。エリザベスと、バーンの父親とが出資して捜索隊が派遣され、何週間か砂漠をさまよって、行方不明の二人を懸命に探す。きっと懸賞金も出されるだろう。だが手がかりは何ひとつ見つからない。ひょっとするとバーンの墓くらいは見つけるかもしれないが、それとて望みは薄い。よしんば見つけたとしても、それで彼に近づいたことにはならない。ジュリアン・バーバーは消滅してしまったのだ。誰も彼の消息をつきとめることはできないのだ。彼としてはとにかく、捜索が終わるまでじっとしていればいい。ニューヨークの新聞に死亡記事が掲載され、追悼式が開かれるだろう。それで終わりだ。そうなってしまえば、あとは好きなところに行ける。好きな人間になれるのだ。

とはいえ、慌てるのは禁物である。身を隠している時間が長ければ長いほど、ここを去るのもより安全になる。そう考えた彼は、洞穴で過ごせる時間をぎりぎりまで引き延ばそうと、

日々の生活を最大限厳密に組織化する計画に取りかかった。食事は一日一食に減らして、冬に備えて大量の薪を準備し、健康管理にも気を配った。予定表やグラフを作って、毎晩寝る前にその日使った物資を小まめに書きとめた。これ以上はないというくらい厳格な規律を彼はおのれに課した。はじめのうちは、みずから設定した目標がなかなか守れず、つい誘惑に屈してパンを一枚余分に食べてしまったり、缶詰のシチューをお代わりしてしまうことも何度かあったが、こうした努力の意義自体への信念は変わらなかったので、気が緩むということはなかった。それはおのれの弱さに打ちかつ力を試す企てにほかならなかった。理想と現実の距離が少しずつ縮まっていくにつれて、彼は何かを勝ちとったように感じずにはいられなかった。もちろん単なるゲームだということはわかっている。だがそれは、狂信的な熱意を要求するゲームなのだ。過剰なくらいの精神集中が必要とされるおかげで、絶望に陥っている暇もなかった。

　この規律正しい生活をはじめて二、三週間もしたころ、絵を描きたいという欲求がふたたび湧いてきた。ある夜、鉛筆を手にその日の行動を簡潔に記している最中に、ふと反対側のページに、小さく山のスケッチを描きはじめたのである。自分でも知らぬ間に、スケッチは出来上がっていた。三十秒とかからなかった。その唐突な、無意識の行為のなかに、自分のこれまでの作品には決して見られなかったひとつの力を彼は感じとった。その夜のうちに画材の箱をほどき、それ以降、絵の具がなくなるまで、彼は絵を描きつづけた。毎朝夜明けとともに出て行く、一日じゅう外で描いた。これが一か月半続き、その間に四十枚近くのカ

ンバスが完成した。あのころが間違いなくわしの人生でいちばん幸福な時期だったよ、とエフィングは僕に言った。

彼は二重の拘束の下で描いていた。そして結果的には、両方の拘束がそれぞれ違った形でプラスにはたらくことになった。第一に、描いた絵を誰にも見てもらえないだろうという事実がある。考えてみるまでもない話である。でもエフィングは、そのせいで空しい思いに苛まれるどころか、むしろ解放されたような気になれた。いまや彼は自分のために描いているのだ。もう他人の意見なんかにびくびくする必要はない。これだけでも、絵に対する彼の見方を根本から変えるに十分だった。生まれてはじめて、彼は結果について思い悩むことをやめた。「成功」「失敗」という概念がいっぺんに意味をなくした。芸術の真の目的は美しい事物を作り出すことではない、そう彼は悟った。芸術とは理解するための手立てなのだ。世界に入り込み、そのなかに自分の場を見出す道なのだ。一枚のカンバスにいかなる芸術的特質があろうと、それは、物事の核心に迫るという目的に向かって努力していく上での、ほんの副産物のようなものでしかない。それまでに覚えたルールを彼は一つひとつ捨て去り、風景に身を任せ、対等のパートナーとして風景に接するようになった。自分の意図は放棄し、偶然を進んで受け入れ、思いが湧いてくるに任せ、荒々しく迫ってくる個々の事物からも目をそむけなかった。もはや自分を囲む空虚も怖くなかった。カンバスに描きとろうとするなかでそれがだんだんと内面に取り込まれ、そのうちに、すべてを超越した空虚のもつ冷やかさがわがもののように感じられるまでになった。自分もまた、この広大な空間の沈黙せる力に

CamScannerでスキャン

与しているのだと思うことができた。でき上がった絵は野蛮な絵だった、とエフィングは言った。強烈な色彩にあふれ、思いもよらぬ不思議なエネルギーに満ち、いろんな形や光が渦巻のようにカンバスを舞っていた。それが醜いのか美しいのか、自分でも見当がつかなかったが、おそらく美醜など問題ではなかった。それは自分の絵なのだ。それら自分の絵は、いままでに見たいかなる絵にも似ていなかった。五十年経ったいまも一枚一枚思い出せるんだ、とエフィングは言った。

第二の拘束はこれほどきわ立ったものではなかったが、にもかかわらず、さらに大きな影響を及ぼすことになった。すなわち、いずれは画材がなくなってしまうだろうという事実である。絵の具にしてもカンバスにしても当然数に限りがあるわけで、描きつづけていればいずれは使いきってしまう。一枚目に取りかかった最初の瞬間から、終わりはすでに見えているのだ。描いている最中にも、風景が目の前で消えていくのが感じられた。そのせいで、何をするにせよ、そこには独特の切実さが加わることになった。カンバスをまた一枚完成させるたびに、未来はそれだけ縮んでいき、いっさいの未来が消滅してしまう瞬間へ確実に近づいていった。一か月半みっちり描きつづけて、とうとう最後のカンバスにたどり着いてしまった。だが絵の具のほうはまだ一ダース以上残っていた。ためらうことなく、エフィングはこれまで描いた絵を裏返し、カンバスの裏に次々新しい絵を描いた。あれはまさに執行猶予だったよ、とエフィングは言った。その後三週間、生まれ変わったような思いで、第二シリーズの風景画に取り組んだ。第一シリーズのとき以上に、ひたすら一心不乱に。とうとう裏

周りの四壁が埋まってしまうと、今度は洞穴のなかの家具に描きはじめ、食器棚やテーブルや椅子に狂おしく絵筆を叩きつけた。やがてそれらの表面も埋まってしまうと、すっかり小さくなったチューブからわずかな絵の具を絞り出しながら、南の壁に、パノラマ壁画の輪郭を描いた。でき上がっていたらあれこそわしの最高傑作になったろうよ、とエフィングは言った。けれども、半分もできないうちに絵の具が尽きてしまったのだった。

やがて冬が来た。ノートブックが数冊、それに鉛筆も一箱残っていたから、油絵からドローイングに切り替えてもよかったわけだが、代わりにその寒い日々のあいだ、洞穴にこもって文章を書いた。一冊のノートブックには考えたことや感じたことを書きとめ、それまで絵を通してやっていたのと同じことを言葉でやろうとした。もう一冊のノートブックにはこれまでどおり毎日の行動をメモして、使ったものの量を正確に記録した。どれだけの食糧を食べ、どれだけの食糧が残っているか。何本の蠟燭を燃やし、何本の蠟燭がまだ手つかずのままか。年が明けて、一週間たてつづけに雪が降った。赤い岩の上に白い雪が降り、すっかり見慣れた風景を変容させるのを眺めるのは楽しかった。午後になって太陽が顔を出し、雪があちこちまだらに溶けると、えくぼのように美しかった。風が出てくると、白い埃が宙に吹き上げられ、つかの間の嵐のように舞った。そんな風景を、エフィングは何時間も眺めて立ちつくしていた。いくら見ても飽きない気がした。彼の人生のペースはいまやひどくゆっくりになり、ごくわずかな変化も目に止まるようになった。絵の具がなくなってしばらくは、胸が裂けるような思いでふさぎ込んでいたが、やがて、文章を書くのも十分絵の代わりにな

CamScannerでスキャン

ることがわかった。だが二月なかばになるとノートブックも使いはたし、白いページは一枚もなくなってしまった。意外にも、それで気が滅入りはしなかった。いまや彼は、みずからの孤独の奥底に降り立っていて、もう何の気晴らしも必要としていなかった。ほとんど想像しがたいことに思えたが、何もかもが徐々に変化を重ね、いまや世界だけで十分になっていたのである。

三月末に、とうとう最初の訪問者が訪れた。幸い、その見知らぬ男が崖の下に姿を現わしたとき、エフィングはたまたま洞穴の屋根に座っていて、その小さな姿が一時間近くかけて岩をよじ登ってくるのをつぶさに見守ることができた。男が上りつくころには、ライフルを手に待ち構えていた。頭のなかではこのような情景をすでに百回は思い描いていたものの、実際こうして起きてみると、自分がいかに怖がっているかに愕然とさせられた。状況がはっきりするのに、三十秒とかかるまい。この男が隠者を知っているかどうか、知っているとしたら隠者になりすましたエフィングの変装を見抜けるかどうか。もし男が隠者を殺した張本人だとしたら、変装の問題は無関係になる。あるいは、男が捜索隊の一員で、報奨金を夢見ていまだ荒野をさまようお人好しだったとしても同じことだ。何もかもがあっという間に明らかになるだろう。だがことがはっきりするまでは、最悪の事態に備えるほかない。これまでさんざん罪を重ねてきた上に、もうじき殺人者にもなる可能性が十分あることをエフィングは悟った。

まず目についたのは、そいつが大男だということだった。それからすぐ、今度は男の服装

か何とも奇妙なことが目にとまった。いろんな布切れをつなぎ合わせて作ったのか、明るい赤の正方形がここにあるかと思えば、青と白のチェックの長方形がそこにあり、こっちはウール、そっちはデニムといった具合。そんな衣裳のせいで、男はまるで道化師みたいに見えた。旅回りのサーカスからはぐれてしまったピエロ、といったところ。かぶっているのも、つば広のウェスタンハットではなく、リボンから白い羽根が一本つき出たぼろぼろの山高帽である。まっすぐな黒髪は肩まで伸び、近づいてくるにつれて顔の左側が変形しているのがわかった。太いぎざぎざの傷あとが一本、頬から下唇まで走っている。たぶんインディアンだろう、とエフィングは考えたが、人種などこの際問題ではなかった。この男は幽霊なのだ。岩山のなかから忽然と現われた悪夢の道化なのだ。てっぺんの岩棚によじ上りながら、男は息も切れぎれにふうっとうなり声を上げ、それから立ち上がって、エフィングに笑顔を向けた。いまや二人のあいだの距離は三、四メートルしかなかった。エフィングはライフルを持ち上げ、男に狙いを定めた。だが男は怖がっているというよりとまどっているように見えた。「よう、トム」と男はのろのろと、いささか知恵が足りないような感じの声で言った。「俺のこと、覚えてないのかい？　ほれ、あんたの友だちだよ、ジョージだよ。俺に向かってそんな水臭い真似しなくてもいいだろうに」

エフィングは一瞬ためらったのち、ライフルを下ろしたが、用心のため指は引き金にかけたままにしておいた。そして、声で正体が知れてしまわぬようほとんど聞こえないくらいの小声で「ジョージ」と呟いた。

CamScannerでスキャン

「冬じゅう雪にとじ込められちまってさ」と大男は言った。「それで会いに来れなかったんだよ」。彼はなおもエフィングに向かって歩きつづけ、握手ができる近さまで来てようやく立ちどまった。エフィングはライフルを左手に移し、挨拶に右手を差し出した。インディアンは一瞬のあいだ、彼の目をじっとのぞき込んだ。だが次の瞬間、危機はもう過ぎていた。

「元気そうだな、トム」と男は言った。「ほんとに元気そうだよ」

「ありがとう」とエフィングは答えた。「あんたも元気そうじゃないか」

大男はどっと笑い出した。頭のネジが若干ゆるんでいそうな、さも嬉しそうな笑い声である。その時点で、これなら何とかなるとエフィングは確信した。まるでこっちが今世紀最大のジョークを決めたみたいな笑い方じゃないか。これっぽちの芝居でここまで効き目があるのなら、だまし通すのもそれほど難しくはあるまい。実際、何もかもがびっくりするくらいうまく行っている。エフィングは隠者にごく大まかに似ているにすぎない。だがどうやら、先入観というものは物理的証拠を変容させてしまうものらしい。インディアンは隠者のトムに会うことを予期して洞穴にやって来た。そして、トムと呼ばれて答えた人物が、自分が会いにきたトムでない人物かもしれないなどとは思いつきもしないがゆえに、彼はただちに、目の前の事実を自分の予測に合うよう変えてしまったのである。二人のトムのあいだにずれがあったとしても、それを自分の記憶のあやふやさのせいにしてしまったのだ。もちろん、男の知恵がやや足りないことも大いに助かっている。あるいは、相手が本物のトムでないことくらい、向こうもはじめから承知なのかもしれない。男はただ二、三時間の話相手を求め

CamScannerでスキャン

て洞穴を上ってきただけなのだ。相手になってくれれば誰だって構わないのだ。本物のトムだろうと聖者だろうと、彼にとってはどうでもいい問題なのである。

二人はその日の午後、一緒に洞穴で煙草を吸って過ごした。ジョージは煙草の葉を一袋持参してきていた。どうやらこれが恒例のお土産らしい。天にも昇る思いで、エフィングはたて続けにそれを喫った。何か月も一人で暮らしたあと、こうして他人と一緒にいるのは妙な気分だった。はじめの一時間くらいは、口から言葉を出すのも一苦労だった。喋る習慣がすっかりなくなってしまっていて、舌もうまく動かなくなっていた。ぶざまにもがく舌は、まるで彼の命令そっちのけでじたばたのた打ちまわる蛇だった。幸いなことに、本物のトムはあまり喋るほうではなかったらしく、ジョージもときおりの相槌くらいしか期待していないようだった。ジョージは明らかにこの場をとことん楽しんでいた。三、四センテンス喋るごとに、首をうしろにそらして大笑いした。笑うたびに話の流れを忘れてしまい、また別の話題に飛ぶものだから、ついて行くのは大変だった。ナバホ族の居留地の話が突然酒場での酔っ払いの喧嘩の話に移り、それがまた今度は列車強盗をめぐる熱の入った講釈に変わる、といった具合。それらの話を総合するに、この男は口裂けジョージの名で通っているらしく、そう呼ばれても本人はまるで気にしていなかった。それどころか、自分だけに属す名を世界が与えてくれたことが、勲章でももらったみたいに嬉しいらしかった。人の好さと頭の弱さがここまでひとつになった人物はエフィングもはじめてだった。彼はジョージの話を精いっぱい注意して聞き、しかるべき場所でそれらしくうなずくよう努めた。一度か二度、捜索隊

の噂を聞かなかったかと訊ねてみたい誘惑にも駆られたが、そのたびに何とか自分を抑えつけた。

午後が過ぎていくなかで、エフィングは少しずつ、本物のトムをめぐる事実を組み立てていくことができた。口裂けジョージの話は、取りとめもなく、筋道も定まらなかったが、それでもやがて、一定の頻度で同じところに戻ってくるようになり、いくつかのポイントでくり返し交差したので、そこから次第に、より大きな、まとまった物語の骨格が浮かび上がってきたのである。ささいな出来事が再三口にされる一方、決定的な事件はいっこうに語られず、話のはじまりに属す事柄が最後になってやっと出てきたりもしたが、それでも次のような結論を引き出すには十分だった。すなわちこの隠者は、グレシャム兄弟というならず者の一味とともに、何らかの犯罪活動にかかわっていたのである。みずから積極的に加わっていたのか、それとも単に洞穴を隠れ家に提供していただけなのかはよくわからなかったが、どちらにせよ、殺人が起きたことも、エフィングが着いた日に食糧がふんだんに残っていたことも、これでひとまず納得が行った。何も知らないことを暴露しては具合が悪いので、エフィングとしても根掘り葉掘り訊ねるわけにはいかなかったが、ジョージの話から判断する限り、どうやらグレシャム兄弟はまもなく――おそらくは春の終わりごろに――帰ってくる予定らしかった。ただ、何ぶん話はひとところにとどまらず、一味が現在どこにいるかまでは判明しなかった。ジョージは何度も椅子から飛び上がり、洞穴のなかを歩き回って、絵を一枚一枚じっくり眺めては、つくづく感心したように首を横に振るのだった。なあトム、あん

たな絵を描けるとは知らなかったよ、と僕は同じ科白をその午後に何十回と口にした。こんな綺麗なものははじめて見るよ。世界じゅうこんな綺麗なものはないよ。なあ、俺がちゃんとメンテナンスしてたら、そのうち俺にも絵を教えてくれるかね、とジョージは言った。エフィングは僕の目をじっと見つめ、いいとも、そのうちな、と答えた。絵を他人に見られてしまったのは不本意だったが、と同時に、これほど熱狂的な反響を得たことはやはり嬉しかった。おそらくそれは、これらの作品が得るであろう唯一の反響なのだ。

口裂けジョージが訪ねてきて、すべては一変した。これまで何か月にもわたって、エフィングはおのれの孤独を確固たる実体に仕立て上げようと努めてきた。自分の生の境界線たる、完璧な要塞を築くことに専心してきた。ところがいま、他人と一緒のひとときを洞穴で過ごしてみると、自分が作り上げてきた状況がいかにもろいものかを思い知らされた。人々は彼の居場所を知っているのであり、いまこうして誰かが会いにきたからには、また誰かが来ないという保証はどこにもないのだ。気をつけなくては。侵入者に対し、つねに警戒の目を光らせなくては。この不断の用心が、彼の精神をじわじわ蝕んでいった。やがて彼の世界の調和はすっかり壊れてしまった。でもどうしようもなかった。来る日も来る日も見張りを続け、来たるべき出来事に備えるしかなかった。はじめのうちは、ジョージがまたやって来るのを待っていたが、何週間か経っても大男は現われなかったので、今度はグレシャム兄弟に注意を向けはじめた。冷静に考えれば、そこですべておしまいにして、荷物をまとめて洞穴を出るのが賢明だっただろう。だが、彼のなかの何かが、脅威にやすやす屈してしまうのを拒ん

でいた。立ち去らないのは狂気の沙汰だと自分でも承知していた。それは何の意味もない選択であり、みすみす命を落とすことになるのはまず確実だ。だがいまの彼にとって、洞穴こそ唯一戦うに値するものだった。洞穴を捨てて逃げる気にはなれなかった。

肝腎なのは不意打ちを喰わないようにすることだ。眠っているあいだに入ってこられたら、もうチャンスはない。ベッドから出る間もなく殺されてしまうだろう。連中は前にも一度そうやっているわけだし、もう一度やるくらい訳はないはずだ。だがその反面、何か警報装置を作って、彼らが近づいてきたことがわかるようにしたところで、わずかばかりの時間が稼げるだけの話だろう。目を覚まし、ライフルをつかむくらいの余裕はできるかもしれないが、三人一度にやって来られたら、やはりこっちの不利に変わりはない。洞穴の入口に石や枝でバリケードを築けばもっと時間を稼げるだろうが、そうなると唯一の強み——すなわち、自分がここにいることを彼らに知られていないという事実——をみすみす放棄してしまうことになる。バリケードを目にした瞬間、誰かが洞穴に住んでいることを兄弟は知り、しかるべき対応に出てくるだろう。起きている時間のほとんど全部を費やして、エフィングはこの問題について考えた。取りうるさまざまな戦術を一つひとつ検討し、自殺行為にならぬような策を考え出そうと懸命に知恵を絞った。結局、洞穴で眠るのはいっさいやめて、裏の崖を半分くらい下りたあたりの岩棚に毛布と枕を持っていった。グレシャム兄弟のウィスキー好きは口裂けジョージから聞いていたから、洞穴に入ったら連中はまず酒を飲み出すだろうとエフィングは踏んだ。長い砂漠の旅で三人とも退屈しきっていることだろう。いったん酔って

くれば、もうこっちのものだ。人が住んでいる形跡をエフィングは洞穴内からできる限り抹消した。絵やノートブックは奥の暗がりにしまい込み、ストーブを使うのもやめた。家具や壁に描いた絵はどうしようもないが、とにかくストーブが冷たくなっていれば、絵を描いた人間はもういなくなったものと考えてくれるのではないか。むろんそう考えるという保証は何もない。だがそう期待する以外に、難局を切り抜ける道も思いつかなかった。最近誰かが洞穴にいたということは、連中にも示しておく必要がある。去年の夏に彼らが来て以来誰もいなかったように見えるとすれば、隠者の死体がなくなっていることの説明がつかなくなってしまう。となると、グレシャム兄弟も不審に思うにちがいない。誰かが一時期そこに住んでいたとわかれば、不審の念もひとまず解消するだろう。少なくともエフィングはそう期待した。この状況にひそむ無数の不確定要素を考えれば、あまり上手い話を期待するわけにもいかなかった。

　地獄のような日々がさらに一か月過ぎた末に、とうとうグレシャム兄弟が戻ってきた。五月なかば、バーンと一緒にニューヨークを発ってから一年ちょっと経ったころのことである。兄弟は黄昏どきにやって来た。大声の会話、笑い声、調子はずれな歌声。岩山に騒々しい声が響きわたって、三人の到来を告げた。準備の時間は十分にあったが、それでもエフィングの胸がどきどき激しく脈打つことに変わりはなかった。とにかく落着くんだ、と前もって自分に言い聞かせておいたものの、夜のうちに決着をつけるしかないことを彼は悟った。それ以上、こんな緊張を続けるなんてとうてい不可能だ。

崖の裏の狭い岩棚に身をかがめ、夜の闇があたりにたれ込めるなか、エフィングはチャンスが来るのを待った。グレシャム兄弟を乗せた馬が近づいてくるのが聞こえてきた。二言三言、話し声が聞こえたが、内容まではわからなかった。やがて兄弟の一人が「トムを放り出したら少し空気を入れ替えなくちゃな」と言うのが聞こえた。他の二人が笑い、その直後に声がぱたっと止んだ。洞穴に入ったのだろう。三十分後、屋根からつき出たブリキの煙突が煙を出しはじめ、肉を焼く匂いが漂ってきた。その後二時間は何も起こらなかった。耳を澄ませていると、馬たちが下で咳払いをしたり、ひづめで地面を叩いたりするのが聞こえてきた。ダークブルーの夕暮がじわじわ黒くなっていった。月は出ていなかったが、空は一面の星に明るく輝いていた。ときおり、笑い声のくぐもった余韻が聞こえてきたが、それっきりだった。そのうちに、兄弟が小便をしに一人ずつ交代で岩山に出てくるようになった。トランプでもやりながら飲んだくれているといいが、とエフィングは期待したが、もちろん確証はない。最後の一人が用を足すのを見届けてから一時間か一時間半待とう、と彼は決断した。それくらい経てばたぶん三人とも眠りこけていて、彼が入っていく足音も聞こえまい。そう考えて待ち構えながら、どうやって片手でライフルを操ったものかをエフィングは思案していた。洞穴の明かりが消えていたら、狙いを定めるために蠟燭を持っていく必要があるだろう。だが彼はそれまで、片手で撃つ練習を全然やっていなかった。ライフルはウィンチェスターの連発銃で、一発撃つごとに撃鉄を起こし直さねばならず、その作業はいつも左手でやっていたのだ。蠟燭を口にくわえるという手もあるが、目のすぐそばに火があるのは危険だ

し、炎が髭に触れてしまったら目も当てられない。葉巻のように人差し指と中指で支えるしかない、と彼は判断した。残り三本指で、何とか銃身を握れるものと期待しよう。あるいは、銃床を肩に載せる代わりに腹に押しつければ、引き金を引いてから右手ですばやく撃鉄を起こせるかもしれない。だがいずれにせよ絶対確実な手段とはとても言えない。どたん場での、思いつきの方便にすぎない。闇に身をひそめて待ちながら、エフィングは自分の計算の甘さを呪い、おのれの馬鹿さ加減に心底呆れてしまった。

結果的には、光は問題にならなかった。隠れていた場所から這い出し、身を低くしたまま洞穴の表側に回ってみると、なかでまだ蠟燭が燃えているのが見えたのである。エフィングは入口のかたわらに立ちどまって息を殺し、もし兄弟がまだ眠っていないようだったら岩棚に飛んで帰るつもりで、じっと耳を澄ませてみた。しばらくすると、いびきのような音が響いてきたが、そのすぐあとに、テーブル付近とおぼしきあたりから、いろんな音が聞こえてきた。ふうっというため息、しばしの沈黙をはさんで、グラスをテーブルに置いたような小さなごんという音。少なくとも一人は起きているのだ。だがまだ一人だけと決まったわけではない。やがて、トランプをシャッフルする音が聞こえてきた。それから、テーブルをとんとんと打つ音が七回。一息置いて、六回打つ音、それからまた一息。次は五回。そして四回、三回、二回、一回。一人遊びだ。絶対間違いない、ソリティアだ。一人は起きていて、あとの二人は寝ているのだ。さもなければトランプをしている男は仲間のどちらかに話しかけるはずだ。黙っているのは、話しかける相手がいないからだ。

エフィングはライフルの撃鉄を起こし、洞穴に入っていった。左手で蠟燭を持つのは造作ないことだった。さっきのパニックはまったくの取越し苦労だったのだ。エフィングが姿を現わすと、男はさっと顔を上げ、恐怖に目を見開いた。「何てこった」と男は小声で言った。「お前、死んだはずじゃないか」

「残念ながら逆だね」とエフィングは答えた。「死んでるのはお前さ、俺じゃない」

エフィングが引き金を引いた次の瞬間、男は椅子に座ったままうしろに飛び上がった。弾丸が胸を貫くと同時に男は悲鳴を上げたが、やがて何の音も立てなくなった。エフィングは撃鉄を起こし直し、寝袋から這い出そうとあわてている二人目の兄弟に狙いを定めた。今度も一発で始末した。弾は顔のど真ん中に命中し、その勢いで頭のうしろ半分が吹っ飛んで、脳味噌や骨の破片をまき散らしながら洞穴のなかを転がっていった。第三のグレシャムはもう少し厄介だった。この男は奥の方で寝ていて、エフィングが二人目を始末したころには、すでに自分の銃をつかんで発砲の態勢に入っていた。弾丸がエフィングの頭のすぐ横をかすめていき、背後の鉄のストーブに当たってはね返った。エフィングは撃鉄を起こし、左手のテーブルのうしろに飛び込んで身を隠したが、その衝撃でたまたま蠟燭が二本とも消えてしまった。洞穴は真っ暗になった。と、奥にいる男は突然しくしくとヒステリックに泣き出し、死んだ隠者について訳のわからない文句をまくし立て、エフィングのいる方角に向けてめったやたらに発砲してきた。洞穴の輪郭を知りつくしているエフィングは、闇のなかでも男の位置を正確に判断することができた。相手が六発撃ち終えるのをエフィングは確認した。向

こうは半狂乱になっている。明かりなしでは弾もこめ直せまい。エフィングは立ち上がり、ベッドの方へ歩いていった。そして引き金を引き、弾丸を撃ち込まれた男が悲鳴を上げるのを聞き、それから撃鉄を起こしてもう一度撃った。洞穴はしんと静かになった。室内に漂う火薬の匂いが鼻を刺した。突然、自分の体が震え出すのが感じられた。よろめきながら懸命に外に出て、がくんと両膝をつく間もなく、地面に吐いた。

彼はそのまま洞穴の入口で眠りに落ちた。翌朝目を覚ますと、ただちに死体の始末に取りかかった。自分が何のやましさも感じていないこと、この手で殺した男たちを少しの良心の呵責もなく眺めていられることに、我ながら驚いてしまった。死体を一つひとつ洞穴から引っぱり出し、崖の裏手に引きずり下ろして、ハコヤナギの下に埋まっている隠者と並べて埋めた。最後の死体を片付けたころには正午を過ぎていた。くたくたに疲れて、昼食を取りに洞穴に戻っていった。そのときだった。テーブルの前に座って、グレシャム兄弟のウィスキーをグラスに注ぎかけた瞬間、ベッドの下に鞍袋が転がっているのが目に入った。エフィングが僕に言った言葉を使えば、まさしくその瞬間、彼にとってすべてがふたたび一変した。人生はにわかに針路を変えたのだ。鞍袋は全部で六つあった。最初の一袋の中身をテーブルに空けたとたん、洞穴暮らしが終わりを告げたことを彼は悟った。本がばたんと閉じられるように、あっさりと、決定的に。テーブルの上には金があった。鞍袋をまた一つ空けるたびに、金の山はどんどん高くなっていった。やっとのことで数え終わると、現金だけでも二万ドル以上あった。金以外にも懐中時計、ブレスレット、ネックレスなどが混じっていて、加

えて最後の袋には無記名債券がきっちり三束に束ねられ、コロラドの銀鉱、ウェスティングハウス電力、フォード自動車などの債券が一万ドル分以上あった。当時としては信じがたい額だ、とエフィングは言った。途方もない財産だよ。まっとうに動かせば、一生働かずに暮らせるだけの額だ。

盗まれた金を返すのははじめから論外だった。警察に行って一部始終を報告しようなどとはまったく考えなかった。自分が発見されるのを恐れたのではない。ただ単に、その金をわがものにしたかったのだ。その欲求はあまりに強く、自分の行ないについてじっくり考えてみる気持ちはまるで起こらなかった。金がそこにあった。それを自分のものにした。ただそれだけだ。その金がすでに自分のものであるような気になっていた。正しいか間違っているかという問題はまったく無関係だった。彼は冷酷に三人の男を殺したのであり、いまやそんな綺麗ごとを考えていられる身ではなかった。グレシャム兄弟の死を嘆く人がどのみちそう大勢いるとも思えない。彼らは消えてしまったのであり、世界はまもなく、彼らがもはや存在しないという事実に慣れてしまうだろう。ジュリアン・バーバーなしで生きることに慣れたのとまったく同じように。

翌日はまる一日を費やして、洞穴を去る準備をした。家具をきちんと元に戻し、目についた限り血のしみを洗い落とし、ノートブックを食器棚(だな)にしまい込んだ。絵に別れを告げねばならないのはつらかったが、といってどうしようもない。ベッドの足元にきちんと重ねて立てかけ、壁の方に向けた。これだけなら二時間もかからなかったが、午前の残りと午後のあ

いたすっと、明い日なたに出て石や枝を集め、洞穴の入口をふさいだ。帰ってくることがあるとは思えなかったが、それでもやはり、この場所を隠しておきたかったのだ。これは彼個人の記念碑であり、彼の過去を葬った墓なのだ。今後この洞穴に思いをめぐらすことがあるたびに、それがまだここに、昔のままの姿で残っているんだと思いたかった。そうすれば、二度と足を踏み入れることはなくとも、ここが心の避難所になってくれる。

その夜彼は外で眠り、翌朝、出発の準備にかかった。鞍袋に金を詰め、食糧と水を集めて、グレシャム兄弟が残した三頭の馬に荷物を全部縛りつけた。それから、次に自分が何をするのかを思い描こうとしながら、馬を走らせていった。

そこまで話が進むのに二週間以上かかった。クリスマスはもうとっくに過ぎていたし、その一週間後に六〇年代もすでに終わりを告げていた。でもエフィングは時代の切れ目のことなどほとんど頭にないようだった。彼の思いはもっと前の時代に埋没していた。無限の細心さをもって、エフィングは自分の物語を掘り進んでいった。何ひとつ省くことなく、くり返し前に戻って細かなディテールをつけ加え、ごくささいな意味あいについても入念に説明しながら、自分の過去を取り戻そうとしていた。しばらくすると僕も、これは本当の話なんだろうかなどと思案するのをやめてしまった。彼の物語は、いまや走馬燈のような幻想性を帯びていた。ときには、過去の人生の外的な事実を思い出しているというより、その人生の内

的な意味を説き明かす寓話を捏造しているんじゃないかと思えることもあった。隠者の洞穴、鞍袋の金、西部劇顔負けの撃ちあい。何もかもあまりに出来すぎている。けれど、あまりに途方もない話だという事実こそが、おそらくこの物語に何よりも説得力を与えていた。こんな話をわざわざでっち上げる人間がいるとは思えない。それに話しぶりも真に迫っている。本心から語っていることがひしひしと伝わってくる。僕はただ話の流れに身を委ね、それが実際にあった出来事かどうかなど考えもしなかった。ひたすら耳を傾け、彼の言葉を記録した。余計な口をはさんだりはしなかった。虫酸が走るような思いをさせられることもあったが、その反面、この人は僕と同類なんだと感じずにはいられなかった。そういう気持ちを抱き出したのは、たぶん洞穴の話がはじまったあたりからだ。考えてみれば僕だって洞穴暮らしの経験はあるわけだし、洞穴での孤独感を彼が語ったときなどは、僕自身があのとき感じたのと同じ思いが語られている気がしてならなかった。僕自身の物語にしたところで、エフィングの話と同じくらい常軌を逸している。でも僕にはわかっていた。もしかりにエフィングにそれを語ったなら、きっと一言残らず信じてくれるだろうと。

日が経つにつれて、家のなかの雰囲気はだんだん息苦しくなっていった。厳しい天気が続き――凍りつく雨、氷に覆われた街、体をもろにつき抜ける風――当面は午後の散歩も中断せざるをえなかった。エフィングは死亡記事の作業時間を倍に増やした。昼食後に自室に戻って少し昼寝してから、二時半か三時になるとまた威勢よく飛び出してきて、何時間も話しつづけるのだ。あれほどのペースで喋りつづけるエネルギーが、いったいどこから湧いてい

たのか？　センテンスとセンテンスのあいだで普通よりやや長めに息をつぐ必要がある以外、声が出なくて困るようなことはまったくなかった。あたかも声自体がひとつの部屋であるかのように、僕はやがてその声のなかで暮らすようになっていった。それは窓ひとつない、一日が過ぎるたびにじわじわ小さくなっていく部屋だった。エフィングはいまやほとんど欠かさず両目にアイパッチをつけるようになっていた。僕と彼とのあいだに何か絆があるんだなどと思い込む余地はなかった。彼は頭のなかの自分の物語と一人で対峙し、僕は僕で、彼の口から流れ出る言葉と一人で対峙していた。それらの言葉が、僕のまわりの空気の一インチ一インチを満たし、しまいにはそれらの言葉を呼吸するしかなくなった。もしもキティがいてくれなかったら、僕はきっと窒息してしまっていただろう。エフィングとの仕事が済んだあと、たいていは何時間か彼女と過ごし、夜もできるだけ長いあいだ一緒にいた。朝帰りをしたことも一度ならずあった。ミセス・ヒュームは僕の行動を承知していた。エフィングは気づいていたとしても何も言わなかった。要は毎朝八時に僕が朝食の席に遅れず現われればいいのだ。そして僕は一度も遅れなかった。

　洞穴を出ると——とエフィングはふたたび語り出した——何日も砂漠を旅した末に、ブラフの町に着いた。あとは楽だった。町から町へのんびり移動しながら少しずつ北へ上っていき、六月末にソルトレーク・シティに戻って、そこから鉄道を使うことにしてサンフランシスコまで切符を買った。カリフォルニアに着いて、彼は新しい名前を発明した。最初の晩にホテルの帳簿にサインするときに、自分をトマス・エフィングに変えたのである。トマスは

CamScannerでスキャン

モランにあやかったつもりだったが、ペンを置いた時点でふと、隠者の名前――一年以上ひそかに自分のものにしていた名だ――もトム（訳注 トマスの愛称）だったことに思いあたった。この偶然を、彼は吉兆として受けとめた。自分の選択がより堅固な、必然的なものになったように思えた。名字については講釈の必要もあるまい、とエフィングは言った。エフィングという名が洒落であることはすでに聞かされていたから、こっちが何か決定的な読み違いでもしていない限り、その由来はまず疑いようがないと思えた。トマス、と書いた時点で、きっと彼は「疑うトマス」という成句（訳注 「疑り深い人」の意）を思い出したのだ。そして「ダウティング」の部分が別の分詞に変わって「糞ったれトマス」となり、一応世間体につき合ってあいだ二文字を省略した結果「-ing」となったのである。かくしてトマス・エフィング、おのれの人生を台なしにした男が生まれた。たちの悪い冗談を好む彼の性癖からして、さぞ一人で悦に入ったにちがいない。

そもそものはじまりから、僕は脚の話を聞かされるものと予想していた。ユタの岩山はいかにもその種の事故が起こりそうな場所に思えた。でも毎日少しずつ物語が進んでも、エフィングを不具にした事件の話はいっこうに出てこなかった。スコーズビーとバーンとの旅、口裂けジョージとの出会い、グレシャム兄弟との撃ちあい。それらの出来事を一つひとつ、エフィングは無傷のまま切り抜けた。やがてサンフランシスコまで来てしまうと、ひょっとして脚の話は最後まで出てこないんだろうかという気がしてきた。彼は一週間以上を費やして、金をどう動かしたかを克明に語った。行なった投資、成立させた取り引き、株で冒した

CamScannerでスキャン

とてつもないリスクなどを一つひとつ列挙した。九か月もすると、以前とほぼ変わらぬ大金持ちになっていた。ラシアンヒルで召使いの揃った屋敷に住み、女にも不自由せず、社交界の華と目される人々とつき合いを持った。もし何ごとも起こらなかったら、こうした暮らしに、あるいはそのまま腰を落着けていたかもしれない（実際それは、子供のころから知ってきた暮らしだった）。ところが、サンフランシスコに来て一年ばかり経ったところで、ちょっとした事件が持ち上がった。二十人ほどの晩餐会に招かれた席上で、かつて知りあいだった人物に出くわしたのである。ニューヨークで十年以上彼の父親の同僚だった、アロンゾ・リドルという男だった。もうすっかり老人になっていたが、第三者に紹介されて握手を交わしたとき、リドルが彼の顔を認知したことは明らかだった。すっかり驚いたリドルは、あなたは私が昔知っていた人間に生き写しですよと口走った。エフィングは軽く受け流し、人はみなどこかに分身がいるものですからね、と愛想よく冗談まで言った。だがリドルの驚愕はあまりに大きく、それくらいで引き下がろうとはせず、こともあろうにジュリアン・バーバー失踪の物語をみんなの前で語り出したのである。エフィングにとっては何ともおぞましい一時だった。その晩のあいだずっと、疑わしげにいぶかるリドルの視線から逃れるすべもないまま、生きた心地もなく、身をすくめていたのだった。

　これをきっかけに、彼は自分の状況がいかに危ういものであるかを思い知った。遅かれ早かれ、いずれまた過去の知りあいに出くわすだろう。そうしたら、今度もリドルの場合のように何とか切り抜けられる保証はどこにもない。きっと次に出会う人間はもっと確信があっ

て、もっと攻撃的に非難の言葉を浴びせてくるだろう。あっという間に、目の前ですべてが崩壊してしまうかもしれない。予防手段として、エフィングはにわかにパーティーを開くのをやめ、人からの招待も断るようになった。だがこの処置も、長い目で見れば大して足しにならないことは自分でも承知していた。いずれ人々は、彼がつき合いを絶ったことに気がつくだろう。そうなれば好奇心を刺激されて、何かと噂するにちがいない。厄介な事態になるのは目に見えている。時は一九一八年十一月、休戦条約が交わされたばかりである。アメリカにいられる日にもう限りがあることをエフィングは悟った。だがそうとはっきりわかっていても、なぜか行動を起こす気になれなかった。無気力にとり憑かれてしまい、計画を立てることも、どんな道が開けているか考えてみることもできなかった。罪悪感に苛まれ、人生をめちゃくちゃにしてしまったという思いにうちひしがれた彼は、これまでの経過を説明する何かとてつもない嘘を抱えてロングアイランドに帰ろうかと夢想してみたりもした。むろんそんなことは問題外だったが、彼はいわば救済の夢としてそれにすがりつき、偽りの抜け道を次々に飽かず考え出した。依然として行動を起こす気にはなれなかった。何か月かのあいだ、エフィングは世間との交渉を断って暮らした。昼は暗くした自室で眠り、夜になるとチャイナタウンにさまよい出ていった。いつも決まってチャイナタウンだった。そこへ行きたかったわけでは全然ない。だが行くのをやめるだけの意志の力もなかった。みずからの意に反して、迷路のように入り組む狭い路地裏に隠れた売春宿やアヘン窟や賭博場に彼は足しげく通った。何もかも忘れたかったんだ、とエフィングは言った。自分を包む激しい自己嫌

CamScannerでスキャン

恥の念に釣りあうほどのおぞましい堕落のなかに溺れてしまいたかったんだ、と。かたかたと廻るルーレット、煙草の煙、あばた面で歯の抜けた中国女、澱んだ室内の空気、そして嘔吐。それらが発散する毒気が彼の夜を包み込んだ。湯水のように金を使い、八月には財産の三分の一近くが放蕩に消えてしまっていた。あるいはそのまま、自殺か破産に追いやられるまで、そんな状態が続いたかもしれない。だがここでもまた運命が追いついてきて、エフィングを真っ二つに打ち砕いた。これほど乱暴な、これほど唐突な出来事もなかった。が、ひどく惨めな思いは味わわされたものの、実のところ、それくらいの災難でも起きなければ彼は救済されえなかったのだ。

その夜は雨が降っていた、とエフィングは言った。チャイナタウンで何時間かを過ごしたあと、歩いて家に帰る最中だった。麻薬のせいで体じゅうがくらくらし、自分がどこにいるのかもろくに意識していなかった。午前三時か四時のことである。自宅の方に通じる急な坂を彼は上りはじめた。街灯に行きあたるたびにしばし立ち止まり、息を整えた。歩き出したあたりで傘もなくしてしまっていて、その坂道にたどり着いたころにはもうずぶ濡れだった。雨が激しく歩道を打ち、頭はアヘンに朦朧となって、見知らぬ人影が背後に近寄ってくるのも聞こえなかった。よたよたと道を歩いていたのが、次の瞬間、ビルが頭の上に降ってきたような衝撃を受けた。それが何なのかは見当もつかなかった。棍棒、煉瓦、銃床、何であっても不思議はなかった。感じたのはただ、その殴打の力だけだった。頭蓋骨の底部を襲ったすさまじいショックだけだった。彼は崩れ落ち、ばったり歩道に倒れ込んだ。意識を失って

CamScannerでスキャン

いたのはほんの二、三秒だったにちがいない。次に覚えているのは、目を開けて、顔に雨が打ちつけるのを感じたことだった。彼は坂道を滑り落ちていた。抑えようもないスピードで、つるつるの街路を滑走していた。頭から先に、腹を下に、何かにつかまってこの気狂いじみた落下を止めようと手足をばたばたさせながら。いくらもがいても、止まることも立ち上がることもできなかった。傷ついた昆虫のようにじたばた体を揺さぶるしかなかった。ある時点で、体をねじったのか、歩道を落下する軌道がわずかに斜めに曲がり、いまにも縁石を越えて車道に飛び出そうとしているのがわかった。衝撃を覚悟して身を固くしたが、縁石のすぐ手前まで来たところで体はさらに八十度か九十度回転し、街灯に正面衝突した。すさまじい勢いで、背骨が鉄柱にぶち当たった。と同時に、何かがぱちんと切れるのが聞こえた。それから、いままで感じたどんな痛みとも似ていない激痛が襲ってきた。あまりにグロテスクな、あまりに激しい痛みに、体が文字どおり破裂してしまったように思えた。

怪我の詳細についてエフィングは何も語らなかった。問題なのは今後の見通しだった。そしてその点に関し、医者たちはまもなく全員一致の裁決を下した。彼の両脚はもう使えない。どんな療法を試みたところで、二度と歩けるようにはならない。そう言われて、なぜかわしはほとんど安堵に近い気持ちを感じたんだ、とエフィングは言った。彼は罰せられたのだ。これだけ恐ろしい罰を受けたからには、もはや自分で自分を罰する必要はない。罪の償いは済んだのだ。こうして彼は、ふたたび空っぽの状態になった。罪の意識ももはやなく、正体がばれはしまいかという不安も恐怖感もなくなった。かりに事故がもう少し違った性質のも

のだったなら、こんな気持ちになることもなかったかもしれない。自分を襲った人物の姿を見なかったからこそ、そもそもなぜ襲われたかもわからなかったからこそ、これを一種の天誅と受け取ることができた。この上なく純粋な正義が果たされたのだ。容赦ない、人智を越えた殴打が天から降ってきて、意味も慈悲もなく彼を打ち砕いたのだ。身を守る時間も、おのれを弁護する時間もありはしなかった。気がついたらそれははじまっていたのだ。裁判はすでに終わり、判決も下され、裁判官は法廷から姿を消していた。

九か月かかって回復すると（回復しうる範囲で、ということだが）エフィングはアメリカを去る準備をはじめた。家を売り払い、資産をスイスの無記名口座に移して、アナーキストの組織に所属する人物からトマス・エフィング名義の偽造パスポートを買った。当時はパーマー司法長官の先導になる赤狩り旋風の真っ最中で、労働組合のメンバーが次々にリンチを加えられ、サッコとバンゼッティが逮捕され、急進派グループの大半が地下に潜行していた。パスポートを偽造してくれたのは、貧民セツルメントの散らかった地下室を仕事場にしているハンガリー人移民だった。パスポートを手にするまでにずいぶん苦労させられたよ、とエフィングは回想して言った。男は神経衰弱の寸前まで来ていて、エフィングのことをおとり捜査員ではないかと疑い出したため、仕事ができ上がったとたんに逮捕されるのを恐れて、〆切が来るたびに何やかやと見えすいた口実を並べ、何週間も完成を遅らせたのだった。その間に値段もだんだん吊り上がっていたが、エフィングにしてみれば金はまるで問題ではなかったから、とうとう業を煮やした彼は、翌朝九時きっかりにパスポートをもらえるなら倍

の金を払う、と持ちかけた。いまや金額は八百ドル以上に達していた。ハンガリー人アナーキストにはあまりに誘惑的な話だった。翌朝エフィングから現金を受け取り、逮捕もされないとわかると、いっぺんに緊張が解けたアナーキストは、しくしく泣き出し、感謝の接吻をエフィングの手に浴びせた。その後二十年、これがエフィングにとってアメリカで他人と交わした最後の交流ということになった。泣き崩れる男の姿の記憶は脳裏に焼きついて離れなかった。アメリカ全体が地獄に堕ちちまったんだ、そうエフィングは思った。何の未練もなく別れを告げることができた。

一九二〇年九月、蒸気船デカルト号に乗って、パナマ運河経由でフランスへ向かった。フランスへ行く理由が特にあるわけではなかったが、といって行かない理由も何もなかった。一時はどこか奥地の植民地に行こうかとも考えたが――中央アメリカか、あるいは太平洋の島か――ジャングルで余生を送るというのは、無垢でお人好しの原住民に囲まれていっぱしの王様になれるのはともかく、あまり創造力を刺激される話ではなかった。エフィングは楽園を探しているのではなかった。ただ単に、退屈しない国へ行きたいだけだった。イギリスは論外だった（彼はイギリス人をとことん見下していた）。フランスも大して変わらなかったが、若いころパリで暮らした一年の記憶は快かった。イタリアにも惹かれたが、フランス語だけは一応流暢に喋れるという点が結局話を決めた。少なくとも食べ物は美味いし、ワインもいい。たしかに、ニューヨーク時代の芸術家仲間にばったり出くわす可能性もほかのどの都市より高い。でもそうした出会いを恐れる気持ちはもうなくなっていた。あの事件が

すべてを変えていた。ジュリアン・バーバーは死んだのだ。彼はもう芸術家ではない。もう誰でもないのだ。トマス・エフィング、車椅子から離れられない、国を捨てた人間なのだ。誰かが彼の正体について文句をつけてきたら、地獄へ堕ちやがれ、と言ってやればいい。それだけのことだ。誰にどう思われようと、もうどうでもよかった。ときたま自分の身元について嘘をつかねばならないとしても、それで構いはしない、嘘をつくだけの話だ。どのみち何もかもが猿芝居なのだ。何をしようと変わりはない。

エフィングはさらに二、三週間話を続けたが、僕はもう前のようには惹きつけられなかった。肝腎な点はすでに語られていた。もはや明かされるべき秘密もなく、胸から絞り出すべき暗い真実も残っていなかった。エフィングの人生における主要な転換点はすべて、アメリカで、ユタへ旅立ってからサンフランシスコで事故に遭うまでに起きてしまっていた。ヨーロッパへ舞台が移ってからは、物語はよくある話になり下がった。いろんな事実、いろんな出来事が並ぶ、時の流れの物語にすぎなくなった。エフィングもそれを自覚しているように思えた。はっきり口には出さなかったけれど、話しぶりにも変化が見られ、前のような精緻で真摯な力はもう感じられなかった。雑な脱線も多くなり、話の流れを見失ってしまうこともしばしばで、ときにはまったくの矛盾に陥りさえした。たとえばある日には、フランスでの生活は怠惰そのものだった——本を読み、チェスに興じ、街角のビストロにたむろする——と言ったかと思えば、翌日になるところっと話が変わって、何やら複雑な商売の説明をしたり、描いたもののじきに破棄してしまった絵について語ったり、書店を経営したとか、

スパイ活動をやったとか、スペイン共和国軍のために資金を集めたとか言い出すのだ。嘘をついていることは間違いなかった。でもそれは、僕をだまそうというよりは、単に習慣からそうしているだけというふうに思えた。話も終わりに近づくと、エフィングはパベル・シュムとの交友について誠意をこめて語り、体は不自由になっても相変わらず盛んだった性生活の話をこと細かに述べ立て、さらには、宇宙をめぐるさまざまな持論を長々と講釈した。思考の電気、物質同士の隠れた結びつき、魂の輪廻。いちばん最後の日は、パベルと一緒にドイツ軍の侵攻迫るパリを逃げ出した話から、ブライアントパークでテスラに再会した話につながり、それから、何の前触れもなく、ぴたっと話は終わった。

「これで十分だ」とエフィングは言った。「ここで終わりにしよう」

「でもまだ昼食まで一時間ありますよ」と僕はマントルピースの上の時計を見ながら言った。「次のエピソードを軌道に乗せる時間は十分あります」

「口答えをするんじゃない。わしが終わりだと言ったら、終わりなんだ」

「でもまだ一九三九年までしか話してないじゃないですか。あと三十年残ってます」

「その三十年はどうでもいいんだ。一、二センテンスで勝手に片付けてくれればいい。『第二次大戦が勃発して欧州から帰国したエフィング氏は、ニューヨークに戻って三十年の余生を過ごした』とか何とかそんな感じだ。べつに難しくはなかろう」

「じゃ、終わりというのは、今日だけのことじゃないんですね。これで話はすべておしまい、そうおっしゃるんですね？」

「それはもうはっきり言ったはずだがな」

「いいんです、もうわかりました。納得は行きませんが、とにかくわかりました」

「時間がないんだよ、鈍い奴だな。さっさと書きはじめないと間に合わないんだよ」

その後の二十日間、僕は毎朝自分の部屋にこもって年代物のアンダーウッドに向かい、エフィングの生涯の三つの異なったバージョンをタイプした。まず新聞社に送る短いバージョン。ごく表面的な事実だけを、五百語で事務的に述べた文章である。それから「ジュリアン・バーバー謎の生涯」と題した長めのバージョン。三千語あまりの、なかなか猟奇的な物語で、これはエフィングの死後に某芸術雑誌に送るよう言われた。それから最後に、エフィングが語った通りの完全版原稿を編集したバージョン。長さにして百ページ以上あり、僕としてもこれにいちばん力を注いだ。無意味なくり返しや俗っぽい表現を丁寧に削除し、文章を練り上げ、語られた言葉の勢いを削ぐことなく書き言葉に移しかえようと工夫を凝らした。やってみるとそれは、細心の注意を要する厄介な作業だった。本来の意味に忠実であろうとして、文章全体を組み立て直さねばならないこともよくあった。エフィングがこの自伝を(もはやこれは死亡記事ではない)どう利用するつもりかはわからなかったが、完璧なものに仕立てようという気でいることは明らかだった。僕に何度も書き直しを命じ、読み上げられた文章で気に入らないセンテンスがあるたびに僕を叱り飛ばし、大声で文句を言った。毎

日の午後に行なわれる編集作業はまるで戦場だった。ごくささいな文体上の細部をめぐって、我々はたがいに怒声を浴びせあった。どちらにとっても精力を奪われる仕事だったが（二人の頑固者ががっぷり四つに組んだ死闘、という感じだ）、一つずつ、やがては三つすべてのバージョンについて我々は合意に達し、三月初旬に作業は完了した。

　翌日、僕の部屋のベッドの上に、三冊の本が置いてあった。どれもソロモン・バーバーという名の男が書いたものである。朝食の席では何も言わなかったが、置いたのはエフィングにちがいない。いかにも彼らしいやり方だ。遠回しで曖昧で、一見何の動機もなさそうに見える。もうそのころには僕もエフィングという人間がある程度わかっていたから、これが彼なりの、この本を読めというメッセージなんだと察しがついた。作者の名を見る限り、決して単なる思いつきではなさそうだ。何か月か前、物事にはかならず続きがあるとエフィングは言っていた。いよいよその続きがはじまるのだろうか。

　それは三冊ともアメリカ史の研究書で、それぞれ違う大学出版局から出ていた。『バークリー司教とインディアン』（一九四七）、『ロアノーク――消えた植民地』（一九五五）、『アメリカの荒野』（一九六三）。カバーに書かれた著者略歴はごく簡単なものだったが、乏しい情報をつなぎ合わせてみると、ソロモン・バーバーは一九四四年に歴史学の博士号を取得し、その後学術誌に多数の論文を発表しながら、中西部のいくつかの大学で教壇に立っていた。一九四四年という数字がポイントである。一九一六年、出発前夜のエフィングが妻を妊娠させたと仮定し、その翌年に息子が生まれたとすれば、一九四四年には二十七歳になっている。

CamScannerでスキャン

博士号を取るには妥当な年齢だ。何もかもつじつまが合うように思える。だが早合点は禁物である。さらに三日待たされて、やっとエフィングのほうから話を切り出してきた。そのときようやく、自分の読みが正しかったことを僕は確認したのである。

「火曜日に君の部屋に本を置いといたんだが、まだのぞいておらんだろうな」紅茶に角砂糖をもう一つ入れてくれと頼むみたいに、さもさりげない口調でエフィングは言った。

「のぞいてみましたよ」と僕は答えた。「そればかりか、読んでさえみました」

「そいつは驚きだ。歳を考えれば、ひょっとして君にもまだ望みがあるかもしれんな」

「望みは誰にでもありますよ。だからこそ世界は回るんです」

「格言は要らん。で、あの三冊をどう思った？」

「見事だと思いましたね。文章もいいし、論理もきちっとしている。僕には初耳の話がたくさんありました」

「たとえば」

「たとえば、バークリーがバミューダ島のインディアンを教育しようと考えていたなんて全然知りませんでした。バークリーがロードアイランドで過ごした年月のこともはじめて読んだし。どれも驚かされましたが、あの本で一番よかったのは、バークリーのそういう実体験を、認識というものをめぐる彼の哲学と結びつけて論じているところですね。議論が実に巧みで、斬新だし、奥も深い」

「ほかの二冊は？」

「同じです。ロアノークのこともろくに知りませんでした。消えた植民者たちをめぐる謎を解決してみせるわけですが、説得力がありますね。植民者たちがクロアタン・インディアンと手を結んで生き延びた、という説は読んでいて納得させられます（訳注　十六世紀末、人のいなくなったロアノークの植民地には、「クロアタン」という言葉が木の幹に彫ってあった）。ローリーやトマス・ハリオットに関する背景説明もよかった。ハリオットが望遠鏡で月を見た最初の人間だったってこと、御存知でしたか？　いままでずっとガリレオだと思ってましたけど、ハリオットのほうが何か月か早かったんですね」

「知っておる、もちろん。わしに向かって講釈は要らん」

「そちらの質問にお答えしているだけですよ。何を学んだか訊かれたから、答えたんじゃないですか」

「口答えはよせ。この家で質問をするのはこのわしだ。わかったか？」

「わかりました。どんな質問でも御自由になさって下さい。でもミスター・エフィング、わざわざ遠回りなさる必要はありませんよ」

「どういう意味だ？」

「これ以上時間を浪費することはないっていう意味です。あなたは僕に何かを言いたかったから、あの三冊の本を僕の部屋に置いた。だとすれば、あっさり言ってくれたらどうです」

「おやおや、今日はずいぶん冴えとるようだの」

「このくらいすぐ見当がつきますよ」

「まあそうだろうな。で、もう言ったも同然だろう？」

「ソロモン・バーバーはあなたの息子さんですね」

話が行きついた地点をまだ認めたくないかのように、エフィングは長いあいだ黙っていた。遠くにじっと目を向け、黒眼鏡を外してハンカチでレンズを拭き――盲人には無用の、不似合いなしぐさだ――それから、喉の奥をふんと鳴らした。「ソロモン」と彼は言った。「みっともない名前だ。だがむろん、わしがつけたんじゃない。存在しているかどうか知らん人間に名前をつけるわけにも行かんだろう?」

「会ったことはあるんですか?」

「会ったことはない。向こうにしても同じだ。奴にとってはあくまで、父親は一九一六年にユタで死んだんだ」

「いつ知ったんです、息子さんがいることを?」

「一九四七年だ。パベル・シュムのおかげだよ、パベルが扉を開いてくれたんだ。ある日、バークリーの研究書を奴が持ってきた。大した読書家だったからな、そのことはもう言ったと思うが。で、バーバーとかいう若い歴史学者の話をやり出すものだから、こっちも当然聞き耳を立てる。わしの過去についてパベルは何も知らんわけだから、もっと聞き出すには、まずは本に興味をそそられたふりをするしかない。この時点ではまだ、確かなことは何もなかった。バーバーなんてそう珍しい名前じゃないし、このソロモンとかいう男がわしにつながりがあると決める理由は何もない。それでも、何か勘が働いたんだよ。一人の人間としての長く愚かなキャリアのなかで、わしが何か一つでも学んだことがあるとすれば、それは勘

に耳を傾けることの大切さだよ。わしはパベル向けに作り話をでっち上げた。たぶんその必要もなかったろうがね。頼めばパベルは何でもしてくれただろうよ。北極へ行ってくれって言われても、すぐに飛んでいったと思う。わしとしてはちょっとした情報が欲しいだけだったが、あからさまに訊くのも危ない気がしたから、パベルにこう言ったんだ。実はいま基金を設立しようと考えてるんだがね、若い優秀な学者を毎年一人選んで賞を贈ろうと思うんだ。そのバーバーって男なんかなかなか良さそうじゃないか。金が要りそうな身かどうか、ちょっと調べてみるってのはどうかな？ そしたらパベルの奴、すっかり乗り気になってくれてな。奴にしてみれば、精神生活の後押しをすることこそ、この世で最高の善だったからな」

「でも奥さんのほうはどうなんです？ 奥さんのその後については何かわかったんですか？ 息子を生んだかどうか調べるくらい、そんなに難しくないでしょう。そういう情報なら、手に入れる道もいろいろあると思いますが」

「その通り。だがわしは、エリザベスについてはいっさい何も調べまいと心に決めたんだ。もちろん好奇心はあった。そりゃ当然だ、ないわけはない。でも同時に、蛆虫の缶をまたぞろ開けるのは御免だった。過去は過去だ、わしにしてみればもうすっかり閉ざされたものだった。あいつが生きているか死んでいるか、再婚したかしなかったか、そんなことを聞き出して何になる？ 何も知らないままでいよう、そう決めたのさ。ずいぶん肩ひじ張った選択だが、だからこそ自分が何者なのかを忘れずにいるのにも役立った。わしはもう別人なんだという事実を覚えている足しになったのさ。ふり返らないこと、大事なのはそれだった。後

悔もなし、同情もなし、甘っちょろい感傷もなし。エリザベスについて調べるのを断念することで、わしは自分の強さを保ったんだ」

「でも息子さんのことは知りたかった」

「それは話が別だ。自分が一人の他人をこの世に送り出したんだとすれば、そのことについて知る権利があるはずだ。わしはただ事実をはっきりさせたかったんだ。それだけだ」

「パベルがその情報を探し出すにはどれくらいかかったんです？」

「大してかからなかったさ。まずソロモン・バーバーの居所を調べて、アイオワだかネブラスカだか、覚えとらんがどこか中西部の三流大学で教えていることがわかった。そこでパベルは、例の本について手紙を出した。ファンレターだな、いわば。あとは楽なものだった。バーバーが丁重な返事をよこし、今度はパベルが、じきにアイオワだかネブラスカだかを通る予定があるから一度お会いできないものでしょうか、と書く。もちろん、まったくの偶然、という調子でだ。ハ！　この世に偶然なんてものがあるみたいにな。喜んでお会いします、とバーバーも言ってきた。かくしてお膳立ては整った。パベルは汽車に乗ってアイオワだかネブラスカだかまで出かけていって、バーバーと一緒に一晩を過ごし、わしが知りたい情報をすべて聞き出して帰ってきた」

「すなわち」

「すなわち――一、ソロモン・バーバーは一九一七年ロングアイランドのショーラムで生まれた。一、画家だった父親はずっと前にユタで亡くなった。一、母親も一九三九年に亡くな

った」

「あなたがアメリカに帰ってきた年ですね」

「どうやらそうなる」

「それから？」

「それから何だね？」

「次に何が起きたんです？」

「何も起こらんよ。パベルには、基金の話は気が変わったと言って、それでおしまいだ」

「御自分でお会いになりたいとは思わなかったんですか。そんなふうにあっさりけりをつけられるなんて、ちょっと信じられないな」

「わしにはわしなりの思惑があったんだよ。もちろん簡単だったとは言わん。でもわしは決心を貫いた。最後の最後まで貫き通したんだ」

「御立派な話ですね」

「そう、実に御立派である。君子の鑑である」

「それで、いまは？」

「決心は変わらなかったが、奴の近況は逐一耳に入ってきた。パベルがその後も文通を続けて、こまめに報告してくれたものでな。そのおかげでいまもこうやって君に話しておるんだ。いいか、わしが死んだあとにやってほしいことが一つある。弁護士にやらせてもいいんだが、君がやってくれたほうがありがたい。君のほうがうまくできると思うんだ」

「何をすればいいんです？」

「わしはあいつに遺産を残そうと思う。もちろんミセス・ヒュームにもいくらか行くようにするが、あとは息子にやる。情けない奴でな、どうやら人生を台なしにしちまったらしい。だからいくらかは足しになるんじゃないかと思う。でっぷり太って、独身で子供もいない、夢も希望もない落伍者だよ。風船みたいにふくらんだ、歩く不幸。あんなに頭もいいし才能もあるのに、仕事の面では挫折続きでな。最初に勤めた大学では、四〇年代のなかごろに何かもめ事を起こして——何なのかは知らん、おおかた男の学生のおカマでも掘ったんだろう——それからようやく立ち直りかけたところで、マッカーシー旋風に巻き込まれてまたどん底に落ち込んだ。そんなこんなで、これ以上はないっていうくらいの田舎で、誰も聞いたことのない大学で教える、その連続の人生なんだよ」

「哀れですね」

「まさしくその通り。哀れ。百パーセントの哀れだ」

「でもそれと僕とどう関係があるんです？　あなたは遺書で財産を残し、弁護士がそれを息子さんに渡す。それだけの話に思えますが」

「わしの自叙伝をあいつに送ってほしいんだ。わしらが何のために毎日こんなに苦労してきたと思うかね？　時間つぶしなんかじゃない、ちゃんと目的があるんだ。忘れるなよ、わしのやることにはいつもかならず目的があるんだ。わしが死んだら、それが書かれた経緯を説明した手紙を添えて、あいつに送ってほしい。わかったかね？」

「いや、どうもいま一つ。一九四七年以来ずっと近寄りもしなかったのに、いまになって急につながりを求め出す。どうも筋が通りませんね」
「人はみな自分の過去を知る権利がある。わしがあいつにしてやれることは大してありゃせんが、少なくともそれくらいはしてやれる」
「向こうが知りたがっていないとしても？」
「その通り、向こうが知りたがっていないとしても」
「フェアじゃない気がしますが」
「フェアかどうかなんて話じゃない。そんなことと全然関係ないんだ。生きているあいだ、わしはあいつからずっと離れていた。でもこうして死んでしまったいま、もう物語が明るみに出るべき時なのさ」
「あなたは死んでいるようには見えませんが」
「もうすぐだよ、保証する。もうすぐ、本当にすぐだよ」
「何か月も前からそうおっしゃってますが、相変わらずお元気そのものじゃありませんか」
「今日は何日だ？」
「三月十二日です」
「ではあと二か月だな。今日からきっかり二か月後、五月十二日にわしは死ぬんだ」
「そんなことわかるわけないじゃないですか。誰にもわかりませんよ、そんなこと」
「わしにはわかるんだよ。そうそう。いいか、よく覚えておけよ。今日から二か月後に、

「わしは死ぬんだよ」

その奇妙な会話のあと、我々ははじめのころと同じように、午前は朗読、午後は散歩という日課に戻っていった。だがスケジュールは同じでも、感じは前と違っていた。かつては朗読の本を選ぶにもきちんと計画性があったのに、いまの選び方は、ただの出まかせで、何の一貫性もないように思えた。ある日に『デカメロン』とか『千夜一夜物語』とかを所望するかと思えば、次の日は『間違いの喜劇』。その次の日は本をまるっきりうっちゃってしまい、フロリダのベースボール・キャンプから届く春のトレーニングの記事を読ませるのだ。あるいはそれも、これからは雑多にいろんなものを読もうという意図に基づく選択だったのかもしれない。無数の作品に少しずつ触れて、それらに別れを告げようとしていたのかもしれない――そんなことが世界に別れを告げる方法になるかどうかはよくわからないけれど。三、四日続けてポルノ小説も朗読させられたが（それらは本棚の下のキャビネットに隠してあった）、それを聞いてもエフィングはとり立てて興奮したようには見えなかった。一度か二度、愉快そうにくっくっと笑うこともあったが、ものすごく刺激的な一節を聞きながら寝入ってしまったりもした。彼がうたた寝をしているあいだも僕は朗読を続けた。三十分ばかりして目を覚ましたエフィングは、いま死ぬ練習をしていたところだと言った。「セックスのことを頭に浮かべて死にたいんだ」と彼は呟くように言った。「それ以上の死に方はないからな」。

僕はそれまでポルノグラフィーというものを読んだことがなかった。読んでみると、馬鹿馬鹿しくもあり、同時に気をそそられもした。ある日、いちばん刺激的な部分を何段落か覚えておいて、その夜キティに会ったときに暗唱してみせたら、彼女もやはり同じような反応を示した。笑ってしまう一方で、服を脱いでベッドにもぐり込みたくもなるのだ。

散歩も前とは違ったものになった。エフィングはもう大して熱意も示さず、僕をせっついてまわりの事物を描写させることもなくなり、黙って座ったまま物想いに沈んでいた。僕のほうは惰性で実況放送を続けていたが、彼はろくに聞いていないみたいだった。エフィングの罵詈雑言に応戦する必要がなくなって、何だかこっちも気合いが入らなくなってしまった。彼を知って以来はじめて、エフィングはそこにいないように思えた。周囲の事物との結びつきを失い、ほとんど解脱の境地にでも達したみたいだった。ミセス・ヒュームに相談してみると、実は私もこないだから気になっていたのよ、と答えが返ってきた。だが肉体的には、僕もミセス・ヒュームも何ら大きな変化を認めていなかった。食事の量も前と同じくらいあった(というか、なかった)し、便通も正常。どこかが痛み出したなどと訴えたりもしない。この奇妙な無気力状態がおよそ三週間続いた。それから、もうこれは本格的に老衰がはじまったんだろうかと思いかけたあたりのある朝、エフィングはすっかり元の彼に戻って、意気揚々朝食の席に現われた。こんなに愉快そうな顔の彼も珍しかった。

「決まったぞ!」とエフィングは宣言してテーブルをげんこつで叩いた。あんまり強く叩いたものだから、ナイフやフォークが飛び上がってがちゃがちゃ鳴った。「毎日毎日、ああで

もないこうでもないとさんざん考えてたんだ。沈思黙考、千思万考の末、ここに決断に達したことを御報告する次第である。決まったんだよ！　一世一代の名案だぞ、これは。傑作だ、掛け値なしの傑作だ！　さあれ、お楽しみの気分になっとるか？」

「ええもちろん」ここは調子を合わせる手だと踏んで僕は言った。「常時お楽しみの気分になっております」

「結構結構、その意気だ」とエフィングは言って両手をこすり合わせた。「約束しよう、わが子らよ、これは最高の白鳥の歌になるぞ。またとない最後の一礼だよ。本日の気象状況はどんなだね？」

「快晴です」とミセス・ヒュームが言った。「午後は十度くらいまで上がるかもって、ラジオで言ってました」

「快晴、十度。完璧じゃないか。してフォッグ、本日は暦の何月何日かね？」

「四月一日、新しい月のはじまりですよ」

「四月一日！　悪ふざけの日ではないか。フランスじゃ魚の日というんだ。ここはひとつ、皆の衆に魚の匂いをかがせてやろうじゃないか、なあフォッグ？　籠いっぱいくれてやろうじゃないか」

「ばっちりですよ」と僕は言った。「どっさりくれてやりましょう」

朝食のあいだずっと、エフィングはこんなふうに興奮して喋りまくった。一息置いてオートミールをスプーンで口に運び入れたのもつかの間、またしてもぺちゃくちゃやり出すのだ。

ミセス・ヒュームは心配顔だったが、僕のほうは何はともあれこの躁病エネルギーの奔出に気を強くせずにはいられなかった。結果がどう出るにせよ、陰気きわまるこの数週間よりはましだ。どう考えたってこの人は、むっつり沈んだ老人という柄じゃない。彼が落ち込み、黙りこくって生きているのを見るくらいなら、熱狂のあまり死んでしまうのを見るほうが僕としてはまだ嬉しい。

朝食のあと、エフィングに命じられて、僕とミセス・ヒュームは散歩の支度を整えた。例によって防寒具一式を体に巻かせてから——毛布、マフラー、オーバー、帽子、手袋——エフィングは僕にクローゼットを開けさせ、ブーツやオーバーシューズの山の下から小さなチェックの旅行鞄を取り出させた。「どう思うかね、フォッグ?」と彼は言った。「大きさはこれで足りるだろうか?」

「何に使うか次第じゃないですかね」

「金を入れるんだよ。現金で二万ドル」

僕が口を開く間もなく、ミセス・ヒュームが割って入った。「そんなことといけません、ミスター・トマス。私が許しませんよ。目も見えないのに、二万ドルも抱えて街をうろつくなんて。そんな馬鹿なお話、たったいま忘れてくださいな」

「黙れ、このアマ」とエフィングは言い返した。「黙らんとぶん殴るぞ。わしの金だ、どう使おうとわしの自由だ。頼もしいボディガードもいるんだ、何も起こりゃせんよ。起こるとしたって、お前が口を出すことじゃないわい。わかったか、この肥満牛。もう一言でも言っ

[illegible]
「ミセス・ヒュームは自分の務めを果たしてるだけですよ」気狂いじみた罵倒から彼女を弁護しようとして僕は言った。「そんなに興奮することないじゃありませんか」
「お前もだ、この出しゃばり」とエフィングは僕をどなりつけた。「言われた通りにやれ、さもなきゃクビだぞ。三つ数えて、それで一巻の終わりだわい。嘘だと思ったら試してみろ」
「いい加減になさい」とミセス・ヒュームが言った。「あんたはただの石頭の老いぼれですよ、トマス・エフィング。そんな金、一ドル残らずなくしちまえばいい。鞄から飛び出して、二度と戻ってこなけりゃいい」
「ハ！」とエフィングは言った。「ハ、ハ、ハ！　お前いったい、わしがその金をどうすると思ってるんだ、この馬づら女！　使うとでも思ってるのか？　トマス・エフィングがそんな月並な真似に身を落とすと思うか？　わしにはちゃんと計画があるんだ、誰もいままで夢にも見なかったすごい計画がな」
「馬鹿馬鹿しい」とミセス・ヒュームは言った。「勝手になさい、百万ドル使ったって知ったことですか。私には関係ありませんよ。もうあんたからは手を引きますからね。ろくでもないたわごとはもううんざり」
「まあまあ」にわかに猫撫で声になってエフィングは言った。「そんなにふくれることはなかろうに、可愛いアヒルちゃんや」。彼はミセス・ヒュームの手を取って、さも心がこもっ

ているみたいに、その腕にあちこちキスを浴びせた。「フォッグが面倒見てくれるさ。こんなに逞しい若者なんだ、心配はないよ。任しとけ、ちゃんと細かいところまでプランは練ってある」

「だまされませんよ」と彼女はいまいましそうに手を引っ込めた。「わかってますよ、どうせろくでもないことを企んでるんでしょ。とにかく忘れないでくださいよ、わたしはちゃんと言いましたからね。あとで泣きベソかいて謝りにきても駄目ですよ。もう手遅れですからね。馬鹿は死ななきゃ直らないって母さんがよく言ってたけど、ほんとにその通りですよ」

「できればちゃんと説明したいんだが」とエフィングは言った。「残念ながら時間がないんだ。それにこの毛布の山だ、さっさと外へ出してもらわんと、じきに蒸し焼きになっちまう」

「ならさっさと行っちまいなさい」とミセス・ヒュームは言った。「私の知ったことですか」

エフィングはニヤッと笑って、それから首筋を伸ばして僕の方を向いた。「用意はいいか？」と彼は船長のように吠えた。

「万全ですよ」と僕は答えた。

「よろしい。では出かけよう」

最初に立ち寄ったのはブロードウェイのチェース・マンハッタン銀行だった。エフィングはここで二万ドルを引き出したが、何ぶん額が大きいので、受け渡しが済むのに一時間近くかかった。お偉方の承認が必要だったし、行員たちが五十ドル札をしかるべき数だけ揃えるにも（エフィングがすべて五十ドル札でよこせと要求したのだ）時間が必要だった。自分が

この銀行を長年利用している「重要な顧客」であることをエフィングが再三匂わせたものだから、へたに出るとまずいと見た支店長は、彼の御機嫌をとろうと躍起になっていた。エフィングは一貫して用心深かった。僕にはいっさい手伝わせず、ポケットから通帳を取り出したときも、まるで残高を知られるのを恐れているみたいに、僕から絶対に見えないようにした。でもこの種のふるまいに腹を立てる段階はもうとっくに過ぎていたし、そもそも僕は彼の預金残高になんかまるで興味なかった。ようやく金が揃うと、一人の行員が二回数え、念のため僕がもう一度数えさせられた。こんな大金を目にするのははじめてだったが、数え終わるころにはもう魔法も失せていて、ただの四百枚の緑色の紙切れでしかなくなっていた。ちゃんとあります、と僕が言うとエフィングは満足そうに笑みを浮かべ、札束を鞄に入れるよう命じた。鞄の大きさは十分だった。僕はジッパーを閉め、エフィングの膝の上にきちんと置いてから、車椅子を押して銀行を出た。ドアにたどり着くまでのあいだ、エフィングはさんざん騒ぎ立てた。まるで明日はもうないかのように、杖をふり回し、喚声を上げながら。

外に出ると、さっそく行き先を言われた。ブロードウェイの車道の真ん中の、安全地帯のひとつである。そこは何とも騒々しい場所で、乗用車やトラックがごとごと音を立てて次々に両側を過ぎていったが、エフィングはそんな喧噪などまるで耳に入らない様子だった。誰かベンチに座っているか、と訊くのでいいえと答えたら、では君、座りたまえ、と言われた。その日のエフィングは黒眼鏡をかけていた。両腕で鞄をしっかり胸元に抱え込んだその姿は、いつにも増して人間離れして見えた。宇宙空間からやって来たばかりの巨大なハチドリみた

CamScannerでスキャン

いだった。

「取りかかる前に、計画を説明しておきたい」と彼は言った。「銀行じゃ話なぞできんし、マンションであのやかまし屋に立ち聞きされてもかなわん。君もきっと頭のなかであれこれ推量しておったただろう。相棒役をやってもらうんだから、洗いざらい話しておかんとな」

「いずれそうなさるだろうと思ってました」

「いいか、こういうことだ。わしはもうじきおしまいだ。だからこの何か月か、その準備に努めてきた。遺書を作って、死亡記事を書いて、いろんなことを整理した。だがまだ気になっていることが一つだけある。まあいってみれば、未払いの負債みたいなものだ。ここ二週間ばかりずっとそのことを考えていて、やっと解決策を思いついたんだ。覚えておるだろう、わしは五十二年前に袋に入った大金を見つけた。そしてその金を自分のものにして、それを使ってもっと金を増やした。おかげでこれまでずっと暮らしてこれたわけだ。こうして終わりまで来たからには、もう袋いっぱいの金なんて要りやせん。そこでどうしたらいいか？　唯一筋の通る答えは、金を返す、ということだ」

「返す？　だって誰に返すんです？　グレシャム兄弟は死んでしまったし、そもそも彼らの金じゃなかったんでしょう。あなたの知らない、名もない他人から盗んだ金じゃないですか。元の持ち主がわかったとしても、たぶんもうみんな死んでしまってますよ」

「まさしくその通り。もうみんな死んでしまってるだろうし、その相続人を探し出すのも不可能だ。そうだな？」

「そう申し上げたところです」
「それに君は、その人たちのことを、名もない他人と呼んだ。ちょっと考えてみたまえ。神も見捨てたこの街に何かが大量にあるとしたら、まさしくその、名もない他人というやつじゃないかね。街じゅうにあふれておる。我々のまわりに何百万といる」
「まさか本気じゃないでしょうね」
「もちろん本気さ。わしはいつだって本気だ。もうそのくらい知っておるだろうが」
「それじゃ、街頭で赤の他人に五十ドル札を配って回るとおっしゃるんですか？　暴動が起きますよ、そんなの。みんな狂ったようになって、僕らは八つ裂きにされちゃいますよ」
「うまくやれば大丈夫さ。要はしかるべき計画が立ててあるかどうかであって、計画ならちゃんと立ててある。心配は要らんよ、フォッグ。わしの生涯最高の行ないになるぞ。わが人生の頂点をなす偉業だよ！」
エフィングの計画は実に簡単だった。真っ昼間に街を練り歩いてすれ違った人全員に金を渡すのではなく（そんなことをしたら大勢群がって手がつけられなくなるに決まっている）、慎重に選んだいくつかの地帯で、いわば迅速なゲリラ戦を展開するのだ。作戦は十日にわたってくり広げられ、一回の外出において金を渡す人間は四十人に限定する。こうすれば騒動が持ち上がる可能性もぐっと減る。金は僕の服のポケットにしまっておく。強盗に遭ったとしても、取られる額は最高二千ドルだ。残りの金は鞄に入れて家に置いておけば心配ない。マンハッタンじゅうなるべく広い範囲から場所を選んで、二日続けて近隣の場所に行かない

ようにする。ある日アップタウンに行ったら、次の日はダウンタウン。月曜日がイーストサイドなら火曜日はウェストサイド。何をやっているかを人々に感づかれないよう、一箇所に長くとどまらない。このマンションの近所はいちばんあと回しにする。こうして、誰にとっても一生に一度の出来事が幕を閉じる。誰にも手を出されないうちに、すべては終わっているのだ。

何を言っても止められはしないことはすぐわかった。彼の決心は固まっている。説得を試みても仕方がないので、僕はこの計画をなるべく安全なものにするよう努めることにした。いい計画だとは思いますが、と僕は言った。出かける時間帯が問題ですね。たとえば午後はまずい。人が多すぎます。肝腎なのはまず、金を受け取る本人以外の目を引かないようにすることです。そうすれば邪魔が入る可能性も最小限に抑えられますからね。

「ふむ」僕の話にじっと耳を傾けながらエフィングは言った。「何時ごろがいいと思うかね？」

「夜ですね。仕事時間が終わったあとの、街ががらんとしてしまうほど遅くはない時間。七時半から十時のあいだですかね」

「要するに夕食を済ませてから出かけるわけだな。食後の散歩というところか」

「おっしゃる通り」

「よし、それで決まりだ。黄昏のあとの彷徨と行こう。街をさまよう二人のロビン・フッド、行きあたった幸運なる者に恵みを施す」

「交通のことも計算に入れておかないと。何しろ大都会だし、ここから何マイルも離れた場所も予定に入っています。全部徒歩でやったら、すごく遅くなることもあると思うんです。さっさと逃げる必要が出てきたら、厄介なことになりかねません」

「気弱なことは言わんでよろしい。大丈夫だ、何も起こりゃせん。君の脚が疲れたらタクシーに乗ればいい。君が歩けると思う限り歩くまでだ」

「べつに自分のことを考えてたわけじゃありません。この仕事が実際どういうものになるのか、はっきりさせておきたいだけです。ハイヤーを雇うというのは考えてみましたか？　車があればあっという間に帰ってこられますよ。さっと乗り込めば、あとは運転手が連れて帰ってくれる」

「運転手！　とんでもない。そんなことをしたら計画が台なしだ」

「どうしてですか。要は金を配ることじゃないですか。べつにそのために、冷たい春の空気のなかをニューヨークじゅううろうろしなくちゃならないって法はないでしょう。善行をしたって、風邪をひいちゃ何もならない」

「わしはな、あちこち自分で回りたいんだよ。状況をその場その場で感じとりたいんだよ。車なんかに乗っちゃそれはできん。街に出てなくちゃいけないんだ。みんなと同じ空気を吸わなくちゃいけないんだ」

「ただちょっと提案してみただけです」

「提案は自分の胸にしまっておけ。わしはな、フォッグ、何も怖くないんだよ。ここまで来

れば、もう怖がる歳じゃないんだ。君はいろいろ心配してくれるが、そんな心配は要らん。君がわしと組んでくれれば、それで結構。組んだからには、余計な口はきかんことだ。この計画はわしのやりかたでやるんだ——地獄が来ようが洪水が来ようが」

はじめの八日間は、すべて順調に進んだ。金を受け取る人間には一種の階級制があるべきだということで我々の意見は一致し、僕は自分の判断に基づいて金を渡す人間を選ぶ権限をあたえられた。たまたま通りかかった人間に見境なく金をやるのではなく、もっとも施しを受ける権利のある人間をじっくり探し、誰よりも困っている人間に的を絞るのだ。貧しい者は自動的に金持ちより優先され、健常者より身障者、正気の者より狂気の者が先に考慮された。こうしてまず一応のルールが決まったわけだが、ニューヨークという街の現状からみて、それを守るのはさして難しくなかった。

僕が金を渡すと、もらったとたんに我を忘れて泣き出す人もいれば、げらげら笑い出す人もいたし、まったく何も言わない人もいた。反応を予測するのは不可能だった。じきに僕も、金を渡したらこの人はどうふるまうだろうか、などと予想するのをやめてしまった。かつがれているんじゃないか、と疑う人もいた。ある男などは札をびりびりに破いてしまったし、お前の贋金作りだな、と食ってかかる人も何人かいた。五十ドルじゃ足りないと言ってのける欲張りもいれば、僕らにしがみついて離れようとしない独りぼっちの人間もいた。一杯お

ごるよ、と誘ってくれる陽気な人間、自分の人生の物語を聞かせようとする哀しい人間、お返しに踊ったり歌ったりする芸人肌の人間。驚いたことに、力ずくで金を奪おうとする人間は一人もいなかった。たぶん要するに運がよかったというだけの話なのだろうが、もちろん我々の行動も迅速だったし、絶対に一つの場所に長くとどまりはしなかった。たいていは街頭で金を配ったが、何度かは安酒場やコーヒーショップを襲撃したりもした。プラーニー・ストーンズ、ビックフォーズ、チョックフル・オ・ナッツ。カウンターに座った客一人ひとりの目の前に、僕が五十ドル札をばしんと置いていく。「ささやかな太陽を！」と叫びながら全速力で金を配ってまわり、唖然とした客たちがわれに返る間もないうちに、ふたたび街へ飛び出していくのだ。ショッピングバッグ・レディや売春婦にも金をやったし、アル中や浮浪者にも、ヒッピーや家出少年にも、乞食や不具者にもやった。日が暮れてから大通りをうろつく、ありとあらゆる敗残者に僕は金を与えた。四十人の人間に贈り物をするのに、一時間半以上かかった晩は一度もなかった。

九日目の夜に、雨が降った。ミセス・ヒュームと僕に説き伏せられて、エフィングはしぶしぶ外出を中止した。次の夜も雨だった。今度はもう止めようがなかった。肺炎になったって構わん、と彼は言った。やらなくちゃならんのだ、絶対にやるからな。じゃ僕が一人で行くというのはどうです、と僕は持ちかけてみた。帰ってから詳しく報告しますよ、そうすればご自分で出かけたのとほとんど同じことでしょう。いやそれは駄目だ、自分の体でそこにいなくちゃならん。それに君が金を着服しないとどうして信じられる？　しばらくそこらを

歩き回ってから、頃合いを見計らって帰ってきて、適当な話をでっち上げるかもしれんじゃないか。君が本当のことを言っておるかどうか、わしには知るすべがないんだからな。

「もしそう思うんだったら」と僕はにわかにカッとなって言った。「そんな金、自分の尻の穴につっ込んだらいい。僕は辞めます」

僕と知りあって六か月してはじめて、エフィングは動揺した。おろおろしながら、僕に詫びた。それは劇的な瞬間だった。後悔と反省の言葉を並べ立てている彼を見ていると、ほとんど同情のような気持ちが湧いてきた。体は震え、唾が口にへばりつき、その全存在がいまにも崩壊しそうに見えた。僕の言葉が本気だったことをエフィングは知っていた。僕に出ていかれると思うと、さすがの彼も耐えかねたのだ。彼は僕の許しを乞い、君はいい青年だ、わしがいままでに知った最高の若者だ、と言った。生きている限り二度と君に冷たい言葉は言わんよ。「この償いはする」とエフィングは言った。「約束する、この償いはするよ」。それから、なりふり構わず鞄に手をつっ込み、五十ドル札を一つかみ引っぱり出して目の前にかざした。「さあ、受け取ってくれ、フォッグ。これだけ尽くしてくれたんだ、当然の権利だよ」

「買収するには及びませんよ、ミスター・エフィング。給料なら十分いただいています」

「いや、頼む、受け取ってくれたまえ。ボーナスと思ってくれ。優秀な働きに対する報酬だよ」

「金を鞄に戻してください、ミスター・エフィング。いいんです。本当に必要としている人

にあげるほどの傷としても嬉しいですから」

「では、辞めんでくれるかな？」

「ええ、辞めません。謝ってもらえればそれでいいです。でも、もう二度とあんなことは言わないでくださいよ」

当然その夜の外出は中止になったが、翌日の晩は晴れていた。我々は八時にタイムズスクエアに出ていって、二十五分か三十分という記録的な速さで仕事を終えた。時間も早かったし、いつもより家に近かったので、タクシーに乗らずに車椅子で帰ろうとエフィングは言った。それ自体はささいなことであり、帰る途中で奇妙な出来事が起こらなかったら、僕もわざわざこの夜の話を持ち出しはしないだろう。コロンブス・サークルのすぐ南で、僕と同年配の黒人の男が、道の反対側を我々と同じ方向に歩いているのが目に入った。見たところ男には特に変わった様子はなかった。服装もきちんとしていたし、酔っているとか頭がおかしいとか思わせるようなそぶりも見せなかった。ただ、雲ひとつない春の宵に、男は傘をさして歩いているのだ。それだけでも不自然なのに、おまけに傘は壊れていた――布はすっかりはがれ、骨組が無用に宙に広がっているのである。何だかまるで、巨大な、ありえない金属製の花をかざしているという風情だ。僕は思わず笑ってしまった。男の様子をエフィングに説明すると、彼も笑い声を上げた。その声は僕のより大きく、向かいの男の耳にも届いた。にこにこ満面に笑みを浮かべながら、男は我々に手招きし、一緒に傘に入らないかと誘った。「何だってそんな雨のなかに立ってるんだい？」と男は陽気に言った。「こっちへ来いよ、濡

れちゃうぜ」、その言い方が、いかにも率直で気さくな感じだったので、断るのも無作法なように思えた。我々は通りを横断し、そこから三十ブロックのあいだ、壊れた傘の下に入ってブロードウェイを北上していった。エフィングが冗談の気分にすんなり入っていくのを見て、僕も気持ちがよかった。この手のナンセンスは信じるふりをやめたらおしまいだということを彼もちゃんと心得て、余計な質問もせずに相手に話を合わせていた。我々のホストは名前をオーランドーといった。オーランドーは才能豊かなコメディアンだった。ありもしない水たまりを爪先立ちでそろそろと避けて通ったり、傘をいろんな角度に傾けて雨のしずくを払い落としたりしながら、その間ずっと、途方もない連想や駄洒落にみちたモノローグを機関銃のようなスピードでまくし立てた。これこそまさに、もっとも純粋な形での想像力の発現である。在りもしないものを在らしめる行為、存在しない世界を他人に受け入れさせてしまう行為。男が出現したのがたまたまその夜だったことも、何ともふさわしく思えた。ついいましがた四十二丁目でエフィングと僕がやっていた仕事の気分と、いかにも合っている感じだったのだ。狂おしい雰囲気が街を捉えていた。五十ドル札が見知らぬ人々のポケットのなかに入って歩き回り、雨は降っていてかつ降っていなくて、壊れた傘をつき抜ける土砂降りの雨は一滴たりとも我々に当たらなかった。

ブロードウェイと八十四丁目の交差点で、我々はオーランドーに別れを告げた。三人で代わるがわる握手して、生涯の友となることを誓いあった。散歩のあとのささやかな締めくくりに、オーランドーは手のひらをつき出して空模様を点検し、しばし考えてから、雨は止ん

だ、と宣言した。そしてそれ以上何も言わずに、あっさり傘を閉じて僕に差し出した。「よう、持ってけよ」と男は言った。「またいつ降り出すかわからんよ。あんたらに濡れてほしくないからね。何せ相手は天気だ。いつ変わるかわかりゃしない。万全に準備しとかなくちゃ、何も準備してないのと同じだよ」

「銀行の預金みたいなものだ」とエフィングが言った。

「その通りだよ、トム」とオーランドーが言った。「雨の日に備えて、マットレスの下にしまっときな」

別れの挨拶に、オーランドーはブラックパワー式のげんこつをつき出し、悠然と立ち去っていった。角まで行ったところには、もう人波のなかに消えてしまっていた。

ちょっとした珍事だったが、ニューヨークではこの種のエピソードは案外多いものである。特に、こちらにそれを受け入れる心構えがあればなおさらだ。それでもこの出会いが僕にとってやはり尋常ならざるものに思えるのは、このひとときが表向きは底抜けに明るいものだったからということもあるが、それ以上に、この後に起きた一連の出来事に対して、これが奇妙な影響を及ぼしたように思えるからである。まるでオーランドーとの出会いが、来たるべき出来事の予告、エフィングの運命の前兆だったように思えるのだ。オーランドーによって、我々は一連の新たなイメージを与えられ、それ以降ずっと、それらのイメージの呪縛の下にあったのだ。僕が特に念頭に置いているのは、雷雨と傘だ。でもそれだけではない。変化、ということも僕は考えている。何ごとも、いつでも、突然、永久に変わってしまいうる

のだということを。

翌日はいよいよ最後の一夜である。エフィングは昼のうちからいつになく落着かず、昼寝もせず、朗読も聞こうとせず、僕があれこれ気晴らしの手段を提案しても耳を貸さなかった。我々は昼下がりの時間をしばらく公園で過ごしたが、空に霧がかかって雨模様だったので、僕はエフィングを説き伏せて、予定より早く帰った。日が暮れるころには、濃い霧がニューヨークを包んでいた。世界は灰色と化し、ビルの照明も、まるで包帯にくるまれたみたいに湿気の向こうでぼんやり灯っていた。どう見ても晴れてきそうになかったが、とにかく現時点ではまだ雨も降っていないわけだし、わざわざエフィングを説得してまで最後の彷徨をやめさせることもないように思えた。てきぱきと仕事を済ませ、さっさと連れて帰ればべつに害もあるまい。ミセス・ヒュームは渋ったが、大丈夫、ミスター・エフィングに傘を持ってもらいますから、と僕になだめられて結局折れた。エフィングもこの提案をあっさり承諾した。午後八時に、車椅子を押して表に出たときには、万事ぬかりはないように思えた。

だが、僕が知らなかったのは、エフィングがその傘を、前夜オーランドーからもらった傘とすり替えていたことだった。それがわかったのは、もうマンションを出て五、六ブロック進んだあとだった。何やら謎めかした、子供っぽい上機嫌ぶりで、一人くっくっと笑いながらエフィングは毛布の下から傘を引っぱり出し、それを広げた。傘の柄が家に置いてきたのとまったく同じだったものだから、僕はてっきり、持ってくる傘を間違えたのだと思った。ところが、そのことを指摘すると、でしゃばったことを言うな、とどやしつけられた。

「少しは頭を使え」とエフィングは言った。「わしはな、わざとこっちを持ってきたんだよ。これは魔法の傘なんだ、どんな阿呆が見たってわかるだろうが。こいつを開きさえすれば、透明人間になれるんだよ」

僕はもう少しで何か言い返すところだったが、結局思いとどまった。現に雨が降っているわけではない。仮定に基づく議論で消耗したくはなかった。とにかくさっさと仕事を済ませてしまいたかったし、雨が降り出さないかぎり、エフィングがこの馬鹿げた物体を頭上にかざしてならない理由は何もないのだ。僕はさらに数ブロック車椅子を押しながら、ふさわしい人間とすれ違うたびに五十ドル札を渡した。半分くらい配ったところで道路の反対側に渡り、帰り道の方向に進みはじめた。そのときだった、雨が降ってきたのは——あたかも必然のように、まるでエフィングが自らの意志で雨のしずくを呼びよせたかのように。はじめはごく小降りで、あたりを包む靄のかかった空気とほとんど見分けがつかないくらいだった。でも、次の四つ角にたどり着いたころには、無視できない雨量になっていた。僕は車椅子をもよりの建物の入口に避難させ、雨をやり過ごそうとした。ところが、動きが止まったとたん、エフィングは文句を言い出した。

「何してるんだ？　一息ついてる暇なんかないぞ。まだ金を渡さにゃならんのだ。さあ、行くぞ。進め、進め。命令だぞ！」

「お気づきでないかもしれませんが」と僕は言った。「目下のところ雨が降っているんです。それも春のにわか雨、なんてもんじゃありません。ざあざあ降りですよ。小石くらいの大き

さの雨粒が、車道に当たって五十センチばかり跳ね上がってます」

「雨？」とエフィングは言った。「雨なんかどこにある？　わしには全然感じられんぞ」。それから、突然両手で車をぐっと押して僕の手から逃れ、一人で歩道に滑り出ていった。そしてふたたび傘を手に取り、両手で頭上高く差し上げ、嵐に向かって叫んだ。「雨なんか降っとらんぞ！」。そう彼がわめくさなかにも雨は四方から降りかかり、服をびしょ濡れにし、顔につぶてを浴びせた。「お前には降っとるかもしれんが、わしには降っとらん！　骨みたいに乾いとる！　この頼もしい傘さえあれば、世の中怖いものなんかあるものか。ハ、ハ！　雨が降ろうが槍が降ろうが、なあんにも感じやせんよ！」

エフィングが死のうとしていることを僕は悟った。わざわざ病気になるために、こんな茶番劇を仕組んだのだ。しかもその劇を、少しも怖がらず、おそろしく上機嫌に演じようとしている。僕は呆気にとられるばかりだった。彼は傘を前後に振り回し、けらけら笑って雨を挑発している。それを見て僕は、ほとほとうんざりする一方で、その勇気には感心せざるをえなかった。グロスターの肉体によみがえった小人のリア。今夜はエフィング最後の夜であり、その最後の夜を彼は狂乱のうちに終えようとしているのだ（訳注　グロスターは『リア王』に出てくる、両目をつぶされる老人。リアもまた、道化を連れて嵐の荒野を夜どおしさまよう）。生涯最後の輝かしき行為として、みずからに死をもたらそうとしているのだ。僕もはじめはとっさに、彼を安全な場所に避難させようと思った。でもその姿をもう一度見てみると、もう手遅れだということを思い知った。もう肌までずぶ濡れだし、あの虚弱な体ではおそらくすでに危害が及んでしまっているだろう。風邪をひき、いずれはそ

CamScannerでスキャン

れが肺炎になって、じきに死んでしまうだろう。何もかも、疑問の余地などまるでないように思えた。僕はいっぺんに、何をする気も失せてしまった。あそこにあるのは死体なのだ、そう思った。僕が行動を起こそうが起こすまいが同じことなのだ。それ以来、今日に至るまで、あの夜に下した判断を悔やまなかった日は一日もない。でもあの瞬間には、それがいちばん理に適っているように思えたのだ。エフィングの邪魔をするのは義にもとる行ないのように思えたのだ。彼がすでに死んでいるのなら、その愉しみを妨げる権利がどうして僕にあろう？　この人は何としても自分を死に追いやろうとしている。その狂気の龍巻に巻き込まれてしまった僕は、彼を止めるどころか、指一本動かさなかった。何もせずに傍観するだけで、自殺の意図的協力者としてふるまったのだ。

僕は建物の入口から歩み出て車椅子をつかみ、叩きつける雨に目を細めた。「おっしゃる通りですね」と僕は言った。「どうやら僕にも降ってないみたいです」。そのとたん、稲妻が蛇のように空を走り、すさまじい雷鳴がそれに続いた。雨は情け容赦なく降り注ぎ、我々の無防備の体に液体弾の集中砲火を浴びせた。ふたたび突風が吹き寄せて、エフィングの眼鏡を叩き落としたが、彼はただ笑うばかりで、嵐のすさまじさをとことん楽しんでいた。

「素晴らしいじゃないか、え？」轟音のなかで彼は叫んだ。「雨の匂いがするぞ。雨の音もする。雨の味までするぞ。なのにわしらはこれっぽちも濡れてない。物質に対する精神の勝利だよ、フォッグ。わしらはついにやったのさ！　宇宙の秘密を解き明かしたんだよ！」

何だか僕まで、自分のずっと奥にある神秘的境界を踏み越えたような気になってきた。ど

こかの落とし戸をはい下りて、エフィングの心のいちばん奥の部屋にたどり着いたような気がした。彼のグロテスクな馬鹿騒ぎに呑まれてしまった、と言ってしまえばそれまでだ。でもそれだけではなかった。僕はまさに、彼の自由を認める究極の行為を実行したのであり、その意味において、彼に対してついに僕自身の証しを立てたのだ。エフィングは死のうとしている。でも生きている限り、僕を愛してくれるだろう。

さらに七、八ブロック、我々はよたよたと北へ進んだ。その間エフィングはずっと、恍惚に浸って吠えつづけていた。「奇跡だ！」と彼はどなった。「すごい奇跡だ！　黄金の雨――なくならんうちに拾え！　無料の金だぞ！　万人のための金だ！」

もちろん誰も聞いてはいなかった。通りには人っ子一人いなかったのだ。いまだに雨から逃げていない阿呆は僕ら二人だけだった。残りの金を始末しようと、僕は通りがかりの酒場やコーヒーショップを足早に回った。エフィングを入口付近に残して店に入り、金を配るあいだも彼の狂ったような笑い声を聞いていた。僕の耳のなかでその声がぶんぶんとうなっていた。我々のどたばたフィナーレの、気狂いじみた伴奏。もうそのころには、何もかもがめちゃくちゃになっていた。僕らはいまやひとつの天災だった。行く先々で、罪もない犠牲者を呑み込む台風だった。「金だぞお！」笑い、同時に泣きながら僕は叫ぶのだった。「みんなに五十ドル札！」。体はすっかりびしょ濡れで、ブーツからは水が噴き出した。人間大の涙と化した僕は、会う人一人ひとりに水をはねかけた。じきに金が尽きてしまったのは幸運だったといわねばならない。あのままやっていたら、我々はいずれ、無謀行為で留置場にぶち

込まれていただろう。

最後に入ったのは、チャイルズ・コーヒーショップだった。蛍光灯にぎらぎら照らされた、薄汚ない、蒸し暑く狭苦しい場所である。十五人ばかりの客が背を丸くしてカウンターに座っていた。どの一人をとっても、誰にも負けないくらい悲惨でよるべない身の上に見えた。ポケットの札はもう五、六枚しか残っていない。僕はとっさに、どう対処したらいいかわからなくなってしまった。もう考えることも、決断することもできなかった。ほかに何も思いつかないので、片手を丸めて金を握りしめ、部屋のなかにぱっと投げ出した。「欲しけりゃ持ってけ、誰でもいいぞ!」と僕はわめいた。そして外に走り出て、ふたたびエフィングを嵐のなかに押し出したのだった。

その夜以後、エフィングは二度と家を出なかった。翌朝早くに咳がはじまり、週末に入るころにはぜいぜいという痰まじりの喘ぎが気管支から肺に進んでいった。医者を呼ぶと、案の定、診断は肺炎だった。すぐに入院しなさいと医者は言ったが、エフィングは拒んだ。わしには自分のベッドで死ぬ権利があるはずだ、連れ出せるもんなら連れ出してみろ、指一本でも触れたら自殺してやるからな、と息まいた。「剃刀で喉を切ってやる。そしたらあんたたち、一生それを胸に抱えて生きるんだぞ」。医者は前にもエフィングを相手にしたことがあったから、今回は手回しよく訪問看護サービスのリストも用意してきていた。ミセス・ヒ

ハームと僕はしかるべき手続きを行ない、翌週のあいだはずっと現実的な雑務にかかり切りだった。弁護士、銀行預金、委任状、等々。かけるべき電話は数えきれず、署名すべき書類も無数にあったが、いまここでそれを並べ上げても意味はあるまい。重要なのは僕がやがてミセス・ハームと仲直りしたことだ。嵐の晩、ソフィーを連れてマンションに帰ると、彼女はかんかんに怒っていて、その後まる二日間、僕と口もきいてくれなかった。ソフィーが病気になったのは僕のせいだと彼女は考えた。僕としても基本的に同意見だったから、何も弁明しなかった。ミセス・ハームを敵に回してしまうのはつらかった。けれども、もう二度と和解できそうもない気がしてきたあたりで、状況は急変した。それがどうやって起きたのか、僕にはまったくわからない。でもたぶん、ミセス・ハームがこの件に関してソフィーに何か言い、その結果ソフィーが逆に、僕を責めないよう彼女に言い含めてくれたのだろう。次に顔を合わせたとき、彼女は僕を両腕に抱きよせ、こみ上げてくる涙を押さえながら僕に謝った。来るべきものが来たのよ、と彼女は何度も僕に言った。あの人はもうじきいってしまうわ、私たちが何をしたって止められないのよ、と。

看護婦たちは八時間交代で勤務し、ソフィーに薬を飲ませ、尿瓶を取り替え、腕に刺した点滴を管理した。はっきり言って、無神経で冷酷な連中だった。いうまでもあるまいが、ソフィーもできる限り看護婦たちにかかわろうとしなかった。最後の最後になり、もう彼女たちが何をしようがかまわなくなってしまうまで、その姿勢は一貫して続いた。何か具体的な仕事がない限り、絶対に看護婦を部屋に入れなかった。そのため、看護婦はたいてい、リ

ビングルームのソファにむすっと黙って座り、雑誌をぱらぱらめくりながら煙草をふかしていることになった。一人か二人は勝手に辞めてしまい、一人か二人はこっちからクビにした。けれども、看護婦に対する強硬な態度をべつにすれば、この時期のエフィングは驚くほど紳士的だった。寝込んだとたんに、性格まで変わってしまったみたいだった。死がじわじわ近づいてきたことで、人格の毒気が抜かれてしまったように思えた。痛みはそれほど感じていなかっただろうと思う。日によって波はあったものの（事実ある時点では完全に回復したかと思えたこともあったが、三日後にはふたたび悪化した）、病気は緩慢に進行していった。力がじわじわと、避けがたく失われてゆき、やがてとうとう、心臓が停止したのである。

僕は毎日エフィングの枕元で過ごした。エフィングがそう望んだのだ。嵐の晩以来、僕たちの関係は一変していた。いまや彼は、まるで身内のように僕のことを可愛がってくれた。僕の手を握って、君はわしにとって大きな慰めだ、君がそばにいてくれて本当に嬉しい、と言うのだ。はじめは僕もこのセンチメンタルな感情の吐露に懐疑的だったが、にわかに生じた愛情の証しは増えていく一方で、僕としてもそれを本物として受け取らざるをえなかった。当初、まだ会話を続ける体力が残っていたころ、エフィングは僕の人生についていろいろ質問をした。そこで僕は、母とビクター伯父さんのことや、学生生活のこと、あやうく死にかけた破滅的な日々、それをキティ・ウーに救われたことを話した。わしがくたばったら君がどうなるか心配だとエフィングは言ったが、大丈夫、一人で何とかなりますから、と僕は請けあった。

「君は夢想家だからなあ」と彼は言った。「君の心は月に行ってしまっておる。たぶんこれからもずっとそうだろう。君には野心というものがないし、金にもまるで興味がない。芸術に入れ込むには哲学者すぎる。君には面倒を見てくれる人間が必要なんだ。腹にちゃんと食い物が入って、ポケットに何がしかの金があるよう気をつけてくれる人間が必要なんだ。わしがいなくなったら、君はまた元に戻ってしまうだろう」

「計画はいろいろ立ててるんです」と僕は話をそらそうと嘘をついた。「去年の冬にコロンビアの図書館学科に願書を出しまして、こないだ合格通知が来ました。もうお話したかと思ってましたよ。秋に授業がはじまります」

「授業料はどうするんだ?」

「奨学金が下りたんです。授業料は全額免除、生活費ももらえるんです。すごくいい話ですよ、絶好のチャンスです。二年間で修了のコースでして、それが済めば生計を立てる道にはこと欠きません」

「君が図書館員だなんて想像しにくいな、フォッグ」

「まあたしかに変ですけど、でも案外合ってるかもしれませんよ。考えてみれば、図書館というのは現実世界の一部じゃありませんからね。浮世離れした、純粋思考の聖域です。あそこなら僕も一生、月にいるまま生きていけますよ」

エフィングがこの話を信じていないのは僕にもわかった。でも彼は、調和を崩さないため、我々二人のあいだに生じた平穏を保つために、僕の嘘に調子を合わせてくれた。これがエフ

イング最後の数週間の典型的な態度だった。こういうふうに死んでいけることが彼には誇らしかったのだと思う。僕に優しくなったのも、やろうと思えば自分はまだ何だってできるんだという信念の証明だったのかもしれない。体力は弱ってきていても、自分がいまもみずからの運命を操っていることを彼は依然として確信していた。そしてこの幻想は最後の最後まで揺るがなかった。彼はおのれの死をみずから立案したのであり、すべては計画どおりに進行していたのだ。五月十二日が最期の日だ、と宣言したいま、その言葉に忠実たることが彼の唯一の関心事であるように思えた。彼は両腕を広げて死に飛び込んでいった。でもそれと同時に、彼は死を退けてもいた。最後の一オンスのエネルギーをふり絞って死を組み伏せ、自分の意図した時が来るまで最期の瞬間を寄せつけなかったのだ。もうろくに口もきけなくなって、かすかに喉を鳴らすにもひどく苦労するようになっても、毎朝部屋に入ってくる僕にまず訊ねたのは、今日は何月何日か、ということだった。もはや時間の流れを頭に入れておくこともできなくなっていたから、一日じゅう、何時間かごとにその問いをくり返すのだった。五月の三日か四日あたりから、容態は急激に悪化した。とても十二日までは持ちこたえられそうになかった。依然すべてスケジュールどおりなんだと思わせようと、僕は日にちをごまかしはじめた。特に具合の悪かったある日の午後など、数時間のうちに三日経過させてしまったこともあった。七日です、と僕は彼に言った。八日です。九日です。もうすっかり朦朧となっていた彼は、日にちのずれにも気がつかなかった。その週の後半になって、また容態が安定したとき、僕は依然としてカレンダーより先行していた。その後の二日間ずっ

CamScannerでスキャン

と、九日です、と言いつづけるほかなかった。せめてそのくらいはしてあげるべきだと思ったのだ。最後の試練に自分は勝ったんだ、という満足感を与えてあげねばと思ったのだ。何がどうなろうと、僕は断固、彼の人生が五月十二日に終わるよう力を尽くす気でいた。

君の声を聞いていると気持ちがいいんだ、とエフィングは言った。すっかり衰弱して自分ではもう何も喋れなくなっても、僕が話しつづけることを望んだ。何の話かは問題でなかった。僕の声が聞こえていて、僕がそこにいることがわかればそれでよかった。僕は懸命に喋りつづけ、思いつくまま次から次へ話題を変えていった。独白を続けるのはかならずしも容易でなかった。インスピレーションが尽きてくるたびに、さまざまな手段を使ってとにかく話が切れないようにした。小説や映画の筋を語り直す。うろ覚えの詩を暗唱する（エフィングは特にサー・トマス・ワイアットとフルク・グレビルを好んだ）。朝刊に載っていたニュースを列挙する。不思議なことに、そのうちのいくつかはいまもはっきり思い出すことができる。カンボジア侵攻による戦争の拡大、ケント州立大での射殺事件。それらのことを考えるたびに、あの部屋でエフィングの枕元に座って、ベッドに横たわる彼を見守っている僕自身の姿が見えてくる。エフィングのぽかんと開いた歯のない口が見える。流れの詰まった肺が空気を求めて喘ぐのが聞こえる。何も見えないうるんだ目が天井をじっと見上げ、蜘蛛のような手が毛布をぎゅっとつかむ。皺だらけの皮膚は驚くほど白い。連想の糸は否応なしに伸びてゆく。何か測り知れない、意志を超えた連鎖反応によって、僕にとってそれらの事件は、エフィングの顔の輪郭のなかに埋め込まれてしまっている。そうした事件のことを考え

るたびに、かならずエフィングが目の前に姿を現わすのだ。

ときには、単に部屋のなかを描写するだけということもあった。散歩の最中に覚えた通り、何か一つ物を選んで、まずそれから語り出すのだ。ベッドカバーの模様。隅に置かれたタンス。窓ぎわに掛かった額縁入りのパリの地図。話についてこられる限り、エフィングはこの棚卸しを心底楽しんでいるように見えた。いろんなものが自分から離れかけているいま、すぐそこに物があるんだという手応えが、彼の意識のいちばん端っこで、一種の楽園を形成していた。手に触れられるもの、目に見えるもの、生のすべてを囲む知覚領域。そうした日常の奇跡が、もはや届かなくなりかけた場として彼のまわりにあった。それを言葉にしてあげることで、僕はエフィングにもう一度その奇跡を味わう機会を与えたのだ。事物の世界にわが身を置くことこそ、この世における最高の善であるかのように。ある意味で、あの時期ほど懸命に彼に尽くしたことは一度もなかったといっていい。ごく小さな細部の描写も怠らず、物の素材を入念に吟味し——ウールや綿、銀に錫合金、木目に漆喰の渦——ひび割れ一つひとつに目を凝らし、それぞれの色と形を列挙し、目に見えるものすべての微細な幾何構造を探索した。エフィングの衰弱が進めば進むほど、僕はますますこの作業に熱を入れた。我々のあいだに着実に広がりつつある隔たりを何とかして打ち消そうと、さらにその倍努力した。ついには描写が精緻をきわめるあまり、部屋のなかを一巡するのに何時間もかかるようになった。一センチの何分の一かずつじっくりと進んでいき、何ものも決して見逃さなかった。宙に漂う埃の微片すらおろそかにしなかった。限られた空間をとことん掘り下げるなかで、

CamScannerでスキャン

空間はいつしか無尽蔵となっていった。果てることのない世界内世界がそこに広がっていった。あるときふと、自分がたぶん虚空に向かって喋っていることに僕は気がついたが、それでも構わず喋りつづけた。僕の声だけが唯一エフィングを生かしておけるんだ、そんな思いが催眠術のように僕を捉えていた。もちろん、本当は僕の声など何の違いも生んではいなかった。エフィングはだんだんと遠ざかっていった。一緒に過ごした最後の二日間、僕の言葉が一言でも聞こえたかどうかも怪しいものだと思う。

彼が死んだとき、僕はそこにいなかった。十一日の午後八時まで枕元にいたところでミセス・ヒュームが交代に来てくれて、今夜は休まなくちゃ駄目よ、と言ってくれたのだ。「どのみちいまは何もしてあげられないんだし」と彼女は言った。「今朝からずっと一緒にいるんでしょう、少し外の空気に当たってらっしゃいな。今晩この人が持ちこたえたら、明日はせめてあなたには元気になっておいてもらわないと」

「明日というのはないと思いますね」と僕は言った。

「そうかもしれない。でも昨日だってそう言ってたのよ。なのにまだ頑張ってるじゃない」

僕はキティとムーン・パレスへ夕食に出かけ、食事が済むと、セーリア館で二本立てのうちの一本を観た（たしか『灰とダイヤモンド』だったと思うが、違っているかもしれない）。普通ならそこでキティを寮まで送っていくところだったが、その晩はエフィングのことがどうも気になって、二人で様子を見にウェストエンド・アベニューまで歩いていった。着いたときにはもう午前一時近かった。ドアを開けたミセス・ヒュームは泣いていた。言われなく

ても、何があったかはわかった。聞いてみると、エフィングが亡くなってまだ一時間も経っていなかった。看護婦に正確な時刻を訊くと、午前零時二分、と答えが返ってきた。エフィングは本当に十二日まで持ちこたえたのだ。何とも信じられない気持ちで、僕はただ呆然としていた。頭が妙にうずうずしてきた。突然、脳味噌のなかの配線がショートするのが感じられた。きっと泣き出すんだ、と思った僕は部屋の隅に逃げ込んで両手で顔を覆い、涙が出てくるのを待った。でも何も出てこなかった。しばらく時間が過ぎた。と、奇妙な音が、痙攣のように喉から噴き出してきた。さらにしばらく経って、僕はようやく、自分が笑っていることに気がついた。

遺言によって、死体は火葬となった。弔いの礼拝はなし、埋葬の儀式もなし、遺体の処理にあたってはいかなる宗教関係者も関与すべからず、と遺言ははっきり命じていた。葬式はきわめて簡素なものとなるよう指示してあった。ミセス・ヒュームと僕がスタテン島フェリーに乗って、マンハッタンとスタテン島の中間点を過ぎたところで（自由の女神が右手に見えるあたりだ）ニューヨーク湾に遺灰を撒くというのである。

僕はミネソタ州ノースフィールドに住むソロモン・バーバーに電話で連絡を取ろうとした。彼にも葬儀に加わる機会が与えられるべきだと思ったのだ。ところが、家に何度電話しても誰も出ないので、マグナス・カレッジの歴史学科に電話をかけてみると、バーバー教授は春

学期のあいだ休暇を取っていますと言われた。電話に出た秘書はそれ以上詳しいことを話したがらないようだったが、こっちの用件を伝えるといくらか態度を変え、教授は資料収集でイギリスに行っているんですと教えてくれた。どうやったら連絡が取れますか、と訊いてみると、それは大変だと思いますね。住所を聞いていませんから、と答えが返ってきた。でも郵便はどうなんです、と僕はさらに押してみた。当然どこかに転送なさっているわけでしょう。いいえ、それが違うんです。帰ってくるまで保管しておくよう頼まれたんです。で、いつ帰ってくるんです？　八月まで帰ってきません、と秘書は言って、お伝えできるのはそれだけです、お役に立てなくて済みません、と謝った。その口調から、彼女の言葉に嘘はないと僕は判断した。その日あとで僕は机に向かい、バーバーに長い手紙を書いて、状況をできるだけ明快に説明した。それはとても書きづらい手紙で、書くのに三時間か四時間かかった。書き上げるとジッピィ・ファイアーの自伝の出生証明書と一緒に小包で送った。

僕にしてみれば、それで責任は果たしたはずだった。ヘクターから頼まれたことはしかるべく実行したわけであり、あとは弁護士の仕事だ。いずれ弁護士がバーバーと連絡を取るだろう。

二日後、僕はミセス・ヒュームと一緒に葬儀場へ灰を受け取りにいった。灰が入れてあるグレーの金属製の壺は、パン一斤くらいの大きさしかなかった。そのなかにエフィングが入っているなんて信じられない気がした。彼の大半はすでに煙となってしまったのであり、まだ何か残っていると思うと妙な感じだった。どうやら僕よりも生々しい現実感覚の持ち主ら

しい。ミセス・ヒュームは、僕に恐れをなしたのか、有毒の放射性物質でも入っているみたいに、マンションへの帰り道ずっと、それを抱えた手を体から遠ざけていた。翌日には、雨でも晴れでもフェリーに乗ることに僕らは決めていた。その日はたまたま、ミセス・ヒュームが退役軍人病院に弟を見舞いにいく日でもあったので、訪問を取り止めるよりはと、弟も一緒に連れていくことにした。その話をしているうちに、ミセス・ヒュームはふと、キティにも来てもらったらどうかしらと言い出した。あまり必然性があるとも思えなかったが、とりあえずキティに話してみると、行くという返事が返ってきた。大事な仕事ですものね、とキティは言ってくれた。それに彼女はミセス・ヒュームのことをとても好いていたので、そばにいて支えになってあげたかったのだ。そんな具合に、二人が結局四人になった。ニューヨーク史上、これだけバラバラな葬儀参列者の顔触れもまずなかっただろう。

ミセス・ヒュームは朝いちばんに弟を迎えに病院へ行った。彼女が出かけているあいだにキティがやって来た。ものすごく短い青のミニスカートをはいていて、それがこの日のためにはいてきたハイヒールと組み合わさって、滑らかな小麦色の足がとても素敵に見えた。ミセス・ヒュームの弟さんはちょっと頭に問題があるらしくてね、と僕はキティに言ったが、僕自身直接会ったことはなかったので、それがどういう意味なのか自分でもよくわからなかった。いざ会ってみると、チャーリー・ベーコンは三十代前半の大柄で丸顔の男で、赤味がかった髪は薄くなりかけ、よく動く用心深そうな目をしていた。姉に連れられてやって来た彼は、いくぶん当惑気味の様子で（もう一年以上病院を出ていなかったのだ）、

最初の何分かは、僕らににこにこ笑いかけ、握手をするばかりだった。青のジッパーを喉元まで閉め、カーキ色のズボンにはきちんとアイロンがかかっていて、ぴかぴかの黒い靴に白い靴下をはいていた。上着のポケットに小さなトランジスターラジオが入っていて、そこからイヤホンのコードがくるくる輪になって出ていた。イヤホンはずっと耳に入れっぱなしで、一分か二分ごとに、ポケットに手をつっ込んではラジオのダイヤルを回してみるのだった。そうするときチャーリーはいつも、目を閉じて精神を集中させた。まるで別の銀河からのメッセージに耳を澄ませているみたいだ。どの局がお好きなんですか、と訊いてみると、どこも同じですよと答えが返ってきた。「遊びで聞いてるわけじゃないからね」と彼は言った。「これが仕事なんだよ。きちんとやってりゃ、この街の下で大物がどうなってるかわかるんだ」

「大物？」

「水爆だよ。地下のトンネルに一ダースばかり貯めてあるんだ。ソ連に場所を知られんように、しょっちゅう動かしてるんだよ。置き場が全部で百はあるね――この街の地下深く、地下鉄よりもっと下にね」

「それがラジオとどう関係があるんですか」

「暗号で情報を流してるんだよ。どっかの局で実況放送があったら、大物を動かしてる合図なんだ。野球の放送が一番よくわかるね。メッツが五対二で勝ったら、五十二番ポジションに動かしてるってこと。六対一で負けたら、十六番ポジション。簡単な話だよ、いったん理屈

を呑み込めば」

「ヤンキースはどうなんです？」

「ヤンキースでもいい。とにかくメッツかヤンキースがニューヨークで試合をしてたら、そのスコアに気をつけてればいいんだ。同じ日に両チームがニューヨークにいることは絶対にない。メッツがニューヨークでプレーするときはヤンキースがロード。その逆も同じ」

「でも爆弾のありかがわかって、何の役に立つんですか？」

「自分の身を護るためだよ。あんたはどうか知らんが、爆弾に吹っ飛ばされるなんておいらは願い下げだからね。何がどうなってるのか、誰かがちゃんと見張ってなきゃならん。ほかに誰もやらんのなら、おいらがやるまでの話さ」

ミセス・ヒュームが着替えているあいだ、僕とチャーリーはこんなふうに話をしていた。彼女の支度が整うと、みんなでマンションを出て、タクシーを拾ってフェリーの発着場へ向かった。天気のいい日で、空は青く澄みわたり、すがすがしい風がひゅうっと鳴っていた。ウェストサイド・ハイウェイを南に下るタクシーのなかで、僕は膝に骨壺を載せて後部席に座り、チャーリーがエフィングの話をするのを聞いていた。どうやら二人は何度か会ったことがあるらしかった。彼らをつなぐ唯一の絆（ユタ）のことを話してしまうと、今度はじきに、チャーリーがかつてユタで過ごした日々をめぐるとりとめのない話がはじまった。戦争中ウェンドーバーで爆撃の訓練を受けたんだよ、とチャーリーは言った。砂漠の真ん中でね、塩で作ったミニチュアの街を爆破するんだ。彼はドイツ空爆任務を三、四十回果たしたのち、

終戦間際になってユタに連れてこられ、原爆投下計画の一員に加えられたのだった。「何の計画なのか、俺たちゃ何も知らされてなかった」と彼は言った。「でもおいらは嗅ぎつけたんだ。情報を探したけりゃチャーリー・ベーコンに任せろ、てなもんさ。最初はまずビッグ・ボーイだった。ティベッツ大佐が指揮してヒロシマに落としたやつだよ。おいらはその三日後に出る第二機に乗せられることになってた。ナガサキに行くやつだよ。冗談じゃない、まっぴら御免だよ。あんなにでっかい爆弾は神様の領分だ。人間がちょっかいを出す権利なんてないんだ。で、おいらはね、気狂いのふりをして奴らをだましてやったんだ。ある日の午後ふらふらと出ていって、かーっと暑い日なたを砂漠の方に歩いていったんだよ。撃たれたって知ったことか、そう思ったね。ドイツでもずいぶんひどいことやらされたけど、大量殺人の手先なんて願い下げだ。お断りだね、そんなことで罪の意識に苛まれるくらいなら、気が触れちまったほうがましってものさ。おいらは思うんだがね、もしジャップが白人だったらあんなことはしなかっただろうよ。みんな黄色い人間なんかどうだっていいと思ってるんだ。いや、気を悪くなさらんで下さいよ」とチャーリーはあわててキティの方を向いて言い足した。「でもね、奴らから見りゃ、黄色い人間は犬と変わらんのですよ。いまアメリカ人が東南アジアで何をやってると思う？　昔とおんなじだよ、黄色い人間を片っ端からぶっ殺してるのさ。インディアン皆殺しの時と何も変わっちゃいない。こないだ原爆と思ったら、今度は水爆だ。ユタじゃいまだに、将軍連中が寄り集まって新兵器を作ってるんだよ。あそこならどこからも遠く離れてるし、誰にも見られない。去年、羊が死んだ事件を覚えてるか

いや、大手柄だったんだよ。新発明の毒ガスを空中にふっ散して、まわり何マイルも生き物が全滅しちまったんだ。いやだねおいらは、あんな皆殺しの片棒かつぎなんかまっぴらだよ。黄色い人間、白い人間、何が違うっていうのかね？ 俺たちみんな同じじゃないか、え？ いやだね、あんな汚れ仕事、チャーリー・ベーコンはお断りだよ。気が触れちまったほうがいいね、大物なんかにかかわるくらいなら」

目的地に着いたところで独演もおしまいになり、以後その日ずっと、チャーリーはトランジスターラジオの神秘の世界にとじこもっていた。でも船に乗っていること自体は楽しんでいるみたいだった。そして僕も、ふと気がつくと、我知らずいい気分になっていた。我々の任務には、どこか常軌を逸したところがあって、暗い思いに浸ろうにもなぜか気がそれてしまうのだ。ミセス・ヒュームでさえ、一滴の涙もこぼさずに最後までやり通すことができた。僕が何よりよく覚えているのは、小っちゃなドレスを着たキティの美しさだ。風が彼女の長い黒髪を吹き抜け、華奢で可愛らしい手は僕の手のなかに収まっていた。船が混みあう時間ではなく、デッキの上に出ている乗客よりもカモメのほうが多いくらいだった。自由の女神が見えてきたところで、僕は壺を開け、風のなかへ灰を振り出した。白、グレー、黒の三色入り混じった灰は、ほんの数秒のうちに消えてしまった。チャーリーは僕の右側に立ち、キティは左側に立ってミセス・ヒュームの体に腕を回していた。僕らはみんなで、灰がつかの間あわただしく宙を舞い、やがて何も見えなくなるのを見守った。と、チャーリーが姉の方を向いて言った。「おいらのときもこうしてくれよ、リタ。おいらが死んだら、燃やして灰

にして、空に捨ててほしいね。素敵な眺めじゃないか。四方八方にパーッと散ってさ、この世で最高に素敵な眺めだよ」

フェリーがスタテン島のドックに入ると、我々はそのまま次のフェリーに乗り、マンハッタンに戻った。ミセス・ヒュームがあらかじめ御馳走を準備してくれていたので、マンションに戻って一時間もしないうちに、僕らは食卓についていた。これですべておしまいだった。僕の荷作りも済んでいた。食事が終わったら、このマンションを出て、もう二度と帰ってこないのだ。ミセス・ヒュームは財産の処理が済むまでここに残っている予定だった。万事うまく行ったら（つまり、遺産を無事受け取ったら）チャーリーと一緒にフロリダへ行って新しい生活をはじめるつもりだ、とミセス・ヒュームは言った。もう五十回目くらいだったろう。彼女は僕に、好きなだけこのマンションにいていいのよ、と言ってくれた。そして僕も、同じくこれ十回目くらいだったろうか、いえ、キティの友だちのところに厄介になりますから、と答えた。これからどうするの？　とミセス・ヒュームは訊ねた。どういう生活を送るつもりなの？　この期に及んで彼女に嘘をついても仕方がない。「よくわからないんです」と僕は答えた。「まずじっくり考えてみないと。でもいずれきっと何か出てくると思うんです」

僕たちはさよならを言いながら心からの抱擁を交わし、別れの涙を流した。今後も連絡を取りあいましょう、と僕らは約束した。だがいうまでもなく、結局これが最後だった。僕はその後二度とミセス・ヒュームに会わなかった。

「あなたは立派な若者よ」と玄関先でミセス・ヒュームは言った。「ミスター・トマスにあ

なたがどれだけ優しくしてあげたか、私は絶対忘れませんよ。あんなに優しくしてもらう権利なんかないことも多かったのに」
「誰だって優しくしてもらう権利はありますよ」と僕は言った。「誰であろうと」
キティと僕がドアを出て、マンションの玄関ホールを半分くらい行ったところで、ミセス・ヒュームがのっしのっしと僕らを追いかけてきた。「もう少しで忘れるところだったわ」と彼女は言った。「あなたに渡すように言われたものがあるの」。我々がマンションに戻っていくと、ミセス・ヒュームは廊下のクローゼットを開け、てっぺんの棚から茶色いくしゃくしゃの紙袋を取り出した。「先月ミスター・トマスに渡されたのよ」と彼女は言った。「あなたが出ていくまで預っておくように言われたの」
僕は袋を小脇に抱えてまた出ていこうとしたが、キティがそれをさえぎった。「なかに何が入ってるか、見たくないの？」とキティは言った。
「外に出てからにしようと思ったんだ」と僕は言った。「爆弾が入ってるといけないからね」
ミセス・ヒュームは笑った。「やりかねないわね、あのろくでなしなら」
「まったく。墓のなかから、いたちの最後っ屁」
「あなたが開けないんなら、私が開けるわ」とキティが言った。「何か素敵なものが入ってるかもしれないじゃない」
「ね、楽天家でしょう、キティって」と僕はミセス・ヒュームに言った。「いつもいいほう、いいほうに考えるんだ」

「開けさせてあげなって」とチャーリーが熱心に会話に割り込んで言った。「きっと値打ちもののプレゼントだよ」

「結構」と僕は袋をキティに渡して言った。「僕の不信任案が可決されたようだから、名誉ある権利は君に譲ろう」

この上なく繊細な手つきで、キティは何度か折り返された袋の口を開き、なかをのぞき込んだ。そしてふたたび顔を上げて僕らを見渡し、一瞬とまどったような表情を浮かべたが、やがて、得意げな笑みが満面に広がった。何も言わずに、彼女は袋をさかさまにして、中身を床に落とした。金がはたはたと舞い落ちていった。古い皺だらけの紙幣のはてしない雨。十ドル札、二十ドル札、五十ドル札。それらが足元に落ちるのを僕らは黙って見守った。数えてみると、全部で七千ドル以上あった。

6

素晴らしい日々がはじまった。その後八、九か月のあいだ、いままでとうてい縁のなかったような生活を僕は送った。それは僕がこの惑星で過ごしたあらゆる年月のなかで、いちばん楽園に近い暮らしだったと思う。お金が入っただけではなく（もちろんお金も軽く見るわけには行かないが）、何もかもが突然ひっくり返ったのだ。エフィングの死によって、僕は彼との束縛から解放された。それと同時に、エフィングのおかげで世界との束縛からも解放されたのだ。そして僕は若かった。世界というものについてまだほとんど何も知らなかった。だから僕には、この幸福な日々がいつかは終わるかもしれないなんて思いもよらなかった。砂漠をさまよっていた僕が、不意にある日、わがカナン、わが約束の地を見出したのだ。まずは歓喜に浸ることしか考えられなかった。ひざまずいて感謝の祈りをささげ、自分の立っている大地に口づけするだけだった。この生活がいずれ崩れてしまうかもしれない、などと考えるにはまだ早すぎた。先に控えている苦難の旅を思い描くには、まだ早すぎたのだ。

僕が金を受け取ってから一週間くらいして、キティの学校が夏休みに入った。六月のなか

ばには、一緒に住む場所も見つかった。三百ドルに満たない家賃で、だだっ広く埃っぽいロフトがイースト・ブロードウェイに見つかったのだ。チャザム・スクェアとマンハッタン橋からも近いあたりで、チャイナタウンのど真ん中である。いろんな交渉も全部キティがやってくれた。中国人同士のコネを駆使して家主と交渉した結果、五年契約がもらえたし、建物内部を我々が改良した場合には家賃も一部引いてもらえることになった。時は一九七〇年、ロフトをスタジオに改造した画家や彫刻家がほんの一握りいたことを除けば、古い商業ビルに住むという発想は、まだニューヨークの流行になっていなかった。キティはダンスの練習に広いスペースを求めていたし（何しろそこは二百平方メートル以上あった）、僕としても、パイプはむき出し、ブリキの天井も錆びた元倉庫に住むんだと思うと、何となくわくわくした。

僕たちはロウアー・イーストサイドで中古の調理レンジと冷蔵庫を買い、バスルームにも簡易シャワーと湯沸し器を入れた。捨てられた家具を探して街なかを漁ったのち――我々はそうやってテーブル、本棚、椅子数脚、がたがたの緑色の洋服ダンスを手に入れた――マットレスと最低限の台所用品を購入した。それだけ揃えても、広大なスペースにはほとんど影響がなかった。僕もキティも物が散らかっているのは好まなかったから、原始的ミニマリズムともいうべきこの状態が気に入って、それ以上物を増やそうとは思わなかった。ロフトにこれ以上金をかけるよりはと（もうすでに千ドル近くつぎ込んでいたのだ）僕はキティを連れて我々二人の服を新調しに出かけた。僕に必要な服は一時間足らずで全部見つかり、あと

CamScannerでスキャン

はずっと、キティのための完璧なドレスを探して店から店を回った。ようやくそれが見つかったのは、結局チャイナタウンに帰りついてからだった。艶やかな絹のチャイナドレスで、色は藍色、赤と黒の刺繍があり、一方にスリットが入っていて、腰と胸はぴっちりタイトに締まっている。ドラゴン・レディにぴったりのコスチュームだ。値段がすごく高かったので、ほとんどキティの腕をねじるようにして、何とか僕が払うことを納得させたのを覚えているが、僕にしてみればそれは少しも無駄遣いではなかった。彼女がそのドレスを着ている姿は、何度見ても飽きなかった。ドレスがあまり長いあいだクローゼットに入ったままになっていると、彼女がそれを身につけるところを見たいがために、僕は何やかやと口実を設けて、レストランに出かけようと提案するのだった。僕の淫らな思いにいつも敏感なキティは、僕がそのドレスに入れ上げているのを見抜いてからは、どこへも出かけない晩にも家のなかでそれを着てくれるようになった。誘惑への序曲に、裸の体にそっとドレスをかぶるのだ。

チャイナタウンは僕にとってまるで外国だった。街に出るたびに、自分がどこにいるのかわからなくなってしまった。ここはアメリカだというのに、まわりの人が言っていることは何ひとつ理解できないし、目に入ってくるいろんな物の意味もわからない。近所の店の人と何人か知りあいになってからも、我々の交流は儀礼的な笑顔となりふり構わぬジェスチャー以上に発展することはなかった。さしたる内容もない身振り言語、それだけだった。物言わぬ事物の表層の向こうに、僕が入っていくすべは何もなかった。そうやって締め出しを食うことで、何だか自分が夢の世界に生きているような気になることがあった。顔に仮面をかぶ

った、幽霊のような人々の群れに紛れ込んだ気分だった。けれど意外にも、そういうはぐれ者の境遇が、僕は決して嫌ではなかった。むしろそれは奇妙に元気の出る経験だった。こうした状況が、僕の身に起きるいろんなことをいっそう新鮮にしてくれるように思えた。同じニューヨークのなかを移動したような気はしなかった。世界を半分旅して、ようやくここにたどり着いたという感じだった。だとすれば、何もかもが——僕自身さえもが——いままでと違って見えるのも、まったく当然ではないか。

引越しが一段落すると、キティは夏のあいだのアルバイトを見つけてきた。金はあるわけだし、君がわざわざ働くことはないよ、と説得に努めたのだが、彼女は耳を貸さなかった。何ごとも対等にしておきたい、とキティは言った。僕に養われるというのは、彼女の好むところではなかった。大事なのはお金を長持ちさせることよ、できるだけゆっくり使うことよ、と彼女は言った。こういう事柄に関しては明らかにキティのほうが大人だったから、僕も彼女の論理に屈せざるをえなかった。彼女は秘書の短期採用を斡旋するエージェントに登録し、わずか三日後に、六番街のマグロー=ヒル・ビルで業界誌を作っている会社の仕事を割り当てられた。僕らはその雑誌のタイトルについてしょっちゅう冗談を言いあっていたので、もうその名前は僕にとって忘れようにも忘れられないものになっている。いまでもそれを口にするたびに、思わず口元が緩んでしまう。『現代プラスチック——トータル・プラスチック・ライフの専門誌』。夏の暑いさなか、キティはほかの何百万もの通勤客と一緒に地下鉄に乗って通勤し、毎日九時から五時まで働いた。決して楽ではなかったはずだが、キティはそう

いうことで愚痴をこぼすようなタイプではなかった。夕方は家で二、三時間ダンスの練習に励み、翌朝にはまた元気に早起きして、一日の勤めに出かけていった。キティが仕事に行っているあいだ、僕は家事と買い物を済ませ、彼女が帰ってきたときにはかならず夕食ができているようにした。家庭生活というものを、僕は生まれてはじめて味わっていた。何のためらいもなく、すんなりそのなかに入っていけた。二人とも将来のことは何も話さなかった。でもある時点で——たぶん一緒に住むようになってから二、三か月後に——いずれは結婚するんだという気持ちをキティも僕も抱きはじめたように思う。

　僕はエフィングの死亡記事をニューヨーク・タイムズに送ったが、返事はなかった。掲載を断る連絡さえなかった。おおかたどこかに紛れてしまったか、ただの悪戯だと思われたのだろう。長いほうのバージョンはエフィングに言われたとおり『アートワールド・マンスリー』誌に送ったが、やはり断られてしまった。向こうが警戒したのも無理はないと思う。編集長が手紙に書いてきたように、編集部でジュリアン・バーバーという名を聞いたことがある人間は一人もいなかったのだ。作品のスライドでも見せてもらえれば別ですが、そうでなければこれを記事にするのはリスクが大きすぎるのです、と手紙にはあった。「それにミスター・フォッグ、我々はあなたがどなたかも存じ上げておりません。でも私の見るところ、これはあなたの創作になる手の込んだ捏造と思えるのです。話に迫真性がない、と申し上げているのではありません。むしろ、妙なお芝居はやめて、フィクションとしてしかるべき相手に売り込まれたほうが、出版にこぎつけるチャンスも大きいのではないでしょうか」

少なくとも一応の努力をしてみる義務はあると思ったので、この手紙を受け取った翌日に僕は図書館へ行って、ジュリアン・バーバーの一九一七年の死亡記事をコピーに取り、短い説明の手紙を添えて『アートワールド・マンスリー』編集長宛てに送った。「行方不明となった時点でのバーバーは、まだ若い、そしてたしかに無名の画家でした」と僕は書いた。「でも彼が存在していたのは事実です。このニューヨーク・サンの死亡記事を御覧になれば、僕のお送りした記事が悪ふざけで書いたものでないことは御了解いただけると思います」。同じ週のうちに謝罪の手紙が送られてきたが、これも所詮は、再度の拒絶の前置きにすぎなかった。「ジュリアン・バーバーという名のアメリカ人画家がかつて存在したことは認めましょう」と編集長は書いていた。「けれどそれで、トマス・エフィングとジュリアン・バーバーが同一人物であることが証明されたわけではありません。かりにそうであったとしても、バーバーの作品の複製が我々の手元には一点もなく、彼がいかなる画家であったのか何とも判断のしようがないのです。その無名ぶりから考えるに、残念ながら傑出した才能の持ち主ではなかったと推測するのが妥当と思われます。だとすれば、そのような人物のために本誌のスペースを割くわけには行きません。先日のお手紙で、あなたがよい小説の素材をお持ちだといったようなことを申し上げました。あれは取り消します。あなたがお持ちなのは、異常心理の一症例です。それ自体は興味深いものかもしれませんが、芸術とは関係ありません」

僕はこれであきらめた。もしその気になれば、どこかでバーバーの作品の複製を探し出す

こともできたかもしれない。でも実のところ、彼の作品がどんなものだったのか、僕は知らないままでいたかったのだ。何か月もエフィングの話を聞いているうちに、僕は少しずつ、彼の作品を頭のなかに思い描いていった。そうやって自分で作り上げた美しい亡霊を、いまさら壊してしまう気にはなれなかった。記事を掲載してもらうためには、それらの幻影を葬(ほうむ)り去らねばならない。そこまでする価値はない、と僕は思った。ジュリアン・バーバーがいかにすぐれた芸術家だったとしても、その作品が、トマス・エフィングがすでに僕に与えてくれた作品に匹敵することはありえない。それはエフィングの言葉から僕が夢見た作品であり、それゆえに完璧にして無限、現実を現実以上に正しく表象しているのだ。目を閉じている限り、僕はそれをいつまでも想像しつづけていられるのだ。

　僕は壮麗なる怠惰のなかで日々を過ごした。単純な家事をべつにすれば、さしたる責任は何もなかった。七千ドルといえば当時としては相当な大金である。さしあたっては、あわてて計画を立てる必要もなかった。僕はふたたび煙草(たばこ)を喫(す)うようになった。本を読み漁り、マンハッタンの下町をぶらぶらさまよい、日記をつけた。それらの走り書きはやがて何本かのエッセイにまとまった。思いつくままに書いた随想ができ上がるたびに、僕はキティに読んで聞かせた。初めて会ったとき、シラノ・ド・ベルジュラックをめぐる長広舌に圧倒されて以来、キティは僕がいつの日か作家になるものと信じていた。そしていま、こうして毎日ペンを片手に机に向かっていると、まるで彼女の予言が現実になったみたいだった。それまで読んだあらゆる作家のなかで、僕にとって最大のインスピレーション源はモンテーニュだっ

た。モンテーニュにならって、僕も自分自身の体験をおのれの考察の出発点に使ってみた。素材に導かれるまま、突拍子もない抽象論に入り込んでしまうときでも、べつに何か最終的な結論を述べている気はなく、あくまでも偽装した自伝を語っているつもりだった。取り組んだエッセイ一つひとつを全部覚えているわけではないが、そのうちのいくつかは、じっくり考えればいまでも思い起こすことができる。たとえば金銭をめぐる省察があり、衣服を論じた小文があった。孤児についてのエッセイもあった。自殺についてのエッセイはいくぶん長めで、主としてジャック・リゴーを論じたものだった。リゴーは無名のフランス人ダダイストで、自分はあと十年だけ生きることにすると十九歳で宣言し、やがて二十九歳になって、宣言通りの日にピストル自殺したのである。テスラについて若干調べてみたことも覚えているが、これは機械対自然という問題をめぐる考察の一環をなすはずのものだった。ある日、四番街の古本屋を漁っている最中に、偶然テスラの自叙伝が見つかった。『わが発明』と題するその書物は、元来『エレクトリカル・エンジニア』という雑誌に一九一九年に発表されたものだった。僕はその小著を買って帰り、さっそく読んでみた。何ページか読み進んだところで、もう一年近く前にムーン・パレスで占いクッキーから出てきたのと同じ言葉に行きあたった——「太陽は過去であり、地球は現在であり、月は未来である」。占いの紙切れはいまだに僕の財布に入っていた。その言葉が、エフィングにとってあれほど重要だった人物のものであることを知って、僕は衝撃を受けた。知らないうちに、いろんなことが並行して起きているのだ。その事実がいかにも意味深長に思えるものの、ではどういう意味があるの

かと考えはじめると、はっきり答えを出すのは難しかった。何だかまるで、運命が僕に呼びかけているのに、その言葉を聞きとろうと耳を澄ますたびに、それが僕の知らない言語で語られていることを思い知らされるという感じだった。中国の占いクッキー工場に勤めている人で、誰かテスラの本を読んでいた者がいたのだろうか？ ありそうもない話だ。それにもしかりにそんな人物がいたとしても、あのとき三人でテーブルを囲んでいたなかで、そのメッセージの入ったクッキーを選んだのが僕だったのはなぜか？ こうした成行きに、僕は動揺を覚えずにいられなかった。いわばそれは世界の不可解さの結節点だった。説明をつけようにも、怪しげな説を持ち出すしか手はないように思えた。物質による奇怪な陰謀、未来を予言する事象、隠れた予知能力。チャーリー・ベーコンの世界観とさして変わらない。僕はテスラに関するエッセイを中断し、偶然の一致という問題を考察しはじめたが、大した成果は挙がらなかった。それは僕の手に余る問題であり、結局、またいつか考えることにしようと自分に言って放棄してしまった。それっきり二度とこの問題には戻らなかった。

　キティのジュリアードでの授業が九月なかばにはじまった。そして、その週の終わり近くになって、ようやくソロモン・バーバーから連絡が届いた。エフィングが亡くなってからほぼ四か月が経っていた。僕はもう、バーバーの返事を待つのをあきらめてしまっていた。どうしても返事をもらわなくては困るという話ではないし、それに、彼の立場に置かれた人物の胸に生じうるさまざまな反応――衝撃、憤怒、歓喜、畏怖――を考えれば、連絡してこなくても責めるわけには行かないと思ったのだ。生まれてこのかた五十年、父親は死んだもの

と思って暮らしてきたのが、ある日突然、ずっと生きていたことを知らされ、と同時に、いまやその父が本当に死んでしまったと告げられたのだから。これほどの大ニュースに襲われた人がどう反応するかなんて、僕が想像するだけでも傲慢というものだろう。そんなふうに思っていた矢先に、バーバーからの手紙が郵便箱にひょっこり現われたのだ。それは返事が遅れた非礼をていねいに詫びた手紙で、父の最後の数か月にいろいろお世話いただき本当に感謝します、とくり返し礼を述べていた。機会があったらぜひお会いしたい、もし御迷惑でなければこの秋の週末にでもこちらからニューヨークに伺ってよろしいでしょうか、とバーバーは書いていた。その口調は実に礼儀正しく思慮深く、僕としても断ることなど考えもしなかった。手紙を読み終えると同時に僕は返事を書きはじめた。いつでもそちらの御都合のよいときに喜んでお会いします、と僕は書いた。

それからまもなく、バーバーは飛行機でニューヨークにやって来た。ちょうど気候が変わりはじめる、十月初旬の金曜の午後のことだった。ホテルのチェックインを済ませるとすぐかけてきた。我々はホテルのロビーで会うことにした。いますぐ伺います、どうやったらあ(宿はマンハッタン中央部のウォリックにとってあった)バーバーは到着を知らせる電話をなたとわかるでしょうか、と訊ねると、電話口の彼は軽く笑って、「ロビーじゅうでいちばん大きい人間が私です」と言った。「見逃しっこありません。でもまあ私と同じサイズの人間がもう一人いるとして念のため申し上げると、禿げているほうが私です。頭に一本の毛もないほうです」

じきに僕もこの目で見ることになったわけだが、「大きい」という言葉はこの人物を表わすのにとうてい十分ではなかった。エフィングの息子はまさに巨人だった。その体は山のごとく、肉また肉が何層にも積み重なった大伽藍（だいがらん）だった。これほどの体格の人間と知りあいになるのは僕もはじめてだった。ロビーのソファに座っている彼を一目見たとき、近づくのを一瞬躊躇（ちゅうちょ）してしまったくらいである。ときおり街なかで、怪物のように太った人間を見かけるものだが、彼もまさにそういう人物の一人だった。懸命に目をそらそうとしても、ついつい見とれてしまう。その肥満たるやおよそ人間離れしていて、体全体が丸々とはち切れんばかりにふくれ上がっている。見ているうちに、自分が縮んでしまったような思いを覚えずにはいられない。まるでこの人物にあっては、三次元という概念が並の人間よりはるかにはっきり具現化されている感じだ。他人より大きな空間を占有しているのはむろん、まわりの空間にまであふれ出て見えた。自分と外界の境界線を越えてじわじわ外に流出し、自分がいない領域にまで居付いているような按配（あんばい）である。ソファにゆったり座って、何重にも肉の人った堂々たる首から巨大な禿げ頭をつき出している姿は、ほとんど伝説上の存在のように見えた。僕の目にはそれが、醜悪かつ悲劇的に映った。あの小柄で痩せたエフィングが、こんな息子を生んだなんて、およそありうべからざることだった。ここにいるのは、個の遺伝的[illegible]である。[illegible]が異様な発育を遂げ、重力もない開花に至ったのだ。一個のあい[illegible]この[illegible]の産物なのだ、ほとんどそう自分に信じ込ませた。だがそのとき[illegible]

て、薄茶色のハッシュパピーをはいていた。左手に持った喫いかけの細巻シガーが、ほとんど針みたいに見えた。
「ソロモン・バーバーさんですね？」と僕は訊ねた。
「そうです」と彼は言った。「ミスター・フォッグ、お会いできて誠に光栄です」
よく通る大きな声は、肺にからまった葉巻の煙のせいか、いくぶんしゃがれていた。僕は差し出された巨大な手を握り、彼のかたわらに腰を下ろした。しばらくのあいだ、我々はそれ以上何も言わなかった。バーバーの顔から微笑が少しずつ消えていき、不安げな、どこか上の空といった感のある表情が浮かんだ。彼は僕をじっと見ていたが、と同時に、何か物思いにふけっている様子でもあった。何か大事な考えをたったいま思いついたような表情だ。と、彼は不意に目を閉じ、大きく息を吐いた。
「昔フォッグという名前の人を知っていました」と彼はようやく口を開いた。「ずっと昔のことです」
「割合珍しい名前ですが」と僕は答えた。「まあ何人かはいるみたいですね」
「そのフォッグという人は、四〇年代に私の学生だったんです。私がまだ教師になりたてのころです」
「その男のファースト・ネームは覚えてらっしゃいますか？」
「ええ、覚えています、でも男じゃありません、若い女性でした。エミリー・フォッグ。一年生で、私のアメリカ史の授業を取っていました」

「どこの出身だったか御存知ですか？」

「シカゴです。たしかシカゴでした」

「僕の母親の名前はエミリーで、シカゴの出です。同じ大学に、同じ出身地のエミリー・フォッグが二人いたなんてことがあるでしょうか？」

「ありえないことじゃないですが、まあ可能性としては低いでしょうね。何しろよく似ておられる。あなたがここに入ってこられたとたん、彼女の面影が浮かんできましたよ」

「またしても偶然」と僕は言った。「どうやらこの宇宙は偶然に満ちているようです」

「ええ、ときどき訳がわからなくなります」とバーバーは言って、また自分の思いのなかに沈んでいきかけた。数秒後、はっと我に返った彼は、気を引き締め、言葉を続けた。「こんなことをお訊ねして気を悪くされるかもしれませんが、君はどうして母上の旧姓を名乗られることになったんです？」

「父は僕が生まれる前に亡くなりまして、母はその後フォッグの姓に戻ったんです」

「すみません。詮索するつもりじゃなかったんですが」

「いいんです。父のことは全然知りませんし、母も亡くなってもう何年にもなりますから」

「ええ、あれからまもなく私も伺いました。たしか交通事故でしたね。実に悲しい話だ。君もさぞつらかったでしょうね」

「ボストンでバスに轢かれたんです。僕はまだほんの子供でした」

「実に悲しい話だ」とバーバーはくり返して、ふたたび目を閉じた。「美しく聡明な女性で

したね、君のお母さんは。よく覚えています」

十か月後、背骨を折って瀕死の床にあったバーバーがシカゴの病院で打ち明けたところによれば、あの日ロビーではじめて言葉を交わしたときから、彼はすでに真相に感づきはじめていたという。すぐにそれを口に出さなかった理由はただ一つ、僕が恐れをなして逃げてしまうかもしれないと思ったのだ。彼はまだ僕のことを何も知らなかった。そのようなとてつもない事実を突然聞かされたら僕がどんな反応を示すか、見当もつかなかった。状況を想像してみるだけで、黙っているしかないのは明らかだった。体重一六〇キロの赤の他人が僕をホテルに招き、握手を交わして、僕から話を聞くかと思いきや、僕の目をまじまじと見据え、長いあいだ離ればなれになっていたけれど私は君の父親なのだよと告げる。打ち明けたい誘惑がいかに強かろうと、こんな話を信じてもらえるはずはない。おそらく僕は彼のことを狂人と決めつけ、それ以上口をきこうとしないだろう。どのみちおたがいを知りあう時間はたっぷりあるのだ。わざわざいまここで騒ぎを起こして、チャンスをつぶしてしまう必要はない――バーバーはそう考えたのである。僕が語っているこの物語のなかの多くのことがそうであるように、結果的にこの判断は間違いだった。バーバーの予測に反して、時間はたっぷりありはしなかった。未来が問題を解決してくれるものと彼は当てこんでいたが、その未来は結局訪れずじまいだった。むろんそれは彼の責任ではなかったが、間違いの代償を払わさ

れたのは僕であり、そして僕だった。でも結果はどうあれ、あの時点の彼にはかにやりようがあったとは思えない。これから何が起きることになるのか、誰にもわかりはしなかった。僕たちの前に待ち受けている暗く恐ろしい出来事は、誰にも予見できなかったのだ。

バーバーのことを考えるたびに、僕はいまでも強い同情の念に襲われる。僕だって自分の父親が誰なのかは知らなかった。でも少なくとも僕は、父である人がかつてどこかに存在していたことを知っていた。何といっても、子供というのは無から生じるものではない。その子に生命を与えた男は、否が応でも父と呼ばれるのだ。けれどバーバーは何ひとつ知らなかった。彼はたった一度だけ僕の母と寝た（一九四六年春、じめじめとした星のない夜のことだった）。翌日にはもう母はいなくなり、彼の人生から永遠に姿を消してしまった。彼女が妊娠したことも、自分に息子ができたことも彼は知らなかった。自分の行ないの結果について、彼は何も知らなかった。その後に彼が味わった苦難を思えば、何がしかの慰めを与えられてしかるべきだったと僕は思う。せめて自分が何を成し遂げたか、それくらいは知らされてしかるべきだったと思う。その朝早く、掃除婦がノックもせずに入ってきた。喉から湧き上がった悲鳴は、彼女としても抑えようがなかった。二人が服を着る間もないうちに、下宿屋の住人全員が部屋のなかに入っていた。かりに相手が掃除婦だけだったら、何か作り話をでっち上げることもできたろうし、うまく行けば何の問題もなく済んだかもしれない。だが目撃者はあまりに多すぎた。十九歳の一年生が、歴史の先生と一緒にベッドのなかにいる。当時こうした行ないは規則で禁じられていた。よほど間の抜けた人間でもなければ、つかま

るようなヘマはしなかった。何しろここはオハイオ州オールドバーンなのだ。バーバーは解雇され、エミリーはシカゴに逃げ帰った。それっきりだった。学者としての彼のキャリアはこの失態から二度と回復しなかった。でもそれ以上につらかったのは、エミリーを失った苦しみだった。その苦しみは生涯彼につきまとって離れなかった。月に一度はかならず（と彼は病院で僕に言った）彼女にむごたらしく拒絶された瞬間をバーバーは生き直すことになった。結婚してほしいと言ったときにエミリーの顔に浮かんだ、混じりけなしの恐怖の表情を、そのたびにまたありありと思い浮かべることになった。「あなたは私を破滅させたのよ」と彼女は言った。「あなたの顔なんか、もう二度と見たくないわ」。結局その通りになった。バーバーは二度と彼女に会わなかった。十三年後、ようやく消息をつきとめたときには、彼女はすでに墓のなかだった。

どうやら僕の母は、ことの真相を誰にも話さなかったらしい。母の両親はすでに亡くなっていて、兄のビクターもクリーブランド交響楽団の一員として公演旅行の毎日だったし、わざわざ誰かに醜聞を打ち明けねばならない理由は何もなかった。はたから見る限り、母は要するに大学を中途退学した娘にすぎなかった。一九四六年に生きる若い女性にとって、べつに大騒ぎするような話ではない。不可解なのは、妊娠したのを知ったあとも、相手の男の名前を母が絶対に明かそうとしなかったことだ。ビクター伯父さんと一緒に暮らしていたころ、僕も何度か訊ねてみたのだが、伯父さんもやはり何も知らなかった。「それはエミリーの秘密だったんだ」と伯父さんは言った。「私だって思い出すのも嫌になるくらい、しつこく問

いかがわしいものさ。でもむしろホッとしたヒントさえ湧かなかったよ」。当時、私生児を産むというのは、男よりも女の罪とされていた時代だった。けれど母は少しも迷わなかったらしい。ほかにも感謝すべきことはたくさんあるけれど、まずはそのことを母に感謝せねばならない。母はだ身ぶりが強くない女性だった。僕を流していたことだろう。あるいは、もっとひどい話、中絶の手段を講じたかもしれない。ぞっとしない話だが、母があのような人でなかったら、僕はこの世にたどり着かずに終わっていたかもしれないのだ。もし母が、いわゆる分別ある選択をしていたら、僕は生まれもしないうちに死んでいたのだ。三か月の胎児が、どこかの裏道のゴミ箱の底に転がっていたはずなのだ。

悲しみに打ちのめされはしたが、僕の母に拒絶されたこと自体はバーバーにとって驚きではなかった。年月が経つにつれ、母を恨む気持ちも次第に薄れていった。むしろ不思議なのは、そもそものはじめに母が彼に惹かれたという事実のほうだった。一九四六年の春、すでに三十九歳になっていたバーバーにとって、ミリーは金銭抜きで寝てくれたはじめての女性だった。金で愉しみを買う行為にしても、ごくたまのことでしかなかった。そもそも危険が大きすぎたし、それに、快楽が屈辱によって台なしにされることを思い知ってからは、もうめったにそういう手段にも訴えなくなっていた。自分自身について、バーバーは何ら幻想を抱いていなかった。人々が自分を見るとき、彼らの目に何が映っているかもちゃんと承知していたし、そのとき彼らが抱く気持ちが不当なものだとも思わなかった。ミリーは彼にとってたった一度のチャンスだったのであり、その彼女はもう失われてしまったのだ。総

めるのはつらかったけれど、これも自業自得なんだと思わずにはいられなかった。

彼の肉体は地下牢だった。彼はその牢で一生を過ごす判決を下された終身囚だった。上訴の道も与えられない、減刑の希望もなければ迅速かつ慈悲深い死刑執行のチャンスもない、忘れられた囚人だった。十五歳のころに彼の身長は伸びきったが（一八六センチか七センチ）、体重はその後も依然増えつづけた。思春期のあいだは、何とか一一〇キロ以内に抑えようと懸命に頑張ったが、夜更けに湧いてくる食欲はどうにも抗しがたく、ダイエットに努めてもいっこうに効果は挙がらなかった。彼は鏡を避けるようになり、できるだけ一人で過ごすようになった。世界は彼にとって、じろじろ眺める視線と、無遠慮に指す指に満ちた障害物競走となった。彼は動く見世物であり、四方から浴びせられる嘲笑のただなかをよたよた歩く風船男だった。すれ違う人々は、彼の姿に思わず立ち止まった。書物は早くから彼の避難所となってくれた。本の世界にいる限り、自分を隠していられた。他人からだけでなく、自分自身の思いからも。こんな姿になってしまった責任が誰にあるのか、彼は一瞬たりとも疑ったことはなかったのだ。目の前のページに書かれた言葉のなかに入っていくことによって、自分の肉体を忘れることができるばかりか、おのれを責める思いをつかの間なりとも鎮めておくことができた。書物はバーバーに、浮遊するチャンスを与えてくれた。自分の存在を精神世界に宙吊りにすることを可能にしてくれた。一心不乱に本に集中していさえすれば、鎖を断ち切ったような錯覚を味わっていられた。醜悪きわまる停泊所に自分を縛りつけている綱が、ぷつんと切れたような気持ちになれた。

CamScannerでスキャン

ロングアイランドの小さな町ショーラムで、誰もが舌を巻く驚異的な成績を並べて、バーバーは高校を首席で卒業し、その年の六月に、いささかまとまりには欠けるものの熱のこもった卒業演説を行なった。時は一九三六年、蒸し暑い体育館に集まった父母たちは、平和運動とスペイン共和制とローズベルト再選を支持するその政治観にはかならずしも賛成しなかったが、演説が終わると大きな拍手を送った。そしてバーバーは、何も知らぬ彼の息子が二十九年後にそうするように、コロンビア大学で四年間を過ごすべくニューヨークへ向かった。その四年が終わるころには、体重の目標は一三〇キロに変わっていた。大学院に進学して歴史を専攻し、軍隊に志願したものの入隊を拒否された。「デブはお断りだよ」と担当の軍曹はせせら笑って言った。かくしてバーバーは、体に麻痺のある者や精神的不適格者や、若すぎる者や歳を取りすぎている者たちとともに、いわゆる銃後の戦線に加わることになった。戦時中の年月を、彼はコロンビアの歴史学科で女たちに囲まれて過ごした。異様な肥満体の男が一人、女たちのなかに紛れ込んで、日々図書館で本と睨めっこしていたというわけだ。けれども、彼が優秀な学生であることは誰も否定できなかった。バークリー司教とインディアンをめぐる論文は一九四四年のアメリカ文化研究奨励賞を受賞し、その結果、東部の大学から何校か就職の誘いが来たが、自分でもよくわからない理由から、彼はオハイオを就職先に選んだ。

一年目は順調に行った。学生にも人気があったし、教官の合唱団にバリトンとして加わり、インディアン捕囚体験談を扱った本も最初の三章が書き上がった。ヨーロッパでの戦争はそ

の春ようやく終わり、八月に日本に原爆が二回落とされたときも、少なくともこれで二度とこんなことは起きないのだから、と考えてみずからを慰めた。次の年度も予想外の華々しいスタートだった。九月から一月にかけて、一三五キロまで減量することに成功したのである。生まれてはじめて彼は、何がしかの楽観をもって未来に目を向けることができた。春学期がはじまり、エミリー・フォッグが一年生の歴史の授業に現われた。チャーミングで活気にみちた娘、それが驚いたことに彼に夢中になったのだ。あまりに素晴らしい出来事に、慎重にことを進めねば、と努めて自分にブレーキをかけたものの、いまや何だって夢じゃないんだという実感がだんだん湧いてきた。それまでは想像するのも尻込み(しりご)していたことさえ不可能ではないのだ。やがて、下宿でのあの事件が起きた。掃除婦が部屋に入ってきて、何もかもが台なしになった。あまりにも目まぐるしい展開に呆然(ぼうぜん)としてしまった彼は、どうすることもできなかった。その日に学長室に呼ばれたときも、解雇に抗議しようなどと思いつきもしなかった。バーバーは部屋に帰って荷物をまとめ、誰にも別れを告げず町を去った。

夜汽車に乗ってクリーブランドへ行き、ＹＭＣＡに部屋を取った。最初の計画は窓から飛び降りるということだったが、しかるべき瞬間を待って三日間を過ごした末に、自分にそれだけの度胸がないことをバーバーは思い知った。そして彼は降伏を決意した。きれいさっぱり努力を放棄してしまうことにした。死ぬだけの勇気がないのなら、せめて自由な人間として生きることにしよう、そう思った。それだけははっきり決心した。これ以上自分自身から空(むな)しく逃避するのはよそう。自分が何者なのか、他人に決めさせたりするのもよそう。その

後の四か月、バーバーは忘却の彼方へ向かってひたすら食べつづけた。クリームパンにドーナツ、バターを塗ったポテトにグレイビーのたっぷりかかったローストビーフ、パンケーキ、フライドチキン、どっしり大きなボウルに入ったチャウダー、手当たり次第に貪り食った。暴食が終わった時点では十六キロが加わっていた。でもそんな数字はもはやどうでもよかった。もう数字なんか見るのはやめたのであり、ゆえにそれはもう存在しなくなっていたのだ。

体が大きくなればなるほど、バーバーはますます自分の内にこもるようになっていった。彼の目標は自分を世界から閉め出すことであり、おのれの肉塊のなかに自分自身を埋没させてしまうことだった。クリーブランドでの数か月のあいだに、他人にどう思われるかを気にしない力を身につけ、見られることの苦痛に対して免疫を築き上げていった。毎朝ラッシュアワーにユークリッド・アベニューを歩いて自分をテストし、土曜日曜には昼下がりにウェイパークをそぞろ歩き、公園を訪れた大勢の人の目にわが身をさらした。じろじろ眺めている連中が何を言っても聞こえぬふりを決め込み、意志の力で断固その視線をはね返した。彼はいまや一人だった。すべての人間から隔たっていた。おのれの意識の混沌のなかをよたよた歩く、巨大な卵型の単子だった。努力は実を結び、もはや孤立も怖くなくなった。自分の内に棲む混沌のなかに飛び込むことによって、彼はついにソロモン・バーバーになった。一個の人格、一人の個人、みずから創造した一人だけの世界それ自体になったのだ。

仕上げのタッチは数年後に訪れた。バーバーの頭が禿げてきたのである。はじめのうちは、下手な駄洒落としか思えなかった。床屋という名の、禿げ頭の男。だがかつらや入れ毛は問

題外だったから、禿げに耐えて生きていくしかなかった。かつて彼の頭にあった美しい庭園は次第に枯れていった。以前は赤茶色の巻き毛が茂っていたところに、いまや空白の頭皮が露出し、むき出しの皮膚が不毛に広がった。むろん彼としてはこの変化を好ましくは思わなかったが、もっと嫌だったのは、自分ではそれをどうしようもないという事実だった。自分に対して受け身の関係を強いられること、それがいまでは何よりも耐えがたかった。そこである日、禿げがおよそ半分くらいまで進行した時点で（側面にはまだ髪があったがてっぺんはつるつるだった）、彼はおごそかに剃刀を手に取り、残っている毛髪を剃り落としてしまった。この実験は、思ったよりはるかに目覚ましい結果を生んだ。自分が巨石のごとき立派な頭部を所持していることを彼は発見したのである。それは神話的な頭部といってよかった。鏡の前に立って、地球にも比せらるべき巨大な肉体がそれに相応しい月を得たのを眺めていると、しごく理に適っている気がした。その日以来、バーバーはこの天体を入念に手入れするようになった。毎朝クリームとオイルをすり込んで艶と滑らかさを保ち、電気マッサージで刺激を与え、雨風にもさらさぬよう細心の注意を払った。かくして彼は帽子をかぶるようになった。ありとあらゆる種類の帽子をかぶり、やがてはこれが彼の奇人ぶりのトレードマークになった。帽子は彼という人物の究極的な看板だった。もはや単に、でぶのソロモン・バーバー、ではない。彼はいまや「帽子をかぶる男」だった。こういう行動に出るにはそれなりの勇気が必要である。だがもうこのころには、自分の奇怪ぶりを自分で助長するのをむしろ楽しむようになっていた。小道具たる帽子はどんどん増えていき、それとともに、他人

CamScannerでスキャン

を煙に巻く能力もますます磨かれていった。山高帽にトルコ帽、野球帽に中折れ帽、麦わら帽にカウボーイハット、スタイルも流行もお構いなく、気の向くままに何でもかぶった。一九五七年にはコレクションも相当な量に達し、二十三日間、一度も同じ帽子をかぶらずに過ごしたこともあった。

オハイオでの磔刑（のちにバーバーはあの事件をそう呼んだ）のあと、彼は中西部や西部の小さな無名大学を転々とした。はじめ自分では一時的な流刑と思っていた生活が、気がついたときには二十年以上も続いていた。それが終わったころには、彼の傷跡を示す地図は、いまや米国中央部の全領域にわたっていた。インディアナにテキサス、ネブラスカにオクラホマ、サウスダコタにカンザス、アイダホにミネソタ。一つの場所に二、三年以上とどまることは決してなかった。大学はどこも似たりよったりだったが、動きつづけているおかげで退屈せずに済んだ。もともと仕事には熱心だったところに、埃っぽい田舎の静けさに収まって、ほかにすることもほとんどなかったので、ひたすら仕事に打ち込んだ。論文や著書を着々と発表し、学会に参加し講演を行ない、授業や学生指導にも熱心だったから、どこへ行ってもかならず、キャンパスでもっとも人気ある教師の地位を獲得した。学者としての能力にも疑問の余地はなかった。にもかかわらず、オハイオでの汚点が忘れかけられたあとも、名門大学は彼の応募を相変わらず却下しつづけた。エフィングはマッカーシー旋風のことを口にしていたが、実際にバーバーが左翼の運動に足をつっ込んだ経験といったら、三〇年代にコロンビアで平和運動のシンパだったことくらいだった。公式にブラックリストに載った

CamScannerでスキャン

ことは一度もなかったにもかかわらず、誹謗者たちは何かにつけて彼の名前に左翼がかった色合いをつけようとした。ある意味ではそのほうが、彼を採用しない口実としては都合がよかったのだ。誰もはっきり口に出しては言わなかったけれど、要するに誰もがみな、こいつはどう考えても場違いだと感じていたのである。彼はあまりにも大きく、あまりにも独立独歩、おのれを恥じるということをあまりにも知らなさすぎた。考えてもみるがいい、一六〇キロの巨人がテンガロンハットをかぶってイエール大学のキャンパスを闊歩する姿を。論外というしかない。恥知らずの、品位というものをまるで持ち合わせていない男。あんな人間がいるだけで秩序はかき乱されてしまうだろう。ほかにも候補者はゴマンといるのだ。わざわざ厄介の種を招き入れることはない。

おそらくそれでよかったのだろう。周縁にとどまることによって、バーバーは自分がありたいままの人間でいることができたのだから。小さな大学はどこも喜んで彼を雇ったし、前代未聞の肥満教授であるところにもってきて「帽子をかぶる男」と来ては、田舎にありがちなみみっちい中傷や策略ともかかわりようがなかった。何もかもがあまりに奇抜で突拍子もなく、あまりに常識外れの人間であるがゆえ、誰も彼を批判するだけの度胸はなかった。夏の終わりになると、旅で埃まみれになった体で、バーバーは新しい町に姿を現わすのだった。排気ガスをげっぷのように吐き出すポンコツ車が、引越し用コンテナをうしろに引きずっている。その場に学生が居合わせると、バーバーは即座に彼らを荷降ろしに雇い、法外なアルバイト料を払った上に昼食を御馳走した。どこへ行ってもこの戦術が、流れを定めるのに役

立った。驚くばかりの蔵書量と、無数の帽子と、カンザス州トピーカで作らせた特注の書き物机（聖トマス・アクィナス・デスクと彼は呼んでいて、腹のふくらみに合わせて大きな半円の凹みがある）を学生たちはしょっぱなから目にすることになった。目を奪われずにいるのは難しかった。彼はいつもぜいぜいと息を切らしたように歩き、あっちからこっちへのろのろ巨体を引きずり、ひっきりなしに長い葉巻を喫うせいで服は一面灰だらけだった。学生たちは陰であざ笑いはしたが、同時に彼を慕いもした。田舎町の農場主や商店主や牧師の子供たちにとって、真にすぐれた知性と親しく知りあえる機会はおそらくもう二度とないのだ。当然、彼に熱を上げる女子学生も出てきた。精神はまさしく肉体よりも強いことの証である。だがすでに苦汁を嘗めさせられていたバーバーは、ふたたび同じ罠に陥りはしなかった。若い娘たちにちやほやされるたびに、心中ひそかに喜びはしたが、表面的にはあくまで気づかぬふりを押し通し、お固い学者を演じつづけるのだった。飽食の果てに欲望を超越してしまった、お人好しの、去勢された男。それが彼の役柄だった。むろんそれはつらく寂しい役回りだったが、そうすることでとにかく自分を護っていられた。いつも首尾よく演じ通せたわけではなかったが、少なくともカーテンを下ろしドアに鍵をかけることの大事さだけは学んでいた。放浪を続けた長い年月、その手の事柄で非難を浴びたことは一度もなかった。彼はその奇癖でもって人々を圧倒し、同僚たちに飽きられてしまう前にさっさと次の場所に移る手はずを整え、別れの言葉とともに夕陽の彼方に消えていったのである。

バーバーが僕に語ったところによると、彼は一度ビクター伯父さんと同じ町に居合わせた

ことがあるという。けれども、二人の生涯を綿密に検討してみると、うまくすれば三度顔を合わせた可能性があると考えることができる。最初に想定しうる出会いの場は、一九三九年、ニューヨークの万国博覧会である。二人とも万博に行ったということは事実として判明しているし、確率的には高くないけれども、同じ日に行った可能性も決してゼロではない。二人が何か同じ展示物――「未来の自動車」、あるいは「明日のキッチン」――の前に並んで立っている姿を、僕は好んで想像してみる。やがて二人の体がうっかりぶつかり、彼らは同時に帽子を持ち上げて相手に詫びる。二人ともまだ人生の盛りにある青年だ。一人は太って一人は痩せた幽霊コンビが、僕の頭蓋骨の映写室でささやかなコメディを演じてくれる。もちろん、ヨーロッパから帰国したばかりのエフィングも万博に来ていた。僕はときおり、その空想の場面に彼も登場させてみる。エフィングは旧式の籐製の乳母車に座っていて、それをパベル・シュムがうしろから押している。バーバーとビクター伯父さんが隣り合わせに立っているところに、折りしもエフィングが通りかかる。あるいはその瞬間、エフィングはロシア人の友に向かって何か口汚ない罵倒の文句を投げつけているかもしれない。乳母車の男の傍若無人ぶりに唖然として、バーバーとビクター伯父は顔を合わせて苦笑を交わし、やれやれとばかり首を横に振る。むろん彼らは、その男こそ自分たちの一方の父親であり、もう一方の未来の甥の祖父であることなど知るよしもない……。この場面で起こりうる出来事の可能性は無限にある。でも僕は概して、それをできるだけ控え目に抑えておく――笑顔、一瞬の脱帽、謝罪の呟き。つかの間の静かな交流。そのほうが僕にとっては、情景がリアルに浮

かんでくるのだ。想像の度を越さぬようにして、一瞬のささやかな細部に思いを凝らすことによって、それが本当に起きたんだという錯覚に浸ることができるのである。

想定される第二の出会いは、一九四六年、クリーブランドにおいてである。これは第一の出会い以上に想像の要素が強い。ある日僕がシカゴで伯父さんと一緒にリンカーンパークを散歩していたときのこと、ものすごく太った大男が芝生に座ってサンドイッチを食べているのを見たのをはっきり覚えている。そして伯父さんは男を見て、そういえば前にクリーブランドでもあんな太った男を見たよ、と言ったのだ（「わしがまだオーケストラにいたころにね」）。むろん確かな証拠は何もないけれど、クリーブランドで伯父に強い印象を与えた男がバーバーであったと僕は考えたい。少なくとも時期的にはぴったりである。伯父さんがクリーブランドにいたのは一九四五年から四八年までであり、バーバーは一九四六年の春にYMCAに宿を取ったのだ。伯父さんの話では、ある夜その男はランスキーズでチーズケーキを食べている最中だった。ランスキーズはセバレンス・ホールから三ブロック西に行った大きな騒々しい食堂である。オーケストラはオール・ベートーベンのプログラムを終え、伯父さんは仲間の木管奏者三人と連れ立って夜食を食べに行ったのだった。伯父さんが座った奥の方の席からは、仕切り板のかたわらのテーブルに一人で座った肥満男の姿を何の妨げもなく眺めることができた。ぽつんと座ったその巨大な人物から目を離そうにも離せぬまま、伯父さんは恐怖の念に包まれて男の食事の進行を見守った。団子入りスープをボウル二杯。ロールキャベツを一皿。サイドオーダーにチーズの包み揚げを一皿、コールスローを三皿。パン

をバスケット一山。バケツにフォークをつっ込みピクルスを六切れ、七切れ引っぱり上げる。あまりの大食ぶりにビクター伯父さんはすっかり肝をつぶしてしまい、その強烈な記憶は生涯消えなかった。それはまさに、混じりけなし、掛け値なしの、不幸の肖像にほかならなかった。「あんなに食べるのは死のうと思ってるんだよ」と伯父さんは言った。「飢え死にしかけた人間を見るのと同じだったよ」

彼らの最後の遭遇は一九五九年、僕が伯父さんと一緒にミネソタ州セントポールに住んでいた時期のことである。バーバーは当時マカレスター大学で教えていた。ある晩バーバーがアパートで地元紙『パイオニア・プレス』の中古車広告を眺めていると、「元クリーブランド交響楽団員」ビクター・フォッグなる人物によるクラリネット・レッスン開講の広告がふと目にとまった。その名が槍のように彼の記憶を突き通した。エミリーの面影がよみがえってきた。可憐な姿が、ここ何年も経験しなかった鮮明さとかぐわしさを伴って浮かび上がった。バーバーの胸のなかに、にわかに彼女が戻ってきた。その名が新聞に現われたことが、彼女を生き返らせたのだ。その週のあいだずっと、バーバーは彼女をめぐる思いを頭から追い払うことができなかった。彼女がその後どうなったかを案じ、彼女が生きたかもしれないさまざまな人生を思い描いた。ショッキングなくらい生々しく彼女の姿が目に浮かんだ。この音楽教師がよもやエミリーの親戚ということはあるまい。だが訊いてみてもべつに損はないはずだ。はじめは電話で問い合わせてみようかと思ったが、自分の科白を頭のなかで組み立ててみるうちに、それは思いとどまった。要領を得ない文句をしどろもどろに口走り、電

CamScannerでスキャン

話の向こう側の赤の他人をうんざりさせる、などという醜態を演じたくはなかった。そこで代わりに手紙を出すことにし、七回か八回書き直した末にようやく納得の行く文章ができ上がり、胸を締めつけられるような思いで投函し、封筒がポストのなかに消えたとたん今度は後悔の念に襲われた。返事は十日後に来た。素っ気ない文面が、黄色いノートペーパーに斜めに書きなぐってあった。「前略　お察しの通りエミリー・フォッグは私の妹でありましたが、昨年交通事故で亡くなりました。遺憾千万に存じます。草々　ビクター・フォッグ」

つきつめて考えるなら、その手紙は何ら新しいことを伝えてはいなかった。ビクター伯父は単に事実をひとつ告げたにすぎない。そしてその事実は、バーバーがすでにずっと前に学んでいたことだった。もう二度とエミリーには会えないということ、死はそれを変えはしなかった。すでに確かだったことに裏付けを与えたにすぎない。何年も抱えてきた喪失感が、再確認されたにすぎないのだ。むろんだからといって、その手紙を読む苦痛が減じたわけではない。だが、いったん涙が止まると、今度はもっと詳しいことを知りたいという気持ちが湧いてきた。彼女の身に何が起こったのか？　どこへ行って、何をしたのか？　結婚はしたのか？　子供は残したか？　誰かが彼女を愛したか？　バーバーは事実を知りたかった。空白を埋め、彼女の人生を組み立ててみたかった。何か実感のあるものを手にしたかった。思いのままに開いて眺めることのできる心のアルバムが欲しかった。翌日彼はビクターに手紙を書いた。最初の段落で心のこもった哀悼の言葉を連ねたあと、いくつかの質問を並べ、答えてもらえれば非常にありがたいという旨をさりげなく伝えた。彼は辛抱強く返事を待った。

だが何の音沙汰もないまま二週間が過ぎた。とうとう、手紙が途中で紛失してしまったかもしれないと考えて、ビクターに電話をかけた。三回か四回呼び出し音が鳴ったあと、オペレーターが割って入ってきて、この番号はもう使われていませんと伝えた。妙な話だとは思ったが、バーバーはそれでもあきらめず（もしかしたら金がなくて電話代が払えなくなったのかもしれない）、五一年型ダッジに乗り込んで、リンウッドアベニュー一〇二五番地にあるビクターのアパートに行ってみた。玄関のブザーのかたわらに並んだ名前のなかにフォッグという名はなかった。代わりに管理人のベルを鳴らしてみると、しばらく経って緑と黄のセーターを着た小男がのそのそ出てきて、ミスター・フォッグは引越されましたと告げた。「小っちゃい坊やも一緒ですよ」と男は言った。「十日ばかり前、急に荷物をまとめて出ていかれました」。予想もしなかった展開に、バーバーは落胆してしまった。だが、その小っちゃい坊やというのが誰なのか、これっぽちも考えはしなかった。かりに考えたとしても、結局は同じことだっただろう。きっとクラリネット吹きの息子だろう、と決めて、それっきり考えるのをやめてしまったに違いない。

　ビクターからの手紙のことをバーバーに聞かされて、一九五九年に伯父が僕を連れてなぜあんなに急いでセントポールを去ったのか、その理由を僕はやっと理解した。あのときの一部始終がありありとよみがえってきた。あわただしい夜ふけの荷作り。シカゴまでノンストップで走った道のり。学校へも行かずに過ごした、二週間のホテル住まい。バーバーという男の正体について伯父さんはむろん何も知らなかったが、その正体を恐れる気持ちに変わり

はなかった。この世のどこかに僕の父親がいる。そしてこの男はエミリーのことを熱心に聞きたがっている。わざわざ危険を冒すことはない。最悪の結果になって、子供の養育権でも主張されたら大変だ。最初の手紙に対する返事では、僕の話を持ち出さずに済ませるのも訳はなかった。けれども二通目の手紙が来て、あれこれ新たに質問を受けてみると、厄介な事態に陥ったことを伯父さんは悟った。手紙を無視したところで、問題を先送りしたことにしかならない。これだけ熱心なのだから、いずれは本人が会いにくるに決まっている。そうしたらどうなるだろう？ 伯父さんとしては行方をくらます以外に手はなかった。かくして真夜中に僕を抱きかかえ、煙に包まれて姿を消したのである。

バーバーは僕にいろんな話を聞かせてくれたが、この話はそのなかでもいちばん最後のほうに聞いたものである。僕は胸がはり裂ける思いだった。ビクター伯父さんの行動の意味を理解し、僕に対する深い愛情を改めて思い知らされて、たまらなく切ない気持ちになった。いまさらながら伯父さんが恋しくなって、伯父さんの死をまた一から悲しまずにはいられなかった。けれど同時に、苛立(いらだ)たしい思いも僕にはあった。失われてしまった年月を苦々しく感じる気持ちは抑えがたかった。バーバーからの二通目の手紙を受け取った伯父さんが、もし逃げ出さずに返事を書いていたなら、僕は一九五九年の時点で自分の父親を知ることができたかもしれないのだ。もちろん誰も責められないことはわかっている。でもだからといって、簡単にあきらめのつく話ではなかった。すべては結びつきの欠如と、タイミングの悪さと、無知ゆえの盲動の結果だったのだ。僕らはつねに間違った時間にしかるべき場所にいて、

しかるべき時間に間違った場所にいて、つねにあと一歩のところでたがいを見出しそこない、ほんのわずかのずれゆえに状況全体を見通しそこねていたのだ。要するにそういうことに尽きると思う。失われたチャンスの連鎖。断片ははじめからすべてそこにあった。でもそれをどう組み合わせたらいいのか、誰にもわからなかったのだ。

もちろん、バーバーとはじめて会った日には、こういった話はまだいっさい出てこない。もしやという疑念を自分の胸にしまっておくことにバーバーが決めてからは、我々に共通の話題は彼の父親だけだった。バーバーのニューヨーク滞在中、我々はこの話題をとことん語りあった。最初の晩の夕食は、バーバーが五十二丁目のギャラガーズに連れていってくれた。二日目の夜はキティも仲間に入れてチャイナタウンのレストランに出かけた。三日目の日曜はミネソタに帰る飛行機に乗る日だったが、朝のうちに彼の泊まっているホテルで一緒に朝食を食べた。バーバーはウィットにあふれる魅力的な人物だった。話しているうちにその気の毒な外見のことも忘れてしまう、一緒にいればいるほど心が和んでくる人だった。出会ってまもないうちから僕らはのびのびと会話を楽しみ、それぞれ自分の物語を相手に伝えながらジョークや意見を交わしあった。彼は真実を恐れる人ではなかったから、僕も彼の父親のことを話すにあたって、いちいち自己検閲を加えたりせずに済んだ。僕がエフィングとともに過ごした数か月間の物語を、よいことも悪いことも一緒くたにして話した。

バーバーは父親についてほとんど何も知らなかった。自分が生まれる何か月か前に西部で死んだと聞かされていて、べつにそれを疑いもしなかった。家の壁には絵がたくさん掛かっていたし、お前の父さんは画家だったんだよ、風景画が専門で年じゅう旅に出ていたんだよ、とみんなからも言われていた。最後に出かけた先はユタの砂漠だった、と彼らは言った。この世で神に見捨てられた地があるとしたらまさにあそこだという場所で、お前の父さんは亡くなったんだよ。けれど父親がどのようにして死に至ったのか、その事情はどうもはっきりしなかった。七歳のとき、お前の父さんは崖から落ちたのよと叔母の一人に言われた。その三年後、インディアンにつかまったのだと伯父に言われ、それから半年も経たないうちに、あれは悪魔の仕業だったのよとモリー・シャープが断言した。家の料理人で、学校から帰ってくるとおいしいプディングをたっぷり食べさせてくれたモリーは(血色のいい赤ら顔のアイルランド女で、歯と歯のあいだに大きなすきまがあった)彼の知る限り嘘をついたことは一度もなかった。父がいかなる死を遂げたにせよ、母が部屋にこもり切りになったのは父の死が原因だという点に関しては、話はつねに一致していた。親戚の者はみな、部屋にこもり切る、という言い方で母親の病状を表現したが、実際にはときおり部屋から出てくることもあった。特に、蒸し暑い夏の夜など、家の廊下をさまよい歩いたり、たまには海岸まで出かけていって水辺に腰を下ろし、海峡から打ち寄せてくるささやかな波の音を聞いているのだった。

バーバーが母親と顔を合わせることはそう多くなかった。調子のよい日でも、母はなかな

か彼の名前を思い出せなかった。彼の目をまっすぐに見据え、百パーセントの確信をこめて彼をテディと呼んだり、あるいはマルコム、あるいはロブと呼んだりした。そうでなければ、彼には訳のわからない奇妙なあだ名で呼んだ。バリー＝ボール、プー＝バー、ミスター・ジンクス。そう呼ばれても、彼は母の誤りを正そうとはしなかった。母と一緒にいられる時間はあまりに貴重だったし、ちょっとしたいさかいで母の気分があっという間に悪化してしまうことはすでに経験済みだったからだ。母親をべつにして、家族はみんな彼をソリーと呼んだ。このニックネームには彼としても異論はなかった。何となく、本当の名前が自分だけの秘密として、ひっそり隠れているような気になれたからだ。ソロモン、ヘブライの賢王。子供を二つに切ると威嚇した厳正なる裁判官。やがて、ソリーから ly が落ちてソルになった。エリザベス朝の詩を読んで、これが「太陽」の古語であることを知り、それからまもなく、フランス語では「大地」の意味だと知った。自分が太陽であると同時に大地であるという事実に彼は心を惹かれた。何年かのあいだ、彼はそれを、自分だけが宇宙のあらゆる矛盾を包含しうる存在なのだという意味に受け止めていた。

　母親は屋敷の四階で、次々に交代する看護婦や家政婦とともに暮らしていた。何日も階下に降りてこないこともよくあった。四階は独立した空間になっていて、廊下のつき当たりはキッチンに改築されていた。もう一方のつき当たりには大きな九角形の部屋があった。お前の父さんはあの部屋をアトリエにしていたんだよ、とみんなは言った。窓から外を見ると、ちょうど水以外は何も目に入らないよう作ってあった。長いあいだ窓の前に立って、ガラス

に顔を押しつけていると、まるで自分が宙に浮かんでいるような気がしてくることを彼は発見した。母の部屋にはあまり行かせてもらえなかったが、すぐ下の階にある自分の部屋にいても、夜中に母が歩き回っているのが聞こえたし（絨毯(じゅうたん)の下で床板がきしむ音が天井から響いてくるのだ）話し声もときおり聞こえてきた。くぐもった会話の声、笑い声、歌の一節、うなったりすすり泣いたりする声。彼の四階への訪問は看護婦によって統率され、どの看護婦もみな違ったルールを打ち出した。ミス・フォレストは毎週木曜日の一時間を彼の訪問時間に定めた。ミス・キャクストンは彼をなかに入れてくれる前に爪(つめ)を点検した。ミス・フラワーは海岸を早足で散歩することの信奉者だった。ミス・バクスリーはココアを出してくれた。ミス・ガンダソンはほとんど聞き取れないくらいの小声で喋(しゃべ)った。一度だけ、母と一緒に午後のまる半日、着せかえごっこをして遊んだことがあった。暗くなるまでおもちゃのボートを池に浮かべていたこともあった。そうした思い出は彼の記憶のなかでもとりわけあざやかに残っていた。何年もあとになって彼は、それが母と一緒に過ごしたなかでいちばん幸福な時間だったことを悟った。物心ついたころからすでに、母は彼にとって老いた人だった。髪は白く、顔には化粧もなく、青い目はうるんで口元はたるみ、手の甲にはしみが浮かんでいた。体の動きにも、いつもわずかに震えが混じっていて、おそらくそれが母を実際以上にひ弱な人間に見せていた。およそ落着きというものをなくしてしまった、つねに崩壊の一歩手前にある女性。それでも彼は母のことを、気が狂っているとは考えなかった（たいていいまず思いつくのは不幸という言葉だった）。ほかの人たちを青ざめさせるような真似(まね)を母がし

でかしても、あれはただのお芝居なんだと一人ひそかに思うこともよくあった。長い年月のあいだには何度か危機もあった。看護婦の一人がやめさせられたときの、えんえんと続いた悲鳴の発作。自殺未遂。何か月ものあいだ、衣服をいっさい着ようとしなかった時期。療養という名目でスイスに送られたこともあった。ずっとあとになって、スイスというのが実はコネチカット州ハートフォードにある精神病院の別名であることを彼は知った。

物悲しい幼年期だったが、決して楽しいことがないわけではなかった。下手をすればもっと寂しい年月になっていたかもしれないのだ。母方の祖父母も一緒に暮らしていて、祖母は愚かしい流行に惑わされる傾向はあったものの（フレッチャー式食事法、地球を貫くシムズ・ホール、チャールズ・フォートの超常現象の本）彼にはとても優しかったし、その点は祖父も同じで、南北戦争の話を聞かせてくれたり野生の花の探し方を教えてくれたりした。やがて、ビンクリー伯父さんとクララ伯母さん夫婦も一緒に住むようになり、何年かのあいだ、口では喧嘩(けんか)ばかりしていてもそれなりに仲のよい暮らしが続いた。一九二九年に大恐慌(だいきょうこう)が訪れると、一家は壊滅的な打撃こそ受けなかったが、その後はある程度の倹約を迫られるようになった。お抱え運転手付きのピアス・アローは手放さねばならなかったし、ニューヨークのマンションの契約が切れたときも更新は見送られた。バーバーも当初の計画では寄宿学校に入るはずだったが、これも取りやめになった。一九三一年には父のコレクションの一部を売りに出した。ドラクロワのスケッチを数点、サミュエル・フィンリー・モースが一点、そして一階の居間に掛かっていたターナーの小品。それでもまだたくさんの絵が残っていた。

CamScannerでスキャン

バーバーは特に、食堂に掛かった二枚のブレイクロックが気に入っていた（東側の壁に掛かった月光の絵と、南側に掛かったインディアン野営地の絵）。それにまた、家じゅうどこを向いても父親自身の作品が目に入ってきた。ロングアイランドの水辺、メイン州の海岸、ハドソン川。ひとつの部屋にはキャッツキル山脈へ旅行したときに描いた風景画がずらりと並んでいた。崩れかけた農家の建物、この世のものとは思えぬ山並、はてしなく広がる光。バーバーは何百時間もそれらの作品を眺めて過ごした。高校二年のときには市の公会堂を借りて父の作品の展覧会を開き、解説のパンフレットも自分で書いて、オープニングの入場者全員に無料で配った。

翌年、バーバーは毎晩、父の消滅をめぐる小説を書いて過ごした。彼は当時十七歳になったばかり、思春期特有の迷いと混乱のただなかにあって、自分は芸術家なのだという思いを抱くようになった。胸の苦悩を紙に書きつけることによっておのれの魂を救う未来の天才なのだ、と。ミネソタに帰ってから、バーバーは僕にその原稿のコピーを送ってくれた。といっても、添えられた手紙のなかで彼みずから弁明しているように、若き日の才能をひけらかすためではなく（原稿は二十一の出版社に断られたのだ）、父のいなかったことがどれほど自分の想像力に影響を及ぼしたかを僕に伝えるためである。小説の題は『ケプラーの血』といって、文体は三〇年代の大衆小説の煽情的なスタイルだった。ウェスタンとSFを合わせたようなストーリーが、ありそうもない出来事から出来事へぎこちなく進む。夢と同じ抑えがたい勢いが物語をつき動かしていた。読むに堪えない部分もあったが、それでも僕はいつ

しか夢中になっていた。読み終えたときには、バーバーという人間が前よりよくわかった気がした。彼という人間を形作ったものを何がしか理解できた思いだった。

作品の舞台設定は、時代的に四十年くらい昔にずらして一八七〇年代から話をはじめている以外、父親についてバーバーが知りえた乏しい事実をほとんどそのまま使っていた。三十五歳の画家ジョン・ケプラーが妻と幼い息子に別れを告げ、ロングアイランドの家を出て、六か月の予定でユタとアリゾナへ旅立つ。十七歳の作者の言葉を借りれば、「驚異あふるる地、猛々しい美と野蛮なる色の世界、極小の石にも無限なるものの痕跡の宿る、広大無辺の国に出会うため」。最初の何か月かはすべて順調に運ぶ。やがてケプラーの身に、ジュリアン・バーバーの身に起きたと考えられたのと同じような出来事が起こる。崖から落ちて何本も骨を折り、意識を失ってしまうのである。翌朝になり意識が戻ってくると、体が動かなくなってしまっている。食糧にも手が届かない。荒野で餓死する運命を彼は潔く覚悟する。ところが三日目になり、いよいよこの世ともお別れかというところで、インディアンの集団がケプラーを救い出す。これもバーバーが子供のころ聞かされた話の反映だろう。瀕死の男はインディアンの部落に運ばれ、ユッカやビャクシンの香りあふれる、四方を崖に囲まれた岩だらけの峡谷で手厚く介抱されて、次第に元気を取り戻す。峡谷にはおよそ三、四十人のインディアンが住み、男女はほぼ同数、子供たちは真夏のすさまじい暑さのなかをほとんど裸で歩き回っている。彼に対しても、仲間同士でもほとんど何も言わずに、インディアンは徐々に回復に向かう彼を日夜黙々と世話し、口元に水を持っていってやり、彼がおよそ味わ

CamScannerでスキャン

ったことのない外見も奇妙な食べ物を与える。頭がだんだんはっきりしてくるにつれて、このインディアンたちがあたりに住むほかのどの部族（ウート、ナバホ、パイウーテ、ショショーニ）にも似ていないことがわかってくる。彼らのほうがより原始的であり、外界から孤立していて、性格が穏やかなように思えるのだ。もっと仔細（しさい）に観察してみると、大半はいわゆるインディアン的な容姿ではまったくないことが見えてくる。青い目の者もいれば、髪が赤味がかっている者もいるし、胸毛のある男も少なくない。だがケプラーはその証拠を額面どおりに受け入れる代わりに、自分が実はまだ生死の境をさまよっていて、昏睡（こんすい）と痛みのなかで回復を夢に見ているのだと考える。けれどそれも長くは続かない。少しずつ、体調が回復するにつれて、自分は生きていて、まわりの出来事もすべて現実なのだと認めざるをえなくなる。

「彼らは自分たちを『人間（ヒューマンズ）』と呼んでいた」とバーバーは書いていた。「あるいは『民（フォーク）』、『彼方（かなた）より来し者たち』と。ケプラーが聞かされた伝説によれば、ずっと昔、彼らの祖先は月に住んでいた。ところが深刻な旱魃（かんばつ）に見舞われて土地が干上（ひあ）がり、『人間』はポグとウーマをのぞいてみな死にたえてしまった。このポグとウーマこそ地球に住む『人間』の原初の父母にほかならない。二人は二十九日のあいだ日夜砂漠をさまよった末に、『奇跡の山』にたどり着く。そしてその頂上にのぼり、そこに浮かぶ雲に乗って、七年にわたる空の旅を経て地球に降り立ち、『原初の森』に行きついて、新たな世界を築きはじめたのである。二人のあいだに二百人以上の子供が生まれ、『人間』たちは森に家を建て、穀物の種をまき、魔

法の鹿（しか）を狩り、川で魚を捕えながら、何年も幸福な日々を送った。原初の森には『かれら（アザーズ）』も住んでいた。自分たちの有する秘密の知識を『かれら』が快く教えてくれたおかげで、じきに『人間』も動植物をめぐる『大いなる叡智（えいち）』を知るに至り、地球での暮らしはいっそう快適なものとなった。『かれら』の親切に応（こた）えて『人間』たちも贈り物を返し、幾世代にもわたって両者は仲よく共存していた。ところがやがて、世界の反対側から『蛮人（ワイルド・メン）』がやって来た。何隻（せき）もの巨大な木の舟が、ある朝突然、岸辺に出現したのである。別名『髭（ひげ）ある者たち』はしばらくのあいだ友好的にふるまっていたが、そのうちに『原初の森』に入ってきて多くの木を切り倒してしまった。『人間』と『かれら』がやめてほしいと頼むと、『蛮人』は稲妻の杖（つえ）を取り出し、頼みに来た者たちを殺してしまった。力ではとてもかなわないことを『人間』たちは悟ったが、『かれら』はあくまで抵抗して戦おうとした。これが『むごい別離（わかれ）』の時であった。『人間』の何人かが『かれら』の戦列に加わり、『かれら』の一部が『人間』に仲間入りしたのち、二つの部族は別々の道を歩んでいった。『人間』たちは家を捨て、『暗闇（くらやみ）』の彼方へ旅立った。『蛮人』もここまでは来るまいと思えるまで『原初の森』を奥深く分け入って進んだが、いずれはふたたび旅立たざるをえなかった。というのも、新たな地に部落を作り上げ、やっと一息ついたのもつかの間、決まって『蛮人』が姿を現わしたからである。『髭ある者たち』は最初はいつも友好的なそぶりを見せたが、やがてかならず、おのれの神や書物や、自分たちの不敵の武力を誇示しながら、木を切り倒し『人間』を殺してしまうのだった。かくして『人間』はいつまでも流浪（るろう）の旅を余儀なくされた。『蛮

CamScannerでスキャン

人」につねに一歩先んじようと、西へ西へと動きつづけた。そしてとうとう『原初の森』の果てにたどり着き、『平らな世界』を発見した。それははてしなく続く冬と、短くも地獄のような夏から成る世界だった。『人間』はさらに『空の地』まで進み、そこにもいられなくなると、今度は『水なき国』に降りていった。『水なき国』はからからに乾いた荒涼たる地で、さすがの『蛮人』たちもそこに住もうとはしなかった。姿を見せはしたものの、大半はそのまま次の地めざして進んでいった。とどまって家を建てた『蛮人』はごくわずかで、ちらほらと点在するにすぎず、『人間』たちも難なく彼らを避けることができた。こうして、『新たな時』の訪れ以来、『人間』はずっとこの地で暮らしていた。いまでは遠い昔の記憶も失われ、ここへ来る以前にどんなことがあったのか、誰一人覚えていなかった」

彼らの言語ははじめケプラーにはちんぷんかんぷんだが、何週間か経つうちに、簡単な会話程度は何とかこなせるようになる。まず覚えたのは名詞である。自分のまわりの世界の、さまざまな事物の名。それを並べるだけの彼の言葉は、小さな子供のように幼かった。「クレネポス」は女。「マントアク」は神々。「オキーペナウク」は食べられる根を指し、「タピスコ」は石を意味する。覚えねばならぬことはあまりに多く、はじめはなかなか、文法や構文を解明するところまでは行かない。たとえば、この言語においては代名詞というものが独立して存在するようには思えず、どうやら話者の年齢や性別に応じて複雑に変化する動詞の活用体系のなかに取り込まれているらしかった。頻繁に使われる単語のなかには、まったく正反対の二つの意味（上と下、正午と真夜中、幼年と老い）を持つ言葉もあるし、話し手の表

情で言葉の意味が変わってくるケースも少なくなかった。二、三か月もすると、この言語特有の不思議な発音にも舌が慣れてきて、それまでは何ら区切りのない音のごった煮としか思えなかったものが、徐々に小さなまとまりに分かれていって、その意味も明確になってきた。耳は次第に敏感になり、細かなニュアンスや抑揚も聞き分けられるようになった。驚くべきことに、やがてケプラーは、「人間」の言葉に英語の痕跡が聞き取れるような気がしてくる。ケプラーの知る英語そのものというより、その断片というか、英単語の遺物ともいうべき音が聞こえてくるのである。どうやってかはわからないが、この知られざる言語のすきまに英語が入り込み、ある種の変容を遂げたらしい。たとえば「水なき国（ランド・オブ・リトル・ウォーター）」は「ランオリウオ」という一語になっている。「蛮人（ワイルド・メン）」はワイミー、「平たき世界（フラット・ワールド）」は英語の「フロー」に似た音になっている。はじめはケプラーも、単なる偶然だろうと考える。結局のところ、言語は違っても音はいろいろ共通しているのだから、あまり想像を逞（たくま）しくしても仕方がない。だがその一方で、「人間」の言葉のおよそ七、八語に一語の割合でこのパターンが見られることがじきにはっきりしてくる。そこでケプラーは、自説を実証すべく、自分で作った単語を「人間」たちに聞かせてみる。教わった言葉に見られる結合と省略のパターンにのっとって、新しい言葉を組み立ててみるのである。すると、そのうちのいくつかを「人間」は自分たちの言葉として認識する。成功に気をよくしたケプラーは、今度はこの部族の起源をめぐる仮説を立ててみる。伝説では月から来たことになっているけれども、きっと彼らはイギリス人とインディアンとの異人種婚によって生まれた人間の末裔（まつえい）にちがいないとケプラーは考

える。「新世界の広漠たる森に迷い込み」とバーバーはケプラーの推理をたどってみせる。

「おそらくは絶滅の危機に瀕した古の植民者の一団が、苛酷な自然に抗して生き延びようと、インディアンの部族を訪ね、自分たちも仲間に入れてほしいと頼んだのではあるまいか。そしてそのインディアンこそが伝説にいう『かれら』ではないか、とケプラーは考えた。だとすれば、こうして一つに合体した集団の一部が全体から別れて西部に旅立ち、やがてユタに落着いたと考えていいのではないか。ケプラーはこの仮説をさらにもう一歩推し進め、彼らの起源をめぐる物語はユタに着いたあとに作られたのだ、と推理する。きっとそれは、かように不毛な地に住むという決心に精神的な支えを与えるために作られたのであろう。実際、世界じゅうどこを見ても、この地ほど月に似た場所はあるまい、とケプラーは考えた」

「人間」の言語が自在にわかるようになって、なぜ彼らが自分を救ってくれたのかをケプラーはやっと理解する。彼らは言う。我々の人口は減る一方であり、何とかして数を増やさないことにはいずれ部族は滅んでしまう。そして、部族の賢者にして指導者である「黙想」が前年の冬に部落を離れ、一人砂漠で暮らして神に救いを求めた際、死者が彼らを救うであろうというお告げを夢のなかで聞いたのである。部落を囲む崖のどこかにその男の死体が見つかるであろう、と「黙想」は皆に伝えた。しかるべき薬草を用いるならば、やがて死者は生き返るであろう。事実、すべて「黙想」の予言どおりにことは起こった。ケプラーが発見され、死からよみがえったのである。いまこそ彼が、新たな世代の父となるべき時なのだ。彼こそは月から落ちてきた「荒き父」であり、「魂の生み手」であり、「民」を忘却から救う

CamScannerでスキャン

「霊者」なのだ。

　このあたりから小説はだんだんおかしな具合になってくる。ケプラーは「人間」の一員となって彼らとともに暮らすことを決意する。妻と子のもとに帰らねばという思いも、何ら良心の呵責も感じずに捨て去ってしまう。冒頭の三十ページを貫く緻密で知的なトーンは姿を消し、露骨な性的妄想がごてごてと長ったらしい文章で綴られる。マスターベーションに明け暮れるティーンエイジャーの性欲が、一気にはけ口を見出したという具合である。女たちは北米インディアンというよりポリネシアの性的玩具だ。胸もあらわな美しい乙女たちが、朗らかに笑いながら、嬉々としてケプラーに身を委ねる。それはまったくの絵空事である。人類堕落以前の無垢な社会にあって、たがいに調和し世界と調和して生きる高貴な野蛮人たち。この生活のほうがいままで自分が知ってきた暮らしよりずっと上だ、とケプラーが思うに至るのにさして時間はかからない。十九世紀文明の虚飾を脱ぎ捨てた彼は、進んで石器時代に入っていき、「人間」と運命をともにするのである。

　第一章はケプラーが「人間」とのあいだにはじめて儲けた子供が生まれた時点で終わる。第二章がはじまると、すでに十五年の歳月が過ぎている。舞台はふたたびロングアイランドに戻り、いまや十八歳になったジョン・ケプラー・ジュニアの目を通して、ケプラーのかつての妻の葬式の様子が語られる。父の消滅をめぐる謎を解き明かそうと、若者は翌朝、その探求に生涯を捧げる決意で、壮大なる旅に出かける。ユタに赴いた彼は、その後一年半にわたって、手がかりを求めて荒野をさまよう。そして奇跡的な幸運に恵まれて（このあたりの

CamScannerでスキャン

バーバーの文章はおよそ説得力を欠いている）、ついに岩に囲まれた地で「人間」の部落に行きあたる。父がまだ生きているとは若者はよもや思っていない。だが、いまや人口も百人あまりに達したこの小さな部族の救世主たる、顎ひげをたくわえた酋長に引き合わされてみると、何とそれがジュリアン・ケプラーその人であることを若者は見てとる。あまりの驚きに、若者は思わず、自分は長いあいだ生き別れになっていたあなたの息子ですと口走ってしまう。だがケプラーは顔色一つ変えず、落着き払ったまま、その言葉を理解しないふりを装う。「わしは月から来た賢者じゃ」と彼は言う。「この人々こそわしの生涯唯一の家族じゃ。今夜はお前を泊めてやろうし、食事も与えよう。だが明日になったら、ここを出て、旅を続けなくてはならぬぞ」。冷たくはねつけられて絶望の底に陥った息子は、一転して復讐の念に駆られ、真夜中に寝床を抜け出して、眠っているケプラーのもとに忍び寄り、その胸にナイフを突き刺す。騒ぎが起こる間もないうちに息子は逃げ去り、闇のなかに消えてゆく。

この犯罪には一人だけ目撃者がいる。ジョコミン（荒き瞳）という名の十二歳の少年で、ケプラーのいちばんのお気に入りの息子である。ジョコミンは三日三晩にわたって殺人犯を追うが、見つからない。四日目の朝、絶壁のてっぺんによじ登って周囲の地形を見渡し、ついに追跡を断念したその直後、ジョコミンは何と、かの「黙想」に出会う。老いたる祈禱師は何年も前に部族のもとを去って、砂漠で隠者暮らしを送っていたのである。「黙想」はジョコミンを息子として受け入れ、自分の知る秘儀を少しずつ教え、「十二の変容」の魔法を伝授すべく少年を鍛え上げる。それは長くつらい年月だが、ジョコミンは熱心かつ有能な弟

子として修業に精を出す。病人を治す術、神々と交流する術を学ぶのはもちろんのこと、七年間不断に鍛錬を重ねた末に、とうとう「第一の変容」の奥義を会得する。すなわち、おのれの心身の力を完璧に把握した結果、トカゲに姿を変えることができるようになるのである。その他の変容が次々に続く。ジョコミンは燕になり、鷹になり、鷲になる。石になり、サボテンになる。モグラに、兎に、コオロギに。蝶に、蛇に。そして最後に、もっとも困難な変容を体得して、コヨーテに変身する。そのころにはもう、「黙想」と一緒に暮らしはじめてから九年の歳月が経っている。息子として受け入れた若者におのれの叡智をすべて授けた老人は、いまや自分が死すべき時が来たと告げる。そしてそれ以上何も言わずに、儀礼用の装束に身を包み、絶食に入る。絶食の三日目が終わると、「黙想」の霊は肉体から浮かび上がり、月まで飛んでゆく。「人間」の霊は肉体の死後、月に住むのだ。

ジョコミンは部落に帰って、その後何年か酋長として暮らす。だが、困難な時代が「人間」を襲う。日照りのあとに疫病が続き、疫病は不和を生む。ジョコミンは夢のなかで、お前の父の死に対する復讐が果たされるまで幸福は戻らぬであろうと告げられる。翌日、長老たちと相談した末、ジョコミンは部族のもとを去って東へ旅立ち、ジョン・ケプラー・ジュニアを探しに「蛮人」の世界へ入っていく。そしてジャック・ムーンと名乗って職を転々としながら国土を横断し、やがてニューヨークにたどり着いて、摩天楼建設を専門とする建築会社の職に就き、建築中のウールワース・ビルのてっぺんで働くチームの一員となる。当時ウールワース・ビルといえばまさに建築史上の驚異、その後二十年近く世界一高い建造物と

CamScannerでスキャン

して君臨することになるビルである。ジャック・ムーンはきわめて有能な働き手であり、どんなに高い所へ上がっても少しも怖がらず、たちどころに仲間たちの敬意をかちとる。だが仕事が終わると彼はつねに一人で過ごし、友人もいっさい作らない。空いた時間はすべて、自分の腹違いの兄を探す作業に費やすのだ。そして二年近くの歳月を経て、ようやくその努力が実を結ぶ。ジョン・ケプラー・ジュニアはいまや裕福な実業家になっている。ブルックリンハイツのピアポント・ストリートの豪邸で妻と六歳の息子とともに暮らし、毎朝運転手付きの長い黒塗りの車に乗って仕事に出かける身分である。ジャック・ムーンは数週間にわたってケプラーの屋敷を見張る。はじめはあっさり殺してしまうつもりだったが、やがて気が変わり、息子を誘拐して「人間」の地に連れ帰るほうが復讐にふさわしいと考えるに至る。こうしてある日の午後、誰にも目撃されずに、乳母の手から白昼堂々と少年を奪い取るのである。小説の第四章がこうして終わる。

　少年を連れてユタに戻ると（道中、少年はすっかりジョコミンになつく）、何もかもが変わってしまっている。「人間」たちはいなくなり、空っぽの家々に何ら生命の徴候はない。その後六か月のあいだジョコミンはほうぼうを探し回るが、何の成果も挙がらない。とうとう、夢に欺かれたことを思い知った彼は、自分の部族が滅びてしまったという事実を受け入れる。そして、再生の奇跡を祈りつつ、その地にとどまり少年を息子として育てることを決意する。彼は少年を新たにヌマ（新しき人）と名づけ、意気を失わぬようおのれを叱咤しつつ日々を過ごす。七年が過ぎる。ジョコミンは「黙想」に習った秘伝を息子に一つひとつ教

え、みずからもさらに三年間修業を積んだ末に、「第十三の変容」を達成する。すなわち自分を女に変え、若く豊饒なる女性となって、十六歳の若者を誘惑するのである。九か月後に双子が生まれる。男の子と女の子。この二人の子供から、「人間」はふたたびこの地に根を下ろすことになるであろう……。

ここで舞台はニューヨークに戻り、行方不明の息子をケプラー・ジュニアが懸命に探している。いかなる手掛かりも何ら実を結ばぬ日が続く。が、やがて、まったくの偶然から——この小説ではすべてが偶然によって起きるのだ——ケプラーはジャック・ムーンのたどった足跡を知り、さまざまな情報の断片を組み合わせて、息子を奪われたのは自分が父を殺したためであることを悟る。となれば、ユタへ戻る以外に道はない。いまや四十歳の身に砂漠の道行きはこたえるが、それでもケプラーは黙々と旅を続ける。二十年前に自分の父親を殺害した場所へ戻るかと思うと恐ろしくなってくるが、それも仕方がない。あそこへ行けば息子が見つかるのだ。最後の場面、空には満月がドラマチックに浮かぶ。ケプラーはいまや「人間」の部落のすぐそばまで来ていて、崖地にキャンプを張って夜を過ごしている。手にはライフルを抱え、何か動きがないかと見張っている。と、二十メートルと離れていないあたり、岩がいくつもかたまってつき出ている上に、一頭のコヨーテが月光にくっきり浮かび上がった姿が見える。人里離れた不毛の地にあって、恐怖にとり憑かれたケプラーは、とっさに何も考えずライフルをコヨーテに向け、引き金を引く。コヨーテは一発で斃れ、ケプラーは自分の腕の確かさに一人悦に入る。もちろん、たったいま自分の息子を殺してしまったことな

ど知るよしもない。立ち上がって、仕留めた動物のところまで歩いていく間もなく、三頭のコヨーテが闇のなかから彼に飛びかかる。身を護るすべもないまま、数分のあいだに彼の体はばらばらに食いちぎられてしまう。

こうして、バーバー唯一の文学的企ての成果たる『ケプラーの血』が終わる。書いた時点での年齢を考えるなら、あまり厳しく批判するのはフェアではあるまい。欠点はいくらでもあるし、やり過ぎのところも多い作品だが、僕にとってはバーバーの心理を知る上できわめて貴重な資料である。ほかのいかなる証拠よりも、若いころ胸に抱えていた葛藤を彼がどのように燃焼させたかをこの小説は明かしてくれる。まず彼は、父親が死んだという事実を受け入れたがっていない（したがってケプラーが「人間」に救出される）。だが死んでいないとすれば、家族のもとに帰ってこないのは許せない（ゆえにケプラー・ジュニアが父の心臓にナイフを突き刺す）。とはいえ、そのような殺人を考えること自体この上なく恐ろしいことであり、激しい自己嫌悪の念を生まずにはいない。誰であれ、それを考えた人間は罰せられねばならない。したがって、ケプラー・ジュニアも罰を受けるのだ（この小説のなかで彼は誰よりも無残な運命を課せられている）。この物語全体が、罪悪感と欲望の絡みあった、錯綜せるダンスにほかならない。欲望が罪悪感に転じ、その罪悪感の耐えがたさゆえ、今度はそれが、おのれの罪を償いたいという欲望に変わる。無情で苛酷な正義に屈したいという気持ちが生まれる。その後に学者となったバーバーが、『ケプラーの血』に出てくるのと同じさまざまな問題を研究することになったのも、決して偶然ではないと思う。ロアノークの

消えた植民地、インディアンと暮らした白人の証言、アメリカ西部の神話。そういったテーマをバーバーは歴史学者として扱ったわけだが、いかに綿密かつ学問的にそれらを論じようとも、そこにはつねに個人的な思い入れがひそんでいたのだ。理由は定かでなくとも、そうした問題を考えることは自分自身の人生の謎を掘り下げることにつながるはずだ——そんなひそかな確信のようなものが、そこにはあったのだ。

一九三九年の春、父親について新たな事実を知るチャンスが訪れたが、結果的には何ら収穫はなかった。当時コロンビア大学の三年生だったバーバーは、五月のなかばごろ、もしかしたらビクター伯父さんと会っていたかもしれない万博の日から一週間後に、クララ伯母から電話を受け、母親が睡眠中に亡くなったと知らされた。バーバーは朝一番の列車に乗ってロングアイランドに帰り、母を埋葬するにあたってのさまざまな試練に耐えた。葬式の手配、遺書の開封、弁護士や会計士との頭がおかしくなりそうな会話。母が最後の六か月間を過ごした養老院に支払いを済ませ、もろもろの書類にサインしながら、ときおり思わず涙がこみ上げてきた。葬式が終わると、バーバーは広い屋敷に泊まりに帰った。たぶんこれがこの家で過ごす最後の夜だ、と彼は悟った。家に残っているのはもうクララ伯母だけで、彼と一緒に語りあって夜を過ごすような元気は彼女にはとうていなかった。その日それまで何度も伯母に言った言葉を、彼は根気よくもう一度くり返した。伯母さんの好きなだけ、いつまでもこの家に住んでくれていいんですよ、と。彼女ももう一度彼の親切に礼を言い、背伸びして彼の頬にキスして、例によって、自分の部屋に隠したシェリー酒のもとに戻っていった。バ

ーバーの生まれたころには七人いた使用人も、いまでは一人だけになっていた。ハティ・ニューカムという名の、足の悪い黒人女性で、クララ伯母の食事を作るのが主たる仕事だったが、ときおり思い出したように掃除もやっていた。何年も前から、屋敷は崩壊しはじめていた。一九三四年に祖父が亡くなってからは庭も荒れ放題で、かつては花が咲き誇り芝生が整然と茂っていたところに、胸の高さまで伸びた陰気な雑草が乱雑に絡みあっていた。天井からは蜘蛛の糸が垂れ下がって、椅子はちょっと触れただけで埃がもうもうと舞い上がり、鼠たちが家のなかを狂ったように駆け回っていた。だがクララは、いつもほろ酔い加減でニヤニヤ笑っているクララは、何ひとつ気がついていなかった。もうずっと前からそんな具合だったのだ。バーバーもとっくの昔に匙を投げていた。どのみちこの家に住む気には決してなれないだろう。そしてクララも、いずれ夫のビンキーと同じように、アルコールによる死を遂げるだろう。そうなれば、屋根が崩れ落ちようが落ちまいが、バーバーにとっては同じことだった。

翌朝一階に降りていくと、クララ伯母は居間にいた。まだシェリーの最初の一杯を飲む時間ではなく（概して昼食前に栓を抜くことはなかった）、伯母と話をするとしたらいましかない。部屋に入ると、伯母は隅のカードテーブルに座って、雀のように小さな頭をかがめてソリティアをやっていた。取り立ててメロディーもない、まとまりのない歌を小声で口ずさんでいる。「空中ブランコに乗る男」だな、と彼は思いながら近づいていき、伯母のうしろに回ってその肩に手を置いた。ウールのショールの下、体はもう骨ばかりだった。

「赤の3を黒の4の上に」と彼はテーブルのカードを指さしながら言った。

自分のうかつさにちっちっと舌を鳴らしながら伯母は二つの山を合わせ、次のカードを表に返した。赤のキングだった。「ありがとうよ、ソル」と彼女は言った。「今日はどうも身が入らないんだよ。さっきからへまばっかりでね、やらなくてもいいようなずるをやっちまうんだ」。彼女は小さくくっくと笑い、やがてまたハミングをはじめた。

どう切り出したものかと思案しながら、パーパーはクララ伯母の真向かいの椅子に巨体を押し込んだ。おそらく大したことは聞き出せまい。が、といってほかに話を聞ける人もいないのだ。しばらくのあいだ、パーパーはそこに座ったまま伯母の顔をじっと見つめて、込み入った皺の網目や、頬にべったり塗った白粉や、まるで似合わない赤い口紅をしげしげと眺めた。哀れな、痛ましい姿だと思った。この家に嫁に来たのは決して楽なことではなかっただろう。伯母は長年、子供もないまま、パーパーの母の兄ピンキーと夫婦生活を送っていた。ピンキーは人はいいが頭の足りない女たらしで、伯母と結婚したのは一八八〇年代のことだった。手品師ルドルフォのマジックショーのアシスタントとして、プロビデンスのガリレオ劇場に出演していたクララを見染めて、一週間と経たないうちに結婚したのである。伯母が語る、舞台に立っていたころのとりとめのない思い出話を聞くのが、パーパーは前々から好きだった。家族のなかで最後に残ったのが自分とこの伯母の二人だと思うと、何だか奇妙な気分だった。最後のパーパーと、最後のウィーラー。下層の出の娘、おつむの弱い尻軽女、と祖母はいつも陰口を叩いていた。その美貌も三十年以上前に失われてしまっていた。そし

てもう一方はまさしく肥満居士、とめどなく太りつづける神童、おまけに両親は壮女に溺愛と来ている。いまこの瞬間ほど、クララ伯母さんに優しい気持ちを抱いたことはなかった。

「今夜ニューヨークに帰ります」と彼は言った。

「あたしのことなら心配要らないよ」と伯母はカードから顔も上げずに答えた。「ここで一人でやって行けるからね。いままでもずっとそうだったんだし」

「今夜帰ります」と彼は言った。「もう二度とこの家には戻ってこないつもりです」

クララ伯母は赤の6を黒の7の上に重ねて、黒のクイーンの行き場を探してテーブルを見回し、がっかりしたようにため息をつき、顔を上げてバーバーを見た。「ねえ、ソル」と彼女は言った。「そう仰々しく言わなくてもよかろうに」

「仰々しく言ってるつもりじゃありません。ただ、伯母さんとお会いするのもたぶんこれが最後だと思うんです」

クララ伯母はまだわかっていなかった。「そりゃお前もつらいだろうよ、何といっても母親を失くしたんだものね。でもね、気を落としちゃいけないよ。エリザベスはあの世に行けて幸せなんだよ。何せこの世じゃ苦しいことばかりだったからね、これでやっと安らかになれるんだよ」。伯母はそこで一呼吸置いて、しかるべき言葉を探した。「おかしなこと考えちゃいけないよ、お前」

「そういうことじゃないんです、伯母さん。問題はこの家なんです。もう僕は今後ここへ来る気になれないと思うんです」

「でもここはもうお前の家なんだよ。お前が持ち主なんだよ。なかにある物も全部お前のものなんだよ」

「だからといって、僕が持ってなけりゃならないってわけじゃないでしょう。いつでも好きなときに処分してしまっていいわけでしょう」

「だってソリー……お前昨日、この家は売らないって言ったじゃないか。約束したじゃないか」

「売りませんよ。でも誰かにあげてしまったっていい。そうでしょう？」

「同じことだよ。赤の他人が持ち主になるんだもの。どっちにしろあたしは追い出されて、どっか年寄り女でぎゅう詰めの部屋に放り込まれて死んじまうんだよ」

「伯母さんにあげれば別でしょう。そうすればずっとここにいられる」

「馬鹿なこと言うもんじゃないよ。こんな話が続いたら、あたしゃ心臓発作を起こしちまうよ」

「権利の譲渡は訳ありません。今日にでも弁護士に電話して、さっそく手続きをはじめてもらいましょう」

「だけどソリー……」

「たぶん絵は何枚かもらって行きます。それ以外は全部このままで構いません」

「いけないよ、そんなこと。どうしてだかよくわからないけどね、とにかくそんなのいけないよ、お前」

「ひとつだけ伯母さんにお願いがあるんです」とバーバーは相手の言葉を無視して言った。「きちんとした遺書を作って、家はハティ・ニューカムに遺してあげてほしいんです」

「うちのハティ・ニューカムのことかい？」

「そうです、うちのハティ・ニューカムです」

「でもソル、いいんだろうか？　だってハティは……その……わかるだろう、ハティは……」

「ハティは何なんです、伯母さん？」

「黒人女なんだよ。ハティは黒人女なんだよ」

「ハティさえよければ、伯母さんだってべつに不都合はないじゃありませんか」

「でも世間が何て言う？　崖の屋敷に黒人女が暮らしてる、きっとそう言うよ。お前だってよく知ってるだろう、この町で黒人といったら召使いだけなんだよ」

「関係ありませんよ、そんなこと。ハティは伯母さんのいちばんの仲よしじゃありませんか。僕が見る限り、唯一の友と言ってもいい。世間がどう言うか、なんて気にしてどうするんです？　この世で何より大切なのは、おのれの友に優しくあることじゃないですか」

甥が本気だということがやっとわかってくると、クララ伯母はくすくす笑い出した。彼の言葉によって、いままでの思考体系が一気に崩れ去ってしまったのだ。考えてもみなかったことが本当に可能なんだとわかってきて、伯母は何だかわくわくしている様子だった。「一つだけ気に入らないのは、ハティがここに移る前にあたしが死ななくちゃならないことだね

え」と伯母は言った。「どうせならこの目で見届けたいものだけどねえ」
「天国が本当に話どおりのものなら、大丈夫、見届けられますよ」
「だけどさっぱりわからないよ、どうしてお前がこんなことをしてくれるのか」
「わかって下さらなくていいんです。僕には僕なりの考えがあって、そのことで伯母さんをわずらわせるには及びません。ただちょっとその前に聞いておきたいことがあるんです。それが済んだら、話は決まりです」
「何だい、聞いておきたいことって？」
「昔のことです。過去の話です」
「ガリレオ劇場かい？」
「いえ、今日は違うんです。今日はちょっと別の話なんです」
「あ、そう」。クララ伯母は一瞬まごついて言葉を切った。「いやね、お前、昔からルドルフォの話が好きだったからさ。あたしが棺桶に入れられて鋸で二つに切られる話とかさ。ありゃあ大したもんだったよ。何てったってあれがいちばんだったね。覚えてるかい、お前？」
「もちろん覚えてます。でも今日はその話じゃないんです」
「好きにするがいいさ。昔といったっていろいろあるからね。あたしくらいの歳になればなおさらさ」
「父のことを考えていたんです」
「ああ、お前の父さんね。そうだねえ、それもずいぶん昔の話だねえ。うん。もっと昔の話

もあるけど、あれだって十分昔だねえ」
「伯母さんとビンキー伯父さんがこの家に移っていらしたのは、父が行方不明になったあとですよね。ですが、父を探しにいった捜索隊について何かご記憶かと思って」
「手配したのは全部お前のお祖父様だったからねえ。それともう一人、ミスター・何とか」
「ミスター・バーン？」
「そうそう、ミスター・バーン、その人の息子も一緒にいなくなっちまったんだよ。たしか半年ばかり探したんだけどね、何も見つからなかった。うちのビンキーもしばらく一緒に探したんだ。妙な話をいっぱい仕入れて帰ってきたよ。二人がインディアンに殺されたって説もビンキーが言い出したんだよ」
「でもべつに根拠はなかったんでしょう？」
「何せほら話の得意な人だったからねえ。あの人の言うことになんか、これっぽちの真実もありゃしないよ」
「で、僕の母は？　母も西部に出かけたんですか？」
「お前の母さん？　いやいや、エリザベスはずっとここにいたよ。とてもじゃないけど……何て言ったらいいかね……旅に出られるような具合じゃなかったからね」
「お腹に子供がいたから？」
「まあ、もちろんそれもあったね」
「あとは何があったんです？」

「頭の具合だよ。そのころからあんまり調子がよくなかったんだ」

「もうすでに気が触れていたんですか？」

「何て言うか、昔から気分の移り変わりが激しかったからねえ。むすっと陰気な顔してるかと思ったら、もう次の瞬間にはケラケラ笑って歌ったりね。ずっと昔、はじめて会ったころからそうだったよ。あのころはみんな、神経が張ってるって言い方してたね」

「悪化したのはいつごろです？」

「お前の父さんが行方不明になったあとだよ」

「じわじわ悪くなっていったんですか、それとも一気に？」

「一気にだよ、ソル。はたで見ていてもぞっとしたよ」

「ご覧になったんですか？」

「この目ではっきり見たさ。一部始終をね。あればかりは忘れようったって忘れられるもんじゃない」

「何があったんです？」

「あの晩お前が……いや、その……ある晩にね、いつだか覚えてないけど……冬のある晩のことだったよ」

「どの晩のことです、クララ伯母さん？」

「雪が降っていたよ。外は寒くて、ひどい吹雪の晩だったよ。お医者さんがなかなか来られなくてね、それで覚えてるんだ」

「一月のある晩のこと、そうでしょう？」
「だったかもしれないねえ。一月にはよく雪が降るからねえ。でも何月だったか、はっきり思い出せないよ」
「一月十一日、そうでしょう？　僕が生まれた晩だ」
「ねえソル、もう勘弁しとくれよ。ずっと昔の話じゃないか。いまさら何を言っても関係ないだろうに」
「僕には大ありなんです、クララ伯母さん。そしてこの話を聞けるのは伯母さんしかいないんです。わかりますか？　残っているのはあなた一人なんですよ、クララ伯母さん」
「大声を出さなくたっていいだろう。お前の言ってることはちゃんと聞こえてますよ、ソロモン。そんな乱暴な言い方でおどかすもんじゃないよ」
「おどかしてなんかいません。質問をしようとしてるだけです」
「もう答えはわかってるじゃないか。ついさっきあたしが口を滑らしちまったからね。あんなこと言うんじゃなかった、悪かったよ」
「謝ることなんかありません。大事なのは真実を言っていただくことです。それが何より大事なんです」
「ただ、何て言うか、その……つまり……頼むからあたしの作り話だなんて思わないでおくれよ。あたしはね、あの晩お前の母さんと一緒に部屋にいたんだ。モリー・シャープとあたしとでね、お医者様の来るのを待ってたんだ。エリザベスと来たらものすごい声でわめき立

てるし、ばたばた暴れ回るし、本当にもう、家が壊れちまうかと思ったよ」

「何をわめいていたんです？」

「恐ろしい言葉だったよ。いま考えてもぞっとするよ」

「話して下さい」

「『この子に殺される（ヒーズ・トライング・トゥ・キル・ミー）』って何度も叫んだんだよ。『この子に殺される。出しちゃ駄目（だめ）』」

「僕のことですね？」

「ああ、お腹の赤ん坊のことさ。どうして男の子とわかったのか、とにかくそう言うんだよ。もうそろそろ生まれるっていうのに、お医者様はまだ来なかった。モリーとあたしとで何とか横にならせようと、いろいろなだめたりしてみたんだけどね、全然言うことを聞いてくれないんだ。『脚を開きなさいよ、痛みが和らぐから』ってあたしたちは言ったんだ。でもまるっきりお手上げさ。いったいどこからあんな力が湧（わ）いてきたんだろうねえ。モリーと二人でいくら押さえつけても、振り払って部屋から出ていこうとするのさ、あの恐ろしい言葉を何度も何度もわめきながらね。『この子に殺される。出しちゃ駄目』。ようやっと二人でベッドにねじ伏せたんだ——もっともほとんどモリー一人でやったみたいなものさ、あたしは横からちょっと手を貸した程度だよ。モリーって人はほんとに牛みたいにたくましかったよ。だけど横にならせてはみたものの、今度は脚を開こうとしないんだ。『出してたまるもんですか』そう叫ぶんだよ。『このなかで窒息させてやる。化け物の子、化け物の子。殺すまでは出すもんか』。何とかして脚をこじ開けようにも、身をよじらせて逃げちまう。おまけに

CamScannerでスキャン

両手をばたばた振り回して暴れるもんだから、しまいにはモリーが仕方なく顔をひっぱたいたんだ。ばしん、ばしん、ばしん、力いっぱいひっぱたいてたよ。そうしたらエリザベスは心底怒り狂っちまって、あとはもう自分が赤ん坊になったみたいにぎゃあぎゃあわめき散らすだけさ。顔を真赤にしてね、死者の眠りを覚まそうとするみたいにものすごい声を立てるんだよ」

「何てこった」

「あんな恐ろしい眺(なが)めは見たことがないよ。だからお前にも話したくなかったんだ」

「でも結局僕は出てきたわけですね」

「お前は誰よりも大きくて、誰よりも丈夫な赤ん坊だったよ。五キロはありますね、とお医者様も言っていた。とびっきりの巨人だよ。あたしは思うんだけどね、もしかりにお前があんなに大きくなかったら、きっと生まれていなかっただろうよ。そのことは覚えとくといい。体が大きかったからこそ、お前はこの世に生まれてこれたんだよ」

「それで、僕の母は？」

「お医者様がやっと来てね――ボウルズ先生だよ、六、七年前に自動車事故で亡(な)くなった人さ――エリザベスに注射を打って眠らせた。それで翌日までずっと眠りっぱなしでね、目が覚めたときには何ひとつ覚えていなかった。前の晩のことだけじゃないよ。何もかもさ。過去二十年間に自分の身に起きたことを一切合財忘れちまったんだ。モリーとあたしとでお前を抱いていってね、母と子を引き合わせたら、お前のことを自分の弟だと思い込むんだよ。

気味悪いったらなかったよ、ソル。すっかり子供に戻っちまって、自分が誰かもわからないんだからねえ」

　バーバーは次の質問をしようと口を開きかけた。と、そのとたん、廊下のグランドファーザー・クロックが鐘を打ちはじめた。クララ伯母さんはさっと首を傾けて耳を澄まし、指で時刻を数えた。鐘が鳴りやんだときには十二まで数え上げていた。切実な、ほとんど歎願するような表情が伯母の顔に浮かんだ。「正午だよ」と彼女はきっぱり言った。「ハティを待たせちゃ悪いよ」

「もう昼御飯の時間ですか？」

「どうやらそのようだよ」と伯母は言いながら椅子から立ち上がった。「少しは食べて力をつけなくっちゃいけないよ」

「先に行ってください、クララ伯母さん。僕もすぐ行きますから」

　伯母が部屋を出ていくのを見守りながら、会話が一挙に終わってしまったことをバーバーは悟った。それだけではない。会話はもう二度と再開しないだろう。彼は一度に手の内をさらしてしまったのであり、伯母を買収しようにももう家はない。もうこれ以上、何かで釣って話をさせることはできないのだ。

　彼はテーブルの上のカードを集めて、シャッフルしてから、ソリティアをはじめた。ソリーの涙、と彼はわが名の駄洒落を胸のうちで呟きながら、勝つまでやろうと心に決めた。結局席を立ったのは一時間以上あとだった。もう昼食時間は過ぎていた。でもそれは大した

問題ではなかった。一生に一度、このときばかりはバーバーも空腹ではなかったのだ。

バーバーがこの話を僕にしてくれたとき、我々はホテルのコーヒーショップで朝食を取っていた。日曜の朝で、残された時間はごくわずかだった。最後の一杯のコーヒーを飲み終え、エレベーターに乗ってバーバーの荷物を取りにいく最中に、話はようやく終わりにたどり着いたのである。クララ伯母さんは一九四三年に亡くなった、とバーバーは言った。ハティ・ニューカムは崖の屋敷をめでたく相続し、崩壊と壮麗さの錯綜する大邸宅で四〇年代を過ごした。いくつもある部屋にそれぞれ子や孫を住まわせ、大家族の家長として君臨した。一九五一年に彼女が亡くなると、娘の夫フレッド・ロビンソンが地所をカバルカント不動産に売った。古い屋敷はただちに取り壊された。一年半もすると、土地は半エーカーずつ二十の敷地に区切られ、それぞれの敷地に、たがいにそっくり同じの、中二階のある真新しい建売住宅が並んでいた。

「結果的にそうなるとわかっていたとしても」と僕は訊ねた。「やっぱり家をあげてしまったと思いますか？」

「もちろん」消えてしまった葉巻にマッチで火をつけ、煙をふうっと吹き上げながらバーバーは答えた。「ああしていれば、とか思ったことは一度もないね。人間、あれほど贅沢な真似ができるチャンスなんてそうめったにあるもんじゃない。その機会を逃さなくてよかった

と思っているよ。考えてみれば、ハティ・ニューカムにあの家を贈ったことこそ、私の生涯でいちばん賢明な行ないだったんじゃないかな」

僕たちはもうホテルの前に出て、ドアマンがタクシーを拾ってくれるのを待っていた。さよならを言う時が来ると、不思議なことにバーバーは涙ぐんでしまった。きっと抑えていた感情がいまになって湧き上がってきたのだろう、と僕は考えた。何しろ彼にとっては途方もない週末だったのだ。だがもちろん、バーバーの胸のうちは僕には知るよしもなかった。彼は自分の息子に別れを告げていたのであり、それに対し僕は、単に二日前に知りあった新たな知人を見送っているだけだったのだ。タクシーが彼の前で止まり、メーターがかちかちとせわしなくリズムを刻むなかで、ドアマンがトランクに荷物を入れた。バーバーは僕を抱擁しようとするかのように体を動かしかけたが、最後の瞬間に思いとどまって、僕の両肩にぎこちなく手を置いて、ぎゅっとつかんだ。

「この話をしたのは君がはじめてだ」と彼は言った。「真剣に聞いてくれてありがとう。何だかまるで……何と言うかな……何だか私たちのあいだに、絆ができたみたいな気がするんだよ」

「忘れがたい週末になりましたよね」と僕は言った。

「うん、その通り。忘れがたい週末。あらゆる週末に終止符を打つ週末」

やがてバーバーはみずからの巨体をタクシーのなかに押し込み、後部席から親指を上げて僕に挨拶を送り、車の波のなかに消えていった。そのとき僕は、もう一度彼に会うことにな

るとは思ってもいなかった。我々はたがいに探求すべき領域をすべて探求しつくしてしまったのであり、用事はもう済んだのだと思っていた。次の週に『ケプラーの血』の原稿が届いたときも、僕としてはそれを、はじまった交友の続きというよりは、その締めくくりとして考えた。我々の出会いの幕を閉じる最後のささやかなファンファーレ。原稿を送ると約束したバーバーが、律儀にその約束を果たしただけの話と思ったのである。僕は翌日に礼状を書いて、いろいろお話できて楽しかったです、とくり返し述べた。それで彼とのつながりもおしまいになった——永久に、とそのときの僕は思っていた。

チャイナタウンでの楽園は依然として続いていた。キティはダンスと勉強に励み、僕は文章を書き散歩をした。コロンブス・デーが過ぎ、感謝祭が過ぎ、クリスマスと大晦日が過ぎた。やがて、一月なかばのある日に電話が鳴った。バーバーからだった。どこからかけてるんですか、と訊くと、ニューヨークからだ、と答えが返ってきた。声を聞いただけで、ひどく上機嫌で、興奮を抑えきれずにいるのがわかった。

「そちらにお時間があれば、またお会いしたいですね」と僕は言った。

「うん、ぜひそうしたいと思っているよ。でも今回は、私のためにわざわざ君のスケジュールを動かすには及ばない。しばらくここにいるつもりだから」

「ずいぶん冬休みの長い大学にお勤めなんですね」

「実はまた休暇を取ったのさ。九月まで休めるんだ。それでしばらくニューヨークで暮らしてみようと思ってね。もう十丁目にアパートを借りたんだ。五番街と六番街のあいだだよ」

「あのへんは気持ちのいいところですよね。僕もよく散歩で通ります」

「不動産屋の広告でいう、閑静な住宅地ってやつだね。昨晩越してきたばかりだが、とても気に入っているよ。キティも一緒に、ぜひ遊びにきてくれたまえ」

「喜んで。日にちをおっしゃって下さい。いつでも伺います」

「結構。では週末にもう一度電話するよ。そのころにはもう引越しの整理もついてるだろうからね。ひとつ君に相談したいことがあるんだ。脳味噌をひっかき回されるのを覚悟してきてくれたまえよ」

「ひっかき回しても大したものは出てこないと思いますがね。でも出てきたものはどうぞ御自由にお使い下さい」

それから三、四日して、キティと僕はバーバーのアパートで夕食を御馳走になり、その後もたびたび彼と会うようになった。バーバーのほうから、何かと声をかけてくれたのだ。かりに何か裏の動機があったとしても、僕にもキティにもそれは見えてこなかった。レストランに連れていってくれたり、映画やコンサートに招待してくれたり、日曜に郊外にドライブに誘ってくれたりする上に、とても優しくて気持ちのいい人だったから、断るなんて思いもよらなかった。どこへ行くにもとんでもない帽子をかぶって来て、つぎつぎに冗談を飛ばし、人前で自分が騒動を引き起こしても平然としているバーバーは、僕らを養子にでもするみた

いに、その巨体の傘下に入れてくれた。キティも僕も両親がいなかったから、それは三者誰にとっても願ったり叶ったりの関係だった。

僕らがはじめてアパートに訪ねていった夜、エフィングの遺産の整理が済んだとバーバーは告げた。私にも相当な金が入ってきてね、給料に頼らず暮らせるなんてあとにも先にもいまだけだろうよ。うまく行けば二、三年は教えなくて済むかもしれない。「思いっきり生きるチャンスなんだ」と彼は言った。「めいっぱい活用しなくっちゃね」

「僕はてっきり、あなたは一生働かずに済むのかと思いました」と僕は言った。「エフィングは大金持ちだったじゃないですか」

「そうも行かんのさ。相続税や固定資産税があるし、弁護士への支払いもあるし、ほかにも聞いたこともないような費用があれこれかかる。それでずいぶん持っていかれた。それにね、そもそもはじめの額にしても、思っていたよりずっと少なかったんだ」

「何百万ドル単位じゃなかったんですか？」

「とてもとても。何万ドル単位だね、せいぜい。結局ミセス・ヒュームも私も、手にしたのはだいたい四万六千ドルだ」

「やれやれ、僕もお人好しだな」と僕は言った。「エフィングときたら、ニューヨーク一のお金持ちみたいな話っぷりでしたよ」

「うん、たしかに話を誇張しがちな人だったようだね。でも責めるつもりはないよ。何といってもこっちは、一度も会ったことのない人間から四万六千ドルを相続したんだからね。生

まれてこのかた見たこともない額さ。棚(たな)からぼた餅(もち)もいいところ、思いもよらない幸運さ」

バーバーは三年前から、トマス・ハリオットに関する本を書いていた。普通なら書き上げるまであと二年くらいかかるところだが、ほかの仕事をする必要がなくなったいま、うまくすればあと六、七か月、夏のなかばにも完成しそうだった。そこで電話でも触れた相談事なんだが、と彼は言った。まだ私自身、二週間ばかり前から何となく漠然(ばくぜん)と頭にある程度なんだが、真剣に考える前に君の意見を聞きたいと思ってね。すぐという話じゃない、実行に移すとしてもハリオットの本が済んでからだ。でももしいずれ本当に実践するとなれば、かなり前からじっくり計画を練っておく必要があると思うんだ。「要するに問題は一点に尽きると思う」と彼は言った。「べつに君に、全面的なイエスかノーを求めているわけじゃない。でもとにかく、私が信頼できるのは君の意見だけなんだよ」

僕らはもう夕食を終えて、三人で食卓に座ったまま、コニャックを飲みながら、バーバーが最近カナダ旅行からこっそり持ち帰ったキューバ製の葉巻をみんなで喫(す)っていた。三人とも少し酔っていたし、時の勢いということもあって、バーバーが差し出した巨大なチャーチル葉巻をキティも受け取ったのだ。チャイナドレスを着て座った彼女が神妙な顔で煙をくゆらせている姿はなかなか愉快だったが、愉快といえばバーバーも相当なものだった。ディナーにふさわしいお洒落をと、赤紫のスモーキングジャケットにトルコ帽といういで立ちだったのである。

「僕しか信頼できないということは」と僕は言った。「あなたのお父さんに関係した話です

ね」

「そう、その通り、まさにそうだ」。答えに読点を打つかのように、バーバーは首をうしろに傾け、完璧な煙の輪を吹き上げた。キティと僕は顔を上げ、Oの字がゆらゆらと目の前を過ぎていき、次第に形を失っていくのをほれぼれと眺めていた。しばし間を置いてから、バーバーはまる一オクターブ声を下げて言った。「このあいだから洞穴のことを考えていてね」

「洞穴ねえ」と僕は言った。「砂漠にひそむ謎の洞穴、ですね」

「考えるのをやめようと思ってもやめられない。頭のなかでいつまで経っても鳴りやまない昔の歌みたいなんだ」

「昔の歌。昔の物語。そういうのって絶対追い出せませんよ。でも、そもそも洞穴があったってことがどうしてわかるんです？」

「まさにその点を君に訊こうと思っていたのさ。話を聞いたのは君だからね。どう思う、MS？　父の話は真実だったんだろうか？」

僕が答えをまとめる間もなく、キティが片肱をついて身を乗り出し、左を向いて僕を見て、右を向いてバーバーを見てから、この複雑な問題を二つのセンテンスで要約してみせた。

「もちろん真実だったわ」と彼女は言った。「事実はときに違っていたかもしれないけど、とにかく真実だったわ」

「奥の深い答えだ」とバーバーは言った。「明らかに、それ以外納得のいく答えはありえない」

「どうやらそのようですね」と僕も言った。「かりに事実として洞穴はなかったとしても、洞穴の体験はあった。要はどこまで話を文字どおりに受け取るかですね」

「だとすれば」とバーバーは続けた。「質問をこう言い直そう。確信を持つのが無理だとすれば、いちかばちか賭けてみる価値がどのくらいあると思うかね？」

「いちかばちか何を賭けるんです？」と僕は訊ねた。

「時間と労力をよ」とキティが言った。

「まだわからないな」

「この人は洞穴を見つけたいのよ」とキティは僕に言った。「そうでしょう、ソル？　出かけていって探してみたいのよね」

「君は本当に勘がいい」とバーバーはキティに言った。「まさしくその通り。ぜひともそうしてみたい。もし洞穴が存在する可能性があるのなら、見つけるためには何だってする気だよ」

「可能性はありますよ」と僕は言った。「あんまり大きな可能性じゃないかもしれないけど、だからといってあきらめる必要はないでしょうね」

「一人じゃ無理よ」とキティは言った。「危険すぎるわ」

「そりゃそうだ」と僕は言った。「山登りは一人でするものじゃない」

「特に太った人間はね」とバーバーは言った。「だがそういう細かい点はあとから考えればいい。大事なのは、やってみるべきだと君が思うかどうかということだ。そう思うんだ

CamScannerでスキャン

たい」

「みんなで一緒になればいいわ」とキティが言った。「MSと私とであなたの偵察隊になるわ」

「それで行こう」と僕は言った。頭のなかに突然、バックスキンの服に身を固めた僕自身が、パロミノ馬の背にまたがって地平線を見渡している姿が浮かんだ。「やろうじゃありませんか。見つけましょうよ、洞穴を」

正直な話、僕はこの計画をまるで本気に受け止めていなかった。夜遅くに酒の勢いで出てきた、翌朝になれば忘れてしまうたぐいの思いつきにすぎないと思っていた。たしかに僕らは、その後も顔を合わせるたびに「探検」のことを話しあったが、僕としてはほんの冗談のつもりだった。地図や写真を眺めたり、旅のルートや天候を検討したりするのは楽しかった。でもとりあえず話を合わせることと、本気で信じることとはまるで違う。ユタははるか遠くであり、計画が実行される見込みはごくわずかであるように思えた。かりにバーバーは本気だとしても、実現の望みがあるとは僕には思えなかった。二月のある日曜の午後、バークシャーの森を歩くバーバーの姿を見ていると、僕の疑念はいっそう深まった。とにかくどう見ても太りすぎだし、足元は何とも危なっかしく、持久力も救いがたく足りなくて、十分も歩くと立ちどまって一息つかねばならないのだ。顔を真赤にして、手近な切り株にどさっと腰を下ろし、歩いていた時間と同じくらいのあいだそのまま座り込んでいる。巨大な胸郭は上下に大きく揺れ、房つきのベレー帽からは、まるで頭部が溶けかけの氷塊と化したかのよう

に汗がぽたぽたしたたり落ちている。マサチューセッツのなだらかな丘でもこの有様なのに、いったいどうやってユタの大峡谷に立ち向かうつもりなのか？　いや、やっぱり「探検」は冗談なのだ。いささか風変わりな願望にすぎないのだ。それが会話の領域にとどまっているかぎり、何も心配はない。でも万一バーバーが本当に行くようなそぶりを示しはじめたら、説得してやめさせるのが僕らの務めだ――キティと僕はそう思った。

はじめは乗り気でなかった僕が、結局は一人で洞穴を探しにいくことになったのだから皮肉なものだ。探検の相談をはじめてからわずか八か月後のことだった。けれどそのあいだに実にいろんなことが起きて、いろんなものがめちゃめちゃに壊れてしまっていた。僕がはじめはどう思っていたかなんて、どうでもいいことになってしまっていた。僕は行きたかったから行ったのではない。行くしかないから行ったのだ。事情がすっかり変わってしまって、行かないという選択はもはやありえなかったのだ。

自分が妊娠したのをキティが知ったのは三月の末だった。そして六月のはじめには僕はもう彼女を失っていた。僕らの生活はほんの数週間のあいだにばらばらに飛び散ってしまった。もはや修復は不可能であることを思い知ったとき、僕はまるで心臓をえぐり取られたような気持ちだった。それまでキティと僕は、ほとんど超自然的な調和のなかで暮らしていた。そういう生活を続ければ続けるほど、僕らのあいだに何か邪魔が入り込む恐れなどますますあ

りえないように思えた。もしかりに僕らの関係にもう少し戦闘的な要素があって、喧嘩をしたり皿を投げつけあったりしていたなら、ひょっとすると危機に対してもそれなりの心構えができていたかもしれない。だが現実には、妊娠は大砲の玉のように僕らの小さな池に落ちてきた。その衝撃に身構える間もないうちに、ボートはひっくり返され、僕らは死に物狂いで泳いでいたのだ。

愛しあっていないということでは決してなかった。いさかいがどんなに激しく、涙に満ちたときでも、僕らは絶対に、自分たちのあいだの絆を否定したりはしなかった。事実を偽ったり、たがいの気持ちが変わってしまったようなふりを装ったりもしなかった。僕たちはただ、もはや同じ言語を話さなくなってしまっていたのだ。キティにしてみれば、愛とは僕たち二人のことだった。それがすべてだった。そのなかに子供が入り込む余地はなかった。だから僕らがいかなる決断を下すにせよ、それはひとえに、僕らが自分たち二人のために何を望むかにかかっていた。妊娠したのは自分だったものの、彼女にとって赤ん坊とはひとつの抽象にすぎなかった。すでに存在を開始している生命というよりは、未来の生へ向けての仮説でしかない、生まれるまでは存在しない何ものかだった。けれども、僕の目から見れば、お腹に赤ん坊がいるとキティに告げられた時点から、それはすでに存在しはじめていた。たとえ親指程度の大きさしかなくても、それはひとりの人間であり、避けがたい一個の現実だった。中絶の手段に訴えるのは人殺しと同じだと僕には思えたのである。

理は全面的にキティの側にあった。それは僕にもわかっていた。でもわかっていたところ

で何の足しにもならなかった。僕は筋の通らぬ頑迷さのなかにとじこもり、自分の感情の理不尽さに我ながら愕然としながらも、それをどうすることもできなかった。私はまだ母親になるには若すぎるのよ、とキティは何度も言った。僕としてもそれを正当な発言として認めはしたものの、一歩も譲るまいという気持ちは少しも動かなかった。僕ら二人の母親だっていまの君くらいの歳に僕らを生んだじゃないか、と僕はまるで無関係な二つの状況を強引に結びつけて言い返した。こうして僕らは一気に問題の核心と向きあうことになった。私たちの母親はそれでよかったのよ、とキティは言った。でも私はダンスを続けたいのよ。子供を育てながらそんなことできるわけないでしょう？　すると僕は、さも偉そうな調子で、それなら僕が育ててやるさ、と答えた。無理よ、と彼女は言った。生まれ立ての赤ん坊から母親を奪うことなんてできないわ。子供を育てるというのは大変な責任なのよ、真剣に考えなくちゃいけないのよ。そりゃあ私だっていずれ子供は欲しいわ、私たち二人で何人も子供を育てたいと思うわ。でもいまはまだその時期じゃないのよ。まだ私にはその準備ができていないのよ。だけどもうその時期が来たんだよ、と僕は言った。好むと好まざるとにかかわらず、僕たちは赤ん坊を作ってしまったんだよ。話がここまで来るたびに、僕の石頭ぶりにこらえ切れなくなったキティは、決まって泣き出すのだった。

彼女の涙を見るのは僕だってつらかった。でもその涙でさえ僕の気持ちを変えはしなかった。泣いているキティの姿を見た僕は、もうあきらめろ、彼女の肩に手をまわして、君の言う通りにしようと言ってやるんだ、そう自分に言い聞かせた。でも優しくなろうとすればす

るほど、僕はますます依怙地になっていった。僕は父親になりたかった。その見込みが開けたというのに、捨ててしまうと思うと耐えられなかった。その赤ん坊は、僕が子供のころ味わった寂しさを帳消しにするチャンスなのだ。家族という、自分より大きなものを作り上げる絶好の機会なのだ。それまではそんな欲望をまるで自覚していなかったせいもあって、いざそれが湧いてくると、激しい、言葉にならない切ない思いがどっとあふれ出てきた。僕の母親がもし分別を働かせていたら僕はこの世に生まれてこなかったんだぜ、と僕はキティに向かって叫んだ。そして、彼女が言い返す間も与えずに、もし君が僕の赤ん坊を殺せば僕も一緒に殺すことになるだろうよ、と言った。

時間は迫ってきていた。あと二、三週間のうちに僕らは決断せねばならなかった。圧迫感は日に日に増していった。ほかには何ひとつ話題もなく、僕らはたえずこの問題を議論しあった。夜中まで押し問答を続け、疲れはてた心でたがいの裏切りをなじり合いながら、僕たちの幸福が言葉の大海のなかに溶けてゆくのをなすすべもなく眺めていた。いくら時間を費やしても、二人ともそれぞれの立場から一歩も動こうとしなかった。妊娠しているのはキティのほうである。だからこれはあくまで僕がキティを説得するという関係であって、その逆ではない。結局、もう望みはないことを悟った僕は、わかったよ、君の好きなようにするがいいさ、と言った。もうそれ以上彼女を苦しめたいとは思わなかった。そしてほとんど息もつがずに、手術の費用は僕が払うよ、と言い足した。

当時はいまと法律が違っていて、女性が合法的に中絶手術を受けるには、出産が母親の生

命に危険を及ぼしうることを医師に証明してもらわねばならなかった。ニューヨーク州ではこの法律の運用は比較的柔軟で、その危険のなかには「精神的危険の可能性」（要するに赤ん坊が生まれたら母親が自殺する恐れがあるということ）も含まれていたから、精神科医の診断書でも、内科医のものと同じ効力を与えられていた。キティは肉体的には申し分なく健康だったし、非合法の中絶を受けることには僕が反対だったから――怪しげな非合法中絶なんて考えるだけでぞっとした――残った道はただひとつ、こちらの望みどおりの診断書を書いてくれる精神科医を探すことだった。やがて医者は見つかったが、安くはなかった。これに聖ルカ病院で受けた中絶手術自体の費用も加わって、結局僕は自分の子供を葬り去るために数千ドルを費やすことになった。金はふたたびゼロに近くなった。そして、病院でキティの枕元に座り、血の気も失せたひどく苦しげな表情を見ていると、何もかもが失われてしまった気がしてならなかった。僕の人生すべてを奪われたような思いだった。

　僕らは翌朝チャイナタウンに帰った。でももう物事は二度と元に戻らなかった。忌まわしい出来事をいずれは忘れてしまえるものと、僕たちは二人とも無理して信じ込んでいた。でもいざ元の生活に帰ってみると、もうその生活がなくなってしまっていることを僕らは思い知った。何週間も続いたみじめな議論や口喧嘩のあと、今度は二人とも黙りこくってしまった。たがいの顔を見るのも怖がっているような重苦しい雰囲気だった。中絶はキティにとって予想以上にこたえていた。正しい選択だったんだという確信はあったものの、すべきでないことをしてしまったのではという迷いを彼女は拭い切れずにいた。つらい経験に疲れはて、

CamScannerでスキャン

すっかり元気をなくしてしまい、あたかも喪に服すかのように毎日部屋でふさぎ込んでいた。慰めてやるべきだということは僕もわかっていた。でも僕には、自分の抱えている傷心を乗り越える力さえ出てこなかった。僕はただそこにじっとして、彼女が苦しむのを眺めていた。あるとき僕は、自分がそれを楽しんでいることに気がついた。キティがおのれの選択に代償を払うことを僕は喜んでいたのだ。たぶんそう気づいた時が最悪の瞬間だったと思う。自分のなかの醜さと残酷さを思い知った僕は、たまらなく自分が嫌になった。もうこれ以上やって行けなかった。自分という人間に耐えられなかった。キティを見るたびに、僕には自分の卑しい意気地なさしか目に入らなかった。怪物となり果てた僕自身のおぞましい姿しか見えてこなかった。

しばらくここを離れていろんなことを整理してみたいんだ、と僕はキティに言った。でもそれは要するに、本当のことを告げる勇気がなかったからにすぎない。キティはわかっていた。言葉で聞かなくても、ちゃんと見抜いていた。翌朝、荷物をまとめて出ていく支度をしている僕に、お願いだから行かないでと訴えた。膝までついて、一緒にいてちょうだい、と頼み込んだ。涙に濡れた顔がくしゃくしゃに歪んでいた。でももうそのときの僕は、木のかたまりと化していた。何ものも僕を止めることはできなかった。最後の千ドルをテーブルの上に置いて、僕がいないあいだに使ってくれとキティに言った。そして僕は部屋を出た。表通りに降り立ったころには、僕はもうしくしく泣き出していた。

7

僕は春のあいだバーバーのアパートに居候（いそうろう）させてもらった。家賃の一部を負担すると言ってもバーバーは耳を貸さなかったが、どのみち財布はほとんど空になっていたので、まもなく僕はアルバイトをはじめた。夜は居間のソファで眠り、毎朝六時半に起きて、ささやかな運送業をやっている知りあいを手伝って一日じゅう家具を抱えて階段を上り下りした。味気ない仕事だったが、とにかくへとへとに疲れることは間違いなく、頭のなかを空っぽにすることはできた。でもそれもはじめのうちだけだった。体が慣れてくると、まずぐでんぐでんに酔っ払ってからでないと眠れなくなってしまった。午前零時ごろまではバーバーもつきあってくれて、一緒に話をしたりしていたが、そのあと一人で居間に残されると、明け方まで天井と睨（にら）めっこしているか、飲んだくれて眠るか、道は二つしかなかった。ようやく目を閉じられたころには、たいていワインが一本空いていた。

バーバーはとても親切にしてくれた。限りない思いやりと同情をもって僕に接してくれた。でも僕はまったく救いがたい状態に堕（お）ちてしまっていて、彼がそこにいることさえろくに意

CamScannerでスキャン

識していなかった。僕にとってリアルな人間はキティ一人だった。彼女がいないんだという思いが、ほとんど手で触れられるほどの実感をもってのしかかり、一瞬も力を緩めず僕を圧迫した。ほかのことは何ひとつ考えられなかった。どの夜も同じ渇きとともにはじまった。もう一度彼女に触れられたいと焦がれる、息の詰まるような疼き。それを意識が受け止める間もないうちに、激しい痺れが体内を駆けめぐるのを僕は感じた。体を作り上げているもろもろの細胞組織が、いまにも爆発してしまいそうな気がした。それはこの上なく急激な、絶対的な欠乏感だった。キティの体は僕の体の一部だった。その体がなくなったいま、僕はもう自分を自分として感じることができなかった。文字どおり自分の一部を切断された思いだった。

疼きが過ぎ去ると、今度はいろんなイメージが頭のなかを飛び交いはじめた。僕に触れようと伸びてくるキティの両手。むき出しになった彼女の背中や肩。尻の曲線。ベッドの縁に腰かけてパンティをはくときの、きゅっと縮まった滑らかな腹。それらの像を追い払うことは不可能だった。一つ現われたと思う間もなく次の像が生み落とされ、僕たち二人の暮らしのなかのごくささやかな、いちばん親密な細部をよみがえらせた。僕たちの幸福を思い出すたびに、僕は胸に痛みを感じずにいられなかった。でも僕は執拗にその痛みを追い求めた。それによっていまの自分がどれほど打撃を受けようが、知ったことではなかった。僕は毎晩、受話器を取れ、彼女に電話するんだ、と自分に言い聞かせた。そして僕は毎晩その誘惑と戦った。僕のなかにある自己嫌悪の念を総動員して、それを実行しようとしている僕自身を阻

止した。そんなふうに二週間も自分に拷問を加えていると、まるで自分の体に火がついたような気がしてきた。

困りはてたのはバーバーである。何かひどいことが起きたのはわかっても、それが何なのか、キティも僕も彼に打ち明けようとしなかったのだ。はじめ彼は仲介役を買って出て、僕たち一方と話をしてはその内容をもう一方に伝えてくれた。でもそうやって何度も行ったり来たりしても、成果はいっこうに挙がらなかった。僕らから秘密を聞き出そうと彼が試みるたびに、僕らはそれぞれ同じ答えをした——自分からは言えない、向こうに聞いてくれ。キティと僕がいまも愛しあっていることはバーバーも疑っていなかった。なのに僕らが何もしようとしないので、彼はとまどい、途方に暮れてしまった。キティは君に戻ってきてほしがっている、でも君はもう戻ってこないと思っているようだよ、とバーバーは僕に何度も言った。戻れませんよ、と僕は答えた。僕だってそれを何より望んでいます。でもそうするわけには行かないんです、と。最後の手段として、バーバーは我々二人を同時に夕食に招くという戦術に出た（もちろんもう一人が来ることはどちらにも知らせずに）。ところが僕がレストランに入っていくところをキティが目撃してしまったために、計画もフイになってしまった。彼女があと二秒遅く四つ角を曲がっていたら、もしかしたらうまく行ったかもしれない。だが現実には、とにかくキティは罠を見抜いてしまった。店に入ってバーバーと僕のテーブルに加わることなく、回れ右してアパートに帰ってしまったのだ。翌朝バーバーが問いただすと、小細工はよくないわとキティは答えた。「MSが最初の一歩を踏み出すのを待つしか

ないのよ」と彼女は言った。「私はあの人をひどく傷つけてしまったのよ。だからあの人が、二度と私の顔を見たくないと思ったとしても無理はないわ。もちろん、私がわざとあの人を傷つけたわけじゃないことはわかってくれている。でもだからといって、あの人が私を許さなくちゃいけないということにはならないのよ」

これでさすがのバーバーもあきらめてしまった。メッセージを抱えて僕たちのあいだを往復するのもやめて、みじめな事態がずるずる進むに任せるほかなかった。キティが彼に言った最後の言葉は、僕がいつも彼女のなかに見出していた勇気と寛容を端的に表わしていると思う。その後何か月も、いや何年も、あの言葉を思い出すたびに僕は自分を恥じたものだ。苦しんだ人間が一人いたとすれば、それはキティだった。にもかかわらず彼女は、一人でその結果を引き受けたのだ。もし僕に、キティの何十分の一かでも人間らしさがあったなら、ただちに彼女のもとに飛んで帰っただろう。キティの前にひれ伏し、許しを乞うただろう。でも僕は何もしなかった。日々が過ぎていっても、行動を起こす気になれなかった。傷を負った動物のように、体を丸めて自分の痛みのなかにとじこもり、一歩も動こうとしなかった。物理的にはまだ一応存在していた。でももう僕はそこにいるとは言えなかった。

キューピッド役としては挫折を余儀なくされたものの、バーバーはその後も僕を救おうと精いっぱい尽くしてくれた。ものを書くことに僕の気持ちを引き戻そうとしてくれたり、いろんな本の話をしてくれたり、映画、レストラン、酒場、講演会、コンサート、その他あらゆる場所に誘ってくれた。それも大して足しにはならなかったが、さすがの僕も彼の努力を

まったくありがたく思わないところまで堕ちてはいなかった。バーバーは本当に頑張ってくれたのだ。当然ながら、僕はやがて、どうしてこの人はこれほどまで尽くしてくれるんだろう、と不思議に思いはじめた。トマス・ハリオットの研究書は快調に進んでいて、バーバーは一日に六時間も七時間もぶっ通しでタイプライターの前にかがみ込んでいた。ところが僕が部屋に入ってきたとたん、すべてを投げ出して僕の相手をしてくれるのだ。まるで僕といるほうが、本を書くより楽しいと思っているみたいである。これには訳がわからなかった。いまの自分が最低の話相手であることぐらい自覚していたから、僕と一緒にいて楽しいと思う人間がいるなんて信じられなかった。ほかに何も思い浮かばないので、僕はまず、この人はホモセクシュアルではないだろうかと考えてみた。僕がそばにいるだけで興奮してしまって、ほかのことは何ひとつ手につかなくなってしまうのだ、と。一応筋の通った推論である。だがしょせんそれは、あてずっぽうの臆測にすぎなかった。バーバーはいっこうに僕に迫ってきたりはしなかったし、街なかで女性を見るときの目つきからしても、彼の欲求がもっぱら異性に向けられているのは間違いなかった。では、何なのか？　きっと孤独だからだろう、と僕は考えた。要するに寂しいのだ。ニューヨークにはほかに友だちもいないし、誰かほかの人間が現われるまで、いまの僕で我慢してくれているということなのだろう。

六月下旬のある晩、我々はビールを一杯やりに〈ホワイト・ホース〉に出かけた。むっとするほど蒸し暑い夜で、奥の部屋でテーブルに座っていると（それは一九六九年の秋にジンマーと僕がよく一緒に座ったまさにその席だった）、バーバーの顔から汗が滝のようにあふ

れ出てきた。大きなチェックのハンカチで顔を拭きながら、二杯目のビールを一息か二息で飲みほした彼は、突然どすんとげんこつでテーブルを叩いた。「もう我慢できん、この街は暑すぎる」と彼は宣言した。「忘れてしまうものだな、二十五年も離れていると」

「本番は七、八月ですよ」と僕は言った。「お楽しみはこれからだ、ですからね」

「もう十分楽しんださ。これ以上ここにいたら、タオルでも巻いて歩き回るしかないね。街じゅう蒸し風呂じゃないか」

「だったら避暑に出かければいいでしょう。暑いあいだニューヨークを離れる人は大勢いますよ。山でも海でも、お好きなところへ行ったらどうです」

「私に興味があるところは一つだけさ。どこだか君にもわかるだろう」

「でも本はどうするんです？　まずは本を仕上げてしまうという話だったでしょう」

「このあいだまではそうだった。でも気が変わったんだ」

「原因は暑さだけじゃないんですね」

「もちろん。私には気分転換が必要なんだ。そしてそれを言えば、君だって必要だぞ」

「僕なら平気ですよ、ソル。元気いっぱいです」

「景色が変われば気持ちも晴れるよ。君をこの街に引きとめているものはもう何もないじゃないか。長くいればいるほど、何もかもが悪くなっていくだけだ。私にだってちゃんと目はついているんだよ」

「そのうち何とかなります。いずれ事態も好転しますよ」

「どうかな。君はどっぷり穴にはまっているんだよ、ＭＳ。自分で自分を食いつくしているんだよ。穴から出る以外に治す手はない」

「仕事を辞めるわけには行きませんよ」

「どうして？」

「まず第一に、金が要ります。第二に、スタンも僕を頼りにしてくれています。突然勝手に辞めるのはフェアじゃない」

「二週間くらい先に辞めると言えばいい。そのあいだに向こうも代わりを見つけるさ」

「ずいぶんあっさり言いますね」

「あっさりした話さ。もちろん君は体もたくましいし、歳も若い。家具運搬にはうってつけだ。でも君だって、一生あの仕事を続けるつもりじゃあるまい」

「べつにキャリアを築こうってわけじゃありません。当座の間に合わせというところですよ」

「だったら私も、新手の当座の間に合わせを提供しているわけだよ。君は私の助手になるんだ。私の斥候役、私の右腕に。食事と宿泊付き、用具はすべてこちら持ち、必要経費も負担する。条件に不満があれば、話合いにも応じる。どうだね？」

「いまは夏ですよ。ニューヨークでも耐えがたいと思ってらっしゃるようですが、砂漠はもっとひどいはずです。いま出かけていったら体が丸焼きになっちまいますよ」

「サハラ砂漠とは違うさ。エアコン付きの車を買ってのんびり行くんだよ」

「行くって、どこへ？　どこからはじめたらいいかも、さっぱり見当がつかないじゃないですか」

「もちろん見当くらいついておる。そりゃ私だって、絶対見つかるとは言っておらん。でもだいたいどの辺かはわかってるじゃないか。ユタ州南東部、まずはブラフの町からはじめるんだ。試してみてべつに害はなかろう」

我々はさらに数時間話しあった。バーバーは僕の抵抗を少しずつつき崩していった。僕が論点をひとつ挙げるたびに、彼もまたそれに対抗する論点をひとつ持ち出してきた。こっちが否定的要素をひとつ提示するごとに、向こうは肯定的要素を二つ提示した。どうやってそんな気にさせられたのかよくわからないのだが、降参した時点では、降参してよかったとさえ僕は思うようになっていた。決め手はおそらく、この冒険にまったく望みがなかったことだと思う。洞穴（ほらあな）が見つかる可能性が少しでもあると思ったら、僕が行く気になったかどうかは疑わしい。あらかじめ挫折を運命づけられた旅に出るというところ、空（むな）しい探求に乗り出すというところにこそ、あのころの僕の心に訴えるものがあったのだ。探しはするが、見つかりはしない。行くことそれ自体が問題なのであり、最終的に我々に残るのはみずからの野望の無益さだけだろう。悪くないメタファーだ。これこそまさに、僕がいつも夢見てきた、空虚への飛込みではないか。僕はバーバーと握手し、仲間に入れてもらいますよ、と言った。

その後二週間かけて、我々は計画を練り上げた。目的地へ直行する代わりに、我々はまずセンチメンタルな回り道をすることにした。シカゴに立ち寄ってからミネソタに北上し、それからユタへ向かうことにしたのだ。千五百キロばかり遠回りすることになるが、僕にもバーバーにも問題でなかった。急いで着かねばならない理由は何もない。できれば母と伯父が埋められている墓地に寄っていきたいんですが、と僕が持ちかけると、バーバーは反対するどころか、だったらついでにもうちょっと足を伸ばしてノースフィールドで二、三日過ごすってのはどうだい、と言い出したのである。私もいろいろ片付ける用事があるし、父の描いた絵のコレクションも君に見せてあげられるしね。家の屋根裏にしまってあるんだ。これまでそれらの絵を避けてきたことも、僕はあえて口に出さなかった。すっかり探検気分になっていた僕は、何を言われてもイエスと答えたのだ。

三日後、バーバーはクイーンズに住む男からエアコン付きの車を買った。一九六五年型の赤のポンティアック・ポンビル、走行距離はまだ七万五千キロ。その派手派手しさとスピードにすっかり惚れ込んでしまったバーバーは、ろくに値切りもしなかった。「どうだい、カッコいいじゃないか？」二人で車を検分しながら彼は何度もそう言った。マフラーとタイヤは取り替える必要があったし、キャブレターも調整しなければならず、ボディもうしろが凹んでいたが、バーバーの心は決まっていた。気を変えさせようとしても無駄だと僕は思った。問題はいろいろあるけれど、たしかに粋でスポーティな車ではある。我々の目的にもこれで悪いということはない。僕らはためしにドライブに出てみた。フラッシングの街を縦に横に

CamScannerでスキャン

走り抜けながら、バーバーはかのポンティアック酋長がアマースト卿に対して企てた反乱についてとうとうと講釈をぶった。忘れちゃいけない、この車は偉大なるインディアンの酋長にちなんで名づけられたんだよ、と彼は言った。これで私たちの旅にもいっそうの歴史的広がりが加わるというものさ。この車で西へ旅に出ることによって、私たちは死者に敬意を表することになるんだ。おのれの土地を我々白人の魔手から守ろうと立ち上がった勇者に、追悼の祈りをささげることになるんだよ。

次は道具揃えである。我々はハイキング・ブーツ、サングラス、バックパック、水筒、双眼鏡、寝袋、そしてテントを買った。僕のアルバイトのほうは、スタンの運送屋でさらに十日ばかり働いたところで、夏休みでニューヨークに来たスタンのいとこが引き継いでくれることになったので、僕としても気がねなく辞められた。バーバーと僕はニューヨーク最後のディナーに出かけ（ステージ・デリでのコーンビーフ・サンドイッチ）、早朝の出発に備えて九時にはアパートに戻った。一九七一年、七月はじめのことだった。僕は二十四歳で、僕の人生は袋小路に入り込んでいた。暗闇のなかでカウチに横になっていると、バーバーが忍び足でキッチンに行ってキティに電話をかけるのが聞こえてきた。言っていること全部は聞きとれなかったが、旅の話を彼女に伝えているのは間違いなかった。「確かなことは何も言えない」とバーバーはひそひそ声で言っていた。「でも少しは気が晴れるかもしれない。戻ってきたらまた君に会う気になっているかもしれないよ」。誰の話か、考えてみるまでもない。バーバーが寝室に戻ったあと、僕は明かりをつけてワインをもう一本開けたが、もう僕には

アルコールの効力は失われてしまったらしかった。翌朝六時にバーバーが起こしにきたとき、寝ついてから二、三十分しか経っていなかったと思う。

七時十五分前には我々はもうハイウェイに出ていた。バーバーが運転し、僕は助手席に座って、魔法瓶からブラックコーヒーを飲んでいた。最初の二時間は半分しか目覚めていなかったが、いったん車がペンシルベニアの広大な丘陵地帯に出ると、僕もやっと無気力状態から抜け出しはじめた。それからはシカゴに着くまで二人でずっと喋りっぱなしだった。交代で運転しながら、ペンシルベニア西部、オハイオ、インディアナを抜けていった。二人で何を話したのか、いまではほとんど思い出せないが、それはたぶん、まわりの風景が次々に現われては消えていくように、僕らの話題も次から次へと変わっていったからだと思う。しばらくのあいだ自動車の話をしたことを覚えている。自動車によってアメリカがどう変わったかを我々は話しあった。エフィングの話もしたし、ロングアイランドにテスラが建てた塔の話もした。オハイオを出てインディアナへ入っていくあたりで、酋長ティカムサの霊をめぐる長広舌を切り出さんとするバーバーの咳払いを僕はいまもはっきり耳に聞くことができるが、肝腎の演説の中身となるとどんなに頭をひねっても一センテンスも思い出せない。やがて日が沈んでくると、我々は一時間以上を費やして、思いつく限りあらゆる分野における自分の好みを並べあった。いちばん好きな小説、いちばん好きな食べ物、いちばん好きな野球選手。二人で百以上のカテゴリーを引っぱり出したと思う。個人的趣味の総索引作りだ。野球選手なら僕はロベルト・クレメンテ、バーバーはアル・ケイライン。僕が『ドン・キホー

テレと言えばバーバーは『トム・ジョーンズ』。僕らは二人ともシューマンよりシューベルトを好んだが、バーバーがブラームスに目がないのに対し僕はそうではなかった。その反面、バーバーにとってクープランは退屈だったが僕は『奇妙な障壁』を何度聴いても飽きなかった。バーバーはトルストイ、僕はドストエフスキー。ディケンズならバーバーは『荒涼館』、僕は『我らが共通の友』。世に知られたあまたの果物のなかで、レモンの香りが最高だということで我々の意見は一致した。

その夜はシカゴ郊外のモーテルに泊まった。翌朝になり、朝食を終えてから車で行きあたりばったりに町を流して花屋を見つけ、母とビクター伯父さんの墓に供える花束を買った。車に乗ったバーバーは妙に大人しかったが、きっと昨日の運転で疲れたのだろうと思って、僕は大して気にもとめなかった。ウェストローン墓地を見つけるのにいささか手間取り（二度ばかり角を曲がり違え、一度などは正反対の方向にえんえん走ってしまった）、車で入口の門をくぐったころにはもう十一時近くなっていて、そこから墓を探し出すのにさらに二十分かかった。車を降りて灼熱（しゃくねつ）の夏の暑さのなかに出たとき、二人とも一言も喋らなかったことを覚えている。母と伯父の墓から何区画か離れたところで、四人の人夫がちょうど新しい墓を掘り終えたところだった。僕らはしばし車のそばに立ち、墓掘り人夫たちが緑色の小型トラックの荷台にシャベルをしまって走り去るのを見守っていた。彼らがいなくなるまでは待たねばならないことを、バーバーも僕も暗黙のうちに了解していた。二人きりになるまでは、我々の目的を遂行するわけにはいかないのだ。

それからあと、すべては急速に進んだ。道路を渡って、小さな石の墓標に母と伯父の名前が見えてくると、にわかにこみ上げてくる涙を、僕は懸命にこらえねばならなかった。予想もしていなかった激しい反応だった。二人が文字どおりこの足元に横たわっているのだという思いに襲われたが最後、もう体の震えを止めることもできなかった。そのまま数分が過ぎたと思うが、確かなことは何もわからない。いま思い起こしても、ごくぼんやりした光景が浮かんでくるだけだ。回想の霧に包まれて、ぽつんと孤立した動作が二つ三つ見えるばかりである。それぞれの墓標の上に一つずつ石を置いたことは覚えているし、四つんばいになった僕が、乱雑に茂った芝生から必死に雑草を抜いている姿もときおりちらっと見えてくる。だがその情景のなかにバーバーの姿を探そうとしても、いっこうに見つからない。きっと僕はあまりに取り乱していて、彼の姿もろくに目に入らず、あの数分のあいだ彼がそこにいることさえ忘れてしまっていたのだろう。物語はいわば僕抜きではじまっていたのであり、僕がそこに入っていったころには、話はすっかり先へ進んでしまっていて、もう何もかもが手に負えない状態になっていたのだ。

　どういうふうにしてかはわからないが、気がつくと僕はバーバーと並んで、母の墓の前に立っていた。ふとバーバーの方に顔を向けてみると、滝のような涙が頬を流れ落ちているのが見えた。バーバーはすすり泣いていた。口から漏れてくる、喉が詰まったような哀れっぽい音を聞いて、その涙がしばらく前から続いていたことを僕は見てとった。たぶんそこで僕は何か言ったと思う。どうしたんですか、どうして泣いているんです。正確な言葉は思い出せ

ない。でもどのみちバーバーには聞こえていなかった。じっと母の墓を見つめたまま、まるで宇宙にたった一人取り残された人間のように、広大な青空の下でバーバーはすすり泣いていた。

「エミリー……」と彼はようやく言った。「可愛いエミリー……どうしてこんな姿に……あのとき君が行ってしまわなかったら……私の愛を受け入れてくれていたら……愛しい、恋しいエミリー……何て空しいことだ、あんまりだ……」

息もつかせず、言葉が次々と彼のなかから転げ落ちてきた。あふれ出てくる悲しみが、空気に触れたとたん粉々に砕け散った。まるで大地に声をかけられたような思い、墓のなかから死者が語りかけてきたような思いで、僕は彼の言葉を聞いていた。バーバーは僕の母を愛していたのだ。このたった一つの、否定しようのない事実によって、すべてが動き、揺れ、ばらばらに崩れ、世界がまるごと目の前でその様相を変えていった。バーバーが口に出してはっきり言ったわけではない。でも僕は一瞬のうちに知ったのだ。僕は彼が誰であるかを知り、一瞬のうちにすべてを知ったのだ。

はじめのうち、僕が感じたのは怒りだけだった。火のように激しい憤怒と嫌悪の念だけだった。「何を言ってるんだ?」と僕はバーバーに食ってかかった。それでもバーバーがこっちを見ようとしないので、僕は両手で彼の体をこづき、巨大な右腕を意地悪く叩いた。「何を言ってるんだ?」と僕はくり返した。「何か言ったらどうだ、この太鼓腹、何とか言え、でないとその口をぶん殴ってやるぞ」

バーバーはようやく僕の方を向いたが、それでもただ、何を言ったところで無駄だとでも言いたげに、首を前後に揺さぶるだけだった。「ああマーコ、どうして私をここへ連れてきたんだ？」と彼はやっとのことで言った。「こうなるのがわからなかったのか？」

「わからなかっただって？」と僕はどなった。「どうやってわかれと言うんだ？　あんた、何も言いやしなかったじゃないか。この大嘘つき、僕をだましておいて、いまになって同情しろって言うのか。僕はどうなる？　僕はどうなるんだよ、このカバ！」

僕は狂人のように怒りを爆発させた。暑い夏の空気のなかで、肺もひっくり返らんばかりにわめき散らした。やがて、僕の攻撃に耐えかねたか、バーバーはじりじりとあとずさりしはじめた。相変わらずしくしく泣いていて、歩きながらも顔は両手に埋めたままだった。まわりのものは何ひとつ目に入らぬまま、一列に並んだ墓のかたわらをよたよたと後退し、僕の罵声を浴びながら、吠え、泣いていた。太陽はいまや真上に上がっていて、ぎらぎらと息づく奇妙な光に墓地全体が揺れていた。まるで光があまりに強くなって、もはや現実の光であることをやめてしまったみたいだった。バーバーがさらに数歩下がるのが見えた。と、それから、さっき掘り終えたばかりの墓穴の縁まで来たところで、彼はバランスを失った。おそらく石ころか、地面のへこみにでもつまずいたのだろう。彼の足が、その胴体の下で崩れはじめた。両腕がさっと横に飛び出し、羽根のようにばたばたと上下に動いた。でも体勢を立て直すのはとうてい無理だった。まだそこにいる、と思った次の瞬間にはもう、うしろ向きに墓のなかに落下していた。僕が駆け寄る間もなく、バーバーの体がどすんと穴の底を打

つのが聞こえた。

結局、救出にはクレーンが必要だった。僕が穴のなかを見下ろした時点では、バーバーが生きているのか死んでいるのかもわからなかった。バーバーは両眼を閉じて仰向けに倒れていて、降りていこうにも危険が大きすぎた。無理に降りていっても彼の上に落ちてしまうのが関の山だと判断した僕は、動かなかった。無理に降りていっても彼の上に落ちてしまうのが関の山だと判断した僕は、車に乗って入口の守衛室に舞い戻り、電話で助けを呼んでもらった。十分後には救助隊が到着したが、彼らも僕と同じ問題に直面せざるをえなかった。しばらくおろおろ迷った末に、全員で手をつないで、救護員の一人をどうにか穴の底に降ろした。まだ生きてるぞ、とその救護員は我々に知らせた。でもよい知らせはそこで終わりだった。脳震盪だ。頭蓋骨にひびが入ってるかもしれん。それから、一息間を置いて、救護員はつけ加えた。「こいつは背骨も危ないな。持ち上げるにしても、相当用心しなくちゃ」

やっとのことでバーバーがクック郡立病院の救急室に運び入れられたときには、もう六時になっていた。意識は依然不明で、その後四日間、意識を取り戻しそうな微候は見られなかった。医者たちは彼の背骨を手術し、牽引を施して、あとは幸運を祈るしかありませんねと僕に言った。まる二日のあいだ僕は病院から一歩も出なかったが、これは長丁場になりそうだとわかると、バーバーのアメリカン・エキスプレスのカードを借りて、近くのモーテルに

うくらい安手の穴蔵で、緑の壁はしみだらけ、ベッドもでこぼこだったが、どのみち僕にとっては眠るだけの場所だった。バーバーが昏睡状態から目覚めると、僕は一日の十八、九時間を病院で過ごすようになり、それから二か月は病院が全世界だった。バーバーが息絶える瞬間まで、僕はひたすらその枕元に座っていた。

最初の一か月は、やがて悲惨な結果が訪れることになるとはとても思えなかった。滑車で吊るした巨大なギプス包帯にくるまれたバーバーは、あたかも物理法則に挑むかのように中空に浮かんでいた。体じゅうがんじがらめにされて首も回せず、食事もチューブで喉に通してもらわねばならなかったが、それでも日に日に容態はよくなっていたのであり、快方に向かっているように見えたのだ。とにかく真実が明るみに出て嬉しいよ、とバーバーは言った。二、三か月ギプスをはめられて横になっているくらい、その代償だと思えば少しも苦にならんね。「そりゃ骨は折れたかもしれんが」とある日の午後バーバーは僕に言った。「私の心はやっと治りはじめたんだよ」

バーバーの口から物語があふれ出たのはこの時期だった。話す以外何もできなかった彼は、僕を聞き手に、その生涯を詳細かつ包括的に語り尽くすことになった。こうして僕は、バーバーと母のロマンスもあらゆる細部まで聞かされたし、クリーブランドのYMCA滞在中の気の滅入る物語や、その後アメリカの中央部を転々とした日々の話も聞いた。いうまでもないだろうが、墓地で彼を相手に爆発した僕の怒りはもうとっくに鎮まっていた。けれども、

これだけ疑いの余地なき証拠を前にしても、僕のなかの何かが、彼を父として受け入れることをためらわせていた。イエス、バーバーは間違いなく、一九四六年のある夜に僕の母と寝た。そしてイエス、その九か月後に僕が生まれた。でも、母が寝た相手がバーバー一人だったとどうして断言できよう？ ありえにくいことではあるけれど、母が二人の男と同時につきあっていたということだって不可能ではない。もしそうだとすれば、母を妊娠させたのはもう一人の男だったかもしれない。これだけが唯一、バーバーが僕の父であることを全面的に信じるのを避けるための防壁だった。その防壁を、僕はどうしても手放す気になれなかった。一抹の疑念が残っている限り、何があったことも認めずに済むのだ。自分でも意外な反応だったが、ふり返ってみると、奇妙ではあれそれなりに筋は通っていることがいまの僕にはわかる。二十四年のあいだ、解答不可能な問いを抱えて暮らしてきた僕は、その謎をまさに、僕という人間の核をなす事実として受け止めるようになっていた。僕の起源はひとつの神秘であり、僕は自分がどこから来たのかを決して知ることはないだろう――そのことこそが僕を定義していたのだ。僕は自分のなかの闇に慣れきって、いわば知と自尊の源としてその闇に固執し、ひとつの存在論的必然としてそれに依存するようになっていた。父を見つけたいとどんなに激しく焦がれたにせよ、本当に見つかると思ったことは一度もなかった。それがこうして見つかったいま、僕の心は散りぢりに乱れてしまい、それゆえ、まずはその事実を否定するという防御策に出たのだ。否定した原因はバーバーにあったのではない。状況そのものにあったのだ。バーバーは僕の最良の友であり、僕は彼を愛していた。父として選びた

い人物が誰かこの世にいるとすれば、バーバーこそその人だった。なのに、それでも、僕はその気になれなかった。体じゅうに行きわたった衝撃をどう吸収したらいいのか、僕にはわからなかったのだ。

　何週間か経ったところで、これ以上事実に目をつぶることを不可能にする出来事が起きた。白いギプス包帯にがっちり体を押さえつけられたバーバーは、固形の食べ物はいっさい食べられず、まもなく体重も減ってきた。何しろ、毎日数千カロリーの栄養を貪ることを習慣としてきた人間なのだ。食生活が急激に変わってしまって、その影響はてきめんだった。山のように過剰な贅肉を維持するのは大変な仕事だ。ひとたび供給量が減ってしまえば、体重は激減する。はじめのうちはバーバーも泣き言を並べ、一日に何度かは空腹のあまり本当に涙を流したものだが、しばらくするとこの強制的飢餓を、もっけの幸いと考えるようになった。「いままでどうしてもできなかったことを成し遂げるいいチャンスだよ」とバーバーは言った。「考えてみたまえ、MS。この調子で行けば、退院するころには四十キロくらい痩せているだろうよ。いや、五十キロかな。私は別人のようになるのさ。もう二度とこんな姿をせずに済むんだよ」

　両耳の上あたりの髪の毛が復活し（灰色と赤茶の混合）、その色と瞳の色（青銅に近い濃い青）との対照のせいで、バーバーの頭はまるで、それを包む未分化の空気からじわじわ分離するかのように、いままでにない明確さをもってくっきり浮かび上がってきた。入院して十日ばかり経つと、皮膚は死人のように真っ白になったが、その白さと一緒に、頬にほっそり

した線が現われてきた。脂肪のかたまりや、たるんだ肉が姿を消していくとともに、第二のバーバーが表に出てきた。彼のなかに何年もとじ込められていた、第二の自己。驚くべき変身だった。ひとたびそれが本格的にはじまると、目ざましい副次的効果がいくつも生まれてきた。はじめは僕もはっきり気づかなかったのだが、入院して三週間ばかり経ったある日、ふと彼の顔を見ると、そこに何か見慣れたものがあるような気がした。それはほんのつかの間訪れた思いであり、何を見てそう思ったのかを知る間もなく消えてしまった。二日後、また同じ気持ちが襲ってきた。今度はそれが、どうやらバーバーの目のまわりか、あるいは目そのものに原因があるらしいとわかるまで持続した。エフィングと似ているものが見えたのだろうか。僕を見るちょっとしたまなざしに、彼の父親の面影が感じられたのだろうか。何であれ、なぜかひどく不安な一瞬だった。その日一日、一瞬の思いがずっと心の隅に引っかかったままだった。思い出されていない夢の断片のように、それは僕にとり憑いた。無意識の底から湧き上がってきた、つかの間の認識。そして、すぐ次の日の朝、自分が何を見たのかを僕はやっと理解した。例によって僕が病室に入っていくと、彼は目を開けて僕に笑顔を見せた。血液に鎮痛剤をどっさり注入されたおかげで、その顔はすっかり力を失っていた。僕はわれ知らずバーバーの瞼の輪郭を眺め、特に眉とまつ毛のあいだの空間をしげしげと吟味していた。突然僕は悟った。僕は僕自身を見ているのだ。バーバーは僕と同じ目をしている。顔が縮んだせいで、それが見えるようになったのだ。僕らは似ている。その事実は誰の目にも明らかだった。いったんそう気づき、真実をこうして眼前につきつけられたいま、僕

としてもう認めざるをえなかった。僕はバーバーの息子なのだ。もはや疑念の余地はなかった。
　その後の二週間、何もかもがうまく行くように思えた。医者たちも楽観していたし、ギブスを外してもらえる日を僕もバーバーも心待ちにするようになった。ところが、八月に入ったころから、容態は急に悪化しはじめた。何かの感染症にかかったので投薬を受けたところ、アレルギー反応を起こして血圧が著しく上がってしまったのだ。さらに検査してみると、いままで判明していなかった糖尿病の症状が見つかった。ほかにも何かないかとあちこちつついてみると、問題点がぞくぞく出てきた。狭心症、痛風の初期症状、循環器系のトラブル、等々。もはや体の我慢が限界に達してしまったようだった。あまりに多くの試練をくぐらされて、体がとうとうダウンしてしまったのだ。体重が激減したせいで抵抗力が弱まり、戦う元気もなかった。血液細胞はもはや反撃に出ようとしなかった。八月二十日ごろになると、もう私はおしまいだよ、と彼は言った。でも僕は頑として聞かなかった。「もうちょっとの辛抱です」と僕は言った。「ワールドシリーズの第一球が投げられる前に出してあげますよ」
　僕はもう、自分の気持ちもよくわからなくなっていた。バーバーがどんどん悪くなっていくのをなすすべもなく見守っているうちに、神経もすっかり麻痺してしまって、八月の下旬に入ったころには、抜けがらのような状態で動き回っていた。その時点の僕にとって唯一大事だったのは、表向きの冷静さを保ちつづけることだった。涙は禁物、絶望に駆られたり意志を捨てたりしてはならない。僕は希望と自信を発散しつづけた。心の奥では、状況がいか

に絶望的かを承知していたにちがいない。でもそのことを痛感させられたのは、最後の最後になってからだ。それもきわめて間接的な経路で。ある夜遅く、夜食を取りに食堂に入ったときのことである。その晩の定食のひとつに、チキンポットパイがあった。小さいころに食べて以来一度も縁のなかった料理だ。たぶん母と一緒に暮らしていたころに食べたのが最後である。メニューに書かれたその言葉を見たとたん、今夜は絶対これだと僕は思った。ウェイトレスに注文を伝え、それから三、四分のあいだ、母と住んでいたボストンのアパートを思い起こしていた。二人で一緒に食事した小さなキッチンテーブルが、何年ぶりかで目に浮かんできた。やがてウェイトレスが戻ってきて、すみません、チキンポットパイは品切れなんです、と僕に告げた。いうまでもなく、ごくささいな話である。大きな状況全体から見れば、ほんの埃のかけら、無限に小さな反物質の一片にすぎない。でも僕はいっぺんに、屋根が落ちてきたような気持ちになった。チキンポットパイはもうない。もし誰かから、たったいまカリフォルニアで地震があって二万人が死んだよと聞かされても、あんなに取り乱しはしなかっただろう。涙まであふれてくるのを感じながら、食堂の椅子に座って失望と闘っている最中に、自分の世界がいかにもろくなってしまったかを僕は思い知った。卵は僕の指のあいだからすり抜けつつあった。いずれそれは床に落ちてしまうだろう。

バーバーは九月四日、食堂での出来事のわずか三日後に亡くなった。もうそのころには体重も九十五キロしかなくなっていて、まるで彼の半分はすでに消滅してしまったような感じだった。ひとたびその流れがはじまってしまったいま、残りの部分が消えてしまうのは避け

がたいように思えた。僕は誰かと話したかった。でも思いつく相手はキティだけだった。電話をかけたときは朝の五時だった。キティが出ないうちから、単にバーバーの死を知らせるためだけに電話しているのではないことを僕は悟った。もう一度僕を受け入れてくれる気があるかどうか、キティの気持ちを知りたかったのだ。

「眠っていたのはわかっている」と僕は言った。「でもお願いだから、僕の話を聞き終わるまで切らないでくれ」

「MS?」彼女の声はくぐもっていて、混乱して震えているみたいだった。「あなたなの、MS?」

「シカゴにいるんだ。ソルが一時間前に死んで、話せる相手が誰もいなかったんだ」

語り終えるには時間がかかった。はじめ彼女は僕の話を信じなかった。そして僕も、事実を一つひとつ伝えているうちに、信じてもらえないのも無理はないという気がしてきた。うん、墓穴に落ちて背骨を折ったんだ、と僕は言った。うん、本当に僕の父親だったんだ。うん、本当に今夜死んだんだ。うん、病院の公衆電話からかけているんだ。交換手が割って入ってコインを追加するよう言ったので、話はしばし途切れ、ふたたびつながると、電話の向こう側でキティがしくしく泣いているのが聞こえた。

「かわいそうなソル」と彼女は言った。「かわいそうなソル、かわいそうなMS。かわいそうなみんな」

「こんな話を聞かせてごめん。でも電話しなかったら、やるべきことをやっていない気がし

たと思う」

「いいのよ。してくれてよかったわ。ただあんまり悲しい話だから。ああMS、わかってもらえたらねえ、あなたからの連絡をどれだけ待っていたか」

「僕は何もかもを台なしにしちゃったんだね」

「あなたのせいじゃないわ。自分の気持ちは変えられないもの。誰だって同じよ」

「もう僕から連絡はないと思っていたの？」

「もういまはね。はじめの何か月かは、ほかのことは何も考えられなかった。でもそんなふうじゃ生きていけないのよ。少しずつ少しずつ、私は望みを捨てていったのよ」

「僕は一分だって君を愛することをやめなかった。わかってくれるだろう、ねえ？」

もう一度、電話の向こうに沈黙が流れた。それからキティがまた泣き出すのが聞こえてきた。みじめな、切れぎれの、体から息を吸い出してしまうような泣き方だった。「いい加減にしてよMS、いまさら私をどうしようというの？　六月からずっと何の音沙汰もなかったのが、朝の五時にシカゴから電話してきて、ソルの話で私の心をめちゃくちゃにして、それから今度は愛の話？　そんなの勝手よ。あなたにそんなことをする権利はないわ。もういまは」

「これ以上君なしじゃ耐えられないんだよ。やってみたけど、できないんだ」

「私だってやってみたわ。そして私にはできるわ」

「信じられない」

「私にはつらすぎたのよ、MS。生き残るには、自分を石にするしかなかったのよ」

「どういうことだい？」

「もう手遅れなのよ。私はもうそういうことに自分を開けないのよ。あなたは私を殺したも同然だったのよ、そうでしょう。もう二度とあんな危険を冒したくないのよ」

「誰かほかの相手を見つけたんだね？」

「もう何か月も経ったのよ。あなたが大陸半分離れたところでうじうじしているあいだ、私はどうすればよかったっていうの？」

「いま、そいつと一緒にベッドにいるんだね？」

「あなたには関係ないわ」

「そうなんだね、一緒なんだね。そうならそうと言ってくれ」

「じゃあ言うけど、違うわ。でもだからといって、あなたに訊く権利はないわ」

「誰だって構うもんか。同じことだ」

「もうやめてちょうだい、MS。もう我慢できない。これ以上一言も聞きたくないわ」

「お願いだ、キティ。帰ってきていいって言っておくれ」

「さようなら、マーコ。自分を大切にしてね。お願いだから自分を大切にしてね」

そう言って彼女は電話を切った。

僕はパーバーを母の隣に埋葬した。ウェストローン墓地に彼を埋めるにはいささか手間取った。何しろロシア系、ドイツ系のユダヤ人が並ぶなかに、たった一人非ユダヤ人を入れようというのだから。でもフォッグ家の区画にはまだ一人分スペースがあったし、法律上は僕が家長でありしたがって土地の所有者だったから、結局はこっちの要求が通った。僕は事実上、自分のために取ってあった墓に父を埋葬したことになる。この数か月に起こったことを思えば、せめてそのくらいはして当然だと思った。

キティとあのような会話を交わしたあと、自分を忘れる手段が僕にはぜひとも必要だった。最初の四日間は、とにかく葬儀の手配で乗りきることができた。資金のほうは問題なかった。亡くなる二週間前に、パーバーは最後の力をふり絞って、資産を僕に譲渡する手続きを済ませてくれていたのだ。遺書じゃ話が面倒だ、どのみち君に全部もらってほしいんだから、いまあげてしまえばいい、と彼は言ったのだった。僕は何とかしてやめさせようと説得に努めた。明らかにこの譲渡は、敗北をはっきり認める行為にほかならなかったからだ。でもその一方、あまり強く押す気にもなれなかった。そのころパーバーはもう糸一本でぶら下がっている身だった。あまり邪魔をするのも間違っている気がした。

僕は病院に金を払い、葬儀屋に金を払い、墓石の代金も先に払った。埋葬式を司ってもらおうと、十一年前に僕の成人式をやってくれたユダヤ人司祭に電話をかけた。ラビはもう老人になっていて——七十は優に過ぎていたと思う——僕の名前も覚えていなかった。わしはもう隠居したんだ、誰かほかの人間に頼んだらどうかね、とラビは言った。いいえラビ・グ

リーン、あなたじゃなくちゃ駄目(だめ)なんです、ほかの人じゃ困るんです。説き伏せるにはだいぶ時間がかかったが、結局相場の倍の料金でやってもらうことで強引に話をつけた。普通ならありえんことだがな、とラビは言った。普通の死なんてひとつもありませんよ、と僕は答えた。一つひとつの死がそれぞれ違っているんです。

式の参列者はラビ・グリーンと僕の二人だけだった。マグナス・カレッジに知らせたら同僚が何人か来るだろうかとも考えたが、結局やめにした。見知らぬ他人と一日を過ごすだけの気力が僕にはなかったし、誰とも口をききたくなかった。ラビは僕の依頼どおり、英語では弔辞を述べず、ヘブライ語の伝統的な祈禱(きとう)の文句を唱えただけだった。僕のヘブライ語の知識はもうほとんど消滅していて、何を言っているのかまるでわからなかった。そのほうがありがたかった。おかげで自分の思いに浸っていられたからだ。結局のところ僕が望んでいたのはそれだけだった。ラビ・グリーンは僕の頭がおかしいと思ったらしく、一緒に過ごした数時間のあいだ、できるだけ僕に近づくまいとしていた。僕としては申し訳なく思ったが、さりとて何かしようという気にもならなかった。たぶん僕は、全部で五語か六語しか彼に言わなかったと思う。試練が終わり、自宅の前に止まったハイヤーから下りると、ラビは手をさし出して僕と握手し、左の手のひらで僕の指の関節を軽くぽんぽん叩(たた)いた。それは彼にとって、人を慰めるときに出てくる、署名と同じくらい自然なしぐさだったにちがいない。自分がそうしていることさえ、ろくに気がついていないみたいだった。「君は大きな問題を抱えている」とラビは言った。「私の忠告を聞く気があるなら、医者に行くことを勧めるね」

僕はハイヤーの運転手にイードゥンロック・モーテルまで行ってもらった。こんなところにもう一晩泊まる気はなかったから、ただちに荷物をまとめにかかった。作業は十分もしないうちに終わった。鞄をきっちり閉め、しばらくベッドの上に腰かけてから、部屋のなかをもう一度見渡した。地獄に宿泊施設があったらきっとこんな感じだろうな、そう思った。と、見たところ何の理由もなしに——つまり、そのとき自覚できた理由は何もなかったということだが——僕は片手をげんこつに丸めて立ち上がり、壁に力いっぱいのパンチを浴びせた。薄っぺらい合板の壁板はあっけなく崩れた。ばりばりと鈍い音がして大きな穴が開き、腕が向こう側につき抜けた。家具も同じように薄っぺらなんだろうかと、僕は椅子を持ち上げ、洋服ダンスに叩きつけて、椅子全体が粉々に砕けるのを幸福感に包まれて見守った。それから、実験の仕上げとして、折れた椅子の脚を一本右手に持って室内を巡回し、にわか仕立ての棍棒で物を一つずつ壊していった。電灯、鏡、テレビ、そこにあった物を片っ端からやっつけた。部屋を破壊しつくすのに五分とかからなかったが、終わったとき僕の気分は前と較べものにならないくらい明るくなっていた。何だかまるで、自分がやっと理に適ったことを成し遂げたような、ようやく状況にふさわしい行為を敢行したような気分だった。達成した結果をほれぼれと眺めたりはしなかった。肩ではあはあ息をしたまま、僕は鞄を手にとって部屋を飛び出し、赤いポンティアックに乗って走り去った。

僕はその後十二時間ずっと走りつづけた。アイオワに入ったあたりで日も暮れて、世界はだんだん、無数の星の集まりと化していった。寂しさにすっかり頭も麻痺してしまった僕は、もうそれ以上目を開けていられなくなるまでひたすら車を走らせ、ハイウェイの白線を、まるでそれが僕をこの地球につなぐ最後の絆であるかのようにじっと見つめていた。ネブラスカの真ん中あたりまで行ったところでやっとモーテルに部屋を取り、眠った。暗闇のなかで、コオロギたちの喧噪が聞こえたことを覚えている。蛾が網戸にぶつかってばたばた音を立て、夜のはるか片隅で犬が一匹かすかに吠えていた。

朝になると、偶然が正しい方向に導いてくれたことを僕は理解した。何も考えぬまま、僕は西部への道をたどっていたのだ。こうして旅がはじまったいま、僕の心はいっぺんに穏やかになった。自分で自分をきちんと把握している気になれた。バーバーと二人で立てた計画を実行しよう、そう僕は決心した。僕にはいまや目的があるのだ。何かから逃げているのではなく、何かに向かっているのだ。そう考えると、こう自分に言い切るだけの元気も湧いてきた――僕はもう死にたくなんかないんだ、と。

まさか本当に洞穴が見つかるとは思っていなかったが（最後の最後まで、それは絶対の大前提だった）、探すという行為自体で僕には十分だった。それは他のすべての行為を打ち消す行ないだった。鞄には一万三千ドルあまりの金がある。僕を引きとどめるものは何もない。あらゆる可能性がついえてしまうまで、いつまでも探索を続けることができる。僕は広大な平原の果てまで車を走らせ、デンバーに一晩泊まってからメーサバードに足を伸ばし、そこ

に三、四日とどまって、滅亡した文明の巨大な遺跡を上って回った。僕はなかなかそこを離れる気になれなかった。アメリカにこんな古いものがあるなんて、想像もしていなかった。ユタ州に入るころには、エフィングが話していたことの意味が少しずつわかってきた。その地理に取り立てて感銘を受けた、というのではない（あれなら誰だって感銘を受ける）。むしろ、土地の巨大さ、空虚さが僕の時間感覚を狂わせはじめたのだ。現在というものがいままでと同じ結果を生むような気がしなくなってきたのだ。この場所で時間を測るには、分や時では小さすぎた。ひとたび周囲の事物に目を開いてしまえば、世紀単位でものを考えるしかなくなってくる。千年なんて時計のほんの一瞬の動きにすぎないことが嫌でもわかる。生まれてはじめて、地球が天空を旋回する惑星であることを僕は実感した。決して大きな惑星ではない。むしろ小さい。ほとんど顕微鏡的といってもいいくらいに。宇宙のあらゆる事物のなかで、地球ほど小さな物はほかにないのだ。

僕はブラフの町でコームリッジ・モーテルに部屋を取り、その後一か月にわたって近隣の山々を探索して回った。岩に上り、でこぼこの谷底を徘徊し、車で何百マイルも走った。洞穴もたくさん見つけたが、人が住んでいた形跡のあるものは一つもなかった。それでも、その何週間かのあいだ、僕は幸福だった。まったく一人きりで過ごしながら、ほとんど意気揚々としていたといっていい。ブラフの住人といさかいを起こさぬよう髪も短く保ち、地質学専攻の大学院生なんです、と言うことにしていた。その一言で人々の疑念も解消するようだった。もしあのまま何ごとも起こらなかったら、探索を続けるという以外何の計画もなし

に、さらに何か月かあんな暮らしが続いたかもしれない。毎朝サリーズ・キッチンで朝食を取り、のこのこ荒野に出かけていって、暗くなるまであたりをうろつく日々。ところがある日、僕はいつもより遠くまで車を走らせ、モニュメント・バレーを越えて、オルジェトにあるナバホ族の交易場まで出かけていった。オルジェトとは「水のなかの月」という意味だ。それだけでも僕としては十分気をそそられたが、その上ブラフのある住人から、交易場を経営しているスミスという夫妻はこの辺の歴史に誰よりも詳しいと聞かされたのである。スミス夫人は名開拓者キット・カーソンの孫だか曽孫だという話で、夫婦の家にはナバホの毛布や陶器がずらりと並んでいた。博物館も顔負けのインディアン民芸コレクションである。ひんやりと薄暗い居間で彼らと二時間あまり一緒に過ごした末に、僕はようやく肝腎の問いを発してみた。口裂けジョージという男のことを聞いたことがありませんか、と。だが二人とも首を横に振って、ノーと言うだけだった。ではグレシャム兄弟は？　御存知ないですか？　もちろん知っておる、とスミス氏が言った。五十年ばかり前に消えちまった、ならず者の一党だて。バートにフランクにハーラン。その昔西部にわんさとおった列車強盗の、最後の生き残りじゃな。どこかに彼らの隠れ家がありませんでしたかね、と僕は興奮を抑えながら訊ねた。連中が住んでたっていう洞穴の話を聞いたことがあるんです、何でもずいぶん山に入ったところだったとか。たぶんそうだろうて、とスミス氏は言った。その話ならわしも聞いたことがある。レインボー・ブリッジのあたりだとかいう話だったな。探せば見つかるでしょうか、と僕は訊ねた。前なら見つかったかもしれん、とスミス氏は呟くように言った。前

なら見つかったかもしれん、だがいま探しにいっても無駄だろうて。どうしてです？と僕は訊ねた。パウエル湖じゃよ、と彼は答えた。あたり一帯が水底になっておるんだ。二年ばかり前に湖にしちまったでの。深海に潜る道具でも持ってりゃ別だが、大したものは見つからんと思うがな。

その一言で僕はあきらめた。そう聞かされたとたん、もうこれ以上続けても仕方がないことを悟った。遅かれ早かれ、いずれやめねばならない時が来ることは覚悟していたが、それがこんなに急に、これほど決定的な形で訪れるとは思っていなかった。探索はまだはじまったばかりなのに。やっと仕事の感じをつかみかけたところなのに。それがもう、すべきことは何も残っていないのだ。僕は車でブラフに戻り、モーテルにもう一晩だけ泊まって、翌朝チェックアウトした。それからパウエル湖に出かけた。わが麗しき計画を打ちのめした水を、この目でじかに見ておきたかったのである。でも湖に怒りを感じるというのはいささか困難だった。僕はレンタルのモーターボートを借り、一日じゅう湖上をさまよいながら、これからどうしたものかと思案した。僕にとってはおなじみの問題だが、そのときの敗北感はあまりに大きく、何の考えも浮かんでこなかった。そして、ボートをレンタル小屋に返して、車はどこかとあたりを見回した時点で、突如決定権は僕の手を離れたのだった。

ポンティアックはどこにも見当らなかった。そこらじゅう探しまわったが、とにかくさっき駐車した場所にないことは確かだった。間違いない、盗まれたのだ。手元のナップサックには千五百ドル分のトラベラーズ・チェックが入っているが、残りの金はトランクのなかだ。

額にして一万ドル以上の現金。僕の相続した金すべて、この世での全財産である。

通りすがりの車に乗せてもらおうと坂道のてっぺんに出たが、一台も止まってくれなかった。車がびゅうんと通り過ぎるたびに、僕は卑猥な罵りの文句を浴びせた。日は暮れかけていた。運はいっこうに巡ってこなかった。もうその日は、あたりのヤマヨモギの茂みにもぐり込んで一夜を過ごすしかなかった。車が消えてしまったショックがあまりに大きかったので、警察に届けることさえ思いつかなかった。翌朝、寒さに震えながら目を覚ますと、盗んだのは人間ではないのだという思いが湧いてきた。これは神々の悪戯なのだ。僕を打ちのめすことを唯一の目的とする、神の悪意のなせる業なのだ。

僕が歩き出したのはその時だった。僕はあまりに怒っていた。わが身に起きた出来事にあまりに憤慨していた。もう親指をつき出してヒッチハイクするのもやめた。僕はその日一日歩きつづけた。日の出から日暮れまで、足の下の地面を罰するかのように歩いた。翌日も同じように歩いた。その次の日も。そしてその次の日も。その後三か月、僕は歩きつづけた。少しずつ西へ進み、途中小さな町に行きあたるたびに一日か二日泊まってからまた先へ行き、野原や洞穴や道端の溝で眠った。はじめの二週間、僕は稲妻に打たれた人間のようにふるまった。胸のうちで雷鳴を轟きわたらせ、しくしくと涙を流し、狂人のように咆哮を上げた。だがやがて、少しずつ、怒りは燃えつきていった。僕は自分の歩みのリズムに身を任せるようになった。ブーツを何足もはきつぶした。一か月を過ぎたころには、また人と口がきけるようになっていた。さらに何日かして、葉巻を一箱購入し、僕の父に敬意を表すべく毎晩一

CamScannerでスキャン

本ずつ喫った。アリゾナ州バレンタインの町はずれにある人けのない食堂で、ペグという名のふっくらしたウェイトレスに誘惑されて、結局彼女のところに十日ばかり居候していた。カリフォルニア州ニードルズでは捻挫したせいで一週間左足が使えなかったが、それ以外は休まず歩きつづけて、次第に募ってくる幸福感に支えられながら太平洋に向かっていった。大陸の果てにたどり着けば、何か大事な問題が解決するような気がした。その問題が何なのかは見当もつかなかったが、答えはすでに僕の歩みのなかで形成されていた。僕はただ歩きつづければよいのだ。歩きつづけることによって、僕自身をあとに残してきたことを知り、もはや自分がかつての自分でないことを知るのだ。

一九七二年一月三日、レイク・エルシノアという町で僕は五足目のブーツを買った。三日後、疲れきった体で丘を越え、ポケットに四一三ドルを持ってラグーナ・ビーチの町に入った。岬のてっぺんからすでに海は見えていたが、そのまま歩きつづけ、やがて水ぎわにたどり着いた。午後四時だった。僕はブーツを脱いだ。足の裏に砂の感触が伝わってきた。僕は世界の果てに来たのだ。この向こうにはもう空と波しかない。そのまま中国の岸辺まで広がる、空っぽの空間があるだけだ。ここから僕ははじめるのだ、と僕は胸のうちで言った。ここから僕の人生がはじまるのだ、と。

僕は長いあいだ浜辺に立って、日の光の最後の一かけらが消え去るのを待った。背後では町がいつもの生活を続け、二十世紀後半のアメリカの、聞き慣れたいろんな音を立てていた。沿岸の曲線を見下ろすと、家々の明かりが一つまた一つと灯るのが見えた。やがて、丘の向

ころから月が上った。満月の、焼け石のように丸く黄色い月だった。夜空に上っていく月に僕はじっと視線を注ぎ、それが闇のなかにみずからの場を見出すまで目を離さなかった。

CamScannerでスキャン

訳者あとがき

ムーン・パレスはかつてコロンビア大学のすぐそばに実在した中華料理店の名前である。どちらかといえば質より量がポイントの、学生たちが比較的安価にささやかな贅沢感を味わうには格好の店であった。むろん学生街の常として、安くて腹いっぱい食べられる店はほかにもたくさんあったわけだが、ムーン・パレスはそのなかでも特別だった。あるコロンビア出身者によると、そこはひとつの「名物（インスティテューション）」だったという。かつての学生生活を包んでいた、混沌と喧噪に似つかわしい空間だったということだろうか。僕も一度だけ行ったことがあるが、特に個性的というわけでもない、やや広めで安めの中華料理屋という印象を得た。微妙な文化的意味合いというものは、一介の旅行者にはなかなかわからない。

さて、この小説『ムーン・パレス』の著者ポール・オースターもコロンビアの卒業生である。学生だったオースター青年が、マンハッタン西一一二丁目の中華料理店で、エッグスープやサワーポークやチリソースシュリンプやフライドライスによって一度ならず空腹を満たしたことは想像に難くない。あるいはその代金は、この小説の主人公マーコ・フォッグがそ

うしているように、ムーン・パレスと同じ通りに面した古本屋で、なけなしの蔵書を売って得たものだったかもしれない。

もちろん、「ムーン・パレス」が自伝的な小説である、などと言うつもりはない。言えるのはただ、作者が多感な青年時代を送った時代と場所から書きはじめたこの小説に、書き出しから独特の切実さと、感じのよい饒舌が備わっているということである。オースター特有の、どちらかというと抽象に向かう文章のなかに、月着陸、ベトナム戦争、メッツ躍進といった同時代の代表的な出来事が効率よく配置され、寓話性と具体性とがうまい具合に両立している。その結果、この小説のはじめの何ページかは、から回りの理想主義としようもない見栄とをあわせ持った、相当滑稽でいくぶん自虐的な貧乏学生をめぐる、絶品の青春小説になっている。

マーコはやがて美しく聡明な中国人キティ・ウーと出会い、奇妙な老人の家で住込みで働くようになり、さらに、すさまじい肥満体の歴史学者と知り合いになる。フォッグを聞き手に、老人と歴史学者は自分の生涯を物語る。その意味でこの小説は、三つの違った世代の男たちの物語だともいえる。そしてその三つの物語に共通のパターンを探して、そこからこの小説のメッセージを読みとることも可能だろう。人はいったんすべてを失わなければ何も得ることはできない、とか、自分の死を実感することを通してはじめて生の可能性も見えてくる、とかいった感慨が、この小説にはくり返し出てくる。あるいは、タイトルにもある「月」のシンボリズムについて考えてもいいかもしれない。マーコの夢想癖、浮世離れした

性格の象徴としての月。月面着陸に見られるような、未知の世界へのアメリカ的渇望の究極的対象としての月。老人がかつて知り合いだった、実在の異色画家ラルフ・ブレイクロックの描く月は、逆に、アメリカが失ってしまった世界を包んでいた調和の中心だ。あるいはまた、超肥満体歴史学者のつるっ禿げの頭もどこか月を思わせる……

けれども、この『ムーン・パレス』という小説を楽しむのに、そういう理屈はべつに必要ない。作者自身「私がいままで書いた唯一のコメディ」と規定するこの小説を読むにあたっては、とにかく次々に起こる、あるときは滑稽で、あるときは感傷的で、またあるときは滑稽かつ感傷的な出来事の連鎖に身を任せていればいいと思う。同じオースター作品でも、たとえば『幽霊たち』が、物語への欲望を喚起しつつそれをはぐらかすことを基調とする（要するに、何かが起きそうで起こらない）小説だとすれば、この『ムーン・パレス』はむしろ逆に、物語への欲望を目いっぱい満たしてくれる一作である。途方もない偶然が重なって、思いもよらぬ方向に話が収斂していくあたりは、『トム・ジョーンズ』のような古典的イギリス小説を思わせるストーリー展開だが、そうした偶然も少しも御都合主義に感じられない。それはたぶん、偶然による愉快な展開のすぐ横に、混沌の暗い深淵がぱっくり口をあけていることが、読んでいてじわじわ伝わってくるからだと思う。コメディは、いつ陰惨な悲劇に転じても不思議はないことが見えるとき、正当なる切実さを獲得する。

一、二年前までムーン・パレスがあった場所は、現在はこぎれいなキッチン・ウェアの店になっている。

一九八九年に『シティ・オヴ・グラス』で脚光を浴びて以来、オースターは良質の小説をコンスタントに発表しつづけている。本人はひどい遅筆だと言っているが（一日せいぜい二、三ページ）、大学でもほとんど教えず、書評や雑文もめったに書かず、小説に専念する生活基盤を築いたことが、この着実さを生んでいるのだろう。以下に主要作品のリストを挙げる。

The Invention of Solitude（1982）邦訳『孤独の発明』（新潮社、新潮文庫）
City of Glass（1985）『シティ・オヴ・グラス』（角川書店、角川文庫）
Ghosts（1986）『幽霊たち』（新潮社、新潮文庫）
The Locked Room（1986）『鍵のかかった部屋』（白水社、Uブックス）
In the Country of Last Things（1987）『最後の物たちの国で』（白水社）
Disappearances: Selected Poems（1988）『消失　ポール・オースター詩集』（思潮社）
Moon Palace（1989）本書
The Music of Chance（1990）
Leviathan（1992）
The Art of Hunger: Essays, Prefaces, Interviews（1992）

一九九四年夏には新作 *Mr. Vertigo* の出版も決まっている。また、*The Music of Chance*

はフィリップ・ハース監督によって映画化され、アメリカではすでに公開されて、渋めの佳作、とおおむね肯定的な評価を得ている（オースター自身は脚本や製作にはいっさいかかわっていないが、代わりに、というわけでもないけれど、みずからチョイ役で出演している）。さらに、いまのところオースター唯一の短篇「オーギー・レンのクリスマス・ストーリー」（『リテラリー・スイッチ』第三号所収）に基づく、本人の作になる映画脚本 *Smoke* が、デイヴイッド・ウェイン・ウォン監督によって映画化されることが決まっている。

いつものように、新潮社の森田裕美子さんとはとても楽しく仕事をさせていただいた。どうもありがとうございます。

一九九四年一月

柴田元幸

＊その後刊行されたオースターの作品は以下の通りである。

Mr. Vertigo (1994)

Smoke & Blue in the Face: Two Films (1995)『スモーク&ブルー・イン・ザ・フェイス』（新潮文庫）